野多目台

（のためだい）

――野多目Ｂ・和田Ｂ遺跡第１次調査報告書――

福岡市埋蔵文化財調査報告書第413集

1995

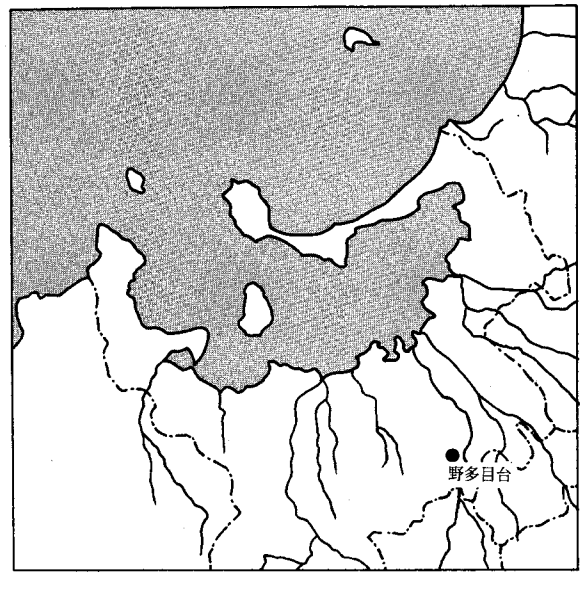
福岡市教育委員会

野多目台

（のためだい）

——野多目B・和田B遺跡調査報告——

福岡市埋蔵文化財調査報告書第413集



1995

福岡市教育委員会

1.　和田Ｂ遺跡Ａ地区全景（東から）

2.　野多目Ｂ遺跡全景（西から）

1.　1号墳主体部人骨出土状況（南から）

2.　3号墳主体部人骨出土状況（西から）

序

九州の北岸に位置する福岡市域はその地理的条件から、古代より大陸や朝鮮半島からさまざまな文化を受容し栄えてきました。市内には数多くの遺跡が分布しています。野多目Ｂ遺跡群、和田Ｂ遺跡群はその中でも弥生時代から古墳時代を中心とした代表的な大規模遺跡です。

福岡市教育委員会ではさまざまな開発によって失われていく文化財について事前の調査をおこない、保存策に努めています。

本書は市内南区に計画された団地造成にともなう埋蔵文化財の発掘調査報告書です。調査によって先土器、縄文、弥生、古墳、古代など、各時期の遺構が検出されました。この成果は、本地域の歴史や文化を語る上で重要な手がかりとなるものと考えられます。

本書が文化財保護の理解を深める一助となり、併せて研究資料として活用いただければ幸いです。

1995年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　尾花　剛

例　　言

1．本書は、福岡市住宅供給公社による（仮称）野多目台住宅建設にともない、福岡市教育委員会が1992年４月16日～同年７月20日に発掘を実施した野多目Ｂ遺跡群の第１次調査ならびに、1993年５月15日～1994年１月17日に発掘を実施した和田Ｂ遺跡群の第１次調査報告書である。

2．本書使用の遺構実測図は、井英明、大塚紀宣、尾園晃、甲斐孝司、金宰賢、岸本圭、佐藤亜聖、嶽道弘明、立石真二、田村佐和子、中野聡子、中村昌慈、八丁由香、宮田剛、山上博明、リサ・ホジキンソン、吉留秀敏が作成し、浄書は吉留秀敏、杉内郷がおこなった。

3．本書使用の遺物実測図は杉内郷、森部順子、吉留秀敏が作成し、浄書は吉留秀敏がおこなった。

4．本書使用の写真は吉留秀敏が撮影した。なお、遺跡の航空写真は㈲空中写真企画に依頼した。

5．本書使用の標高は海抜高であり、方位は磁北である。本地域における真北との偏差は6°21′である。

6．本書の執筆は第５章 1)を本田光子、第３章 5)の人骨所見と第５章の 2)を金宰賢、石井博司、田中良之がおこない、その他は吉留秀敏がおこなった。編集は吉留秀敏がおこなった。

7．本書に関わる図面、写真、遺物などの資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

遺跡調査番号：　9204		遺跡略号：　NMB-1
地番：福岡市南区野多目３丁目595-7他		分布地図番号：　老司040-0146
開発面積：6,000㎡	調査対象面積：　1,900㎡	調査面積：　1,675㎡
調査期間：　1992年４月16日～1992年７月20日		

遺跡調査番号：　9313		遺跡略号：　WAB-1
地番：福岡市南区野多目３丁目地内		分布地図番号：　三宅039-0138
開発面積：74,019㎡	調査対象面積：　13,500㎡	調査面積：　13,500㎡
調査期間：　1993年５月15日～1994年１月17日		

本　文　目　次

第１章、はじめに
　1)調査に至る経過 …… 1
　2)調査の経過と体制 …… 1
　3)遺跡の位置と地理的環境 …… 3
　4)周辺遺跡の調査と成果 …… 4
第２章、野多目Ｂ遺跡群第１次調査 …… 5
　1)調査の概要 …… 5
　2)地形と基本層位 …… 6
　3)縄文時代の調査 …… 7
　4)弥生時代の調査 …… 11
　5)古代の調査 …… 13
　6)その他の遺構と遺物 …… 22
第３章、和田Ｂ遺跡Ａ地区調査 …… 23
　1)調査の概要 …… 23
　2)先土器時代の調査 …… 25
　3)縄文時代の調査 …… 28
　4)弥生時代の調査 …… 35
　5)古墳時代の調査 …… 79
　6)その他の遺構と遺物 …… 97
第４章、和田Ｂ遺跡Ｂ地区調査 …… 103
　1)調査の概要 …… 103
　2)先土器時代の調査 …… 104
　3)縄文時代の調査 …… 104
第５章、考察 …… 110
　1)和田Ｂ遺跡出土の赤色顔料について …… 本田光子 110
　2)和田Ｂ遺跡出土の人骨について ……金宰賢・石井博司・田中良之 111
第６章、まとめ …… 119

挿　図　目　次

図１、野多目Ｂ・和田Ｂ遺跡の周辺地形図（1/5,000）……3
図２、1930年地形図（1/50,000）……4
図３、1986年地形図（1/50,000）……4
図４、調査区周辺地形図（1/1,000）……5
図５、調査区南壁断面土層図（1/15）……6
図６、縄文時代調査区配置図（1/400）……7
図７、縄文時代遺構配置図（1/200）……8
図８、流路 SD61出土遺物１（1/4,2/3）……9
図９、流路 SD61出土遺物２（2/3）……10
図10、弥生時代遺構配置図（1/400）……11
図11、溝 SD52a,b 断面、断面土層図（1/40,1/100）……12
図12、溝 SD52出土遺物（1/4,2/3）……12
図13、古代遺構配置図（1/400）……13
図14、古代遺構図１（1/40）……15
図15、古代遺構図２（1/40）……16
図16、古代遺構図３（1/40）……17
図17、古代遺構図４（1/40）……18
図18、古代遺構図５（1/40）……19
図19、土壙出土の遺物１（1/4）……21
図20、土壙出土の遺物２（1/4,2/3）……22
図21、野多目Ｂ遺跡その他の出土遺物（1/4,2/3）……22
図22、和田Ｂ遺跡調査区配置図（1/2,000）……23
図23、和田Ｂ遺跡Ａ調査地区全体図（1/1,000）……24
図24、基本土層図（1/15）……25
図25、先土器時代調査区、遺物出土状況（1/200）……25
図26、先土器時代調査区出土遺物（2/3）……26
図27、Ａ地区先土器時代出土遺物（2/3）……27
図28、縄文時代遺構の分布（1/1,000）……28
図29、縄文時代遺構図１（1/40）……29
図30、縄文時代遺構図２（1/40）……30
図31、縄文時代遺構図３（1/40）……32
図32、縄文時代遺構図４（1/40）……33
図33、縄文時代出土遺物（2/3,1/2）……34
図34、弥生時代遺構配置図（1/1,000）……35
図35、Ｉ地区弥生時代遺構配置図（1/300）……36
図36、SC17遺構図（1/50）……37
図37、SC17出土遺物（1/4,1/2,2/3）……37
図38、SC18－19遺構図（1/50）……38
図39、SC18－19出土遺物（1/4）……38
図40、SC21遺構図（1/50）……38
図41、SC29遺構図（1/50）……38
図42、SC30遺構図（1/50）……39
図43、SC30出土遺物（1/4）……39
図44、SC35遺構図（1/50）……39
図45、SC40遺構図（1/50）……40
図46、SC40出土遺物（1/4）……40
図47、SC42遺構図（1/50）……41
図48、SC43遺構図（1/50）……41
図49、SC45遺構図（1/50）……41
図50、SC43・45出土遺物（1/2,1/4）……41
図51、SC52遺構図（1/50）……42
図52、SC61遺構図（1/50）……42
図53、SC62遺構図（1/50）……42
図54、SK17遺構図（1/50）……43
図55、SK18遺構図（1/50）……44
図56、SK19遺構図（1/50）……45
図57、SK20遺構図（1/50）……46
図58、SK21遺構図（1/50）……47
図59、SK23遺構図（1/50）……47
図60、SK24遺構図（1/50）……48
図61、SK25遺構図（1/50）……49
図62、SK26遺構図（1/50）……50
図63、SK27遺構図（1/50）……50
図64、SK28遺構図（1/50）……51
図65、SK29遺構図（1/50）……52
図66、SK30遺構図（1/50）……53
図67、SK32遺構図（1/50）……53
図68、SK33遺構図（1/50）……54
図69、SK34遺構図（1/50）……55
図70、SK35a・b実測図（1/50）……56
図71、SK35a 遺構図（1/50）……57

図72、SK35出土遺物（2/3）……57
図73、SK36遺構図（1/50）……58
図74、SK36出土遺物（1/4）……58
図75、SK38遺構図（1/50）……58
図76、SK39遺構図（1/50）……59
図77、SK40a•f 遺構図（1/50）……60
図78、SK40b 遺構図（1/50）……61
図79、SK40c•d•e 遺構図（1/50）……62
図80、SK41遺構図（1/50）……63
図81、SK41出土遺物（1/4）……64
図82、SK42遺構図（1/50）……64
図83、SK44遺構図（1/50）……65
図84、SK45遺構図（1/50）……65
図85、SK46遺構図（1/50）……66
図86、SK47遺構図（1/50）……66
図87、SK48遺構図（1/50）……67
図88、SK49遺構図（1/50）……68
図89、SK50遺構図（1/50）……69
図90、SK51遺構図（1/50）……70
図91、SK53遺構図（1/50）……71
図92、SK57遺構図（1/50）……71
図93、SK59遺構図（1/50）……72
図94、SK60遺構図（1/50）……73
図95、SK61遺構図（1/50）……74
図96、SK61遺物出土状態（1/50）……74
図97、SK61出土遺物（1/4）……74
図98、SK62遺構図（1/50）……75
図99、SK63遺構図（1/50）……75
図100、SK101遺構図（1/50）……76
図101、SR55•56遺構図（1/50）……76
図102、SK107遺構図（1/40）……77
図103、SK107出土遺物（1/4,1/2,2/3）……77
図104、SK109遺構図（1/50）……78
図105、その他の弥生時代出土遺物
（1/2,1/4）……78
図106、古墳時代遺構の分布（1/1,000）……79
図107、1•2号古墳調査前地形図（1/200）……80
図108、1号墳墳丘図（1/100）……81
図109、1号墳墳丘断面土層図（1/60）……81
図110、1号墳主体部（1/30）……82
図111、1号墳主体部人骨出土状況……83
図112、2号墳墳丘、周溝図（1/100,1/60）……84
図113、2号墳主体部（1/30）……85
図114、3号墳調査前地形図（1/200）……86
図115、3号墳墳丘図（1/100）……87
図116、3号墳墳丘土層図（1/60）……88
図117、3号墳主体部（1/30）……89
図118、3号墳主体部人骨出土状況……90
図119、4•5号墳調査前地形図（1/200）……91
図120、4号墳墳丘図（1/100）……92
図121、4号墳墳丘、周溝土層図（1/60）……93
図122、4号墳出土遺物（2/3,1/4）……94
図123、5号墳墳丘、周溝土層図
（1/60,1/100）……95
図124、SK110遺構図（1/20）……95
図125、石組遺構SX102（1/20）……96
図126、その他の遺構（1/1,000）……97
図127、土壙1（1/40）……98
図128、土壙2（1/40）……99
図129、土壙3（1/40）……100
図130、溝状遺構断面図（1/40）……101
図131、SK110……101
図132、B地区と主要遺構……102
図133、B地区遺構分布図（1/1,000）……103
図134、先土器時代の遺物（2/3）……104
図135、SC209出土遺物（1/4,2/3）……104
図136、SC201遺構図（1/50）……105
図137、SC209遺構図（1/50）……105
図138、SC201調査状況（北から）……106
図139、SC209完掘状況（南西から）……106
図140、縄文時代遺構図1（1/40）……107
図141、縄文時代遺構図2（1/40）……108
図142、縄文時代の遺物（2/3）……109
図143、弥生時代の遺構分布……119

図　版　目　次

図版１
1.野多目Ｂ遺跡全景（西から）
2.古代遺構調査全景（上から）
3.縄文～弥生遺構調査全景　（上から）
4.調査区東側近景（北から）
5.Ａ～Ｃ,３～５区付近 土壙群遠景（北から）
図版２
1.ＳＫ06 遺構出土状況（西から）
2.ＳＫ09 遺構出土状況（南西から）
3.ＳＫ10 遺物出土状況（北から）
4.ＳＫ12 遺構出土状況（西から）
5.ＳＫ14 遺物出土状況（東から）
6.ＳＫ15 遺物出土状況（北西から）
7.ＳＫ15 遺物出土状況
8.ＳＫ16 遺構出土状況
図版３
1.ＳＫ23 完堀状況（南から）
2.ＳＫ24 完堀状況（南西から）
3.ＳＫ03 遺物出土状況（南東から）
4.ＳＫ38 遺物出土状況（東から）
5.ＳＤ52 近景（東から）
6.ＳＤ52　（東から）
7.ＳＤ60 完堀状況（南から）
8.ＳＤ60 付近近景（北から）
図版４
1.和田Ｂ遺跡Ａ地区全景（東から）
2.Ａ地区近景（東から）
3.Ａ地区から野多目Ｂ遺跡をのぞむ（西から）
4.Ａ地区１,２号墳付近（西から）
5.Ａ地区東側（上から）
6.１,２号墳全景
図版５
1.Ａ地区旧石器調査区近景（北から）
2.Ａ地区旧石器調査区遺物出土状況（北から）
3.ＳＫ71 完堀状況
4.ＳＫ84 完堀状況（西から）
5.ＳＫ89 完堀状況（東から）
6.ＳＫ85 完堀状況（北東から）
7.ＳＤ103 全景（東から）
8.ＳＸ102 検出状況（西から）
図版６
1.貯蔵穴群調査風景（南西から）
2.貯蔵穴群調査風景（西から）
3.ＳＣ45 炉検出状態（北西から）
4.ＳＣ21 半堀状況（東から）
5.ＳＫ17 土層断面
6.ＳＣ35 検出状況
7.ＳＫ18 完堀状態
8.ＳＫ51 完堀状態（北から）
図版７
1.１号墳全景（南西から）
2.１号墳主体部検出状況（南西から）
3.１号墳主体部人骨出土状況（南東から）
4.１号墳主体部石組状況（北西から）
5.１号墳墓壙掘方（北西から）
6.１号墳墳丘盛土土層断面（北から）
7.１号墳周溝土層断面（北東から）
8.１,２号墳全景（南西から）
9.２号墳縦軸ベルト除去後（北西から）
図版８
1.２号墳主体部埋土
2.２号墳墓壙掘方（北西から）
3.２号墳周溝土層断面（北東から）
4.３号墳全景
5.３号墳全景
6.３号墳周溝土層断面
図版９
1.３号墳主体部検出状況（北東から）
2.３号墳主体部人骨出土状況（北東から）
3.３号墳主体部石組状況（北東から）
4.３号墳墓壙掘方（北東から）
5.５号墳墳丘（北から）
6.４,５号墳近景（北から）
7.４号墳周溝土層断面（北から）
8.ＳＸ102 人骨出土状況
図版１０
野多目Ｂ・和田Ｂ遺跡出土遺物

第１章、はじめに

1)調査に至る経過

1990（平成２）年に福岡市住宅供給公社（以下、甲とする）から、福岡市南区野多目３丁目地内における大規模住宅建設に関する埋蔵文化財事前審査願申請（受付番号４-２-９）がなされた。住宅建設用地はこれまで国立九州ガンセンター敷地内の山林、運動場であった範囲である。福岡市教育委員会（以下、乙とする）では申請地が野多目Ｂ遺跡、和田Ｂ遺跡の範囲内及び隣接地であることから、事前の埋蔵文化財の確認調査の必要を認めた。同年に東側運動場部分について二回の試掘調査をおこなった。試掘は申請地に東西方向のトレンチを複数設定した。一帯は沖積地である。試掘調査の結果、対象地の南端部分1,900㎡において土壙などの遺構ならびに土器片などの出土があった。それ以外では遺跡の存在は確認されなかった。引き続き、申請地の東側にあたる山林、丘陵部分については1991（平成３）年11月～1992（平成４）年１月に試掘調査をおこなった。山林部分は保存樹木を痛めぬよう一部は人力でおこなった。その結果、対象地の南北２地区において古墳、土壙、溝状遺構、焼土壙などが確認された。特に古墳は埋葬主体が箱式石棺であり、保存状態の良い埋葬人骨も確認された。遺存状態の良い前期古墳の存在が推定された。

このように試掘調査の結果、申請地で以下の３カ所に埋蔵文化財の存在が確認された。

遺構名	区	所 在 地	面積(㎡)	内　　容
野多目Ｂ		南区野多目３丁目595-7他	1,900	土壙、土器片他
和 田 Ｂ	Ａ	南区野多目３丁目地内	11,000	古墳、土壙、溝状遺構他
和 田 Ｂ	Ｂ	南区野多目３丁目地内	2,500	土壙他

この結果を受けて、甲、乙は埋蔵文化財保存の協議をおこなったが、建設にともなう造成計画では現状保存は困難であり、発掘調査により記録保存をおこなうこととなった。乙は発掘調査の対象面積、期間、予算の策定をおこない、甲に報告した。その後、両者は数回の協議を重ね、同年７月に甲と乙は発掘調査の受託契約を締結した。調査期間は２カ年に分け、野多目Ｂ遺跡について1992（平成４）年４月16日から同年７月15日、和田Ｂ遺跡については1993（平成５）年５月17日から同年11月16日の予定とした。

2)調査の経過と体制

野多目Ｂ遺跡の発掘調査は1992（平成４）年４月16日から同年７月15日の予定で発掘調査を開始することになった。調査はまず重機によって、表土、造成土の除去をおこない、次に人力により、遺構の検出、調査を進めた。対象地は昭和初期まで水田であったが、日本陸軍病院用地として買収され、１ｍ以上の造成土を盛り、整地してあった。造成土中や一部は遺構に達する深さで数回の建物基礎や、上下水道管、病院廃棄物投棄坑など多数の撹乱がみられた。遺構検出面までは軟弱な地盤であり、安全のために周囲に法面を設けた。遺構検出面では湧水が著しく、常時排水が必要となった。また、調査範囲の周囲地形が高く、あわせて排水施設がないために、雨水は調査区内に流入した。降雨時には排水が追いつかず調査区全域がたびたび冠水し、調査は困難を極めた。

和田Ｂ遺跡の発掘調査は1993（平成５）年５月17日から同年11月16日の予定で発掘調査を開始した。造成工事と並行した調査であるために、工事との協議や調整を進めながら調査をおこなった。工事に

沿って段階的に調査、引き渡しをおこなった。まず、A地区を優先調査し、その後B地区を調査した。A地区はさらに4期に分け、1期として調整池用地(994㎡)、2期として工事用道路部分(1,689㎡)、3期として丘陵本体部分(6,194㎡)、4期として丘陵最高所部分(2,123㎡)を順に調査した。

なお、1期分は造成地内の雨水処理のために梅雨期前の調査終了が求められたために、先行調査し、6月14日に終了した。調査はまず重機によって表土、撹乱部分の除去をおこなった。次に人力によって遺構の検出をおこなった。丘陵斜面には陸軍病院の各種施設が設けられ、相当の撹乱がある。

なお、1993年6月から9月は記録的な長雨、台風襲来があり、合計して約30日が作業困難となった。また、3期部分に貯蔵穴群、4期部分に先土器時代遺跡など、試掘調査では確認できなかった遺構が発見され、協議の上、調査を1994年1月17日まで延期することとなった。

調査組織

本遺跡の調査にあたって以下の組織を準備した。また、調査、整理作業過程において各方面の協力をお願いした。

野多目B遺跡(1992年度)

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第2係
教育長　井口雄哉
部長　花田兎一
課長　折尾　学
第2係長　塩屋勝利

調査庶務：中山昭則、吉田麻由美、寺崎幸男

事前審査、試掘調査：二宮忠司、瀧本正志

調査担当：吉留秀敏

調査補助：井英明

調査作業：上野龍夫、別府俊美、徳永静雄、大長正弘、松井一美、亀井好明、斎藤武雄、小早川邦雄、関義種、神川健次郎、田出橋和男、城戸健、小原康義、藤野雅基、清水邦博、古賀典子、江越ハツヨ、関加代子、山崎悦子、藤野信子

整理作業：尾崎君枝、甲斐田嘉子、木村良子、丸井節子、宮坂環、星子輝美、森部順子

調査・整理協力：立石真二

和田B遺跡(1993年度)

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第2係
教育長　尾花　剛
部長　後藤　直
課長　折尾　学
第2係長　山崎純男

調査庶務：中山昭則、吉田麻由美、寺崎幸男

事前審査、試掘調査：井沢洋一、吉武学

調査担当：吉留秀敏

調査補助：井英明、立石信二、日永田能成、八丁由香、金宰賢、リサ・ホジキンソン、大塚紀宜、宮田剛、尾園晃、岸本圭、嶽道弘明（九州大学)、佐藤亜聖、山上博明（奈良大学)、中野聡子、甲斐孝司、田村佐和子、中村昌慈（福岡大学)

調査作業：池田省三、上野龍夫、大谷政道、越智信孝、川野勇次、木村ヨシオ、近藤正幸、

志堂寺堂、谷英二、別府俊美、徳永静雄、大長晃一、大長正弘、中村米重、西島睦雄、羽岡正春、平井武夫、藤野保夫、松井一美、亀井好明、大城松徳、正木信二、山口熊猛、山口杜人、山田孝允、赤間忠子、有田恵子、石川洋子、市尾由美子、伊藤美伸、岩本三重子、大久保ヒデコ、加集和子、金子さだ子、木下露子、倉八香、古賀典子、米田理恵子、篠塚ひろ子、澄川アキヨ、澄川都、竹下雪子、田中トミ子、寺嶋道子、富田明子、富田輝子、中島真美子、中村フミ子、永隈洋子、長野とみこ、長野由美子、永松伊都子、福場真由美、藤田恵子、藤野信子、藤原直子、北条こず江、松本幸子、水田ミヨコ、森山キヨ子、山下美佐子、山本良子、米倉治美

整理作業：尾崎君枝、甲斐田嘉子、木村良子、丸井節子、宮坂環、星子輝美、森部順子、富田輝子、三苫裕子

また、調査、整理にあたっては下記の方々・機関のご教示、ご指導やご援助を賜った。記して謝意を表したい。(順不順、敬称略)

亀井明徳、武末純一、田中良之、田崎博之、城戸康利、塩地潤一、山村信榮、井上繭子、北島大輔、井上義也、水口由香、林潤也、石橋忠治、坂田規子、九州大学考古学研究室、九州大学大学院比較社会文化研究科基礎構造講座、福岡大学考古学研究室

3)遺跡の位置と地理的環境（図１）

両遺跡は那珂川、御笠川によって形成される狭義の福岡平野の西側に立地する先土器時代から中世にかけての複合遺跡である。

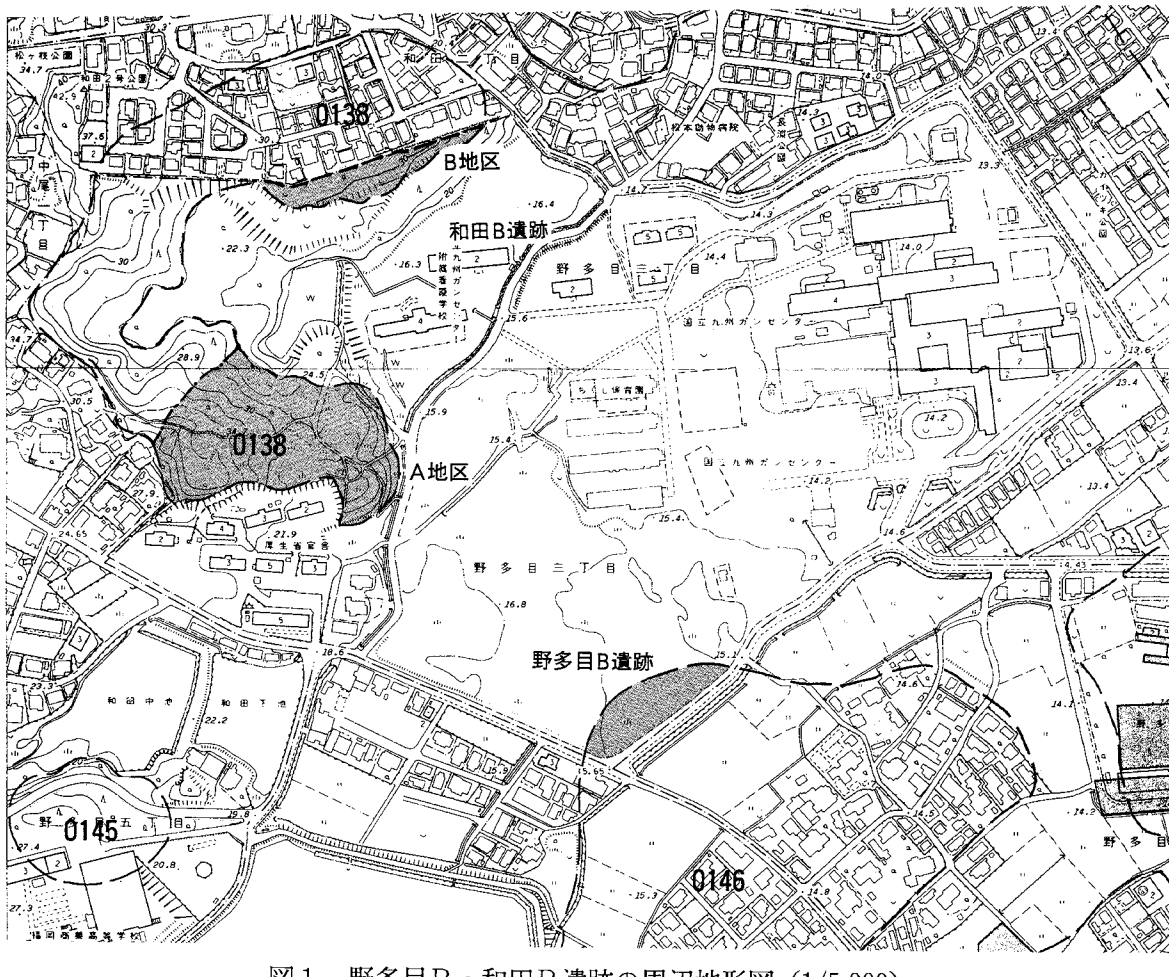


図１．野多目Ｂ・和田Ｂ遺跡の周辺地形図（1/5,000）

福岡平野は背後を背振山塊、三郡山塊に囲まれ、北に玄界灘に面する開放形の沖積平野である。平野を貫流して南から那珂川と御笠川が流れ、両河川の周辺には開析の進んだ丘陵や段丘が残されている。この遺跡の立地している那珂川流域は左岸を油山(592m)からのびる標高100～20mの花崗岩を基盤とする丘陵が頂面高度を北位に下げてのびている。右岸は標高100～60mの春日丘陵と呼ばれる花崗岩基盤の低丘陵からなる。何れの丘陵も浸食が進み樹枝状の丘陵となっている。両遺跡は那珂川左岸にあり、付近は油山山系の花崗岩基盤による低丘陵と沖積谷部が樹枝状に分布している。

野多目B遺跡は中位段丘上にあり、舌状に延びる低丘陵と周辺の沖積地を含んでいる。近年まで水田地帯であった（図2)。現在の標高は15～16mである。和田B遺跡は野多目B遺跡の北西側200～300mの丘陵先端にある。現在の標高は20～40mである。両遺跡は指呼の距離にあるといってよい（図3)。

4)周辺遺跡の調査と成果

両遺跡周辺での考古学的調査は1960～70年代までの採集活動から始まる。なお、戦前に現在の和田B遺跡付近で陸軍病院建設に際して甕棺や石棺、人骨の出土があったと地元で語り継がれていたが、その記録や追跡調査はおこなわれていない。戦後になると野多目B遺跡の南100mにある野多目池（農業用溜池）で縄文時代と見られる石鏃、石匙の採集があり、和田B遺跡のすぐ北側にあたる中尾・若久地区では縄文時代中期の遺物が採集されている。この付近は福岡平野では数少ない縄文時代遺跡として記録、注目されている。その後、1980年代になると野多目B遺跡の東側に位置する野多目A、C（拈渡、古屋敷）遺跡において福岡市教育委員会による発掘調査が始まる。野多目A遺跡ではこれまで3次の調査がおこなわれている。夜臼式期の水田関連遺構、古墳時代や古代から中世の集落跡、野多目C遺跡では周辺調査を合わせて5次の調査がおこなわれている。低丘陵上では先土器時代の包含層、弥生前期後半から中期初頭の住居や貯蔵穴、古墳時代の住居、古代の掘立柱建物群などがあり、丘陵西側の低地では縄文時代中期後半から後期初頭と同晩期中葉の堅果類貯蔵穴群、溝、河川などが検出されている。このように野多目遺跡周辺では各時期の遺構が濃密に分布している状態が伺え、各時代ともに重要な成果が得られている。

図2．1930年地形図（1/50,000）

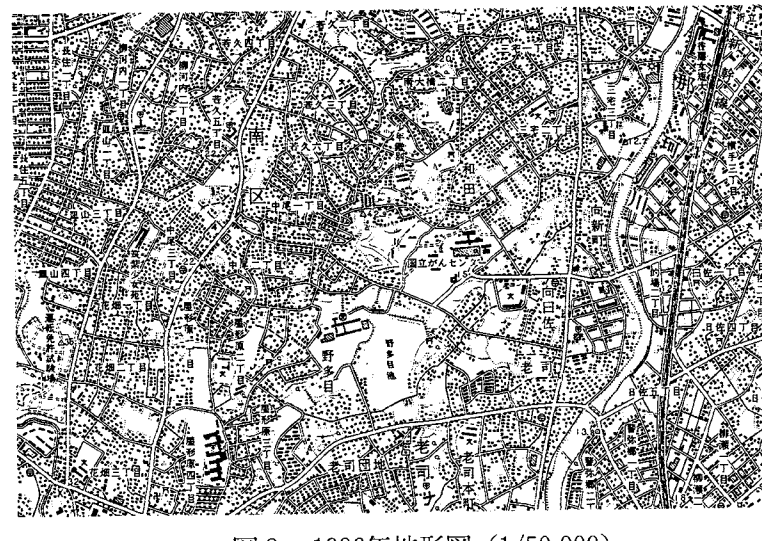


図3．1986年地形図（1/50,000）

第２章、野多目Ｂ遺跡群第１次調査

1)調査の概要

本調査地点は建物建設予定地である。周辺は南側に現在の道路、北側に福岡外環状道路予定地があり、両者に挟まれたおおよそ三角形の土地である（図4)。試掘調査の結果この土地のおおよそ東側半分に遺構の分布が確かめられた。この部分が調査対象地である。福岡市遺跡地図によると野多目Ｂ遺跡の西縁にあたる場所である。

調査は当初重機により表土、造成土の除去をおこない、その後人力により進めることにした。試掘の成果から１ｍ以上の造成土の存在が確かめられていたが、掘削開始後、その造成土は極めて軟弱であることや予測以上に湧水が多いことから、安全のために40°前後の法面を設けた。湧水は調査開始後、南側の水田に水が張られてからさらに増し、常時強制排水を必要とした。

調査範囲は東西約65m、南北約35ｍであり、1,675㎡の範囲である。

調査用グリットは調査範囲に平行して、６ｍを基本単位とする区画を設けた。各グリットの名称は北東端を起点とし、南方向にA、B、C…、西方向に１、２、３…とし、Ｂ２区、Ｃ８区と６ｍ四方を基本単位に調査をおこなった。

調査開始後まもなく、調査区の東半分に不整な円、楕円形を基本とする土壙を多数確認した。平面的には切り合いが少なく、覆土が共通した土色、土質をなすことから、比較的短期間の遺構であると想定された。

長軸方向を基本に土層観察をおこないながら調査を進めることとした。土壙内からの遺物の出土は少ないが、須恵器、土師器、瓦類の出土があり、その特徴から８世紀代の時期と考えられた。また、覆土の特徴や土壙の形態、遺物の出土状態から埋葬遺構の可能性が考えられた。

これらの古代の遺構の調査後、同一面で認められた溝状の遺構の調査をおこなった。溝状遺構は断面U～V字形をなし、調査区内で蛇行、分流している。溝内からの遺物は極めて少ないが、弥生時代前期以前のも

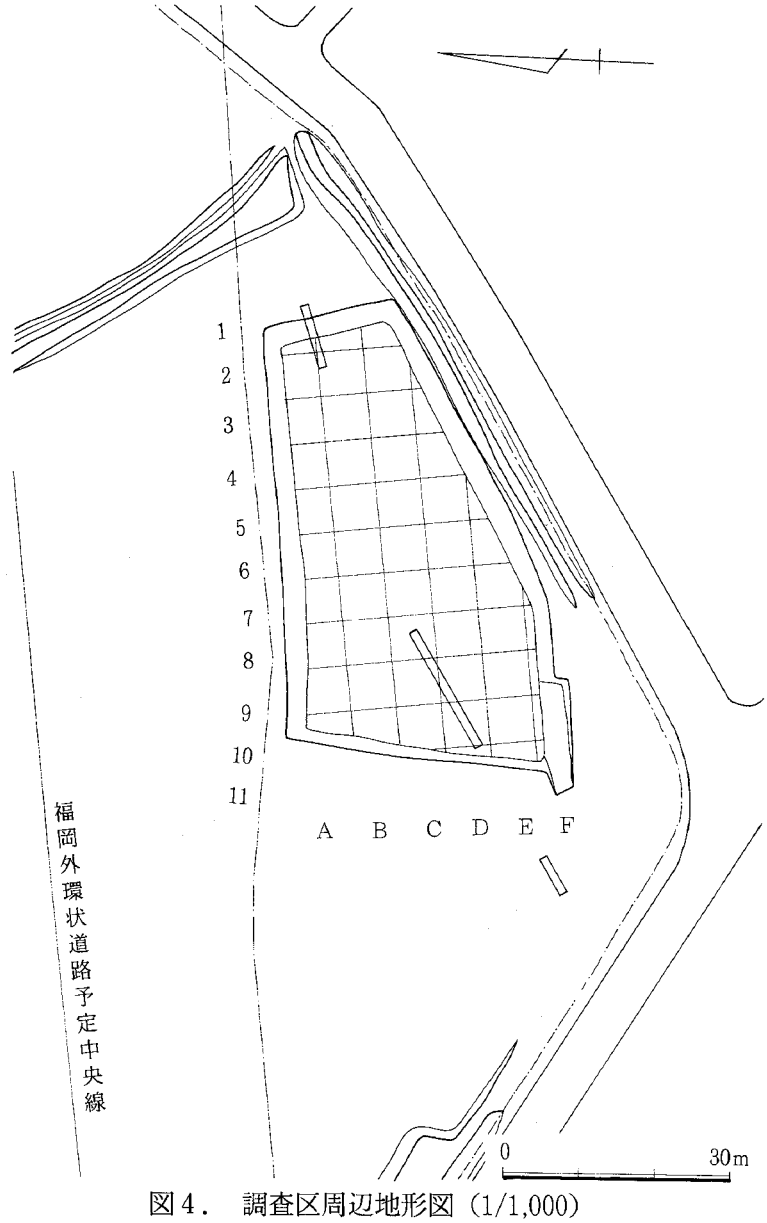


図４．　調査区周辺地形図（1/1,000）

のに限られていることや、溝の各所に水口と見られる突出部があることから、同時代の水田用潅漑用水路であろうと推定した。同様の例は本調査地点から北東約400m に位置する野多目Ａ遺跡第２次調査地点でも確認されている（福岡市埋蔵文化財調査報告書第159集,1987)。

弥生時代遺構の調査段階に調査区西側のＣ・Ｄ８・９区付近の溝状遺構の基盤である砂層中から土器片、黒耀石片が認められたことから、Ａ～Ｅ-８～９区に調査区を設け掘り下げをおこなった。その結果、流路、溝状遺構とともに縄文時代後期前半の土器片、石器類、堅果類を検出した。しかし、これらの検出面の最深部が既に現地表から約３ｍに達したことや、著しい湧水と壁面の崩壊が始まり調査自体が危険となった。また、残された調査期間も少なくなったことから、最小限の記録にとどめ、これ以上の追跡を断念した。

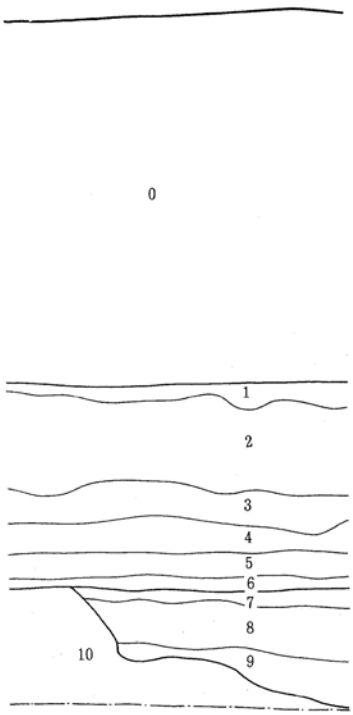
2)地形と基本層位

福岡平野における段丘は高位・中位・低位の３段に区分されている。那珂川中流左岸に位置する本遺跡は中位段丘Ⅱ面にあたる。基盤は早良花崗岩であり、段丘上部をAso-Ⅳ火砕流が覆っている。調査地点の東約500m付近には、那珂川に沿って不明瞭な段丘崖が南北に認められる。那珂川と段丘崖の間には旧河道跡や自然堤防からなる低位段丘の形成が認められる。

これまでの周辺の遺跡調査の結果、段丘上はさらに更新世低丘陵とそれが浸食により二次的に開析、再堆積した沖積地からなっている。両者の比高差は現在２ｍ以下となっている。

その基本層序は低丘陵上が下位からAso-Ⅳ火砕流に該当する八女粘土、鳥栖ローム、さらに新期ローム層と続き、クロボク質土層、表層土壌となっている。沖積地の基本層序は下位から八女粘土（二次堆積を含む)、砂礫層、微砂～シルト層、黒色～暗色腐植土壌と考えられる。ただし、多くの場所では後世の水田、畑地などの形成にともない上部の堆積は二次的な改変を受けている。

本調査地点南壁の基本土層（図5）は、地表下すぐに戦前の造成土が約1mあり（0層)、その直下が旧水田面となる。その下約0.5mは水田耕作土、



0：土層のあり方　（礫―こぶし大以上―が多量に混入する等の状態）から、整地による埋土と思われる。
1：黒色腐蝕土　しまりよくやわらかい、粘性ややあり。
2：暗灰褐色砂質土　しまりよく硬い、粘性ややあり、細くほぼ均一な砂粒つまる。→ 水田耕作面
3：暗茶褐色粘質土　しまりよく硬い、細くほぼ均一な砂粒が少量含まれる。→ 水田床面の層にあたる
4：黄褐色土　しまりよく硬い、粘性ややあり、部分的に砂粒―細くほぼ均一―がつまる。→ 水田面、耕作土面
5：茶褐色土　（４よりも色調が暗い）しまりよく硬い、細い砂粒が若干含まれる。→ 水田床面
6：暗赤褐色　しまりよく硬い、細くほぼ均一な砂粒が多量に含まれる。全体的に鉄分のしみこみが見られる。
7：灰褐色砂質土　しまりよく硬い、粗く均一でない砂粒がすまる。鉄分を部分的に含む。
8：灰褐色土　（７よりも明るい色調）しまりよく硬い、粘質。
9：淡白色砂質土　しまりよく硬い、粗く均一ではない砂粒がつまる。
10：暗赤褐色粘質土～淡青褐色粘質土（八女粘土二次堆積）地山ローム層。

図５．　調査区南壁断面土層図（1/15）

床土の累層（1～6層）となる。その下部はすぐ八女粘土二次堆積層（10層）が現れる。これを切る浸食、堆積砂（8・9層）は縄文時代以降のものである。付近が水田開発にともない相当削平されていることは明らかである。なお、調査開始段階の遺構検出面の東半分は10層上面であるが、西半分は8・9層中である。したがって、古代、弥生時代の遺構検出面は10層上面であり、縄文時代遺構の確認は東側で8・9層を掘り下げて調査した。こうした点から本調査地点では、中位段丘上の沖積地内に立地するが、より詳細な地形は削平のために不明である。

3)縄文時代の調査

調査区西側のA～E-8～9区に縄文時代調査区を設けた。その結果、流路と溝状遺構とともに縄文時代後期前半の土器片、石器類、堅果類などを検出した。

検出遺構と遺物

流路SD61：調査区の西側で検出した。流路の東岸部分のみを長さ約26mほど検出したものである。E10区からA9・10区に向かってほぼ南北に方位を取る。流路の幅は3.0m以上、深さ最大1.0m程度と見られるが、未検出部分が多く詳細な規模は不明である。検出面での溝底は北に下がることから、南から北への流れがあったものと見られる。流路内の埋土は粗砂と細砂、シルト質土の互層からなり、大きな不整合は認められなかった。比較的短期間の埋没と推定された。流路の東岸には大きく抉られた「淀み」状の落ち込みが2カ所ある。1つはE10区にあり、幅、長さともに3m以上、深さ0.4m程度である。もう一つはC・D-9・10区にあり、幅約7m、長さ約10m、深さ0.6m程度である。これらの「淀み」の埋土は流路と連続しており、流路の蛇行などにより形成されたものと推定される。流路の埋土中からは多量の流木が出土し、それに混じって土器片、石器類が散漫に出土した。またそのほかに、カシなどの堅果類が多く含まれていた。ほかに大型菌類（茸）も出土した。注目されるのはE10区付近に堅果類の殻が多量に出土したことである。「淀み」との合流点付近の流路下部に厚さ10cm以下の殻を主体とする堆積が2枚以上あった。再堆積の可能性もあるが、層は南東から流路内に傾斜していることから、流路の東側から流れ込んだものと推定した。

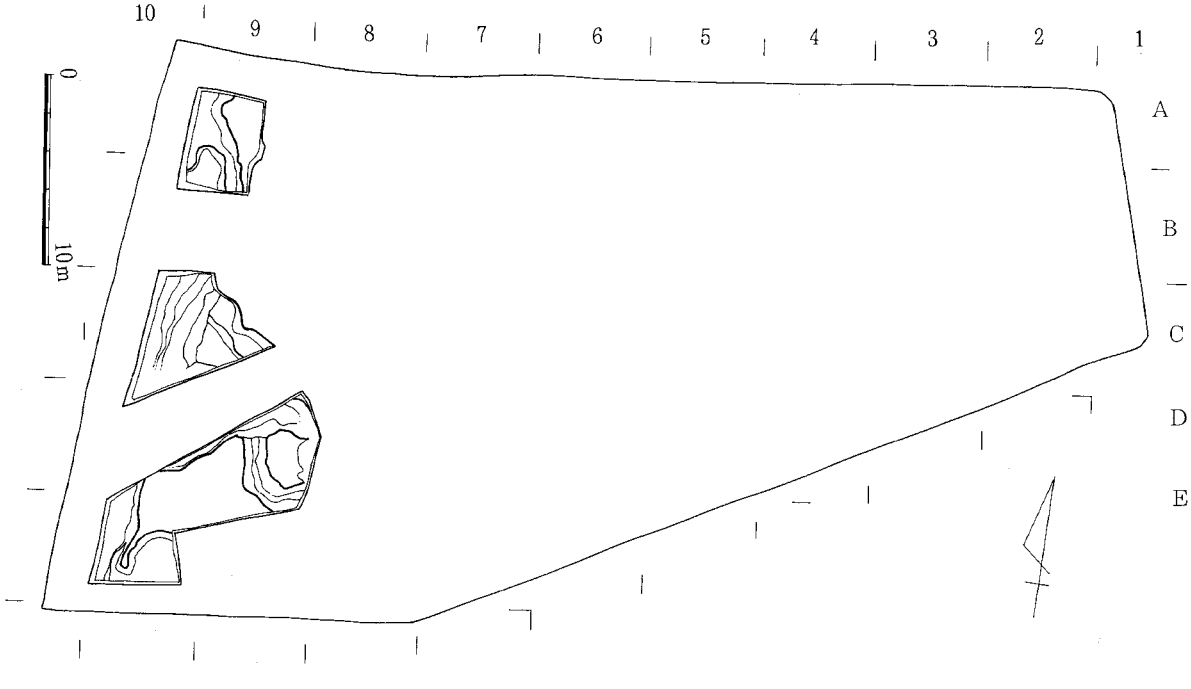


図6．縄文時代調査区配置図（1/400）

溝SD62：D・E９区に長さ約５ｍを検出した。略東西方向から南北方向に曲線を描いて向きをかえる、断面逆台形の溝状遺構である。幅約1.5ｍ、深さ約0.3ｍを測る。僅かであるが、東側で広く、深くなり、北側で狭くなる。北端はSD61の「淀み」に切られる。溝内の埋土は大まかに２区分される。上層は黒褐色粘質土であり、腐植土層である。下層は暗灰色砂層である。上部は堅い埋土であった。なお遺構の基盤は八女粘土層である。溝内の遺物は少量の土器片と黒耀石片がある。何れも縄文時代後期以前のものとみられたが、図化に耐えるものはない。

遺構内からの出土遺物：ＳＤ61からは土器片、石器類が出土した（図８、９）。土器類には深鉢の口縁部、底部などがある。

１～６は外面に文様をもつ。このうち１～４は口縁部破片である。１は口縁部外面に爪形文を四段に施す。口縁は緩くひろがり、口径約18cmを測る。胎土に滑石片を含む。２は口縁外面に連続、断続の横位の凹線文を施す口唇部は平坦となり、緩く外反する。３、４は同一固体か。口縁外面に断続の凹線文を施す。５、６は口縁部に近い胴部破片とみられる。動揺に凹線文がある。７は無文の深鉢口縁部片である。８～12は胴部破片であり、文様はない。このうち９～12は器壁が薄く内外面に貝殻による条痕がみられる。８、12は調整後ナデで仕上げている。14～19は底部破片である。何れも平底であり、内外面を指押さえ、ネデで仕上げる。16には内倍面に貝殻による条痕がある。凹線文が細く、文様の特徴は阿高式系土器類の中でも新しい様相をもつ。

石器類には石鏃７、石匙１、削器１、石核1、楔形石器１、剥片10、砕片21、原石1の計43点が出土した。石材は黒耀石29点、古銅輝石安山岩14点である。

21～32は石器である。21～27は石鏃である。全て良質の黒耀石を素材としている。21と24は浅い抉りで、脚を造り出している。21はやや大きい形状であり、長さ3.0cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm を測る。その他は粗雑な造りの三角鏃である。全て長さが２cm前後であり、22、23、26は未調整部位が残ることから未製品の可能性がある。なお、27は磨製石鏃であり、

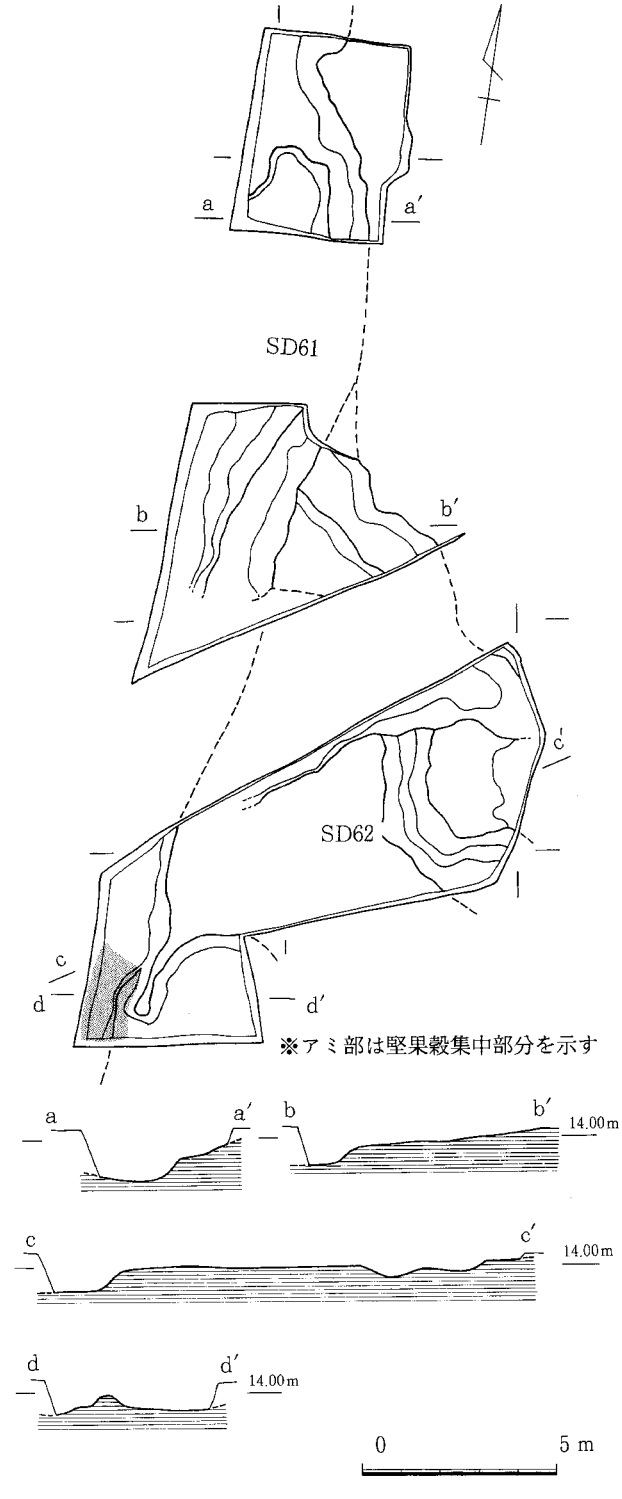


図７．縄文時代遺構配置図（1/200）

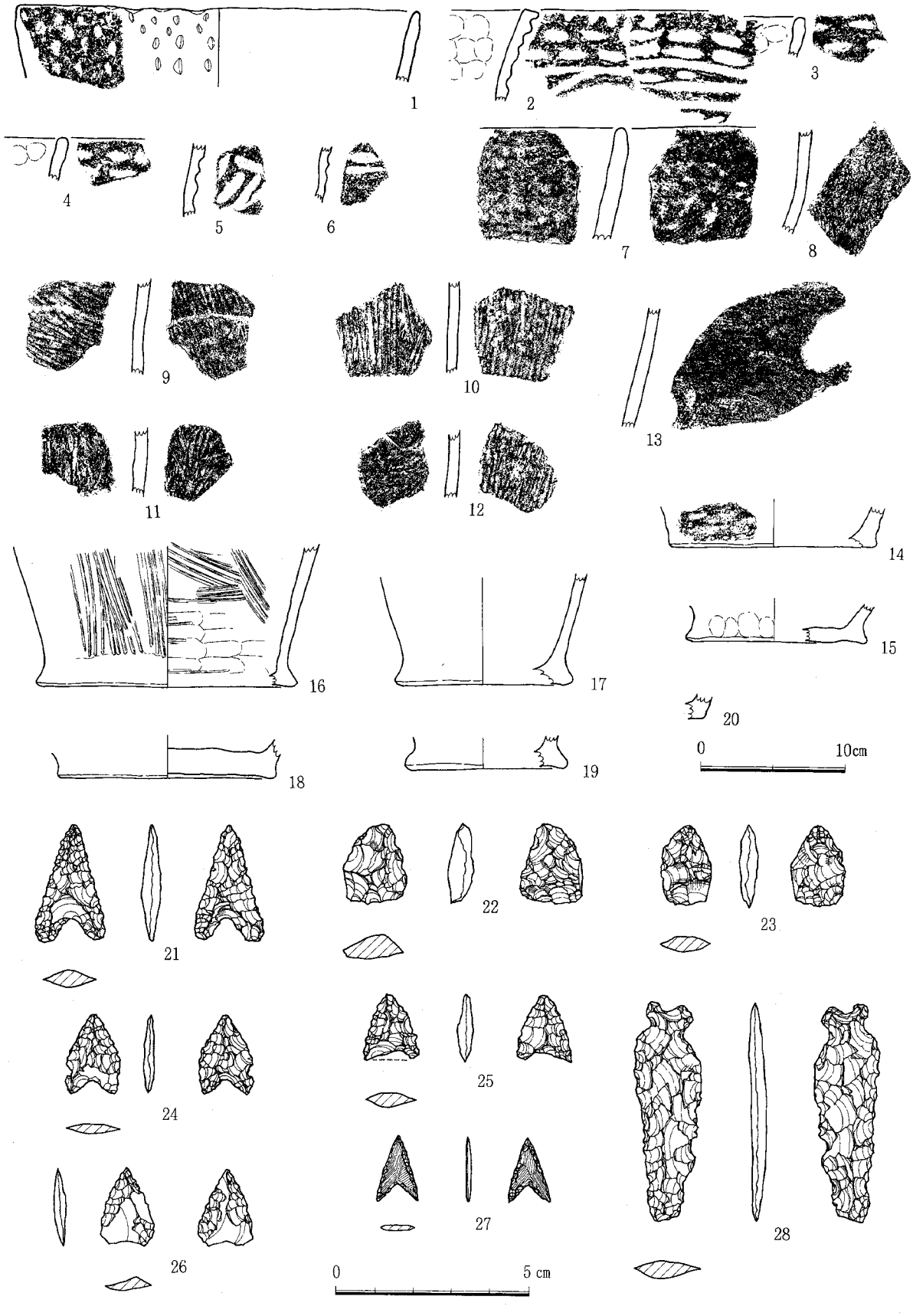


図８．流路SD61出土遺物１（1/4,2/3）

形態からみて縄文早期に位置づけられるものである。28は縦形の石匙である。古銅輝石安山岩を素材とし、入念な調整で薄く仕上げている。先端に向かって次第に先細りとなる。つまみ部は両側と頂部からのくり込みがあり、Y字状の形態となる。現状で長さ5.7㎝、幅1.8㎝、厚さ0.4㎝を測る。29は楔形石器である。良質の黒耀石を素材とし、片側に自然面を残す。上下両端からの剥離がある。現状で長さ2.3㎝、幅1.4㎝、厚さ1.2㎝を測る。30は黒耀石の原石である。亜角礫状を呈し、自然面は比較的平滑である。腰岳産出の黒耀石に類似する。1カ所の端部に数回の打撃による小剥離がある。大きさは現状で長さ4.9㎝、幅4.1㎝、厚さ3.8㎝を測る。31は古銅輝石安山岩を素材とする削器である。背面にも主要剥離面と共通の打点によるポジ面が残る。一側辺に調整を施し刃部としている。現状で長さ5.4㎝、幅4.6㎝、厚さ1.5㎝を測る。32は古銅輝石安山岩の石核である。背面に自然面を残す。周囲から両面に剥片剥離をおこない、円盤状となっている。最終剥離の多くは階段状となっている。現状で長さ7.1㎝、幅6.0㎝、厚さ2.4㎝を測る。

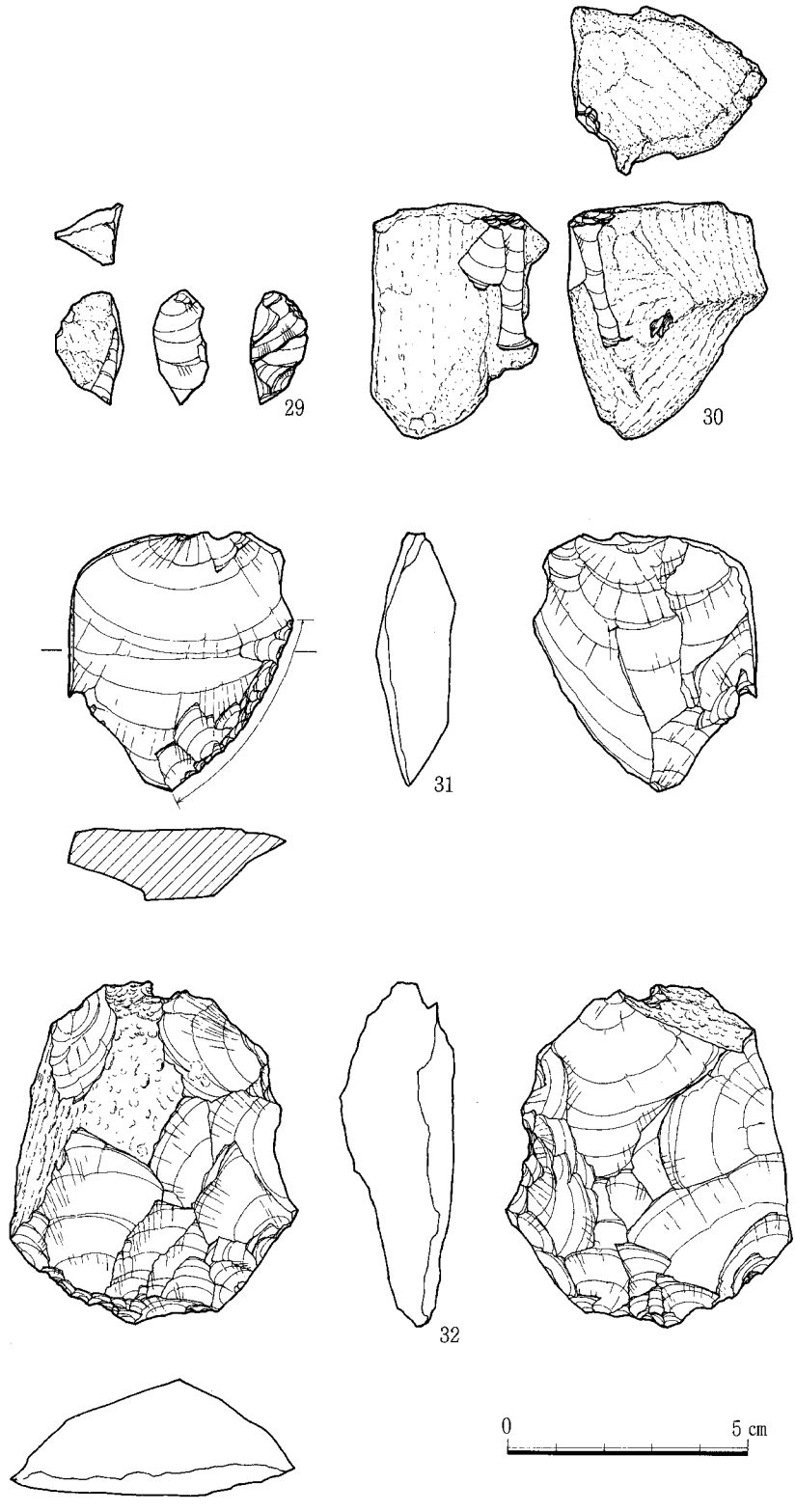


図9．流路SD61出土遺物2（2/3）

4)弥生時代の調査

古代遺構の調査終了後、調査区全域を掘り下げ、清掃し遺構の検出をおこなった。その結果、B～E-4～10区において溝状の遺構を検出した。溝はE9区に端を発し、略東方向に蛇行しながらD4区付近で調査区外に続いている。溝は2本が切り合っており、古い溝をSD52b、新しい溝をSD52aとする。また、D8区でSD52aから分岐し、北西方向に延びる溝をSD51とする。

検出遺構と遺物

溝SD51：D8区においてSD52aから分岐し、B9・10区まで延びる溝である。分岐点から14mまでは幅2m前後、深さ約0.3m、断面形は浅いV字形からU字形を呈するが、B9・10区でおおまかに3条の枝溝に分かれ、それぞれ次第に幅と深さを減じつつ、4mほど延びたところで途切れる。枝溝は何れも幅0.5m以下、深さ0.2m以下である。枝溝は西からSD53、SD54、SD55とする。これらの溝内埋土は粗砂～微砂層の互層であった。また、SD51には溝の縁に接し直交して延びる小規模の枝溝が4カ所ある。それはB10区に2カ所、C9区に2カ所ある。何れも幅、長さともに1m以下であり、SD53～54と同様に次第に浅くなり途切れる。こうしたあり方は野多目A遺跡2次調査で検出された水口遺構に類似するものである。なお、調査時に注意したがこれらの溝の底面には杭などの痕跡は認められなかった。本遺構内からは少量の土器片が出土したが時期を決めるものはない。

溝SD52a：E9区から始まりD4区に達する溝である。幅は1.2～3.4mとばらつきがある。溝の断面はU字形を呈し、深さは西端で0.2m、東端で0.9mと次第に深くなる。SD51との分岐点付近の溝内に長さ2.5m、幅1.5mの範囲で楕円形の落ち込みがある。その底部は周囲の溝底より0.7m程深くなる。また、SD51と同様に溝の縁に接し直交して延びる小規模の枝溝が2カ所検出された。これはE8・9区にあり、溝の北側に付設している。長さは0.4～0.6mを測る。本遺構内からの遺物の出土も少なく、少量の土器片と石器類が出土した。1は甕の口縁部である。粘土帯を張り付け口唇部を短い逆L形に整形している。外面は刷毛目調整である。2は浅鉢の肩部であり、内外面を丁寧にミガキで仕上げている。3は石鏃である。良質の黒耀石を素材としている。浅い抉りにより脚部を造り出している。先端部と片脚端を欠損している。現状での長さ2.1cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmを測る。

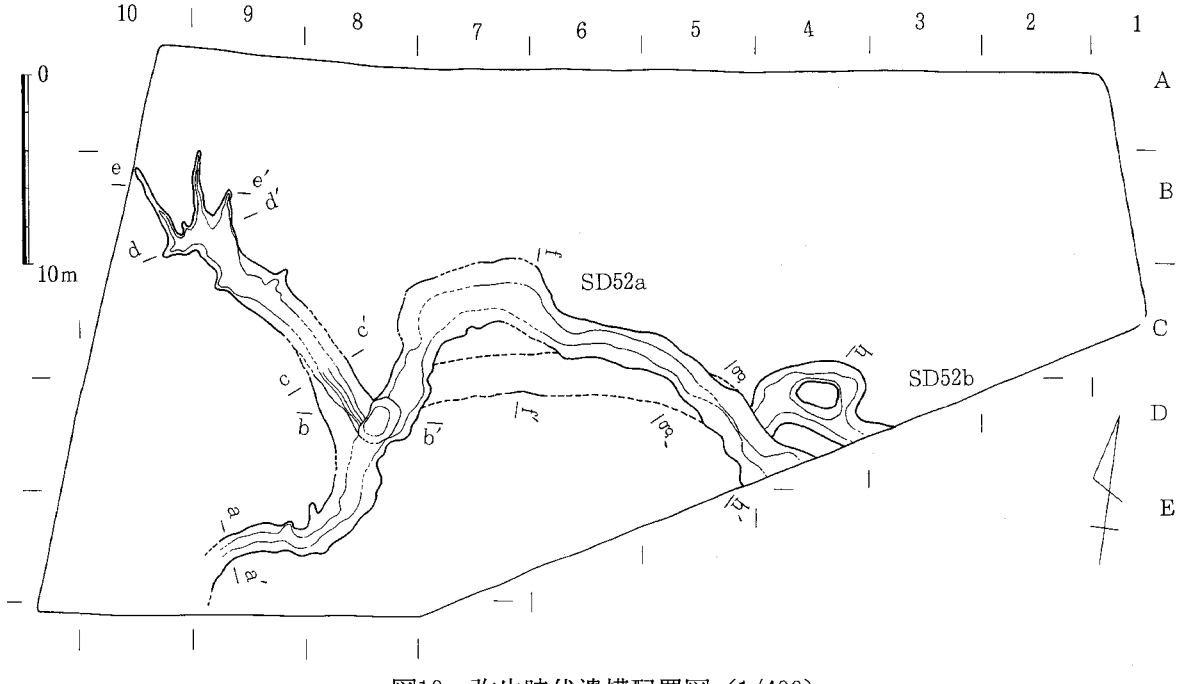


図10. 弥生時代遺構配置図（1/400）

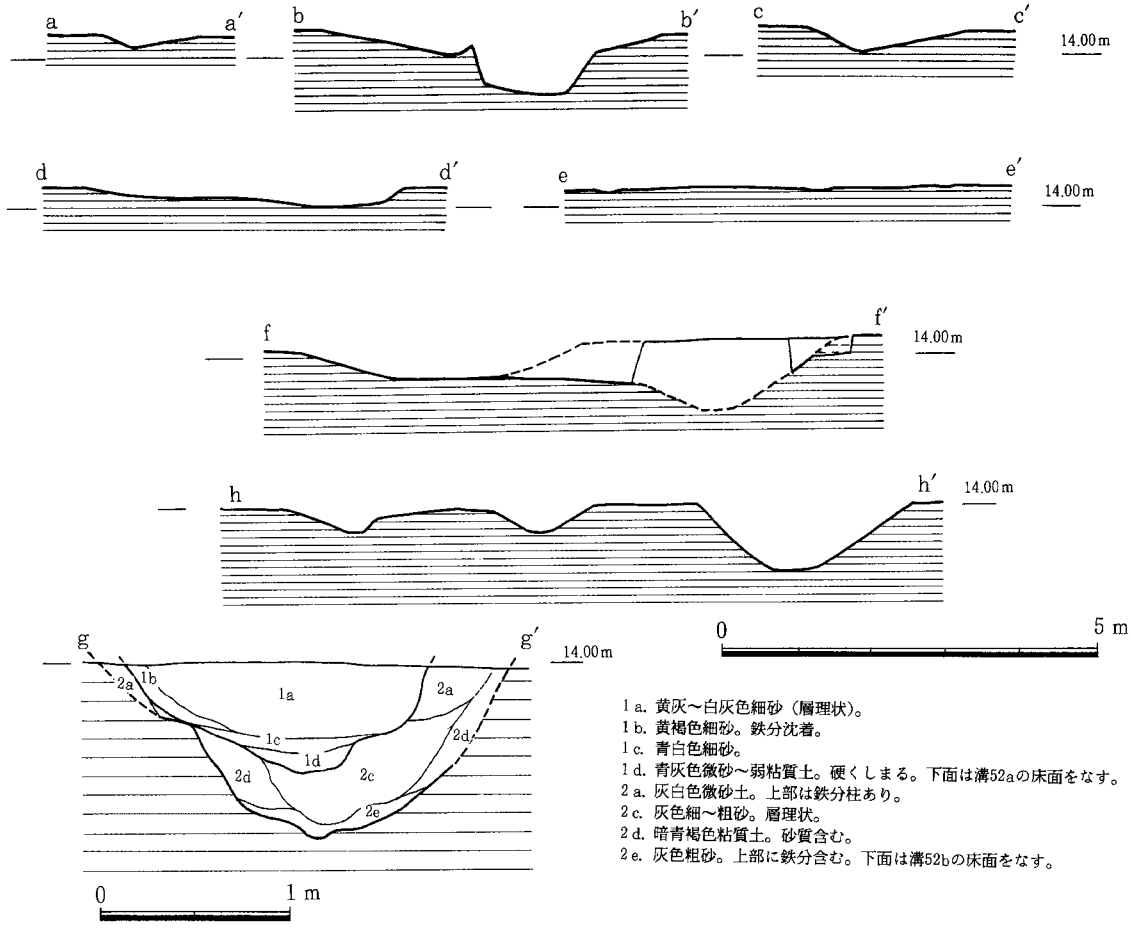


図11. 溝 SD52a,b 断面、断面土層図（1/40,1/100）

溝 SD52b：SD52a に切られている。全掘したものではないが、トレンチ調査や溝の壁面の観察から規模や方向が明らかとなった。断面形、埋土は SD52a に類似する。上半部が灰色から青灰色微砂、下半部が灰色粗砂と灰褐色粘質土の互層である。幅1.5～2.0m、深さ0.7～1.0mを測る。約25mを確認した。C・D 7 区までは SD52a の流路と共通する。SD52aより南側を流れ、D・E 3・4 区に向かっている。C・D 4 区では溝が 2 本に分かれ、再び合流している。本遺構内からの出土遺物は少なく、石鏃 1 が出土した。4 は古銅輝石安山岩を素材とする石鏃である。基部の抉りは弱く三角形に近い。先端部を欠損する。現状の長さ2.4cm、幅2.1cm、厚さ0.5cmを測る。表面の風化は弱い。

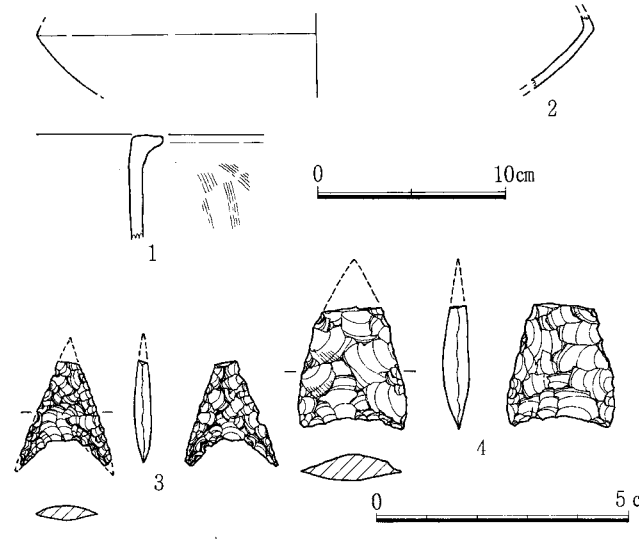


図12. 溝 SD52出土遺物（1/4,2/3）

5)古代の調査

遺構検出の段階に、調査区の東側を中心に土壙や小穴と見られるプランを多数検出した。検出時点で数カ所の土壙から古代の遺物が採集されたことから、古代の遺構群であろうと推定された。小穴については埋土が砂であり、土壙を切る例があり、近接して連続するものがあることから、より新しい時期の溝の底面等の掘削痕であろうと推定された。

土壙はA～D-2～4区を中心に36基が集中分布している。この他には調査区中央から西側に少数が点在している。集中している部分では中央部分に土壙の少ない部分があり、視覚的には環状に分布している。こうしたなかで土壙は切り合いが少なく、この土壙群の形成にあって何らかの規制があったとみられる。なお、この他に土壙の痕跡があったが、遺物などの出土もないためここでは省いた。

検出遺構と遺物

SK01：土壙の集中部と離れてD8区で単独に検出した。平面は楕円形を呈し、主軸はN-46°-Wで、長さ1.75m、幅1.55m、深さ0.5mを測る。断面形はすり鉢状を呈する。床面はほぼ平坦である。覆土は砂層と粘土層の互層からなり、少なくとも下半部は水成堆積と見られた。埋土中位の砂層から小型の土師器甕(1)が1点出土した。完形品であり、口縁径19cm、器高10.5cmを測る。胴部外面中央に2cm程の高さの取手を三方につける。外面はハケメ、底面には削りがある。

SK02：D3区にある。平面は隅丸方形を呈し、主軸はN-13°-Wで、長さ1.3m、幅0.75m、深さ0.3mを測る。壁面はほぼ垂直であり、床面には凹凸がある。覆土は基盤の土塊をブロック状に含む。土壙中央東側の床面より約20m上位に甕形土器の胴部破片が出土した。

SK03：D3区にあり、SK02に近接している。平面は隅丸方形を呈し、主軸はN-36°-Eで、長さ0.8m、幅0.7m、深さ0.3mを測る。壁面は垂直に近く、床面にはやや凹凸がある。覆土は黒褐色の粘質土である。土壙内北側床面に甕胴部片が出土した。

SK04：C2区にあり、平面は隅丸方形を呈し、主軸はN-53°-Wで、長さ1.2m、幅1.0m、深さ0.4mを測る。壁面は垂直で、床面はほぼ平坦である。覆土は地山ブロックを多く含む粘質土である。

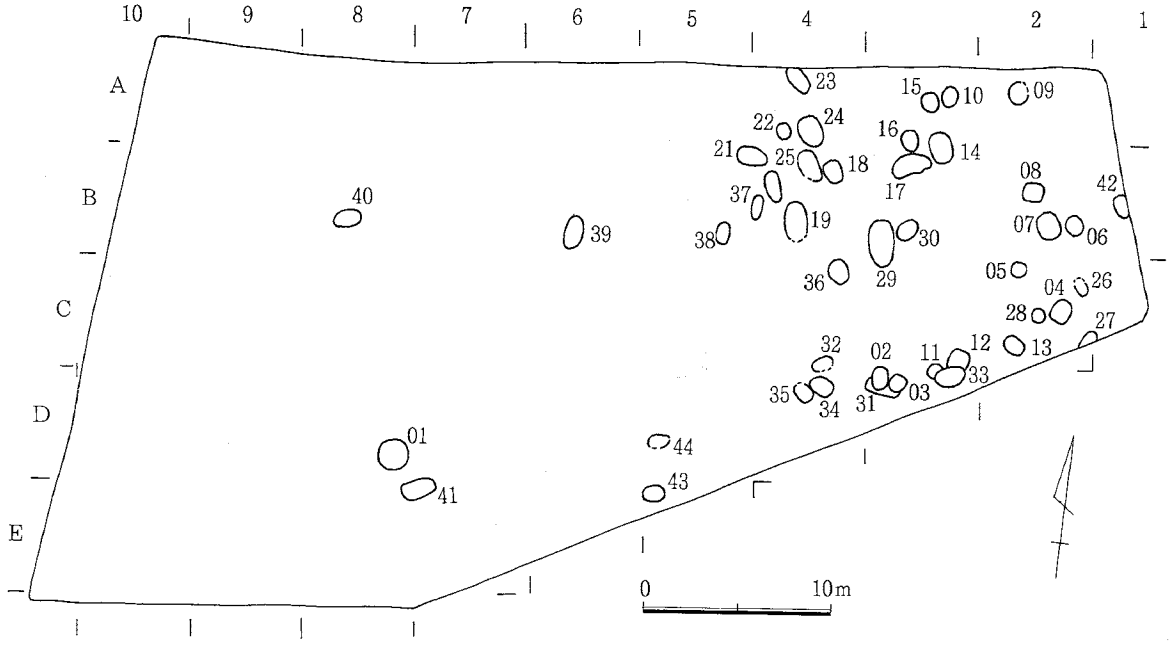


図13. 古代遺構配置図（1/400）

SK05：Ｃ２区にあり、平面は楕円形を呈し、主軸はN-40°-Wで、長さ0.9ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.2ｍを測る。壁面は70～80°の傾斜があり、床面には凹凸がある。覆土は地山ブロックを含む黒褐色の粘質土である。土壙内西側中位に甕胴部片が出土した。

SK06：Ｂ２区にあり、二段掘りであり、一段目の掘り方の平面は隅丸方形を呈し、主軸はN-20°-Wで、長さ1.0ｍ、幅0.9ｍ、深さ0.2ｍを測る。二段目は主軸がN-06°-Wで、長さ0.9ｍ、幅0.5ｍ、深さ0.2ｍを測る。中央には腐植を含む流入風化土壌が認められる。

SK07：Ｂ２区にあり、平面は円形を呈し、径1.4ｍ、深さ0.3ｍを測る。壁面はほぼ垂直であり、床面は凹凸が著しい。覆土は地山ブロックを多く含んでいる。土壙内東側の覆土中に須恵器壷片が出土した。２は須恵器壷である。底部以外は１/３程が遺存している。器高16.5cm、口縁径10.6cm、胴部径21.4cm、底部径10.5cmと復元される。

SK08：Ｂ２区にあり、平面は隅丸方形を呈し、主軸はN-63°-Wで、長さ1.1ｍ、幅1.0ｍ、深さ0.3ｍを測る。壁面は垂直に近く、東半分が一段深くなる。覆土中位に土師器甕片が少量出土した。

SK09：Ａ２区にあり、平面は円形を呈し、径1.3ｍ、深さ0.4ｍを測る。壁面は垂直で、床面は平坦。覆土は地山ブロックを含む粘質土である。中央に覆土を切る噴砂跡があり、層位が乱れている。

SK10：Ａ３区にあり、平面は楕円形を呈し、主軸はN-13°-Wで、長さ1.1ｍ、幅1.0ｍ、深さ0.1ｍを測る。壁面は70°前後の傾斜があり、床面は凹凸が著しい。床面直上から土師器甕片が散漫に出土した。甕は復元困難であった。13は本土壙内から出土した石鏃である。黒耀石を素材とし、基部に浅い抉りが入る。両脚端を欠損する。現状の長さ2.4cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmを測る。風化が強い。

SK11：Ｃ・Ｄ３区にあり、平面は隅丸方形を呈し、主軸はN-77°-Wで、長さ0.8ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.1ｍを測る。壁面は70°前後の傾斜があり、床面は凹凸がある。覆土には地山ブロックを含む。

SK12：Ｃ３区にあり、平面は隅丸方形を呈し、主軸はN-20°-Eで、長さ1.2ｍ、幅1.0ｍ、深さ0.2ｍを測る。壁面は垂直に近く、床面は平坦である。覆土には地山ブロックを含む。

SK13：Ｃ２区にあり、平面は楕円形を呈し、主軸はN-72°-Wで、長さ1.2ｍ、幅0.8ｍ、深さ0.1ｍを測る。壁面は70°前後の傾斜があり、床面は凹凸がある。覆土には地山ブロックを含む。

SK14：Ａ・Ｂ３区にあり、平面は楕円形を呈し、主軸はN-67°-Wで、長さ1.8ｍ、幅1/2ｍ、深さ0.1ｍを測る。壁面は垂直に近く、床面は凹凸がある。床面直上に土師器甕片が出土した。３は土師器の甕形土器である。同一個体であるが、胴部下半が未接合である。口縁部径27.2cm、器高約33cmに復元される。口縁はく字形に外反し、外面と口縁部はハケ、内面は粗いヘラ削りである。

SK15：Ａ３区にあり、平面は楕円形を呈し、主軸はN-33°-Eで、長さ1.1ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.2ｍを測る。壁面は70°前後の傾斜があり、床面は凹凸がある。覆土には地山ブロックを含む。覆土中位に土師器甕の胴部破片が出土した。

SK16：Ａ３区にあり、平面は長楕円形を呈し、主軸はN-19°-Wで、長さ1.1ｍ、幅0.5m、深さ0.2mを測る。壁面は70°前後の傾斜があり、床面は凹凸がある。覆土には地山ブロックを含む。

SK17：Ｂ３区にあり、平面は不整楕円形を呈し、主軸はN-74°-Eで、長さ1.9m、幅1.0m、深さ0.2mを測る。壁面は40°前後の傾斜があり、床面は凹凸がある。

SK18：Ｂ４区にあり、平面は不整円形を呈し、主軸はN-11°-Wで、長さ1.2ｍ、幅1.0ｍ、深さ0.2mを測る。壁面は30～40°前後の傾斜があり、床面は平坦である。覆土には地山ブロックを含む。

SK19：Ｂ４区にあり、平面は不整楕円形を呈し、二段掘りである。掘り方の主軸はN-19°-Wで、長さ1.7ｍ、幅1.2ｍ、深さ0.3ｍを測る。二段目は主軸がN-06°-Eで、長さ1.0ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.2～3ｍを測る。壁面は垂直に近く立ち上がり、床面には緩い凹凸がある。覆土は地山ブロックを混じえ

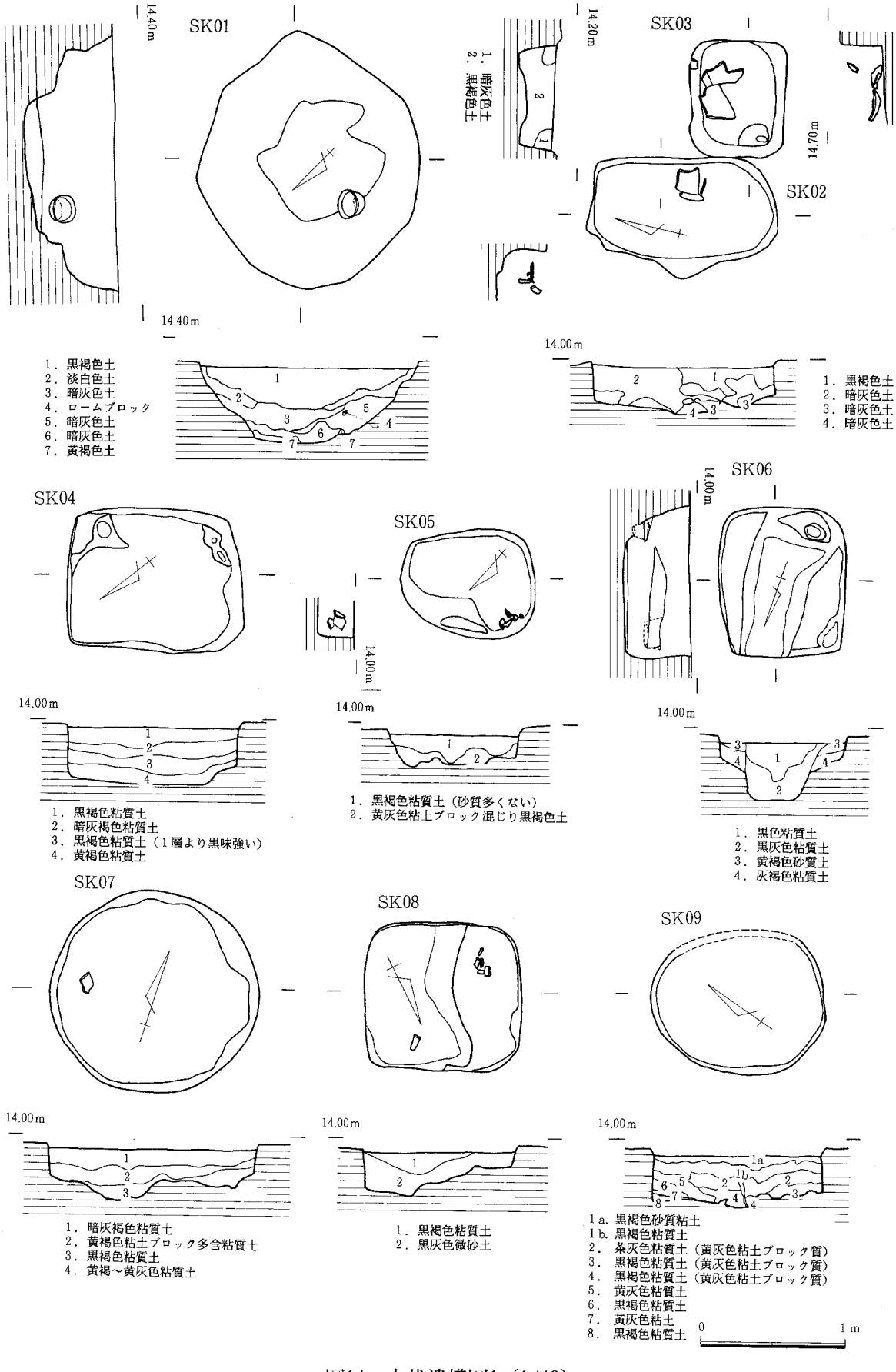


図14．古代遺構図1（1/40）

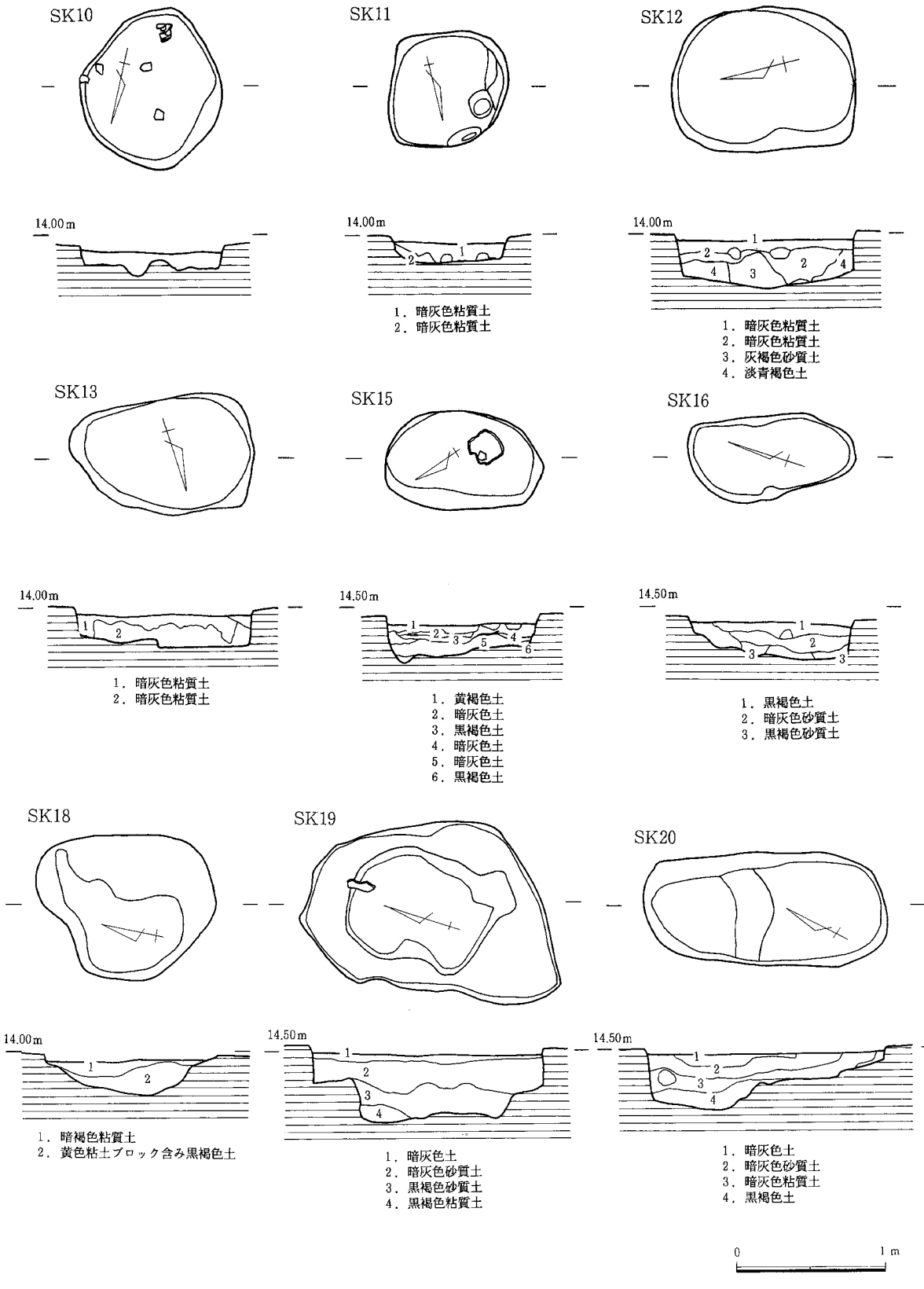


図15. 古代遺構図２（1/40）

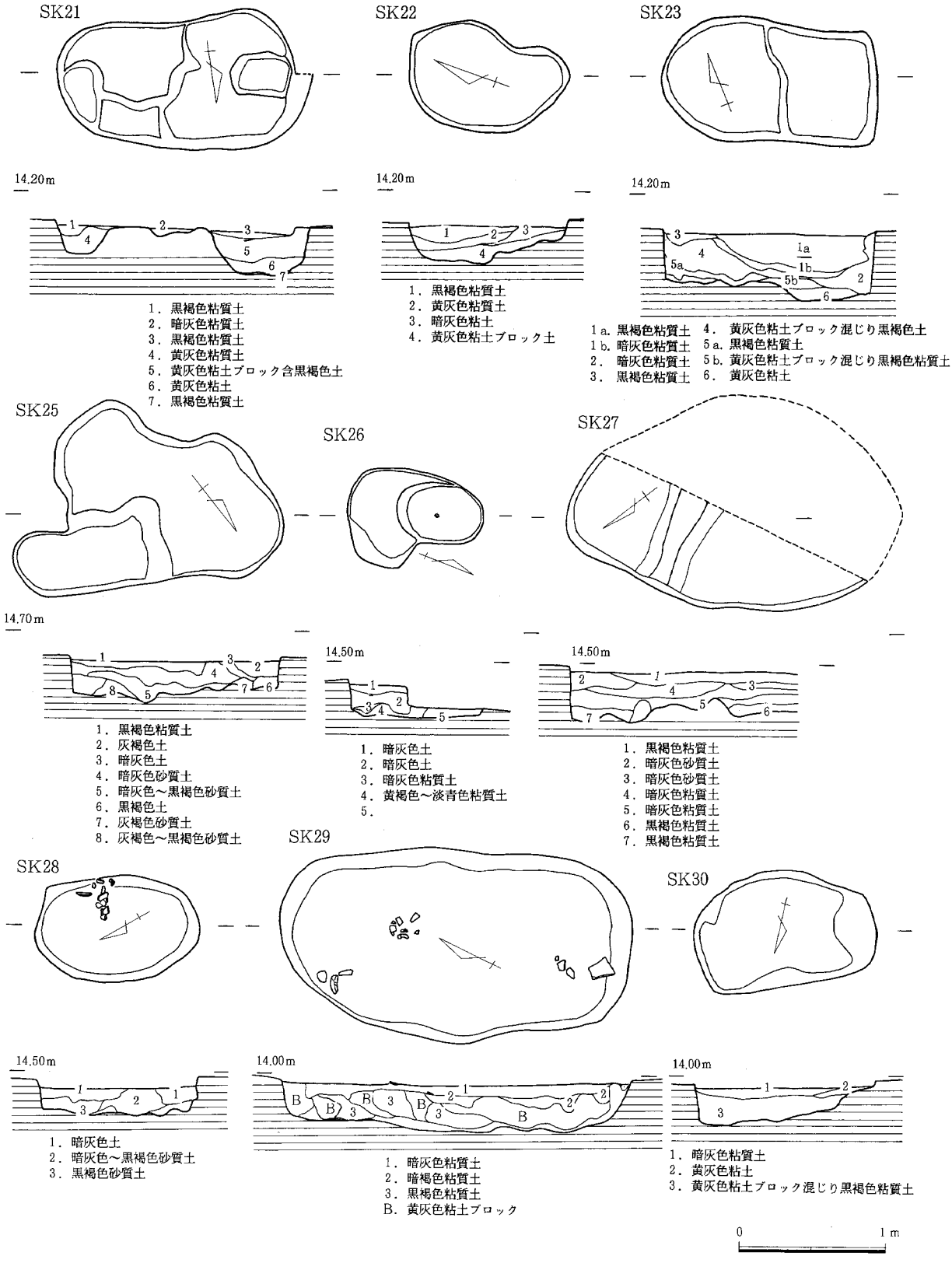


図16. 古代遺構図3 (1/40)

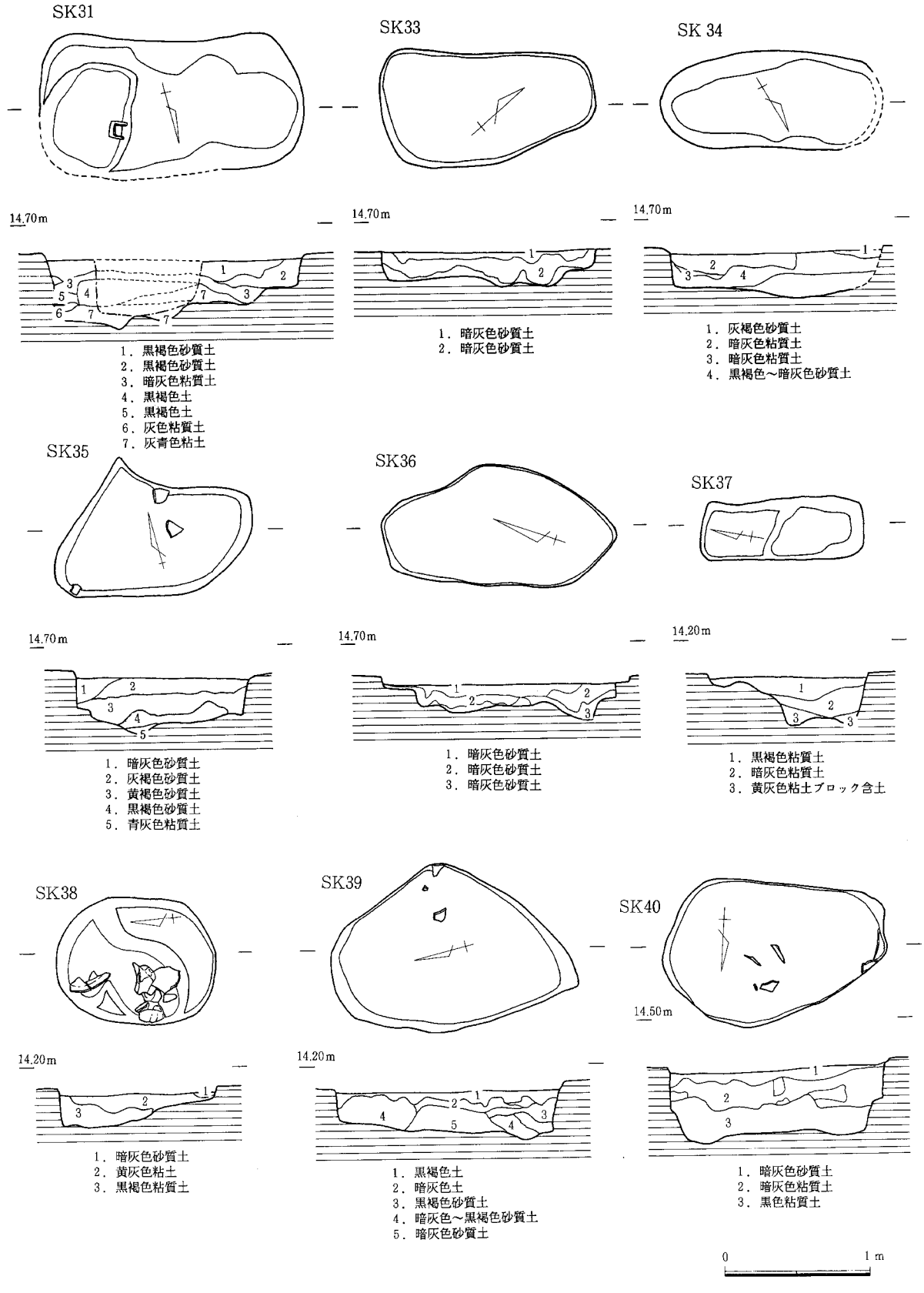


図17. 古代遺構図４（1/40）

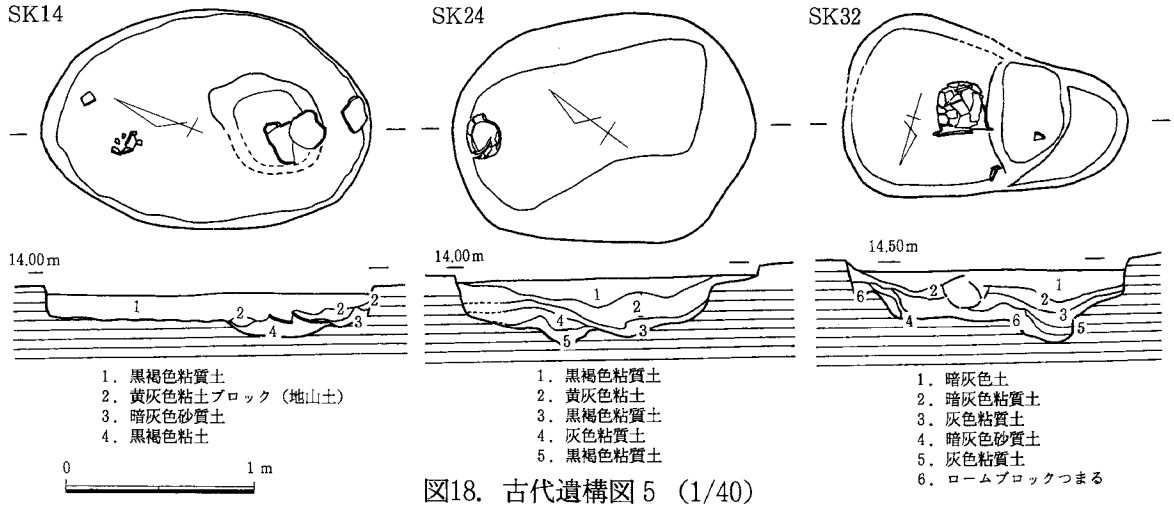


図18. 古代遺構図５（1/40）

る砂質土である。覆土中位から土師器甕片が少量出土した。

SK20：Ｂ４区にあり、平面は長楕円形を呈し、主軸はN-28°-Wで、長さ1.7m、幅0.8m、深さ0.4mを測る。床面は北側が一段下がる。壁面は垂直に近い。覆土に地山ブロックを含む。覆土上部から土師器甕片が少量出土した。

SK21：Ｂ４•５区にあり、平面は隅丸方形を呈し、主軸はN-80°-Wで、長さ1.0m、幅1.0m深さ0.3mを測る。壁面は60°前後の傾斜があり、床面には緩い凹凸がある。覆土に地山ブロックを含む。

SK22：Ａ４区にあり、平面は不整楕円形を呈し、主軸はN-20°-Wで、長さ1.1m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。壁面は70°前後の傾斜があり、床面には凹凸がある。覆土に地山ブロックを含む。

SK23：Ａ４区にあり、平面は隅丸方形を呈し、主軸はN-68°-Wで、長さ1.5m、幅0.8m、深さ0.5mを測る。床面は東側が一段下がる。壁面は垂直に近い。覆土に地山ブロックを含む。

SK24：Ａ４区にあり、平面は楕円形を呈し、主軸はN-37°-Wで、長さ1.6m、幅1.2m、深さ0.3mを測る。壁面は70°前後の傾斜があり、床面には凹凸がある。覆土に地山ブロックを含む。土壙西端の床面に土師器甕が正置状態で出土した。４は土師器甕片である。胴部下位は復元であるが、口縁径約27cm、器高約30cmである。口縁部は肥厚し、外反する。外面はハケ、内面はヘラ削り調整である。

SK25：Ｂ４区にあり、平面は不整楕円形を呈し、主軸はN-23°-Wで、長さ1.7m、幅1.2m、深さ0.3mを測る。２つの土壙の切り合いの可能性があるが、調査時には未確認であった。壁面は垂直に立ち、床面には緩い凹凸がある。覆土には地山ブロックが多く含まれる。

SK26：Ｃ２区にあり、平面は不整楕円形を呈し、主軸はN-10°-Wで、長さ1.0m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。壁面は垂直に近い。覆土に地山ブロックを含む。覆土下部から土師器甕片が出土した。

SK27：Ｃ２区にあり、平面は楕円形を呈し、主軸はN-37°-Eで、長さ2.4m、幅1.5m、深さ0.3mを測る。壁面は垂直に近く、床面には凹凸がある。覆土に地山ブロックを含む。

SK28：Ｃ２区にあり、平面は楕円形を呈し、主軸はN-29°-Eで、長さ1.1m、幅0.9m、深さ0.2mを測る。壁面は80°前後の傾斜があり、床面には凹凸がある。覆土に地山ブロックを含む。土壙東側の覆土上部に土師器甕片が出土した。細片となっている。

SK29：Ｂ３区にあり、平面は楕円形を呈し、主軸はN-26°-Wで、長さ2.4m、幅1.3m、深さ0.3mを測る。壁面は70°前後の傾斜があり、床面には凹凸がある。覆土は上下に二分され、下部に地山ブロックを含み、上部に土壌化した粘質土がある。土壙南側の覆土上部に瓦片が出土し、北側に土師器甕の細片が出土した。５は平瓦片である。幅28.5cm、長さ20cm以上を測る。内面に布目が残り、外面は縄目の叩打痕の後ナデている。焼成は良く、外面は青灰色を呈する。

SK30：Ｂ３区にあり、平面は楕円形を呈し、主軸はN-78°-Eで、長さ1.2ｍ、幅0.8ｍ、深さ0.2ｍを測る。壁面は東側が垂直に近く、西側が40°の傾斜である。覆土に地山ブロックを含む。

SK31：Ｄ３区にあり、SK02に切られる。平面は隅丸長方形を呈し、主軸はN-70°-Wで、長さ1.8ｍ、幅0.4ｍ、深さ0.5ｍを測る。壁面は80°前後の傾斜があり、床面には凹凸があり、全体に東側に下がる。覆土に地山ブロックを含む。

SK32：Ｃ３区にあり、平面は楕円形を呈し、主軸はN-73°-Eで、長さ1.5ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.4ｍを測る。壁面は80°前後の傾斜があり、床面には凹凸があり、床面中央が長さ0.5ｍの範囲で0.1ｍ程下がる。覆土に地山ブロックを含む。覆土中位にほぼ完形の土師器甕が横位で出土した。６は土師器甕である。口縁径は約33cmである。口縁は強く外反する。口縁部と外面はハケ、内面はヘラ削りである。

SK33：Ｄ３区にあり、平面は隅丸長方形を呈し、主軸はN-41°-Eで、長さ1.5ｍ、幅0.8ｍ、深さ0.2ｍを測る。壁面は垂直に近く、床面は凹凸がある。覆土に地山ブロックを含む。

SK34：Ｄ４区にあり、平面は長楕円形を呈し、主軸はN-60°-Wで、長さ1.5ｍ以上、幅0.7ｍ、深さ0.3ｍを測る。壁面は垂直に近く、床面はほぼ平坦である。覆土に地山ブロックを含む。

SK35：Ｄ４区にあり、平面は楕円形を呈し、主軸はN-74°-Wで、長さ1.4ｍ 以上、幅0.9ｍ以上、深さ0.3ｍを測る。壁面は垂直に近く、床面には緩い凹凸がある。覆土に地山ブロックを含む。覆土上部に土師器甕片が少量出土した。７は土師器甕である。口縁部の小破片である。口縁はく字形に外反する。口縁部と外面はハケ、内面はヘラ削りである。

SK36：Ｃ４区にあり、平面は楕円形を呈し、主軸はN-19°-Wで、長さ1.6ｍ、幅0.9ｍ、深さ0.2ｍを測る。壁面は80°前後の傾斜があり、床面には凹凸がある。覆土に地山ブロックを含む。

SK37：Ｂ４区にあり、平面は隅丸長方形を呈し、主軸はN-11°-Wで、長さ1.2ｍ、幅0.4ｍ、深さ0.3ｍを測る。壁面は80°前後の傾斜があり、南側の床面が一段下がり、全体に凹凸がある。

SK38：Ｂ５区にあり、平面は楕円形を呈し、主軸はN-06°-Eで、長さ1.1ｍ、幅0.9ｍ、深さ0.2ｍを測る。壁面は80°前後の傾斜があり、北側の床面が一段下がる。土壙西側の床面上に土師器甕片がまとまって出土した。８～11は土師器甕である。８は取手部破片である。９は1/3が残り、口縁径約32cmに復元される。10は1/3が残り、口縁径約29cmに復元される。11は1/3が残り、口縁径約27cmに復元される。何れも口縁がく字形に外反し、外面ハケ、内面ヘラ削りである。

SK39：Ｂ６区にあり、平面は不整楕円形を呈し、主軸はN-14°-Eで、長さ1.7ｍ、幅1.4ｍ、深さ0.3ｍを測る。壁面は80°前後の傾斜があり、床面はほぼ平坦である。覆土に地山ブロックを含む。覆土中位に土師器甕片を少量出土した。

SK40：Ｂ８区にあり、平面は楕円形を呈し、主軸はN-87°-Eで、長さ1.6ｍ、幅1.0ｍ、深さ0.4ｍを測る。壁面は垂直である。床面は凹凸がある。覆土に地山ブロックを含む。

SK41：Ｅ８・９区にあり、平面は不整楕円形を呈し、主軸はN-74°-Eで、長さ2.0ｍ、幅1.2ｍを測る。深さは10cm以下であり、壁面、覆土は明瞭でない。床面は凹凸がある。

SK42：Ｂ１区にあり、平面は隅丸方形を呈し、主軸はN-28°-Wで、長さ1.2ｍ、幅0.9ｍを測る。深さは10cm以下であり、壁面、覆土は明瞭でない。床面は凹凸がある。

SK43：Ｅ５区にあり、平面は楕円形を呈し、主軸はN-35°-Wで、長さ1.2ｍ、幅0.8ｍを測る。深さは10cm以下であり、壁面、覆土は明瞭でない。床面に凹凸がある。土師器甕片が出土した。12は土師器甕の底部である。小型の器形と推定される。丸底であるが、やや平らとなる。

SK44：Ｄ５区にあり、平面は不整楕円形である。主軸はN-60°-Eで、長さ1.2ｍ以上、幅0.5ｍ以上を測る。深さは10cm以下であり、壁面、覆土は明瞭でない。床面には凹凸がある。

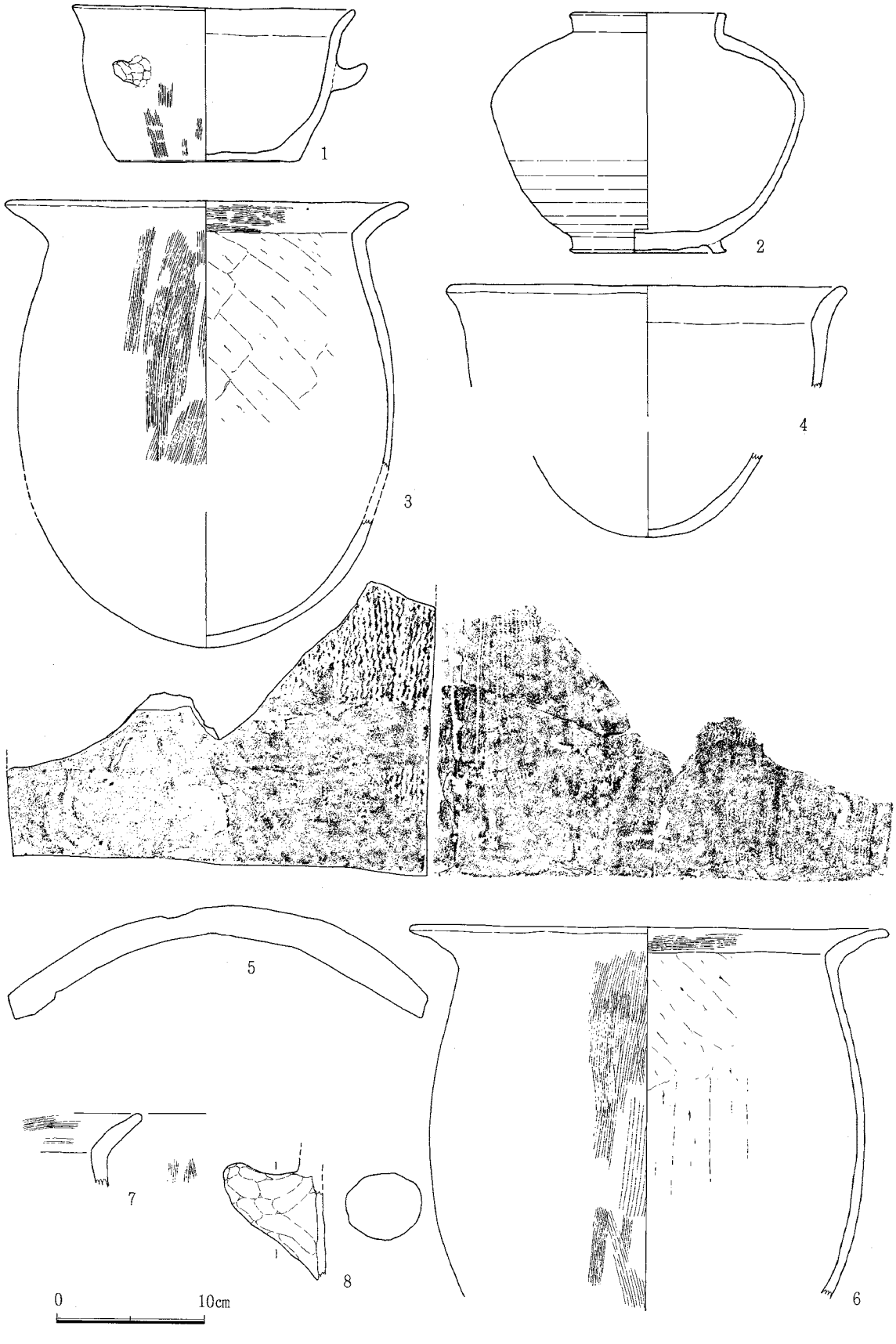


図19. 土壙出土の遺物１（1/4）

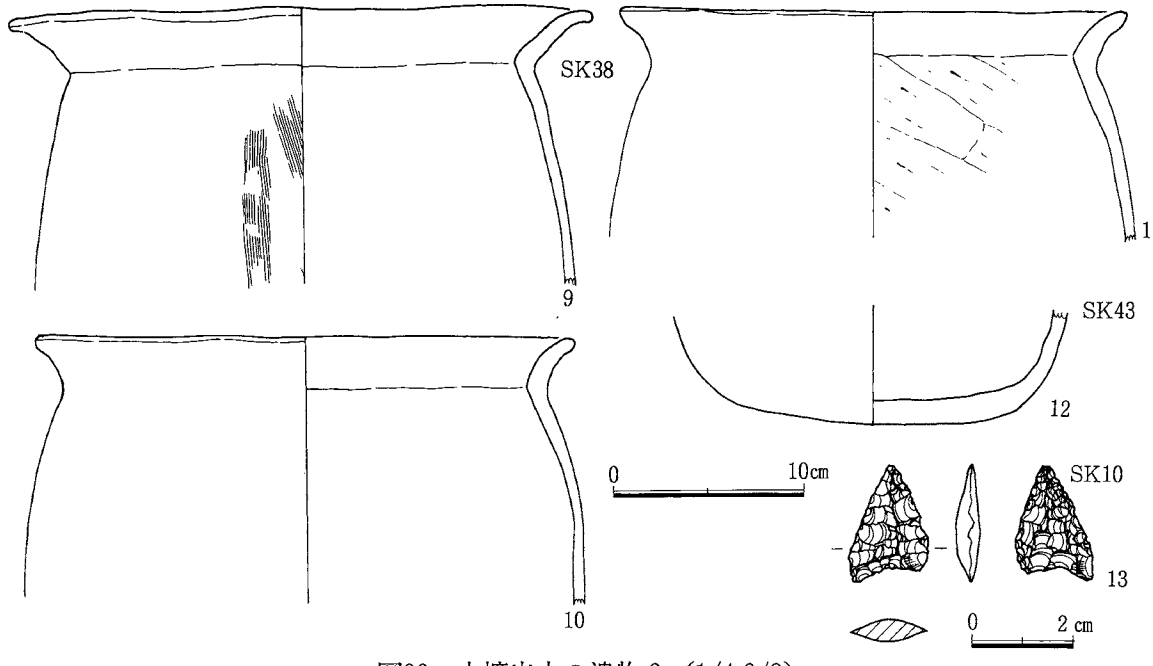


図20. 土壙出土の遺物２（1/4,2/3）

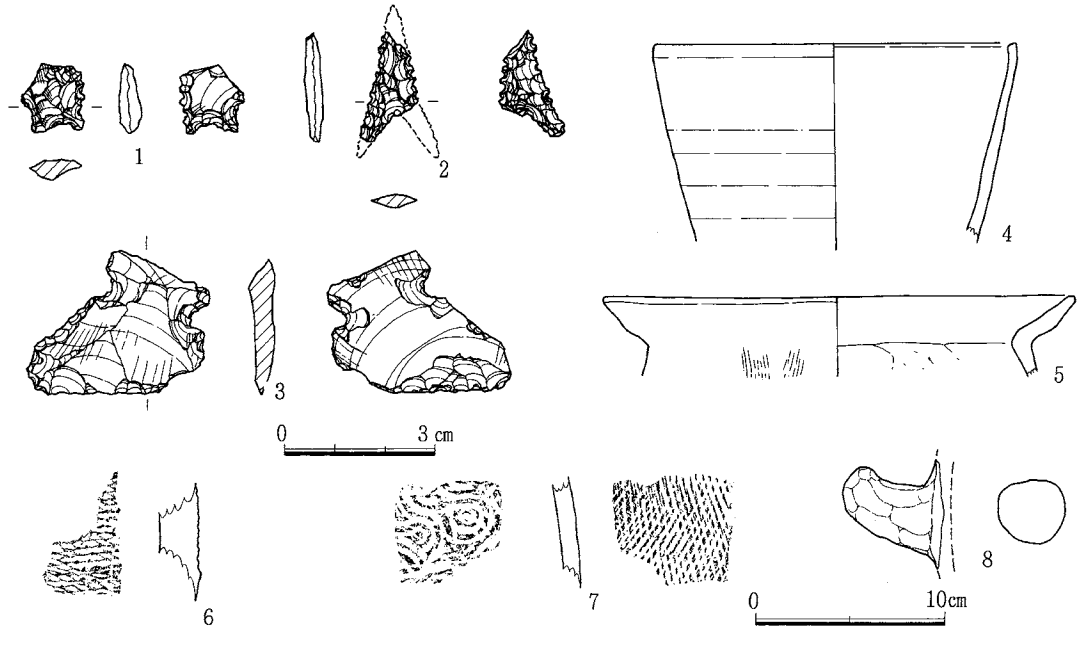


図21. 野多目Ｂ遺跡その他の出土遺物（1/4,2/3）

6)その他の遺構と遺物

本調査では以上の遺構の他に土壙、小穴などが検出されている。しかし、何れも部分調査であり遺存状態が悪く、出土遺物も少なく、時期を特定することが出来なかった。また、遺構検出時を主に少量の遺物を採集した。以下では、その遺物について報告したい。１～３は石器、４～８は土器類である。１，２は黒耀石を素材とする石鏃である。１は素材面を多く残し、未製品の可能性がある。２は長脚の鋸歯縁鏃である。３は古銅輝石安山岩を素材とする横長の石匙である。４は須恵器の鉢である。口縁径は約17cm である。５は土師器甕の口縁部である。６は瓦片である。７は須恵器甕片である。８は土師器の取手である。

第３章、和田Ｂ遺跡Ａ調査区

1)調査の概要

工事対象地は、フノカケ池（溜池）を囲む丘陵地帯であり、付近では数少ない山林であった。しかし、樹木はほとんどが樹齢50年未満の松、くぬぎなどからなる二次林であり、また斜面の各所に、造成によると見られる平坦面や防空壕跡と見られる窪みがあり、全域が伐開、開発された時期があるものとみられた。全域の試掘調査の結果、フノカケ池の南北２カ所の丘陵上に遺跡の存在が確かめられた。何れも福岡市遺跡分布地図による和田Ｂ遺跡に含まれるが、調査の便宜上南側をＡ地区、北側をＢ地区と呼ぶことにした（図21)。

Ａ地区の調査対象地は西から東に延びる丘陵の頂部から尾根線、さらにこの丘陵から北に派生する小枝丘からなる。調査範囲はおおよそ南北90ｍ、東西160ｍであり、面積は約11,000㎡である。標高は40～20mである。なお、この丘陵の南側斜面は早く病院官舎などの建設にともない造成され最大10ｍの崖線が形成されている。

調査は当初重機により表土、造成土の除去をおこない、その後人力により進めることにした。試掘の成果から全域が0.5ｍ以下の表土下に遺構があり、斜面下部のみ１ｍ以上の造成土の存在が確かめられていた。また、

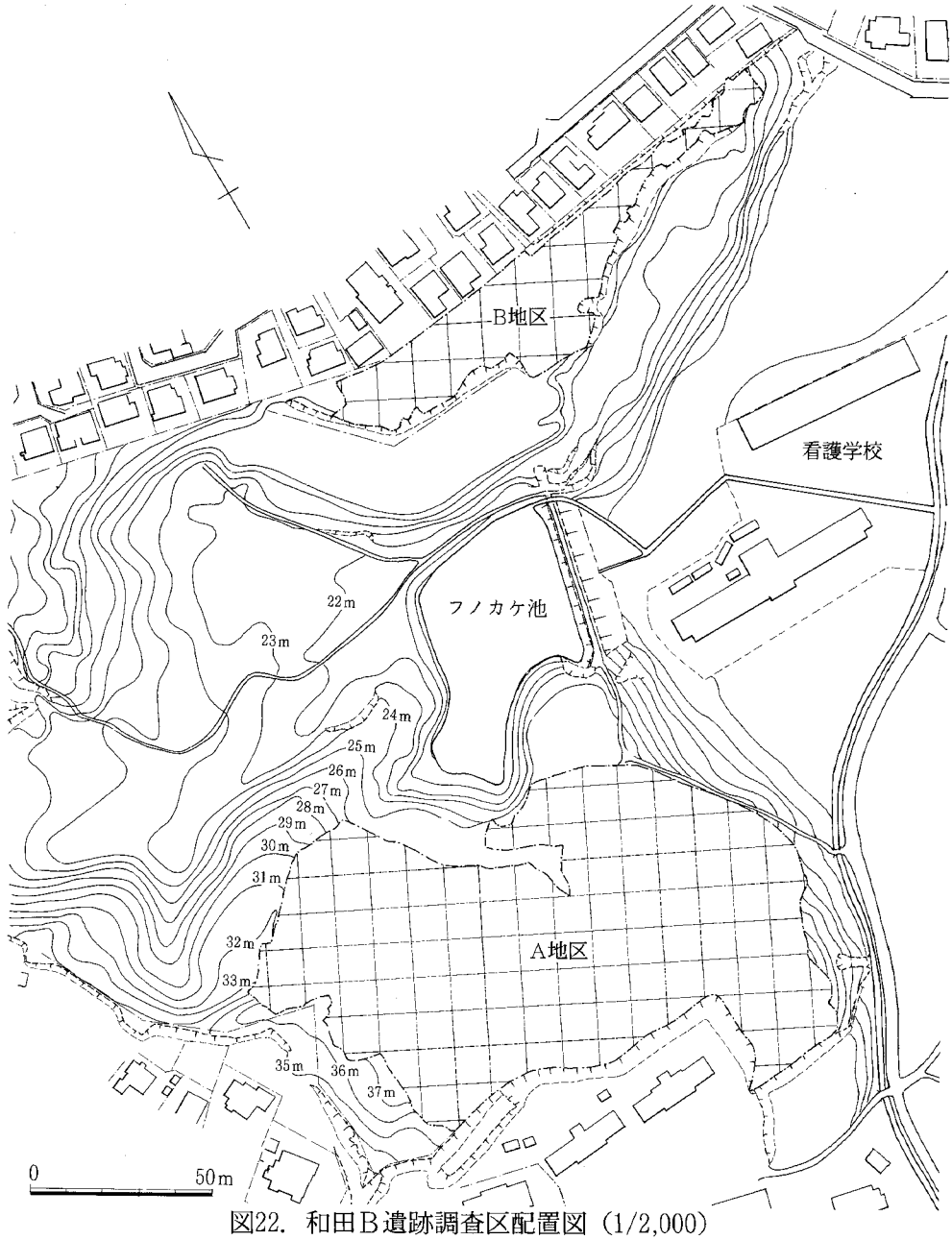


図22. 和田Ｂ遺跡調査区配置図（1/2,000）

遺構の上部に旧病院建物のコンクリート基礎が残されているものがあり、重機、ワイヤーなどにより除去をおこなった。

調査用グリットは調査範囲に平行して、10mを基本単位とする区画を設けた。各グリットの名称は調査区北東側を起点とし、南方向に1、2、3…、西方向にA、B、C…とし、B2区、C8区と10m四方を基本単位として調査を進めた。

調査は4期に分けて順におこなった。

1期はC～J-1～3区の範囲内であり、古墳1基（1号墳)、貯蔵穴1基、落とし穴、焼土壙、土壙など多数を検出した。1号墳主体部から埋葬人骨が出土したため、九州大学に調査協力を依頼した。

2期はB～H-3～6区の範囲内であり、古墳1基（2号墳)、貯蔵穴3基、土壙多数を検出した。

3期はA～K-4～10区の範囲内であり、古墳1基（3号墳)、住居状遺構約10基、貯蔵穴40基以上、溝状遺構、落とし穴、土壙多数などを検出した。3号墳主体部から埋葬人骨が出土したため、九州大学に調査協力を依頼した。貯蔵穴群は深さ3～5mに達するものも多く、切り合いもあるため、調査に予想以上に時間を費やした。南側の住宅に面する崖に現れた貯蔵穴の調査は、危険を避けるために一部高所作業車を用いた。

4期はI～Q-2～11区の範囲内であり、古墳2基（4、5号墳)、木棺墓1基、石組遺構1基、溝状遺構6条、焼土壙、落とし穴、土壙多数を検出し、さらに古墳墳丘下から東側斜面にかけてのK～M-8～10区の範囲に弥生時代の遺構と先土器時代の包含層を確認したため、古墳調査終了後、あらためて弥生時代遺構の調査と先土器時代調査を実施した。先土器時代遺構の調査に際しては現状のグリットをさらに5m単位に細分し、調査をおこなった。

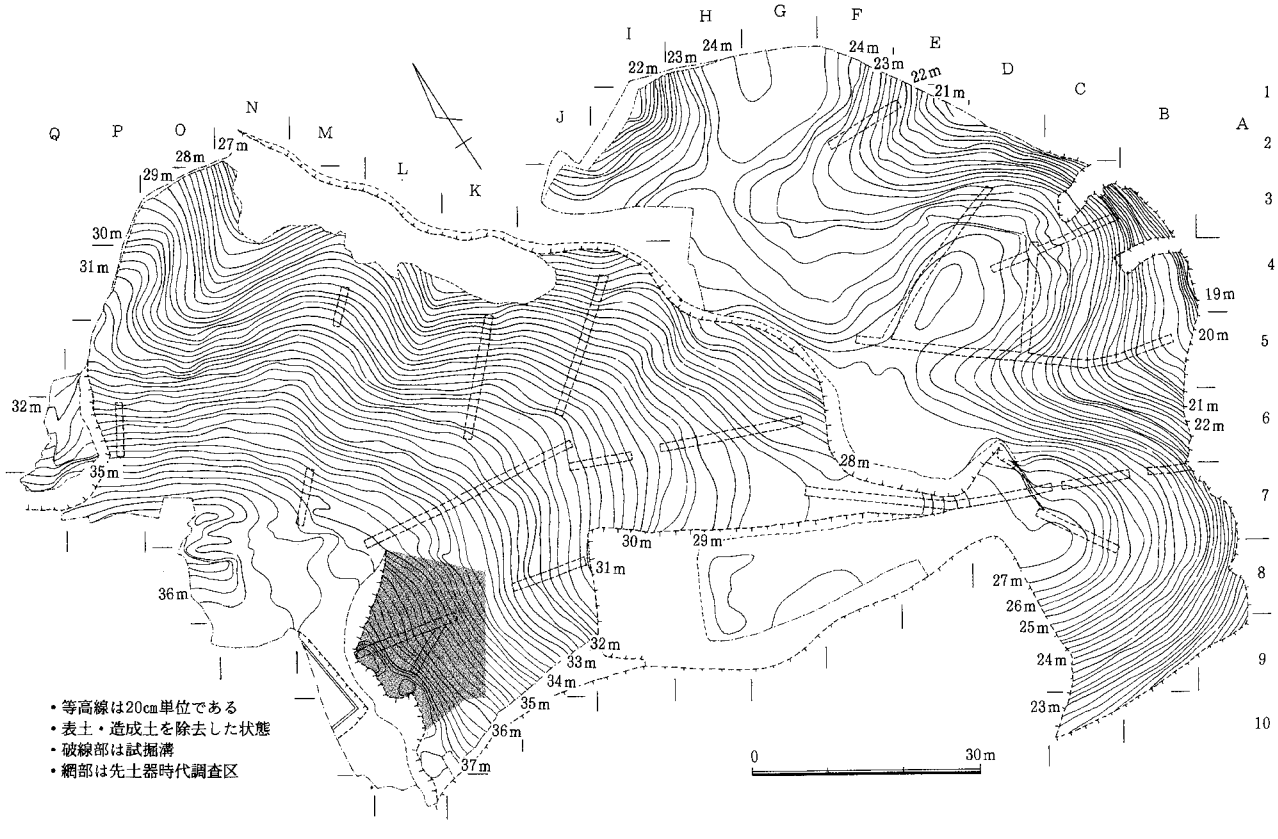


図23. 和田B遺跡A調査地区全体図（1/1,000）

2)先土器時代の調査

a、先土器時代調査区

概要：4号墳墳丘下から東側斜面にかけての範囲で遺構検出の際に先土器時代と見られる剥片が出土した。周辺の防空壕跡などの断面を観察した結果、基盤の花崗岩風化媒乱土の上部に0.5m以下のローム質の風化土壌の堆積を認められ、同時期の遺物の包含が推定された。調査は堆積状態の良い部分を中心にK～M-8～10区の範囲とした。土層観察のためにこの10mグリットをさらに5m単位に四分割し、調査を進めた（図22)。調査面積は約300㎡である。調査は基盤の花崗岩風化部分まで掘り下げ、遺物、遺構の検出、出土状況、基盤面での地形図などの記録作成をおこなった。

立地：丘陵最高所に近い東側斜面であり、調査前の標高は34～38mであった。ここの斜面は周辺に比べて比較的緩やかであるが、それでも10～15°の傾斜を測る。L・K-8区では基盤上に東西方向の浅い谷状の地形が現れた。この落ち込みの床面は不明瞭であり、凹凸があることから自然地形と考えられた。遺物の多くはこの覆土中からの出土である。

土層：基盤上の土層は貧弱であり、基本的に二層に区分される（図23)。上部の1層は砂粒を含む茶褐色の粘質土であり、下位に漸移変化する。2層は赤褐色の花崗岩起源の砂粒を多く含む粘質土であり、漸移状態で基盤層を覆う。先土器時代遺物はすべて2層中からの出土である。土質の自然科学的分析をおこなっていないために明瞭でないが、二層ともに基盤層の風化再堆積土を母材としているとみられた。

遺物出土状態：先土器時代遺物は総数で21点出土した。そのうち半数以上がK8区からL8区にかけての谷状地形内とその周辺からの出土で

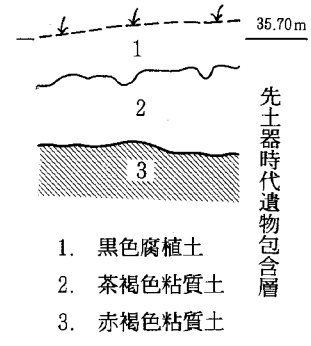


図24. 基本土層図（1/15)

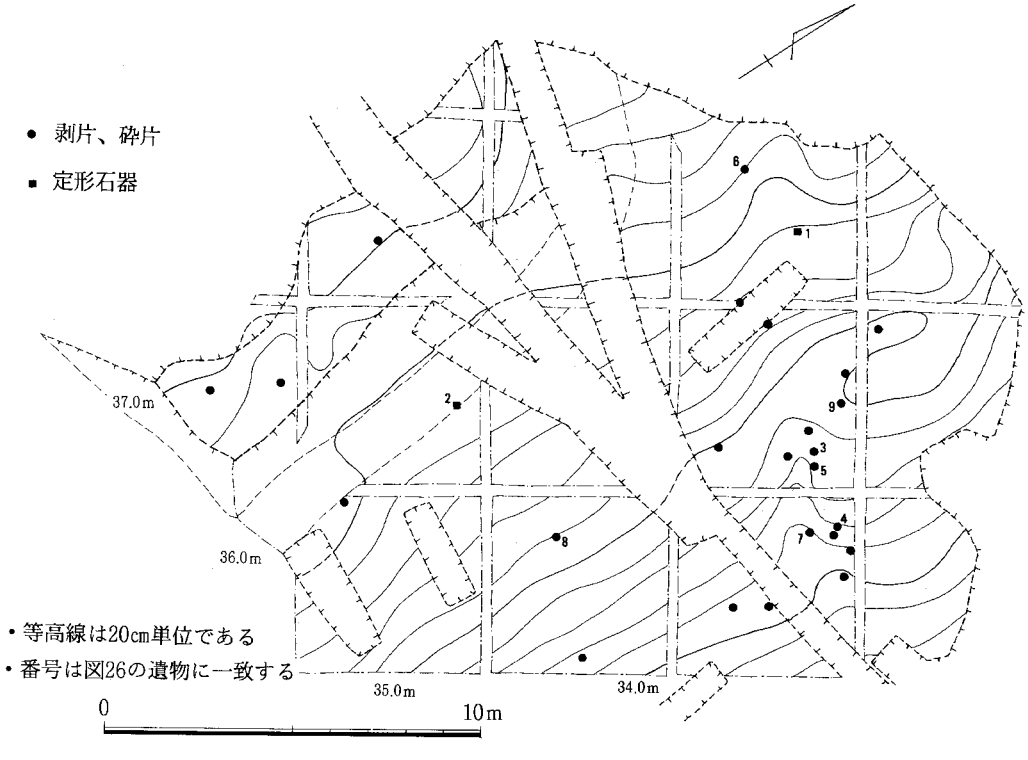


図25. 先土器時代調査区、遺物出土状況（1/200)

ある。分布図を一見すると先土器時代遺物集中分布を伺わせるが、斜面に沿って東西約12m、南北約3mと細長い分布を示し、出土レベルにも差異が大きい。斜面の傾斜や土層の堆積状態と合わせてみると、やはり安定した出土状態とは言い難い。またその他の遺物の出土状態を見ると5m四方に1～2点の遺物が散漫に出土している程度である。こうした点から、K8区からL8区にかけての遺物の集中は、斜面上部のさほど遠くない位置にあった本来の遺物集中分布が何らかの作用で二次的に動き、地山上の谷地形に再堆積したものと考えられる。

出土遺物：総数21点の内訳は台形様石器1、ナイフ形石器1、剥片6、砕片13である。このうち9点を図化した（図25）。1は台形様石器である。刃部右側を調査時に破損してしまった。良質の黒耀石の横長剥片を素材としたもので、背面に僅かに自然面を残す。主要剥離面から角度のある剥離調整を施し、基部断面を台形に仕上げている。主要剥離面にも僅かに剥離がみられる。現状で長さ3.1cm、幅2.0cm、厚さ0.9cmを測る。2は小型のナイフ形石器である。上下は不明であるが、図では剥片の厚みのある方を基部としている。良質の黒耀石で幅1.2cm程度の縦長剥片を素材としている。剥片は打面両設とみられる。剥片両端を主要剥離面側から斜めに整形している。先端を新しく欠損するが、現状の長さ1.9cm、幅1.1cm、厚さ0.3cmを測る。3～7は縦長の剥片である。全て良質の黒耀石を素材としている。3は基部と先端を欠損する。背面と主要剥離面の剥離方向が逆転する。現状で長さ1.4cm、幅1.5cm、厚さ0.3cmを測る。4は背面に小さな自然面を残す。打点は潰れているが、一方向の連続した剥離が認められる。先端部を欠損するが、現状で長さ2.7cm、幅1.8cm、厚さ0.4cmを測る。5は先端を欠損し、左側辺を新しく欠く。打面は潰れ、打瘤が露出する。剥離は一方向である。現状で長さ1.9cm、幅1.4cm、厚さ0.4cmを測る。6は開放剥離による完形品である。調整打面をもち、基部には剥離面調整と見られる剥離がある。剥片の歪みが強く、背面左側に下方斜めからの剥離がある。以上からみてこの剥片は石核側面と剥片剥離面接点の部分の剥片であると見られる。現状で長さ3.0cm、

図26. 先土器時代調査区出土遺物（2/3）

幅1.2cm、厚さ0.3cmを測る。7は基部を欠損した先端部分であり、開放剥離である。背面に僅かな自然面を残す。下方からの剥離があるが、剥片剥離ではなく剥離面の調整とみられる。現状で長さ1.7cm、幅1.7cm、厚さ0.3cmを測る。8は横長の剥片である。右側辺を調査時に欠損した。平坦打面で打痕を残す。本剥片や背面には階段状剥離が多く、剥離面調整にともなう剥片の可能性がある。現状で長さ2.5cm、幅3.4cm、厚さ0.9cmを測る。9はいわゆるブランティング・チップである。縦長剥片の側縁部と見られることからナイフ形石器の調整にともなうものと見られる。現状で長さ1.1cm、幅0.4cm、厚さ0.3cmを測る。

b、その他の先土器時代遺物

A調査区では、この他に先土器時代に所属するとみられる石核、石器、剥片、砕片が少数出土した。しかし、定形石器の出土はなく、また新しい遺構や撹乱中からの出土が多く、良好な遺存状態を示すものは少ない。ここでは、そのうち、4点の石核、剥片を示したい。

10は3期の撹乱中から出土したものである。各所に新しい傷がある。良質の黒耀石による不定形剥片である。背面と打面の一部に自然面を残す。打面には僅かに調整が残る。側片の2カ所に刃こぼれ状の小剥離がある。現状で長さ1.1cm、幅0.4cm、厚さ0.3cmを測る。11は2期の基盤層上で検出した。

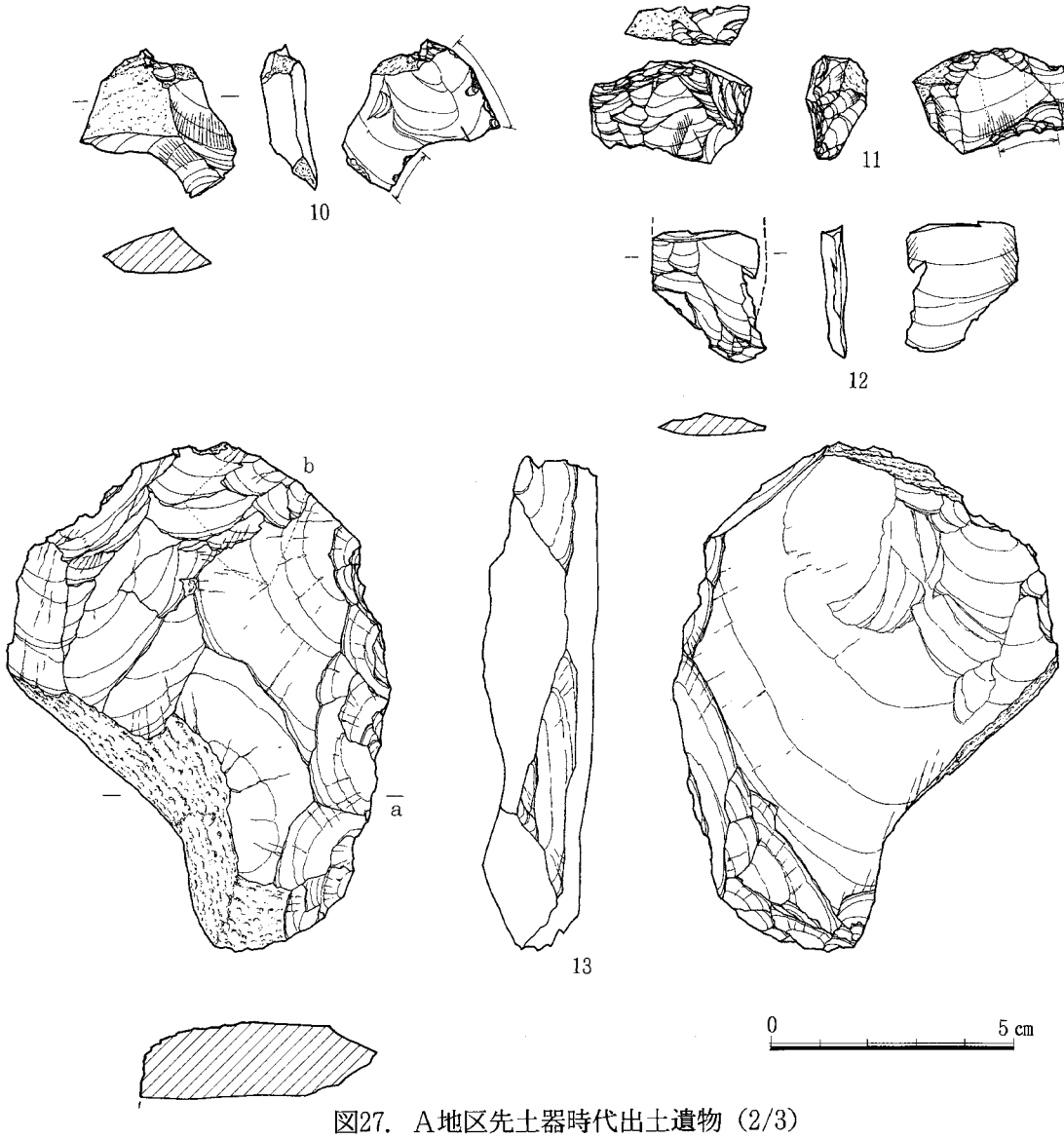


図27. A地区先土器時代出土遺物（2/3）

良質の黒耀石を素材とし、表面の風化は強い。石核を再利用した削器と見られる。打面は自然面と調整剥離がある。表裏ともに打点からの剥片剥離が、階段状に終わる。その後、左側辺と下縁部に調整剥離を施し、刃部を造り出している。現状で長さ2.0cm、幅3.3cm、厚さ1.2cmを測る。12は２期の土壌下部から出土した縦長剥片である。基部を欠損し、右側辺も新しい傷がある。良質の黒耀石を素材としている。表面の風化は強い。剥離は一方向からである。現状で長さ2.7cm、幅2.2cm、厚さ0.5cmを測る。13は２期表土中から採集された横長剥片石核である。古銅輝石安山岩を素材とする。剥離面の風化は著しい。素材の二側辺に自然面が残る。素材は岩脈（節理）に沿って板状に剥離されたものである。素材剥片の側辺、先端部の２カ所の背面に打面調整を施し、打点ａでは打点を山状に造り出し、剥片剥離している。打点ｂは背面の素材剥離以前の剥離との区別が困難であるが、中央の２つの小剥離は打面調整と見られる。剥離された剥片は打点ａが長さ5cm程度、打点ｂが長さ3cm程度である。石核の大きさは現状で長さ10.4cm、幅7.9cm、厚さ2.3cmを測る。

3)縄文時代の調査

概要：和田Ｂ遺跡では斜面の各所に「落とし穴」とみられる遺構を検出した。これらは当初地山上で不明瞭なシミ状の痕跡を見せる程度であり、覆土も周辺地山と差が無い堅く締まったものであり、人為的産物かの疑問をもたせた。しかし、中位まで掘り下げると明瞭な壁面が現れ、床面、柱穴など遺構としての規格性を示した。覆土の観察から、本遺構は形成後人為的な埋め戻しなどはなく、長期間放置されている。検出時の不明瞭さはこの反映と見られた。以下では、個別遺構について記す。

SK22：Ｄ７区にあり、平面は楕円形を呈する。上部は病院施設造成のために１ｍ以下の削平がある。

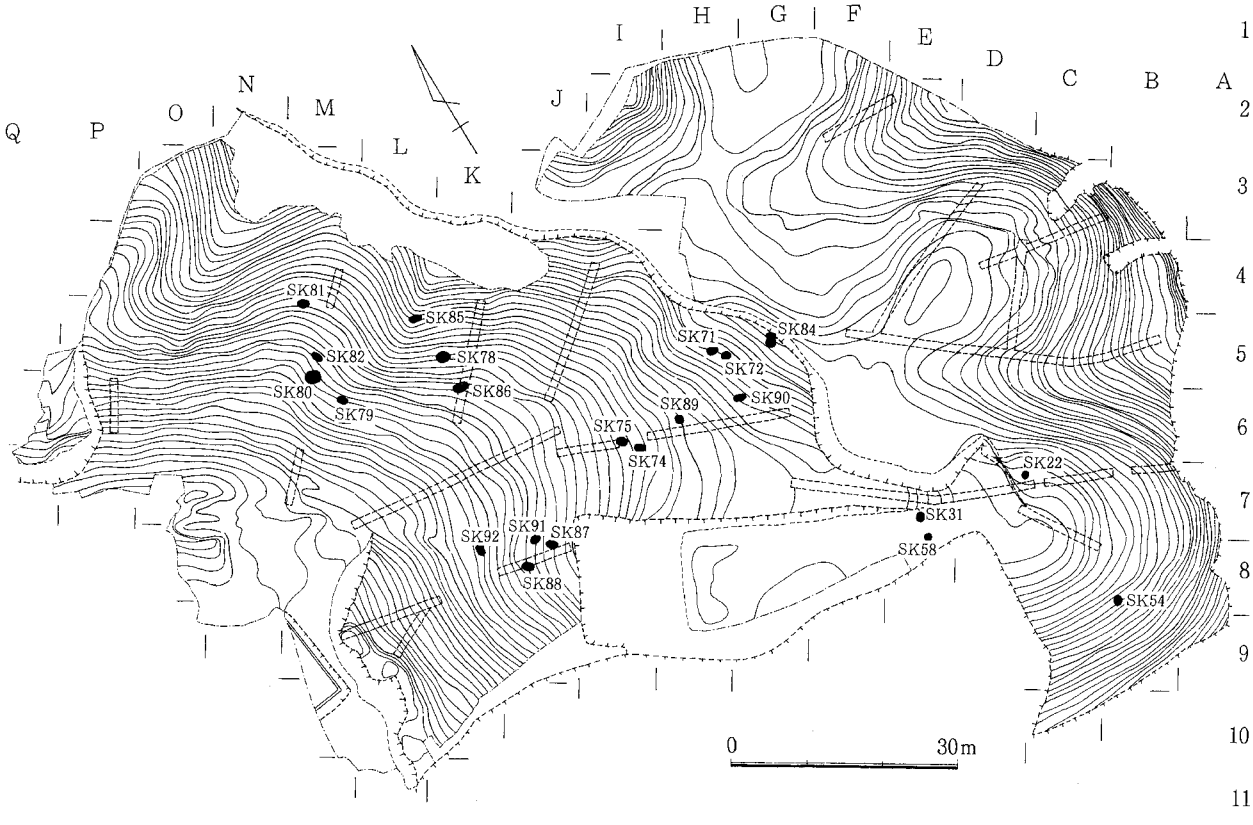


図28. 縄文時代遺構の分布（1/1,000）

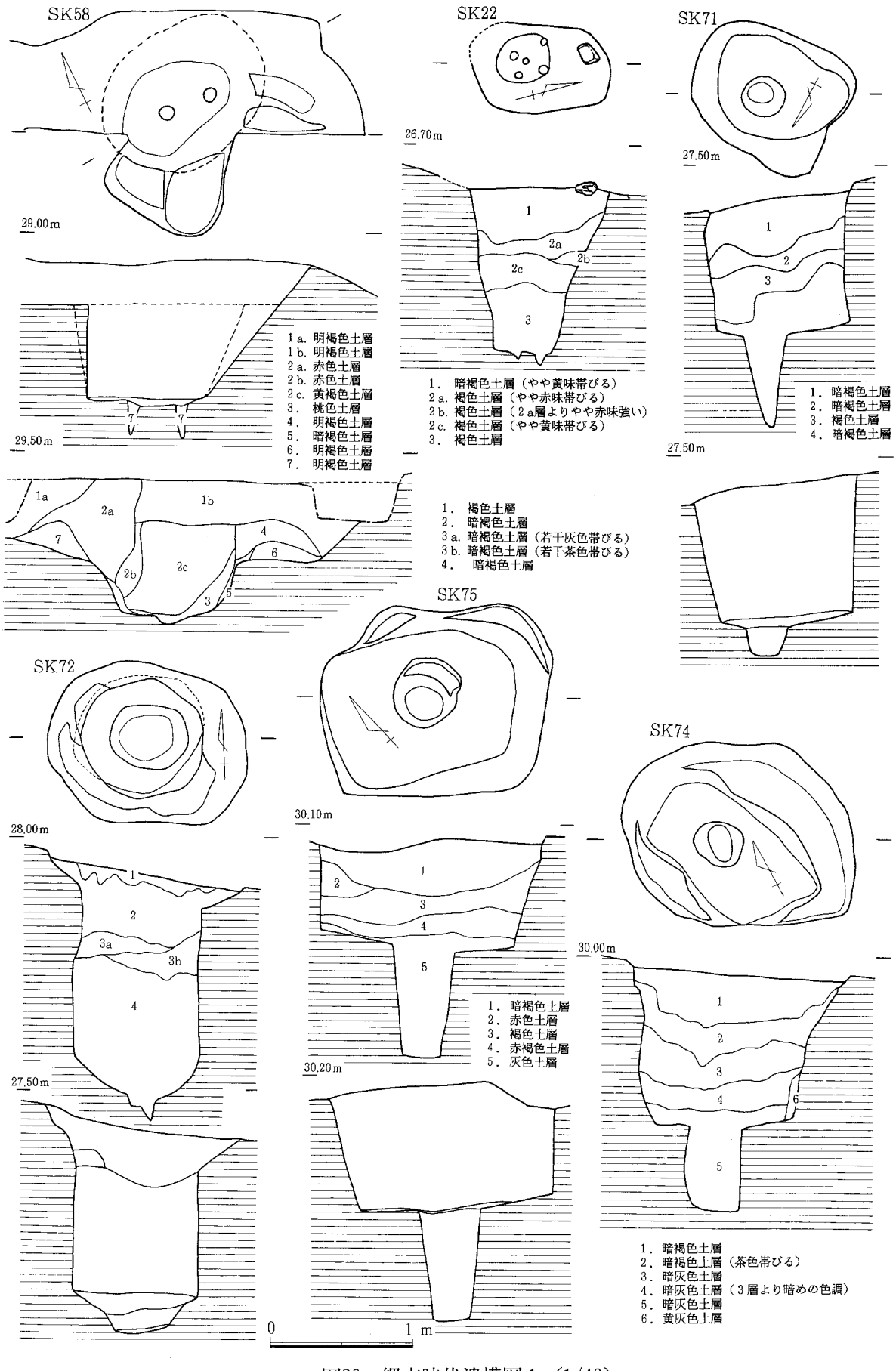


図29. 縄文時代遺構図1 (1/40)

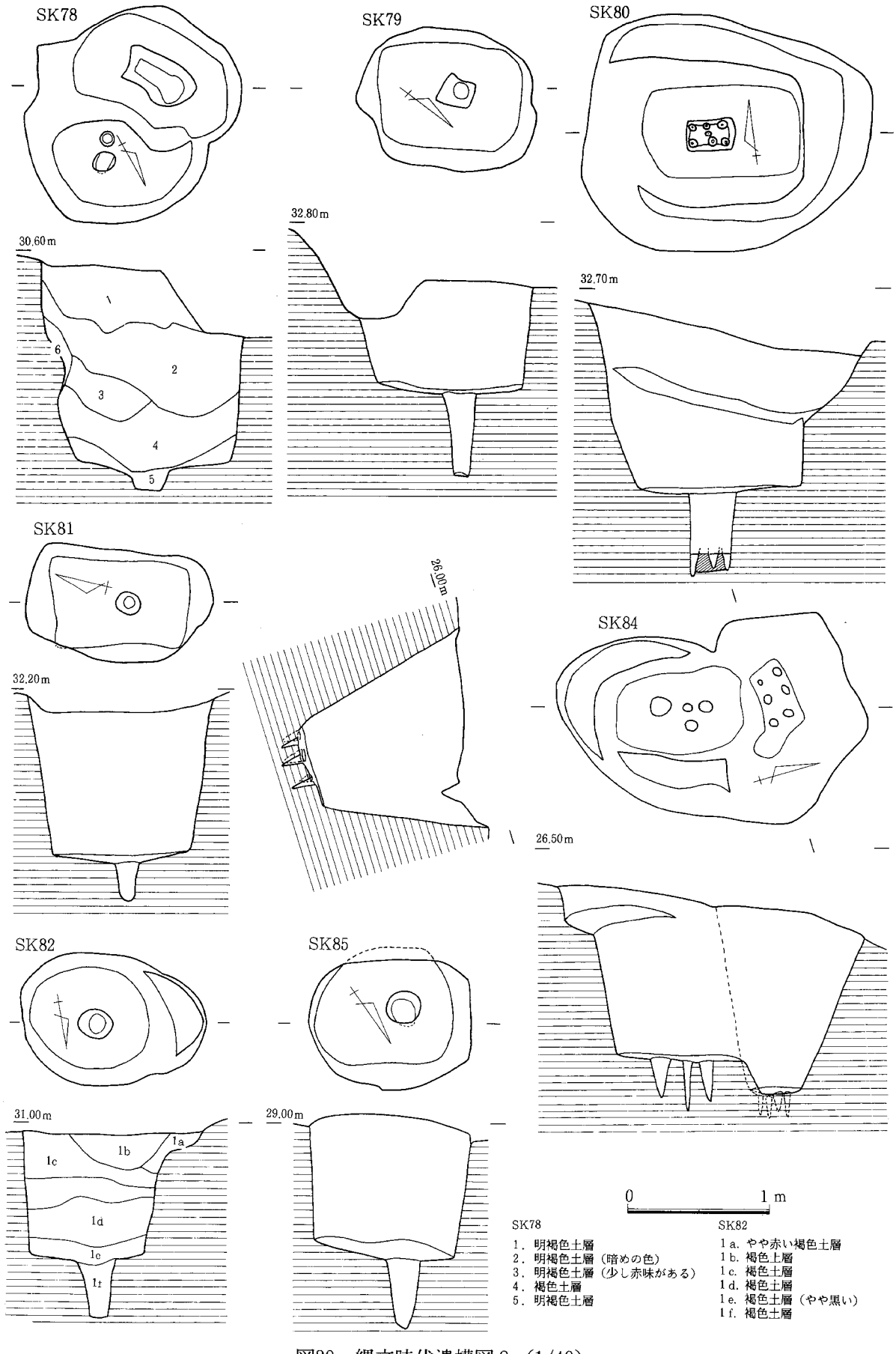


図30．縄文時代遺構図２（1/40）

壁面は70～80°であり、主軸はN-15°-Eで、長さ1.0m、幅0.6m、深さ1.2mを測る。床面に先端が尖った小穴5がある。覆土上部に亜角礫1が出土した。

SK31：E7区にあり、平面は円形を呈する。病院建物基礎のために1m近い削平を受けている。断面形がすり鉢状を呈し、径1.5m、深さ0.8mを測る。床面中央に穴1がある。穴は径0.2m、深さ0.5mである。

SK54：B9区の急な傾斜地にあり、平面は不整楕円形を呈する。壁面は60～70°を測る。主軸はN-19°-Wで、長さ1.7m、幅1.2m、深さ1.4mを測る。床面に小穴6がある。小穴の先端は尖っている。

SK58：E8区にあり、平面は楕円形を呈する。上部は病院建物基礎により1m近い削平を受けている。壁面は60～80°の傾斜である。主軸はN-87°-Eで、長さ1.2m、幅1.0m、深さ0.7mを測る。床面に小穴2がある。小穴の先端は尖る。覆土中位から剥片が出土した（図31-1)。茶褐色のチャートを素材とし、先端を欠損する。打面、剥離面調整がある。剥片の周囲に二次調整があり、削器として使用されたらしい。

SK71：H5区にあり、平面は隅丸方形～楕円形を呈する。壁面は垂直である。主軸はN-70°-Eで、長さ1.2m、幅0.9m、深さ1.0mを測る。床面中央に穴1がある。穴の先端は尖り、径0.3m、深さ0.7mを測る。

SK72：H5区にあり、平面は円形を呈するが、上部の風化部は楕円形となっている。中～下部の壁面は垂直である。その主軸はN-88°-Eで、長さ1.6m、幅1.5m、深さ1.6mを測る。床面中央に穴1がある。穴は径約0.5m、深さ0.2mを測る。穴の覆土上部に先の尖った杭痕1が残る。

SK74：I6区にあり、平面は隅丸長方形を呈する。上部は風化により斜面に沿った不整な楕円形となる。壁面は80°からほぼ垂直となる。主軸はN-15°-Wで、長さ1.6m、幅1.3m、深さ1.1mを測る。床面中央に穴1がある。穴は径約0.3m、深さ0.6mを測る。

SK75：I6区にあり、平面は隅丸方形を呈する。水道管埋設溝のため、上部は削平を受けている。壁面は80°以上の傾斜となる。主軸はN-44°-Wで、長さ1.6m、幅1.3m、深さ0.8mを測る。床面中央に穴1がある。穴は径約0.4m、深さ0.8mを測る。

SK78a：K5区にあり、SK78bと切り合う。埋土による切り合い関係は明らかに出来なかったが、調査時の所見から本遺構の方が新しいと推定した。上部は樹木移設にともない削平を受けている。平面は楕円形を呈する。壁面は80°以上の傾斜となる。主軸はN-27°-Wで、長さ1.1m、幅0.9m、深さ1.5mを測る。床面中央に主軸の合う楕円形の穴1がある。穴は長さ0.5m、幅0.3m、深さ0.2mを測る。

SK78b：K5区にあり、SK78aと切り合う。平面は楕円形を呈する。壁面は80°以上の傾斜となる。主軸はN-30°-Wで、長さ0.3m、幅約1.0m、深さ1.0mを測る。床面に小穴2がある。小穴は径0.1m、深さ0.1m前後である。

SK79：M6区にあり、平面は隅丸長方形を呈する。上部は樹木移設にともない削平を受けている。壁面は80°前後の傾斜である。主軸はN-37°-Wで、長さ1.2m、幅1.0m、深さ0.8mを測る。床面中央に穴1がある。穴は径約0.2m、深さ0.6mを測る。

SK80：M6区にあり、平面は隅丸長方形を呈する。上部は緩く広がるが、下半部は70°から垂直に近い傾斜である。主軸はN-83°-Wで、長さ2.0m、幅1.7m、深さ1.2mを測る。床面中央に長方形の掘り方があり、その中に杭痕7を検出した。掘り方は長さ0.35m、幅0.2m、深さ0.55mを測る。掘り方内は地山の花崗岩風化土が埋土であり、杭痕は茶褐色粘土であり明瞭に区分できた。杭痕の先端は尖っており、数本は掘り方床面に1～5cm程くい込む。

SK81：M5区にあり、平面は隅丸長方形を呈する。壁面は80°以上の傾斜で立ち上がる。主軸はN-15°-Wで、長さ1.3m、幅0.8m、深さ1.1mを測る。床面中央に穴1がある。穴は径約0.2m、深さ0.3mを測る。

SK82：M5区にある。平面は円～楕円形で、上部で広がるが、中～下部はほぼ垂直に近い。主軸はN-80°-Wで、長さ1.3m、幅0.9m、深さ0.9mを測る。床面中央に穴1がある。径約0.2m、深さ0.4mを測る。

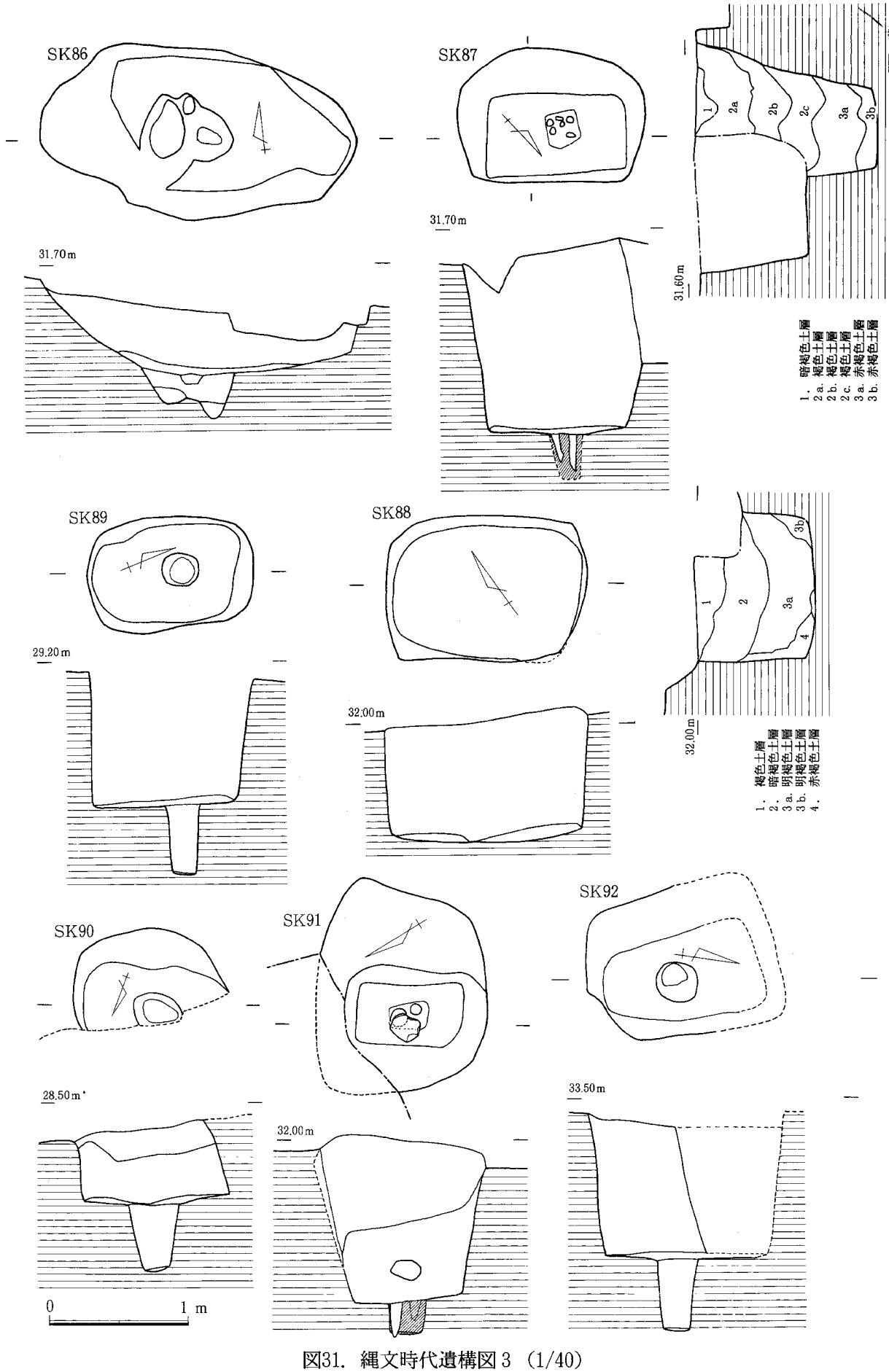


図31. 縄文時代遺構図3 (1/40)

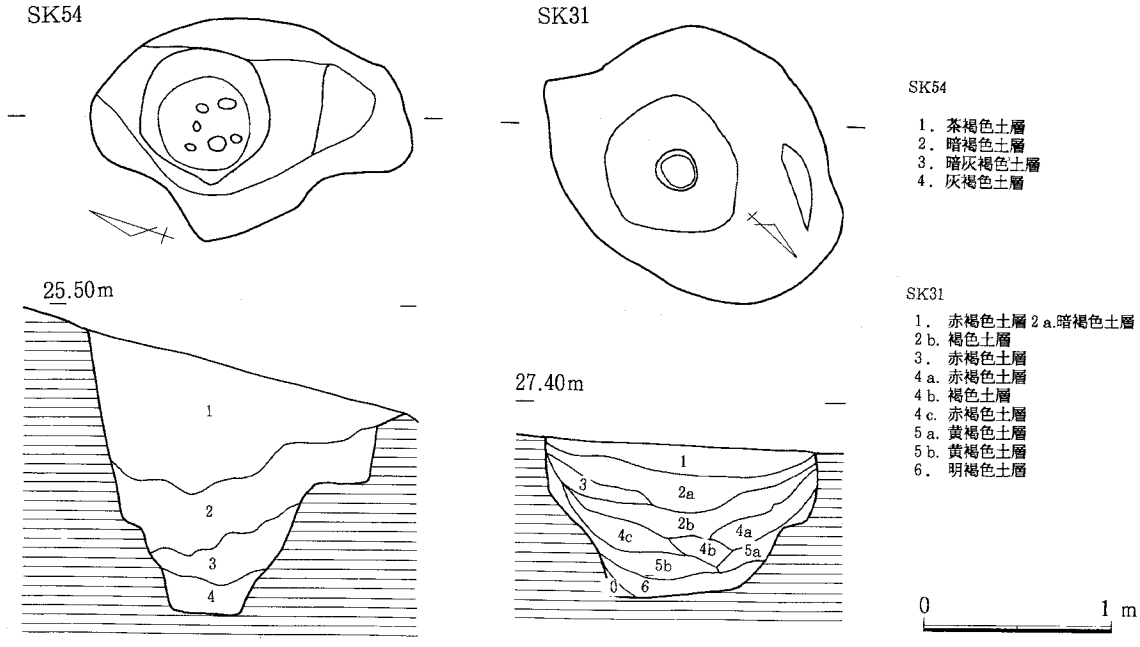


図32. 縄文時代遺構図４（1/40）

SK84a：Ｇ５区にあり、SK84bと切り合う。埋土による切り合い関係は明らかに出来なかった。平面は上部で広がり、楕円形を呈するが、中位以下は隅丸長方形を呈する。壁面は80°前後である。主軸はN-16°-Eで、長さ約1.5m、幅1.2m、深さ1.2mを測る。床面に小穴４がある。小穴の先端は尖っている。その先端は床面から深さ0.3～0.4mまで達している。

SK84b：Ｇ５区にあり、南側でSK84aと切り合う。また、北側は病院造成時に一部削平される。平面は隅丸方形を呈する。壁面は70°前後の傾斜である。主軸はN-89°-Eで、長さ1.4m、幅約1.0m、深さ1.3mを測る。床面に小穴６がある。小穴の先端は尖る。その先端は床面から0.2m前後の深さに達している。

SK85：Ｌ５区にあり、平面は隅丸長方形を呈する。壁面は垂直に近い。主軸はN-54°-Wで、長さ1.2m、幅0.9m、深さ1.0mを測る。床面中央に穴がある。径約0.25m、深さ0.5mを測る。

SK86：Ｋ５区にあり、平面は長楕円形を呈する。試掘時に上部を削平した。主軸はN-85°-Wで、長さ2.3m、幅1.3m、深さ0.5m を測る。床面に穴３がある。穴は連結し、深さ0.3m を測る。

SK87：Ｊ８区にあり、平面は隅丸方形を呈する。防空濠により、北側が壊れる。壁面は上部に広がる。主軸はN-42°-Eで、長さ1.4m、幅1.0m、深さ1.3mを測る。床面中央に方形の掘り方があり、その中に杭痕７を検出した。杭先端は尖る。掘り方は一辺0.24m、深さ0.40mを測る。

SK88：Ｊ８区にあり、北半分を試掘時に削平されている。隅丸方形を呈する。壁面はほぼ垂直である。主軸はN-35°-Eで、長さ約1.4m、幅1.1m、深さ0.9mを測る。床面に穴はない。

SK89：Ｈ６区にあり、平面は隅丸方形を呈する。壁面はほぼ垂直に立つ。主軸はN-22°-Eで、長さ1.2m、幅1.1m、深さ0.9mを測る。床面に穴１がある。径約0.25m、深さ0.5mである。

SK90：Ｇ６区にあり、北半分が撹乱で壊される。楕円もしくは隅丸長方形であり、主軸はN-69°-Eで、長さ1.1m以上、幅0.7m以上、深さ0.5mを測る。床面に穴１がある。径約0.3m、深さ0.5mである。

SK91：Ｊ８区にあり、北側を防空濠で壊される。隅丸長方形であるが、上部は広がる。主軸はN-33°-Eで、長さ1.0m、幅0.9m、深さ1.2mを測る。床面中央に長方形の掘り方があり、その中に杭痕２を検出した。掘り方は長さ0.3m、幅0.2m、深さ0.2mを測る。覆土下半部に亜角礫１が出土した。

SK92：Ｋ８区にあり、北側を防空濠で壊される。隅丸長方形を呈し、長さ約1.3m、幅1.1m、深さ

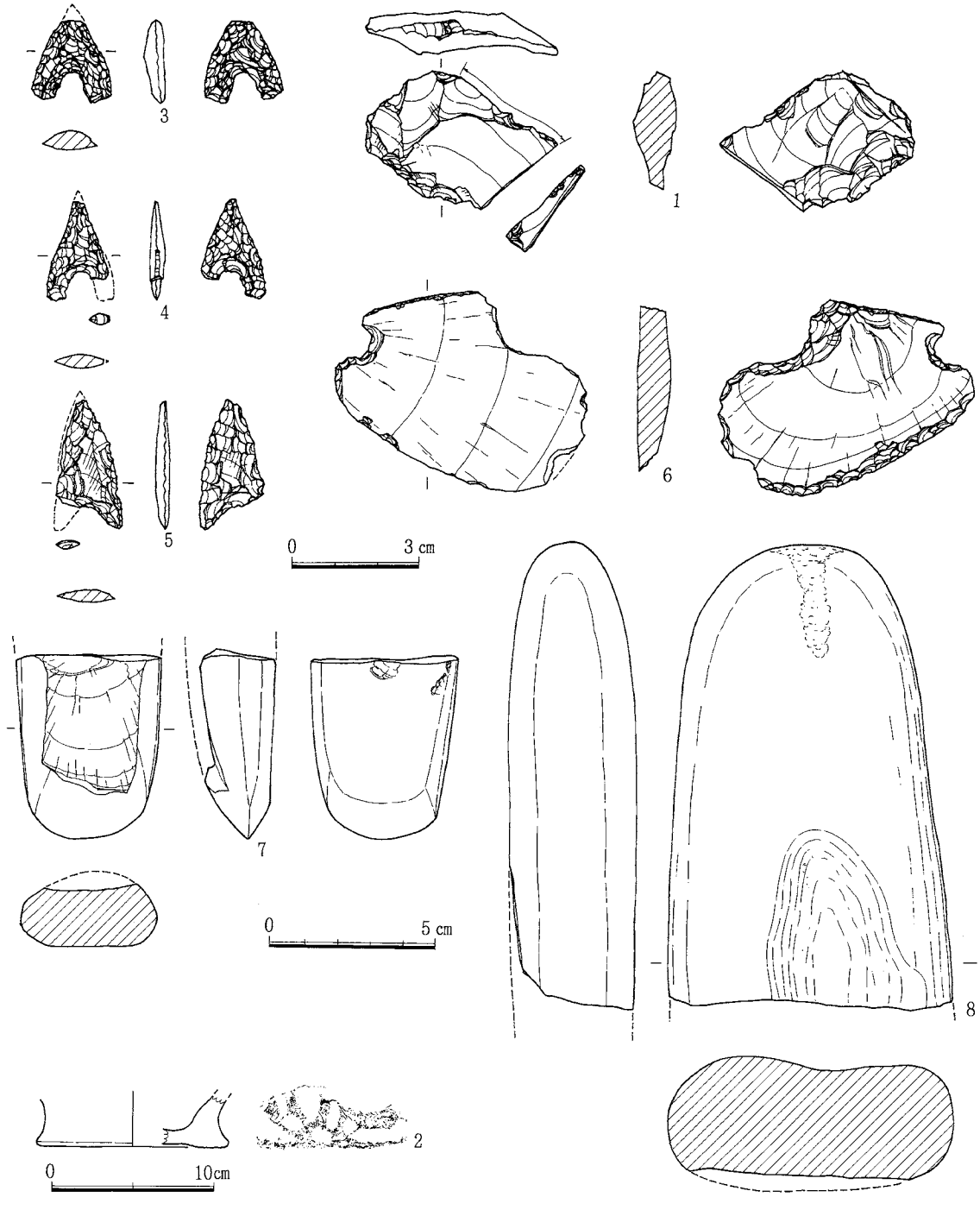


図33. 縄文時代出土遺物（2/3,1/2）

1.0mを測る。床面に穴1がある。径約0.3m、深さ0.5mである。

その他の縄文時代遺物：遺構以外から少量の縄文時代遺物が出土した。2は深鉢形土器の底部である。胎土に滑石を含み、器表に凹線文が入る。縄文時代後期前葉の阿高式系の土器である。3～5は石鏃である。4号墳下とその東側斜面から出土した。3、4は黒耀石製の鍬形鏃である。5は古銅輝石安山岩製の剥片鏃である。6は古銅輝石安山岩製の石匙であり、C6区出土。7、8は石斧である。7は変成岩製で、刃部破片。3、4と同一地点出土。8は玄武岩製であり、基部破片をくぼみ石に転用。3号墳墓壙内出土。

4)弥生時代の調査

概要：A地区の弥生時代の遺構、遺物は大きく３地点で検出された。これを便宜上Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ区として表す。Ⅰ区はB～E７～９区の丘陵先端部であり、小規模な住居状遺構と貯蔵穴が密集している。住居状遺構は、明瞭な床面、壁面、炉跡があり、上屋の存否、構造が不明のものを総称した。この遺構は貯蔵穴を再利用するものと、地山に直接掘削するものがあるが、前者が圧倒的に多い。Ⅱ区はD３区付近の丘陵先端部であり、貯蔵穴１と周辺採集の石包丁片がある。Ⅲ区はK・L９・10区の丘陵頂部とその東斜面部である。不明土壙２と周辺採集の石器類がある。なお住居状遺構は「SC」、貯蔵穴や不明土壙は「SK」で表す。貯蔵穴を再利用した住居状遺構の遺構番号は同じとする。

ａ、住居状遺構

SC17：D７区にある。貯蔵穴SK17の上部にある。平面形は略南北に主軸を取る卵形を呈する。規模は長さ4.0m、幅3.1mである。床面は二次的陥没と見られる段差が各所にあり、平坦でない。中央部分で深さ約0.7mを測る。中央南よりの床面上、長さ0.8m、幅0.5mの範囲に焼土面があり、炭化物の集中があった。覆土は床面上に地山の地山再堆積の未風化土がある他は、土壌化が進んでいる。覆土下部から床面上に、土器片、石器類が多く出土した。1は甕であり、口縁から胴部の破片である。口縁はく字形に外反し、口唇部に刻目を施す。刻目は口唇全面に及ぶが、やや小さい施文である。２は壷の口縁部である。頸部から緩く外反し、口縁部を肥厚させ段をつける。３～５は壷底部である。底部際で短く立ち、平底となる。６～８は石鏃である。何れも良質の黒耀石を用いる。６は片脚を欠損する。長さ1.3cm、幅約1.5cm、厚さ0.2mを測る。７は僅かに抉りが入る三角鏃である。長さ1.8cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm を測る。８は剥片素材面が多く残る。未製品か。長さ1.6cm、幅1.7cm、厚さ0.3cmを測る。９は偏平片刃石器である。基部を欠損する。現状の長さ3.1cm、幅1.4cm、厚さ0.8cmを測る。

SC18-19：D７区にあり、SC17の東側1.4mの位置にある。貯蔵穴SK18、SK19の上部にある。中

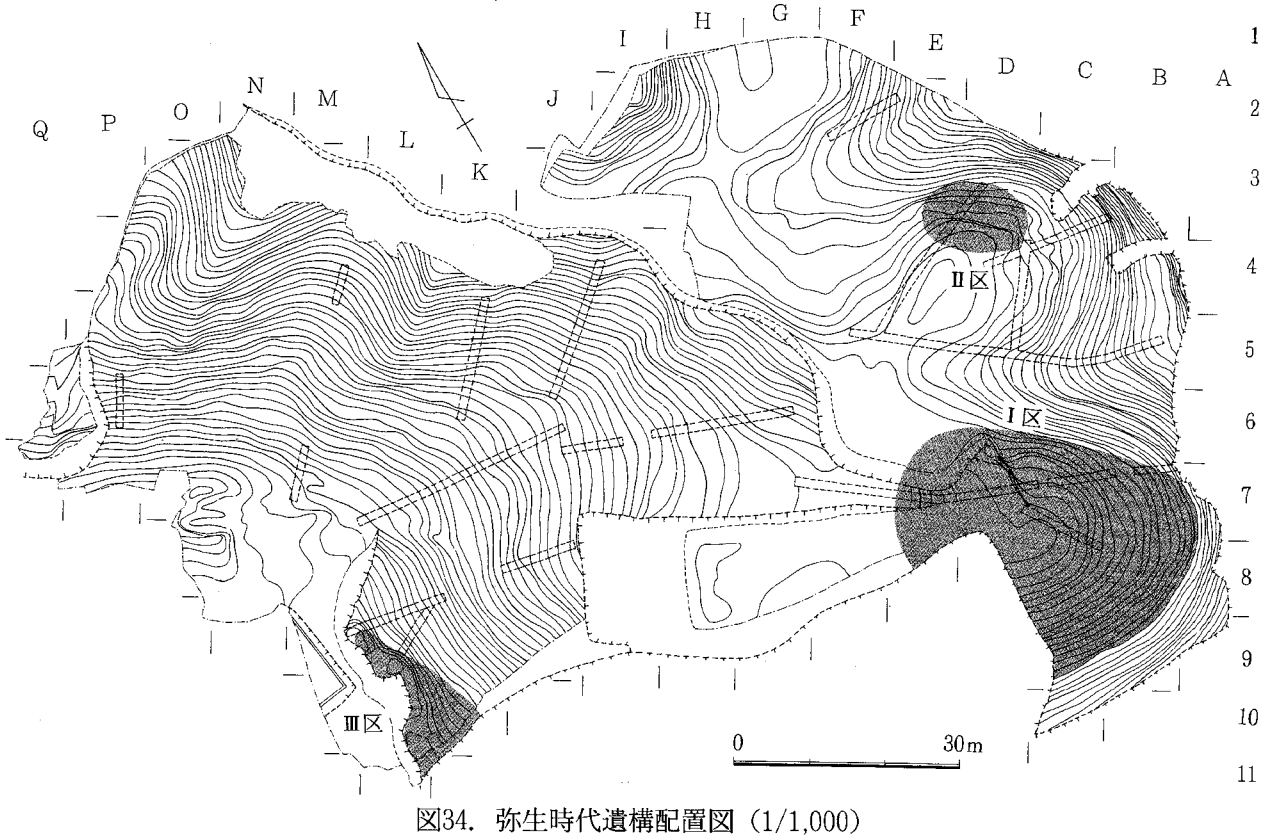


図34. 弥生時代遺構配置図（1/1,000）

央を縦断して試掘溝が入るために、上部床面が壊れている。平面形は長楕円形であり、長さ5.3m、幅2.6mを測る。床面は埋土を介して三面ある。上位の第1面は床面が標高26.6m前後で、東西2つの炉（炉1、2）がある。中位の第2面は床面が標高26.3m前後で、西側に炉3がある。下位の第3面は床面が標高25.9m前後で、中央に炉4がある。住居の深さは現状で第1面が約0.4m、第2面が約0.8m、第3面が約1.2mを測る。覆土は流入風化土が主体である。第1面床面上に少量の土器片が出土した。1は甕である。口縁部の破片である。口縁はく字形に外反し、口唇部全面に及ぶ刻目を施す。

SC21：C7区にある。SC18-19の南側約2mの位置にある。貯蔵穴SK21の上部を削平、拡大し構築している。不整円形を呈し、径約2.7mを測る。床面は埋土を介して二面あり、上位の床面が標高26.6m前後で、中央に切り合いのある2つの炉（炉1、2）がある。下位の床面は標高26.0m前後で、東側に片寄って炉3がある。住居の深さは現状で第1面が0.6m、第2面が1.2mを測る。覆土は地山二次堆積と土壌が交互に堆積する。第1面北西側覆土中に土器片が出土した。壷の胴部である。

SC29：E7区にある。SC17の西側約4mにある。貯蔵穴SK29を中位まで埋め整地している。東西方向に長い楕円形を呈する。東西2.2m、南北1.8mを測る。床面は標高約26.5mであり、検出面からの深さは約0.9mである。床面中央東寄りに炉がある。

SC30：D7区にあり、SC17の南約3mに位置する。病院建物基礎により相当削平されている。貯蔵穴SK30の上部を掘削拡大し設けられ、一部SK24の上部に及んでいる。平面は長辺が膨らむ隅丸長方形を呈する。規模は長さ約3.3m、幅2.2m、深さ0.2mを測る。床面中央に炉がある。覆土は風化土壌である。南壁に近い床面上に土器類が出土した。1は甕であり、底部を欠損する。口縁部が短く外反し、口唇部に刻目を施す。刻目は全面に及ぶが、刻みは浅い。2は壷の底部である。

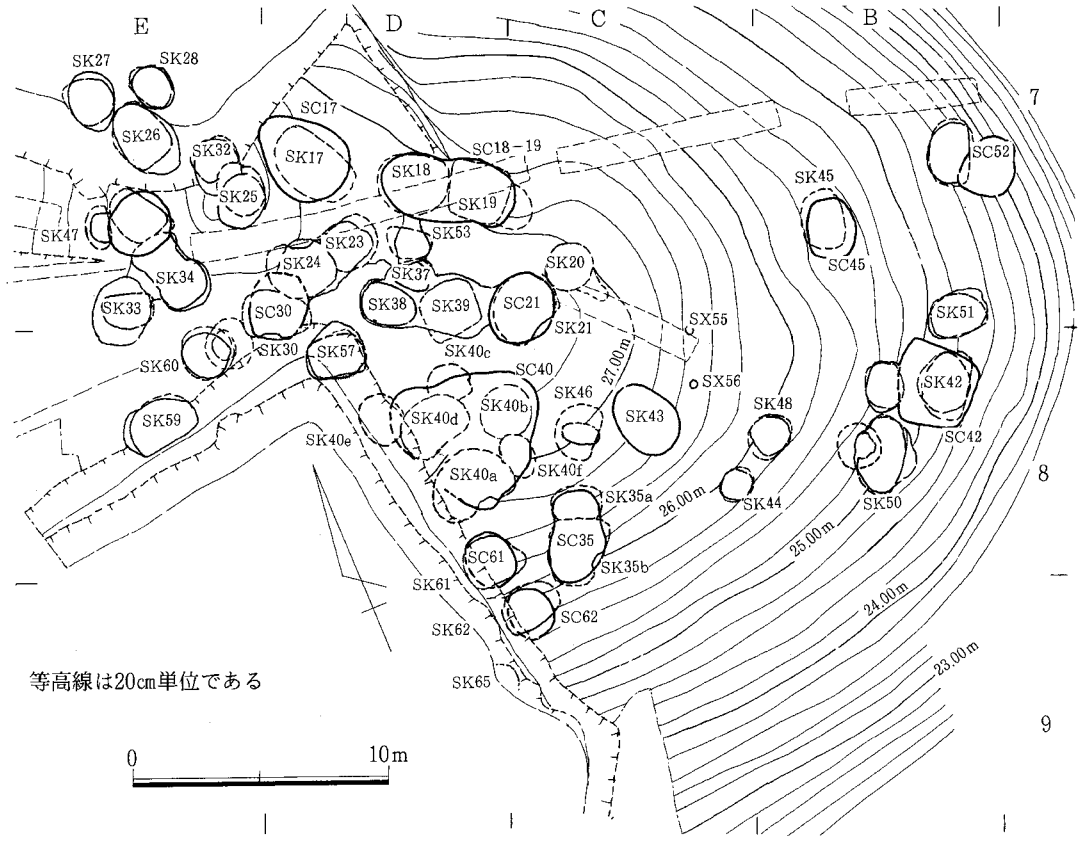
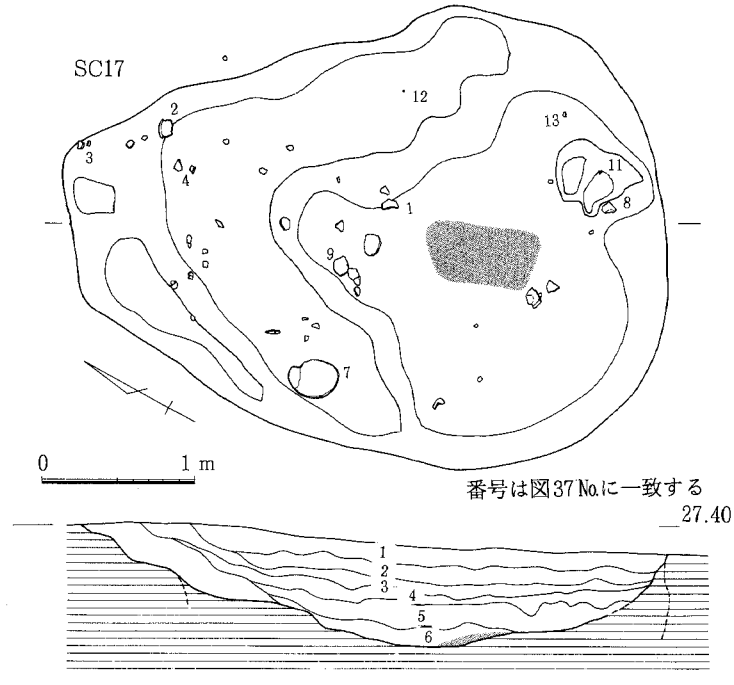


図35. I地区弥生時代遺構配置図（1/300）

SC35：Ｃ８区にある。北から南に下がる10°前後の傾斜地である。SK35 a,bの上部を整形、再利用している。平面は西長辺に括れのある楕円形を呈する。規模は長さ3.5ｍ、幅2.2ｍを測る。床面は埋土を介して上下に二面ある。上面は標高25.8ｍ前後の位置にあり、現状での深さ0.9ｍを測る。床面は全体に汚れ、東側に下がる。中央に炉１がある。下面は貯蔵穴床面に近い標高24.0ｍ付近にある（図70参考）。埋土を整地し、床面としている。南側壁に近い床面に炉２がある。現状での規模は長さ4.2ｍ、幅2.2～2.5ｍ、深さは2.8ｍを測る。上面の覆土は二群に分かれ、最初は斜面上方、北側から土壌化した地山土が流入し、次に南側から風化土壌が長期間にわたって流入している。遺物は床面上南側に土器小片が出土したのみである。



1．褐色土層　比較的風化度強い。粘性は低くしまりは良い。２層との層界は比較的平坦だが不明瞭である。
2．暗褐色土　粘性は低くしまり良い。３層との層界は平坦でやや不明瞭である。
3．暗褐色土層　少量の炭化物を含み先生は低くしまりは良い。４層との層界は凸凹多く、比較的明瞭である。しかしＡ－Ａ′ライン南方ではやや不明瞭。
4．やや暗い褐色土層　一部風化した花崗岩質の砂質土を含む部分がある。粘性は低くしまりは良い。５層との層界はやや不明瞭。Ａ－Ａ′ライン南半分では読み取りにくい。
5．黄色を帯びた明褐色土層　赤褐色の粘質土も多く含む。粘性低くしまり良い。６層との層界は平坦だが、ＢラインとＡラインの交点（炉面上方）付近では不明瞭。その他の部分では比較的明瞭。
6．褐色土層　黄灰色砂質土ブロックと炭化物を少量含む。

図36．SC17遺構図（1/50）

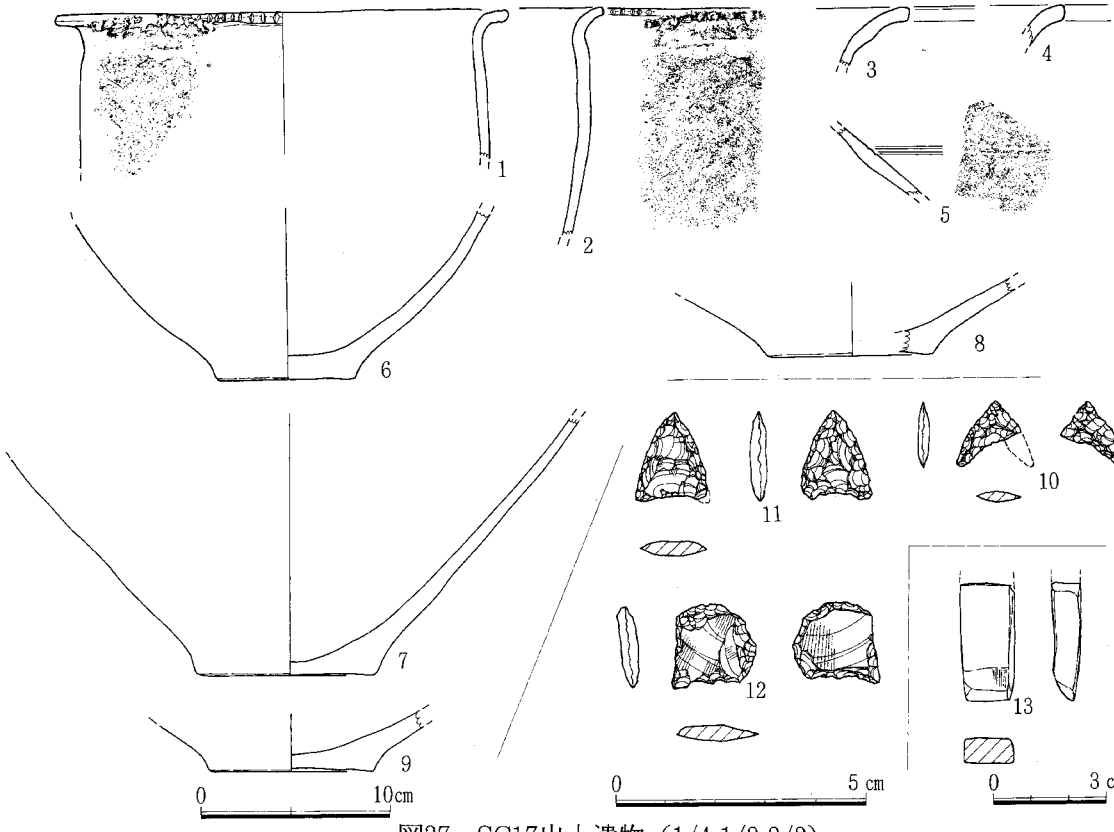


図37．SC17出土遺物（1/4,1/2,2/3）

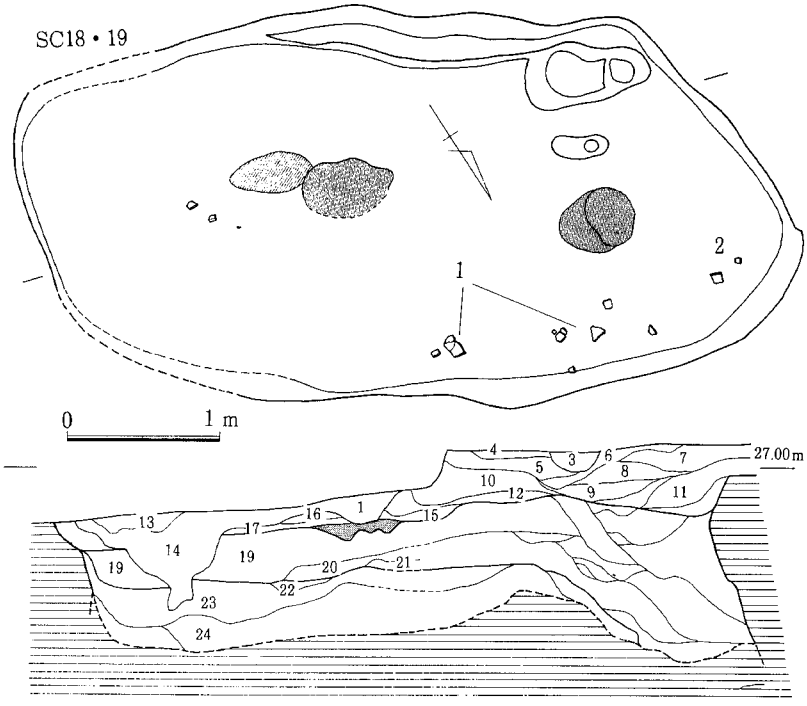


図38. SC18-19遺構図（1/50）

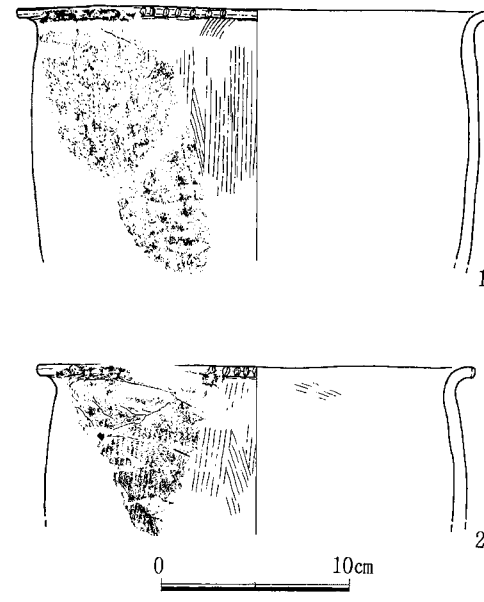


図39. SC18-19出土遺物（1/4）

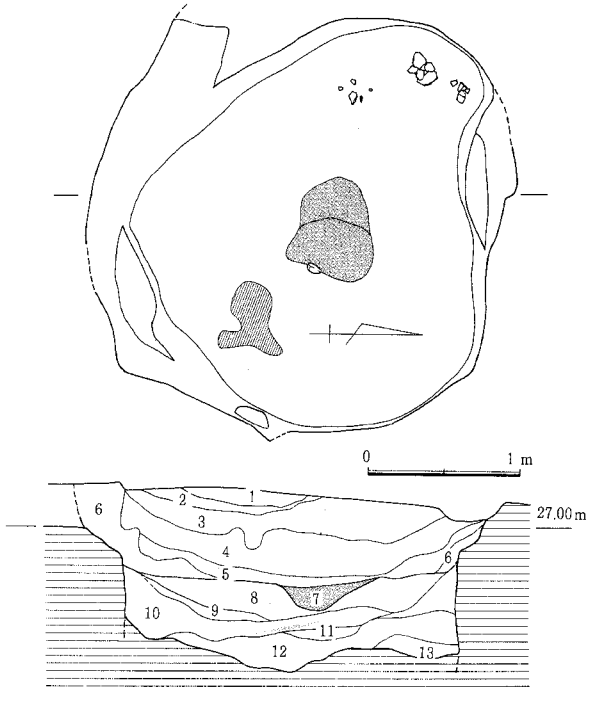


図40. SC21遺構図（1/50）

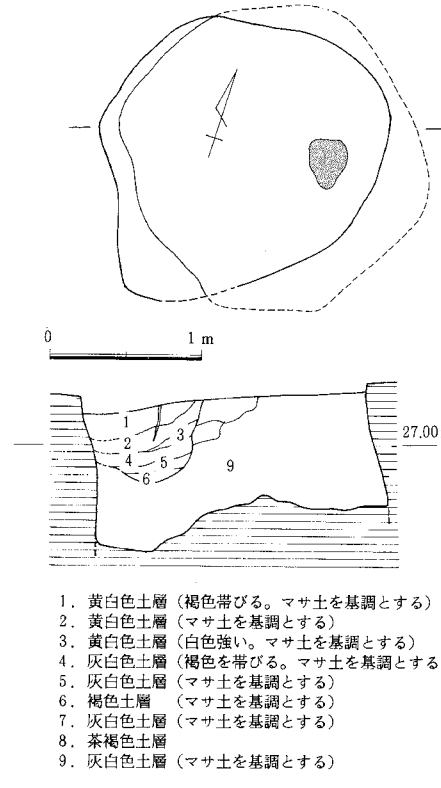
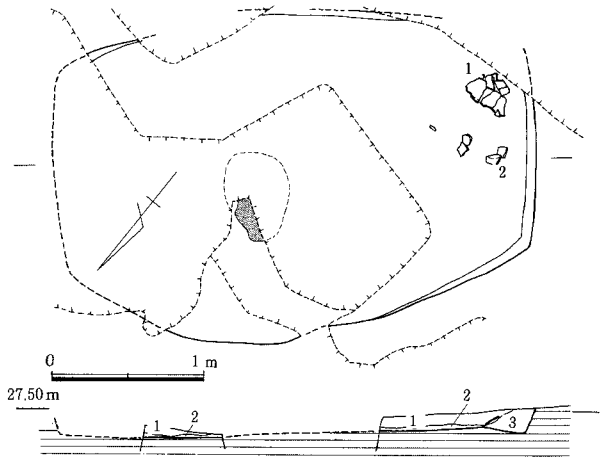


図41. SC29遺構図（1/50）



1．茶灰色砂質土（バイラン２次）　比較的きれい。分離化。長石含む。
2．茶褐色土　炭化物片含む。ややよごれる。
3．赤褐色砂質土　やや硬くしまる。

図42．SC30遺構図（1/50）

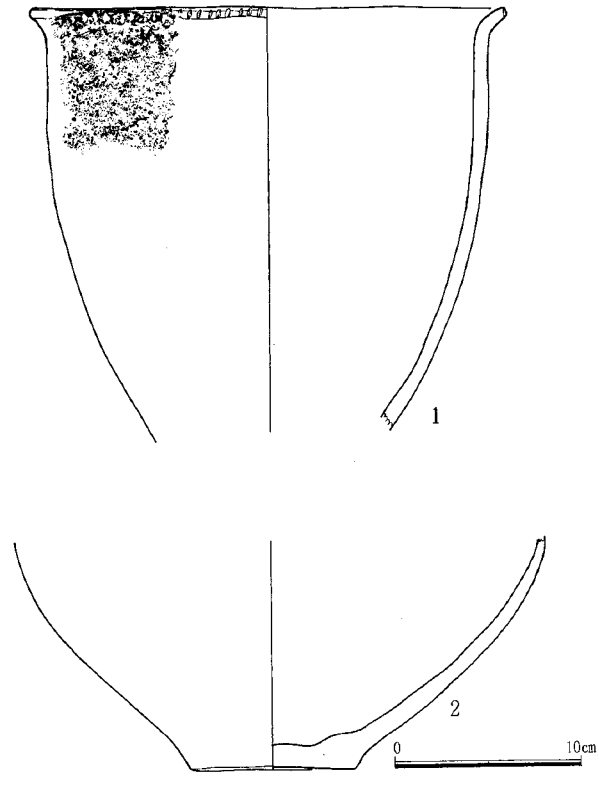
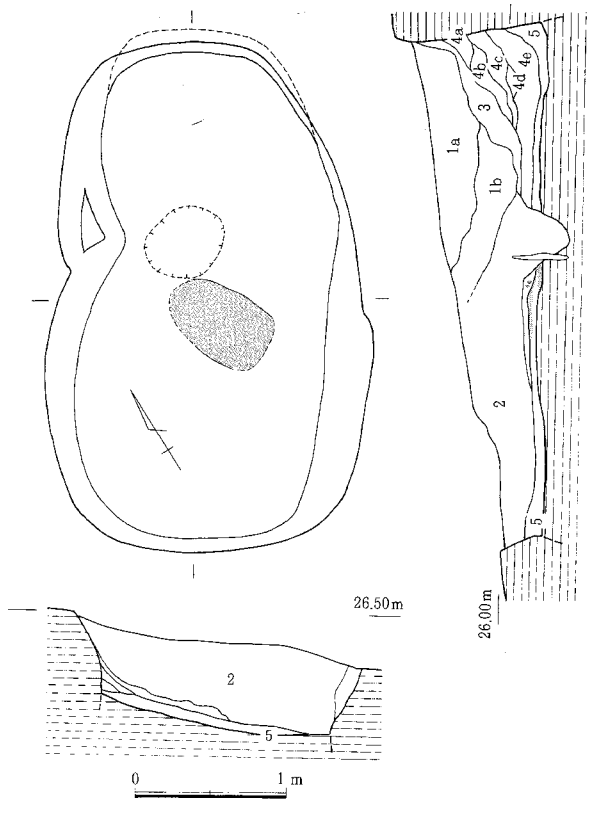


図43．SC30出土遺物（1/4）



1a．褐色土　炭化物含む砂質土。土壌化進む。下位凹凸不明瞭。
1b．暗褐色土　炭化物特に多い。
2．褐色～灰褐色砂質土　上・下部は土壌化が進み不明瞭。中央部に未風化花崗岩砂（長石含）あり。
3．褐色土　やや明るい土色。下位層を切る。凹凸。土壌化。
4a．赤褐色粘質土　炭化物含む。硬くしまる。上・下不明瞭。
4b．黄褐色土　砂質強く土壌化。
4c．赤褐色粘質土　南側に淡い砂質化漸移する。
4d．黄褐色土　砂質。明瞭。
4e．赤褐色粘質土　上部は不明瞭。土壌化し漸移。下面は不明瞭。
5．暗褐色砂質土　5～10cmの層厚。やや粘質。炭化物片、焼土片多し。下位に漸移。よごれた感じ。住居床面か？

図44．SC35遺構図（1/50）

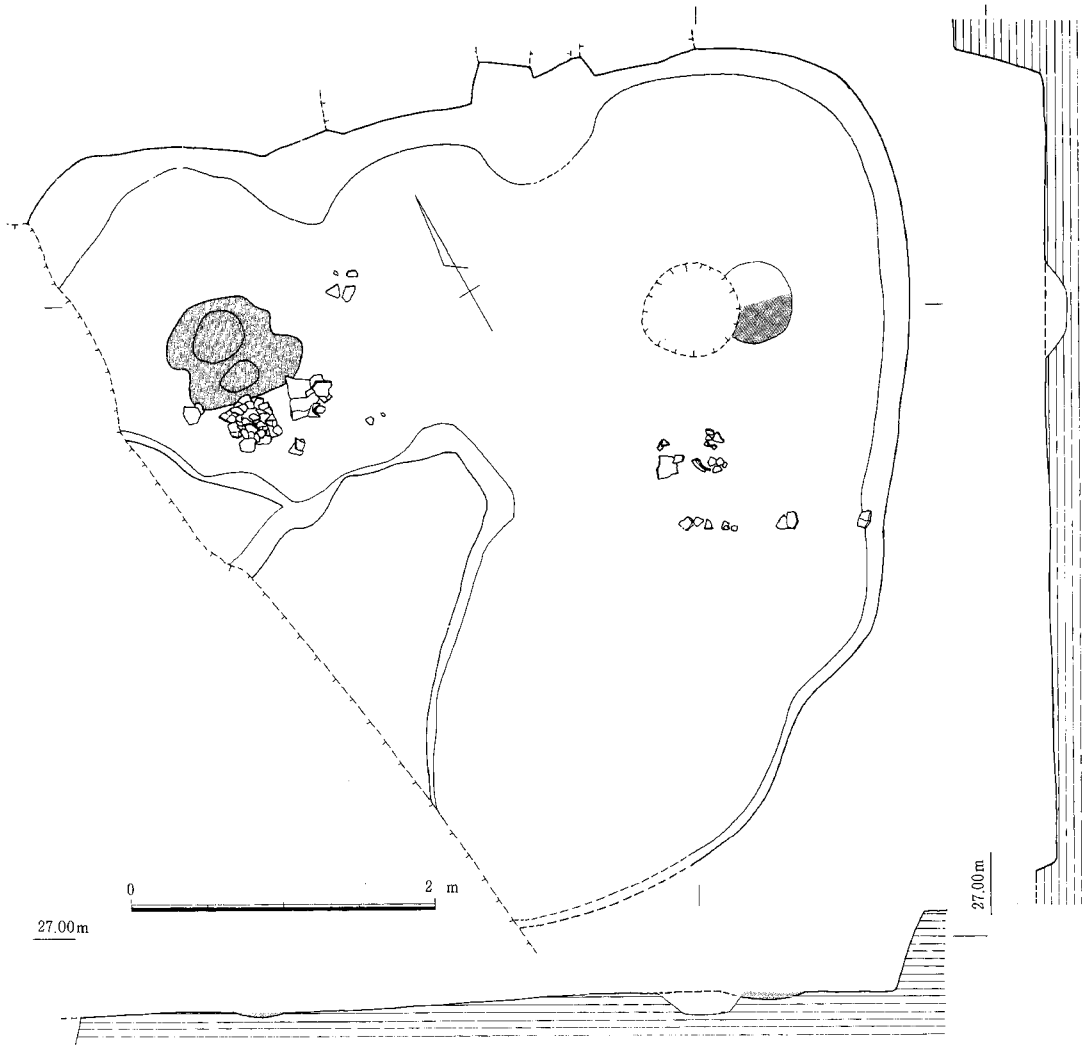


図45. SC40遺構図（1/50）

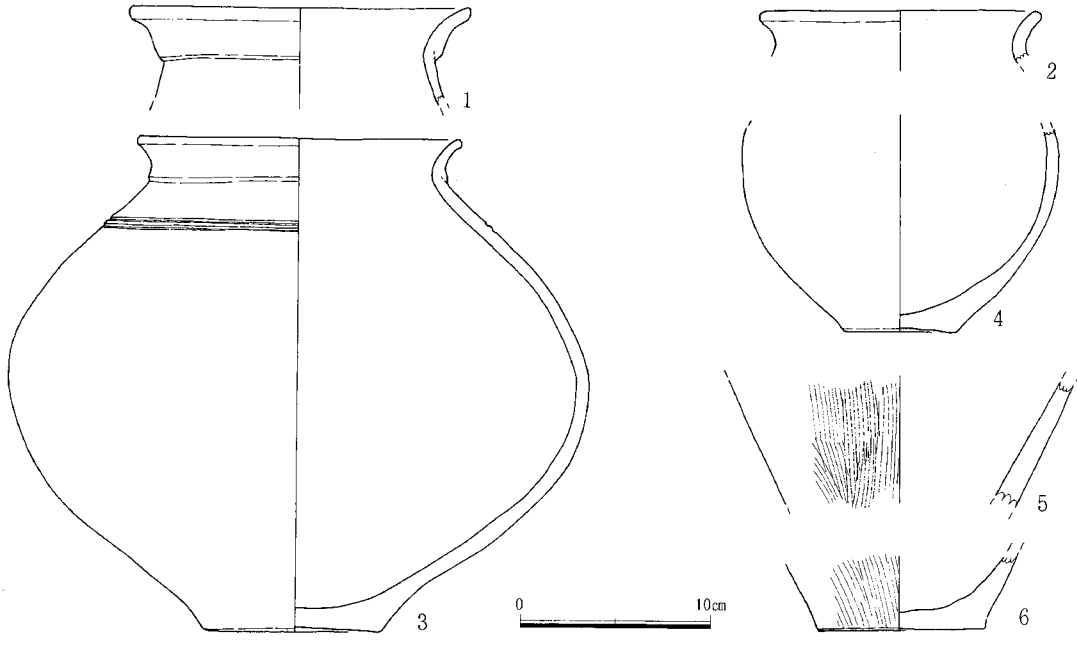


図46. SC40出土遺物（1/4）

SC40：C・D８区にある。SC21の南約1mに位置する。西側を宅地造成のために削られ、1/3ほどを失っている。SK40a～dの上部を整形して構築する。平面は不整な隅丸方形と見られる。規模は一辺約5.5m、深さ0.7mを測る。床面の東西二カ所に炉がある。覆土は全体に風化土壌からなり、人為的な埋土は認められない。住居床面に土器類が出土した。炉１の南側では壷(1)、炉２に近接して壷(2、3)、甕(4)などが出土した。１・２は壷口縁部である。内傾する頸部から強く外反する口縁部がつく。口縁部は粘土帯により肥厚し、段がつく。３は壷である。口径17.5cm、器高26.5cmを測る。肩部に２条の沈線が巡り、近接して外反する口縁がつく。口縁部は粘土帯により肥厚し、弱い段がつく。４は壷の胴部から底部である。５・６は甕の底部である。直線的に立ち上がり、外面はハケ調整である。

SC42：B８区にあり、西から東に下がる斜面にある。SK42の上部を掘削拡大して構築している。上部を撹乱により壊される。調査当初は貯蔵穴SK42の付帯施設と考えていたが、埋土の観察から、

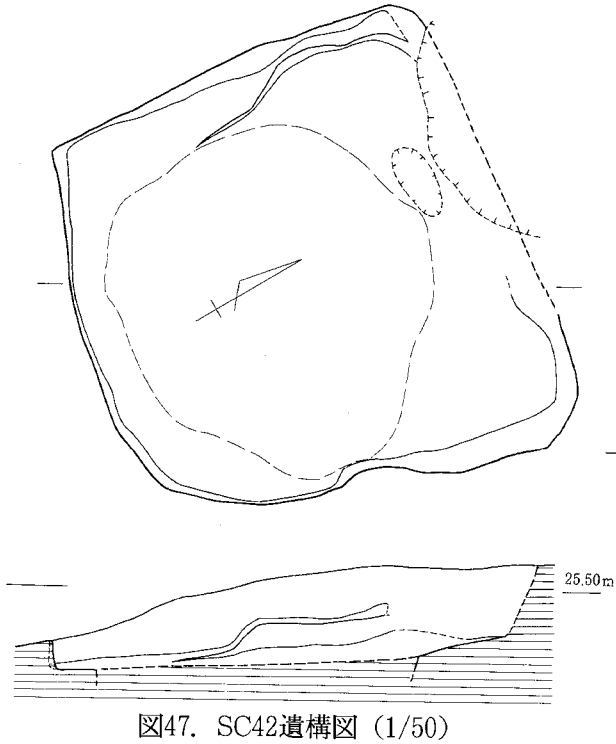


図47. SC42遺構図（1/50）

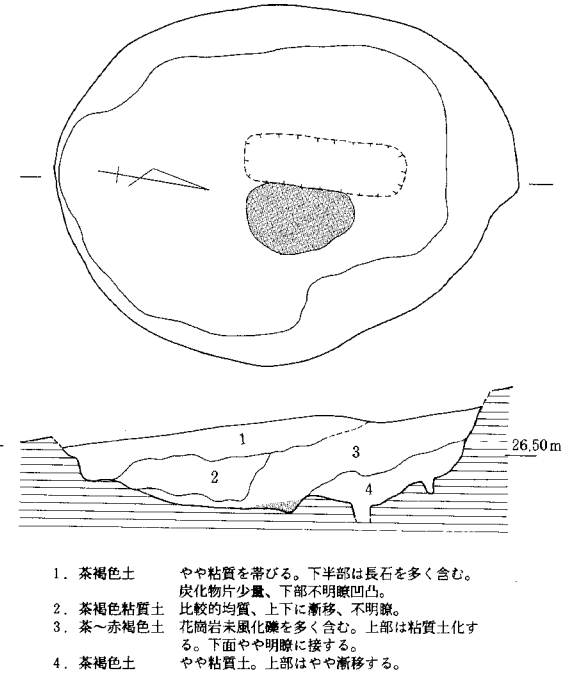


図48. SC43遺構図（1/50）

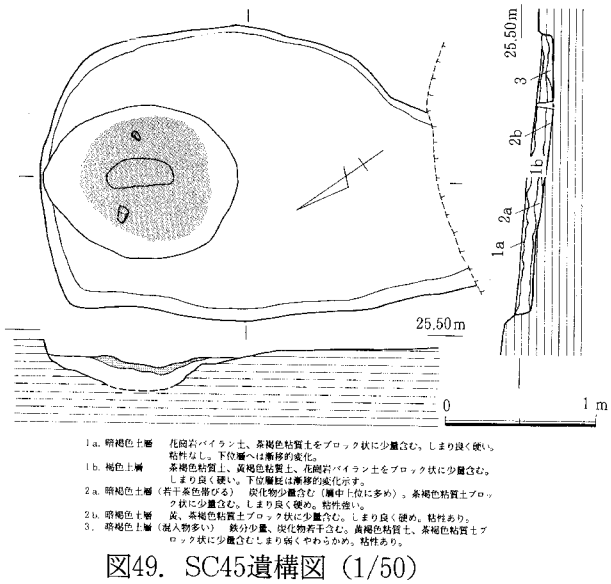


図49. SC45遺構図（1/50）

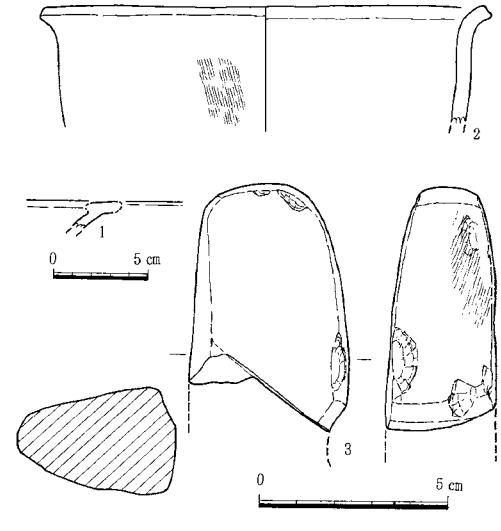


図50. SC43,45出土遺物（1/2・1/4）

貯蔵穴埋没後に本遺構を設けていると判明した。床面中央部が撹乱により失われて、炉跡などが未検出であるが、形態から住居状遺構としてとらえた。平面は隅丸方形を呈し、規模は南北3.2m、東西2.9m、深さ0.6mを測る。床面はほぼ水平である。遺物は出土していない。

SC43：C８区にある。SC21の南東約3.5mの位置にある。貯蔵穴との切り合いはない。南北に主軸をもつ楕円形を呈する。規模は長さ3.1m、幅2.4m、深さ0.7mを測る。床面中央には焼土面の形成は認められないが、炭化物片が集中出土した。覆土は下部が地山の未風化二次土、上部が風化土壌からなる。覆土上部から土器片が出土した。１は高杯とみられる。断面は鋤先状となる。２は甕である。口縁部は外反し、口唇部を面取りする。外面縦ハケである。

SC45：B７区にある。SC21の東約10mに位置する。南側を撹乱により失う。SK45の上部を掘削、拡大して構築する。略南北に主軸を取る。平面は歪んだ隅丸長方形であり、規模は長さ2.9m 以上、幅2.0m、深さ0.3mを測る。床面は東側に下がっている。床面北側に寄って炉がある。覆土は暗褐色の風化土壌である。炉に落ち込むように石斧、礫が出土した。３は抉入柱状片刃石斧の基部である。シルト質砂岩であり、現存の長さ6.5cm、幅3.0cm、厚さ4.3cmを測る。

SC52：A・B７区にある。SC45の東約5mの位置にある。遺構の東側は斜面が急となり、壁が失われている。SK52の上部を整形し構築している。遺構はおよそ南北に主軸をもち、平面形は楕円形を呈している。長さ2.5m、幅2.0m、深さ0.3m を測る。床面は東に下がり、中央に炉がある。覆土は風化土壌である。遺物の出土はない。

SC61：D８区にあり、SC40の南0.6mに位置する。北から南に下がる傾斜地にある。遺構の上部は相当削平され、南側の床面は失われている。平面が楕円形を呈し、規模は長さ2.4m 以上、幅約1.6m、深さ0.7mを測る。炉は床面中央にある。遺物の出土はない。

SC62：C９区にあり、SC61の南に隣接する。SK62の最上部に設けられている。南北に主軸をもつ楕円形を呈し、規模は長さ2.3m、幅1.8m、深さ0.5mを測る。壁面は緩く傾斜し、床面の範囲は径約1.5m と狭い。これが埋没後の沈降によるものか、本来の形態であるのかは不明である。床面の南側に炉がある。遺物の出土はない。

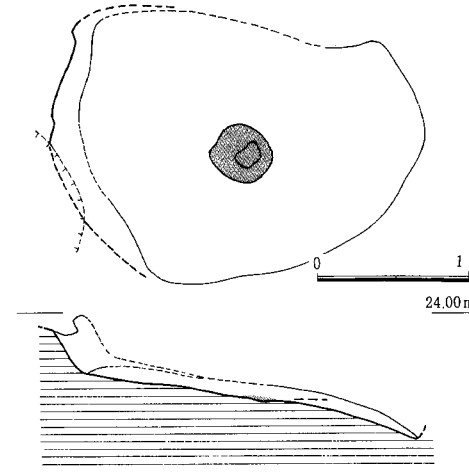


図51. SC52遺構図（1/50）

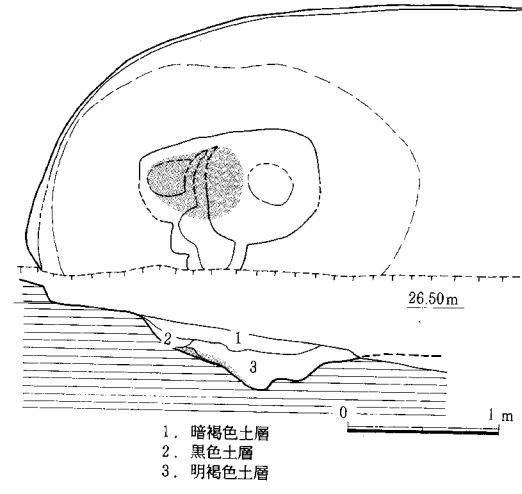


図52、SC61遺構図（1/50）

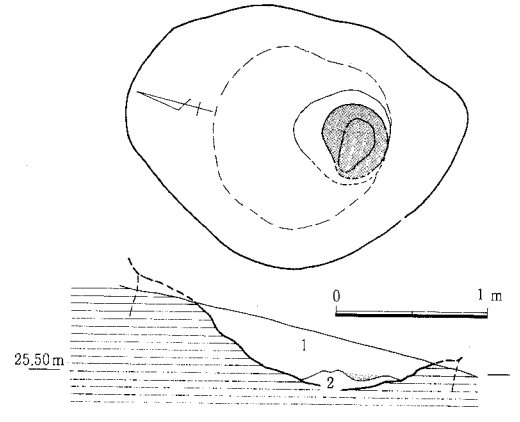


図53、SC62遺構図（1/50）

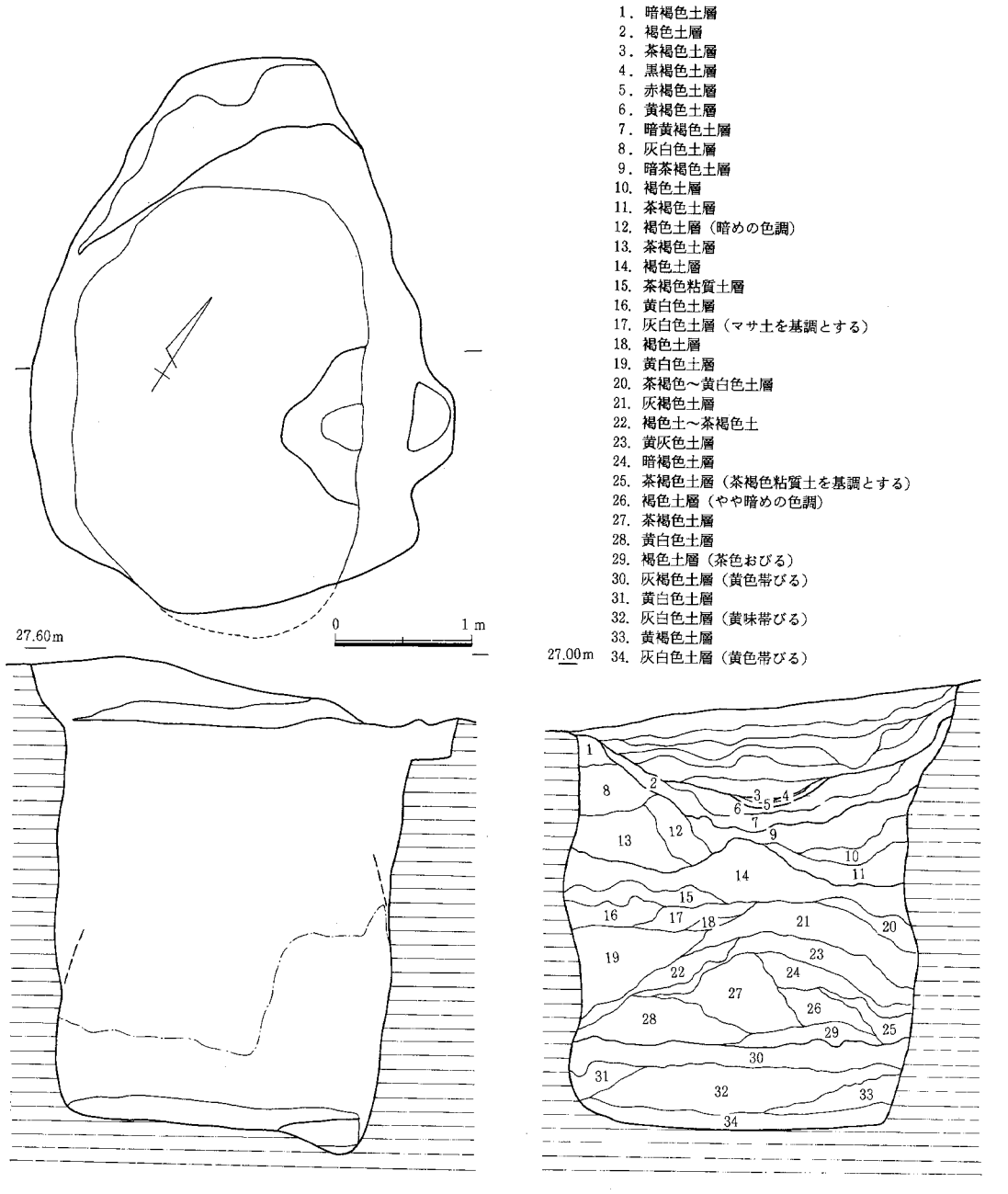


図54. SK17遺構図（1/50）

b、貯蔵穴

SK17：D７区の丘陵尾根頂部に立地する大型の貯蔵穴である。上部はSC17の削り出しにより変形している。床面の平面は隅丸の半円（D）形である。床面での規模は長さ3.2m、幅2.1m、深さ3.3mを測る。直辺に接する床面中央に幅1.1m、長さ0.6m、深さ0.2mの掘り方がある。壁面は床から0.3～1.5mまで遺存しているが、それより上位は崩落している。遺存する壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。覆土は四群に分かれる。第１群は床面から0.6mまでの水平堆積土である。第２群は中央に円錐状に堆積する埋土である。第２群は中央上方から流入していることや、壁面の遺存部分と一致していることからみて、この埋没段階まで上部の袋状の開口部が存在したと考えられる。第３群は周囲からの土砂の流入による堆積であり、特徴的に壁面の崩壊によると見られる地山土塊が含まれる。第４群は中央の逆円錐形の窪地を埋める堆積であり、下部は地山土を含むが、上部では腐植土壌化が見られる。遺物の出土はない。

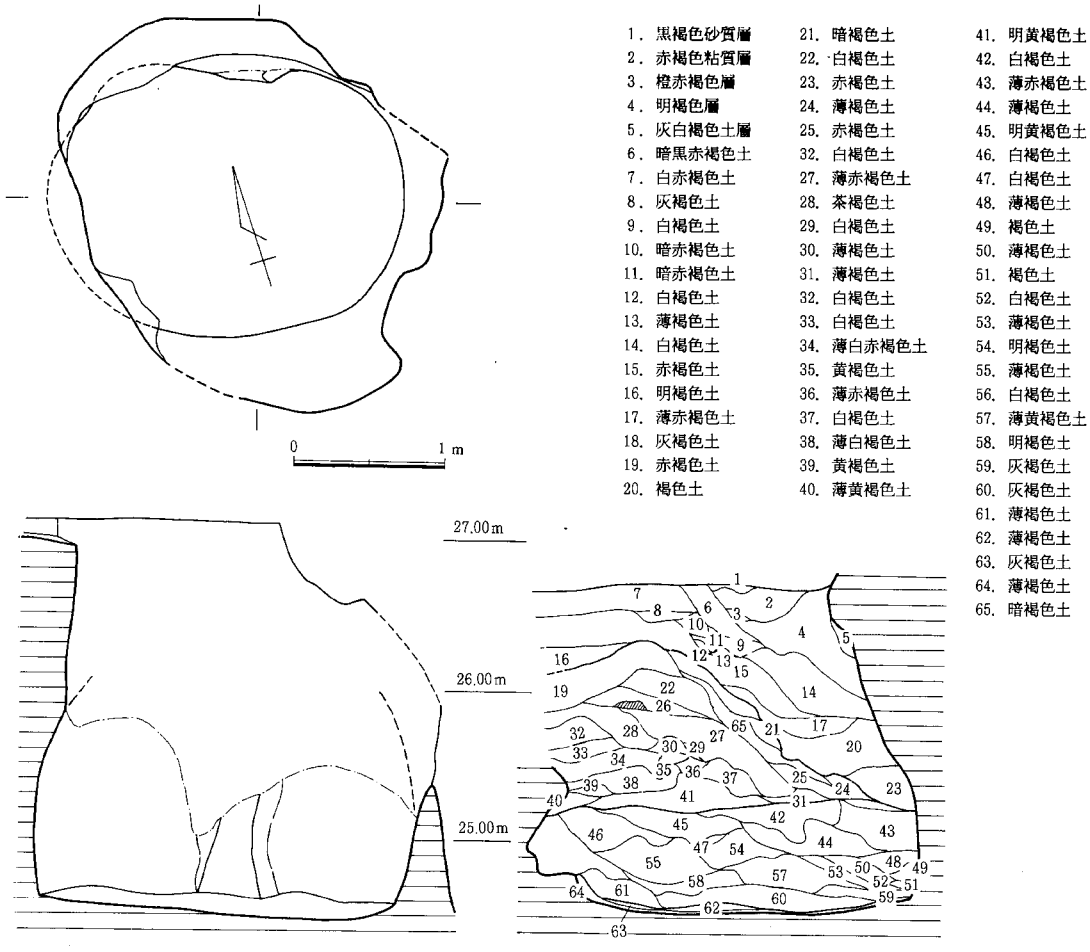
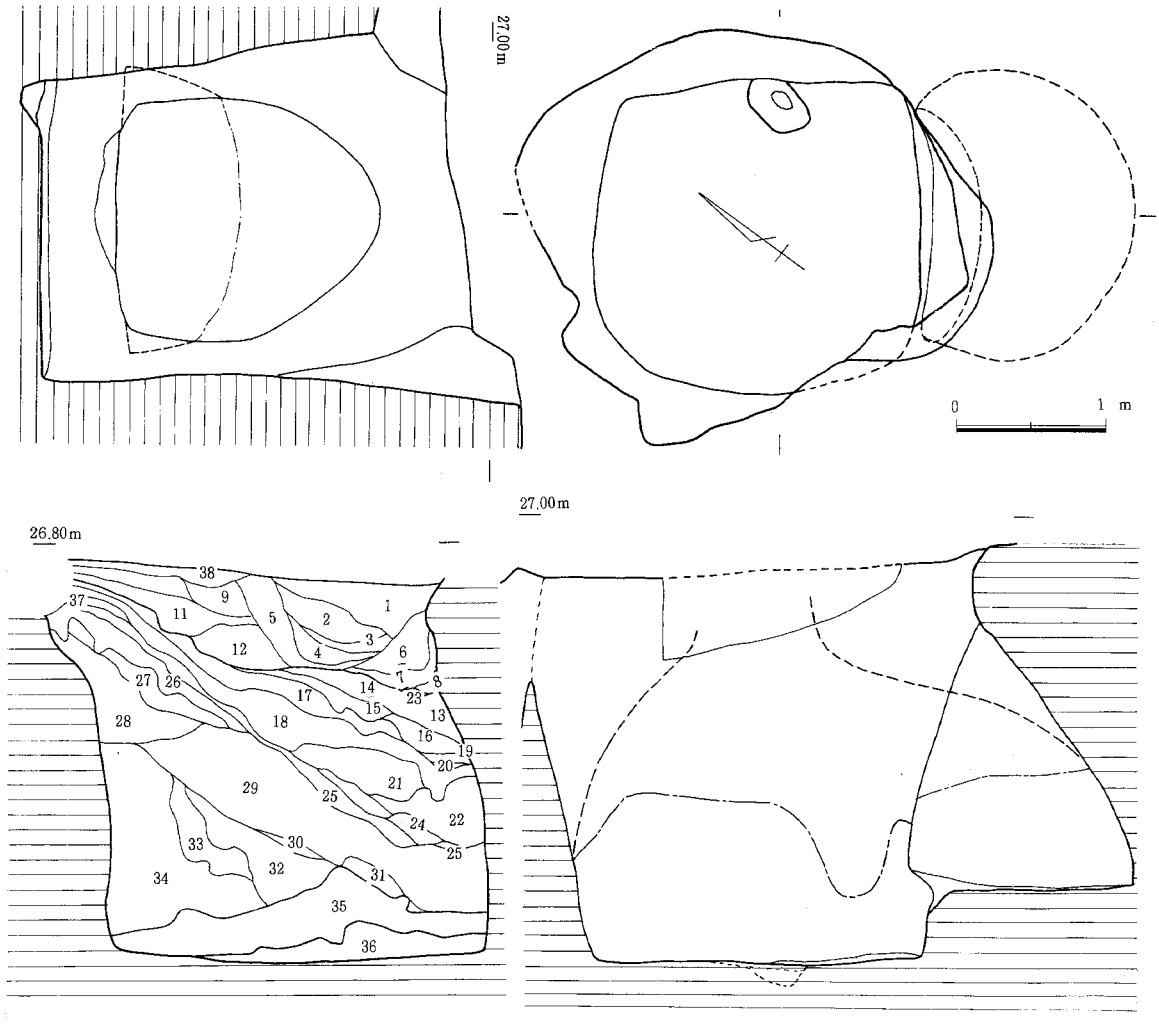


図55．SK18遺構図（1/50）

SK18：Ｄ７区の丘陵尾根より僅かに北に下がる位置に立地する。南側のSK53を切り、東側に0.2m程の壁面を挟んで貯蔵穴SK19がある。この２つの貯蔵穴の掘り方を連結拡大し、住居状遺構SC18-19が造られている。このため、両者の切り合いは不明であるが、住居状遺構床面整地のための埋土が同様に両貯蔵穴の最上部の覆土となっていることから、この両者は同時か、近接した時期に使用、廃絶されたものと推定された。床面の平面は東西に長い楕円形である。床面での規模は長さ2.35m、幅1.8m、深さ2.6mを測る。壁面は床から0.5～1.3mまで遺存しているが、それより上位は崩落している。壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。直辺壁の中央に柱状の削り出しがある。これは幅0.5mで約0.1m突出し、上部は壁面の崩落で不明であるが、高さ0.8mまで確認できる。遺存する覆土は四群に分かれる。第１群は床面上に10cm以下で堆積する水成砂である。第２群はそれから0.7mまでの水平堆積土である。第３群は中央に円錐状に堆積する埋土である。第２群は中央上方から流入していることや、壁面の遺存部分と一致していることからみて、この埋没段階まで上部の袋状の開口部が存在したと考えられる。第４群は第３群と壁面の間隙を埋める埋土であり、壁面の土塊が含まれる。また、第４群中～上部にSC18-19の床面が形成されている。本遺構内からの遺物の出土はない。

SK19(a,b)：Ｄ７区の丘陵尾根より僅かに北に下がる位置に立地する。貯蔵穴SK18と近接し、住居状遺構SC18-19に切られている。床面は隅丸方形であり、南側壁面に半円形の拡張部が設けられている。本体をSK19a、拡張部をSK19bとする。SK19aは床面での規模が長さ2.2×2.1m、深さ3.2m

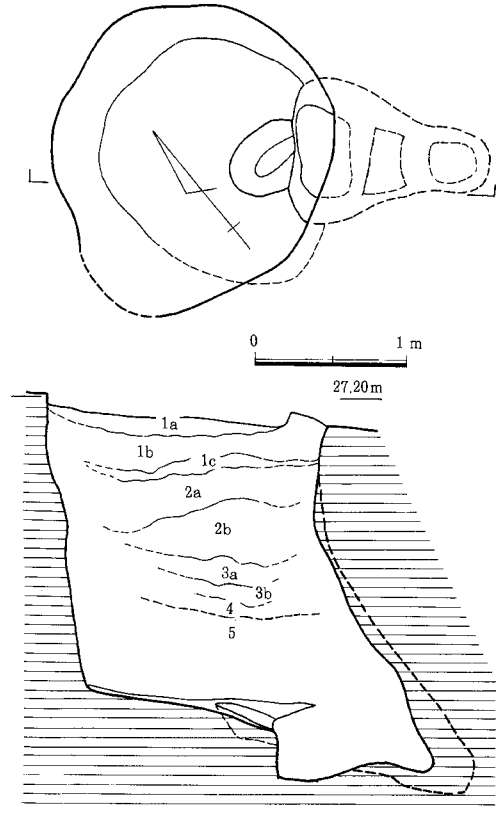


1．薄褐色土　炭化物・礫を多く含む。砂層。堅い。
2．薄褐色土　1層より炭化物量少ない。礫が多少混入する。堅い砂質層。
3．薄褐色土　2層より炭化物量少ない。礫がわずかに混入する。堅い砂層。
4．黒褐色土　砂質土。炭化物がブロック状に混入する粘質土。
5．薄黒褐色土　腐植土を多く混入する。砂質層で柔らかい。
6．褐色土　黒褐色粘土をブロック状に混入する。腐植土の入り具合で3層に細分可能。柔らかい。
7．明褐色土　砂を多く含む粘質土で比較的堅く締まっている。
8．白褐色土　花崗岩バイラン土でもろい。風化がかなり進む。
9．暗赤褐色土　上部は火による変成をうける。2～3㎜大の砂粒を多く含み堅く締まる。
10．暗黒褐色土　腐植土を多く含み柔らかい。2～3㎜大の砂粒を多く含む粘質土。
11．暗黒褐色土　白褐色砂質層をブロック状に少々含む。腐植土を多く含む。柔らかい。
12．明褐色土　砂質層でもろい。
13．褐色土　粘質土で砂をやや多く含む。やや柔らかい。
14．暗褐色土　薄褐色砂質土を3～5㎝のブロック状に含む。やや堅い。
15．黒褐色土　腐植土を多く含む粘質土。3～5㎜の砂粒を多く含む。
16．白褐色土　花崗岩バイラン土で風化激しく、茶褐色の細かい砂質層になりかかっている。もろい。
17．明黒褐色土　細かい砂粒を主体とする砂質層で、5～6㎝のブロック状に褐色粘質土をブロック状に混入する。
18．明灰褐色土　花崗岩バイラン土の風化が激しい層でもろい。
19．褐色土　砂粒を若干含む。粘質土層で柔らかい。
20．黒色土　腐植土を多量に含む。砂質土。もろい。
21．薄褐色土　腐植土をごくわずか含む。0.5～1㎜の砂粒を主体とし、若干粘質土が混入する。
22．赤褐色土　砂質土と粘質土の混合層。5㎜大の砂粒をやや多く含む。堅くしまる。
23．褐色土　粘質土でやや堅い。
24．薄褐色土　花崗岩バイラン土の風化層。比較的堅い。
25．黒褐色土　腐植土を多量に含む。2～3㎜の砂粒を主体をする砂質層でもろい。
26．褐色土　腐植層をわずかに含む。2～3㎜大の砂粒を主体とする砂質層で堅く締まる。
27．明褐色土　2～3㎜の礫を含む。砂質土と粘質土の混合層で堅く締まる・
28．白褐色土　花崗岩バイラン土で褐色砂粒をわずかに含む。比較的堅い。
29．灰褐色土　2～3㎜の砂を多く含む粘質土。部分的に炭化物の集中する箇所がある。やや堅い。
30．白褐色土　花崗岩バイラン土でやや風化が進む。柔らかくもろい。31層と同一層の可能性高い。
31．白褐色土　花崗岩バイラン土。風化が進み褐色砂粒が混入する。柔らかい。30層と同一層の可能性高い。
32．明褐色土　赤褐色粘土をブロック状に含む砂質層。やや堅い。
33．明薄褐色土　花崗岩バイラン土で風化激しい。1㎝大の礫を少量含みやや堅い。
34．白褐色土　花崗岩バイラン土で5～10㎝のブロック状に褐色粘質土を含む。堅く締まっている。
35．明褐色土　砂質層で3～5㎝のブロック状に褐色粘質土を含む。やや柔らかい。
36．灰褐色土　灰色細砂粒と褐色粘土の互層で水平に堆積する。柔らかくもろい。
37．赤褐色土　粘質土でやや柔らかい。
38．白褐色土　火による変成をうけ非常に堅い。住居址の炉址層。

図56．SK19遺構図（1/50）

を測る。東壁と接する床面中央に幅0.5m、長さ0.3m、深さ0.15mの掘り方がある。壁面は床から0.4～1.0m まで遺存しているが、それより上位は崩落している。壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。南側壁面には床面から0.5m上位に SK19b が掘り込まれている。この床面は奥行き1.4m、最大幅1.95mを測る。壁面は0.8mまで遺存するが、上部は崩落している。約1.0mの高さが復元される。覆土は三群に分かれる。第1群は床面中央に円錐状の埋土である。SK19a のみにみられる。第2群は西側からの流入堆積土である。地山土塊などを多く含み、SK19b も埋まる。第3群は同様に西側からの埋土であり、中～上部に SC18-19の床面が形成されている。本遺構内からの遺物の出土はない。

SK20：Ｃ７区にある。尾根先端を僅かに下がった位置である。西側の貯蔵穴 SK21とは壁面で約0.2ｍの距離である。床面の平面は楕円形である。床面での規模は長さ1.8ｍ、幅1.5ｍ、深さ2.0ｍを測る。東壁と接する床面から下方に延びる掘り方がある。これは幅1.0ｍ、奥行き1.3ｍ、床面からの深さ0.5ｍであるが、浅く、次第に細くなることから二段掘りとは考えにくい。壁面は床から1.0ｍまで遺存しているが、それより上位は崩落している。遺存する壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。覆土は二群に分かれる。第１群は床面から0.8ｍまでの水平堆積土である。地山土塊を含む。第２群は下部で地山土を含み、上部では腐植土壌化が見られる。



1a. 褐色土層（やや黄味を帯びている）
２～４㎝の礫少量含む。炭化物片多量に混入する。茶褐色粘質土をブロック状に若干含む。下位層へは漸移的変化。しまりよく硬い。粘性なし。

1b. 褐色土層（１a層に比べてやや暗めの色調）
２㎝以下の礫少量含む（１a層より少なめ）。地山花崗岩若干含む。黄褐色粘質土をブロック状に少量含む。炭化物片多量に混入する（１a層よりやや少ない）。下位層へは漸移的変化。しまりよく硬め。粘性なし。

1c. 褐色土層（１b層よりやや暗めの色調）
細いほぼ均一の礫少量含む。炭化物少量含む（層中上位に多い）。しまりよく硬め。粘性ややあり。下位層へは漸移的変化示す。

2a. 暗褐色土層
茶褐色～黄褐色粘質土をブロック状に少量含む。花崗岩若干混入。炭化物少量含む。しまりよく硬め。粘性ややあり。下位層へは漸移的変化。

2b. 暗褐色土層（２a層よりやや暗めの色調）
茶褐色粘質土、黄褐色粘質土をブロック状に若干含む。３㎝の礫若干含む。炭化物若干含む。しまりよく硬め。粘性あり（弱い）。下位層へは漸移的変化示す。

3a. 暗褐色土層（２b層よりやや暗めの色調）
茶褐粘質土ブロック状に少量含む。花崗岩少量含む。炭化物若干含む。しまりよいがやわらかめ。粘性弱い。下位層へは漸移的変化。

3b. 暗褐色土層（３b層より明るめである）
茶褐色粘質土ブロック状に少量含む（３a層より多めである）。花崗岩少量含み、炭化物少量含む。しまりよいがやわらかめ。粘性強い。

4. 褐色土層
地山花崗岩風化土ブロック状に多量に混入する。しまりよいがやわらかめ。粘性あり。上位、下位層とは明瞭に区分可。

5. 褐色土層
しまりよく硬め。粘性強。炭化物若干含む。細いほぼ均一の礫少量含む。

図57. SK20遺構図（1/50）

SK21：おもにＤ７区にあり、丘陵尾根線上に立地する。上部は病院施設により削平されている。東に SK20、西に SK39と近接する。住居状遺構 SC21と重複している。床面は隅丸の半円形である。床面での規模は長さ2.6ｍ、幅2.2ｍ、深さ2.5ｍを測る。左辺と接する床面に幅0.3ｍ、長さ0.5ｍ、深さ0.1ｍの掘り方がある。壁面は床から0.3～1.7ｍまで遺存しているが、それより上位は崩落している。壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。覆土は三群に分かれる。第１群は床面上に0.1ｍ前後見られる水成堆積土である。第２群は床面から1.3ｍまでの堆積土であり、壁面の崩落と見られる地山土塊などを多く含む。上面はやや窪むが、SC21の下部床面となる。第３群は風化土壌を主とし、上部に SC21の上部床面が形成されている。本遺構内からの遺物の出土はない。

SK23：Ｄ７区にあり、丘陵尾根線上に立地する。上部は病院施設により削平されている。西側の SK24に切られる。床面は楕円形である。床面での規模は長さ2.1ｍ、幅1.55ｍ、深さ2.1ｍを測る。北壁に柱状の削り出しと見られる僅かな起伏があったが、壁面の遺存が悪く不確実であった。壁面は床から0.3～1.5ｍまで遺存しているが、それより上位は崩落している。壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。覆土は三群に分かれる。第１群は床面上に0.1ｍ前後見られる水成堆積土である。第２群は床面から1.3ｍまでの堆積土であり、壁面の崩落と見られる地山土塊などを多く含む埋土である。ほぼ水平に堆積する。第３群は地山土と風化土壌の互層からなる。本遺構内からの遺物の出土はない。

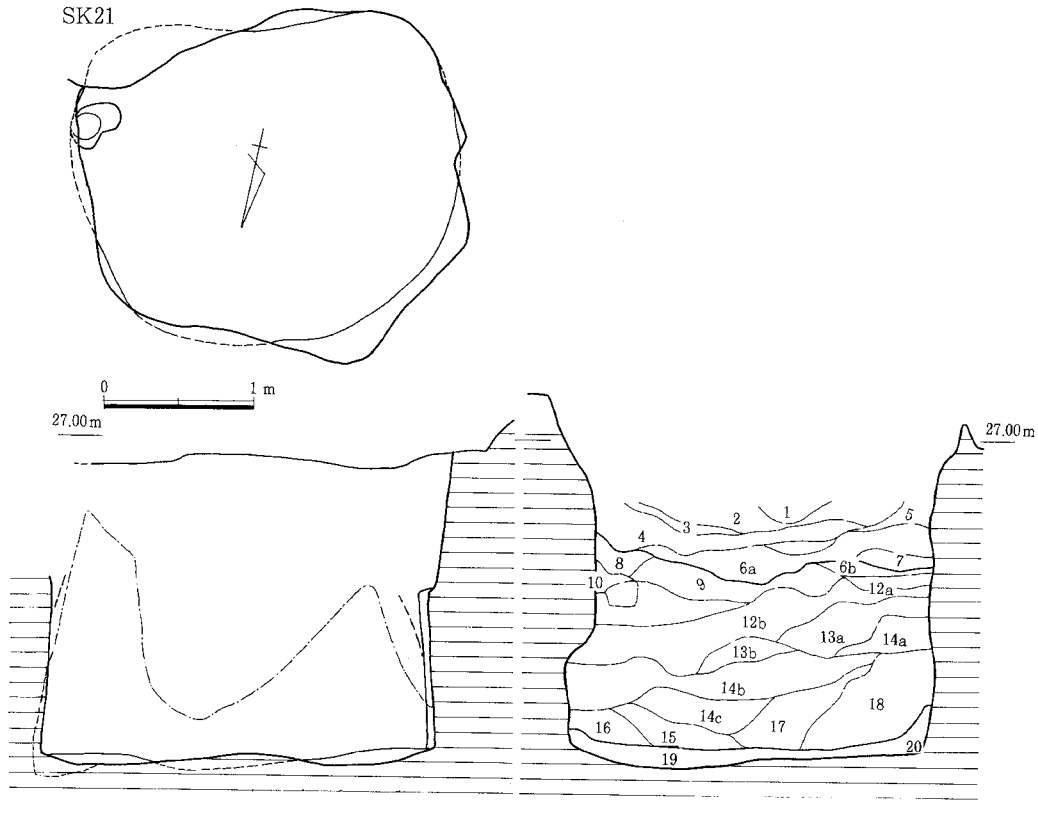
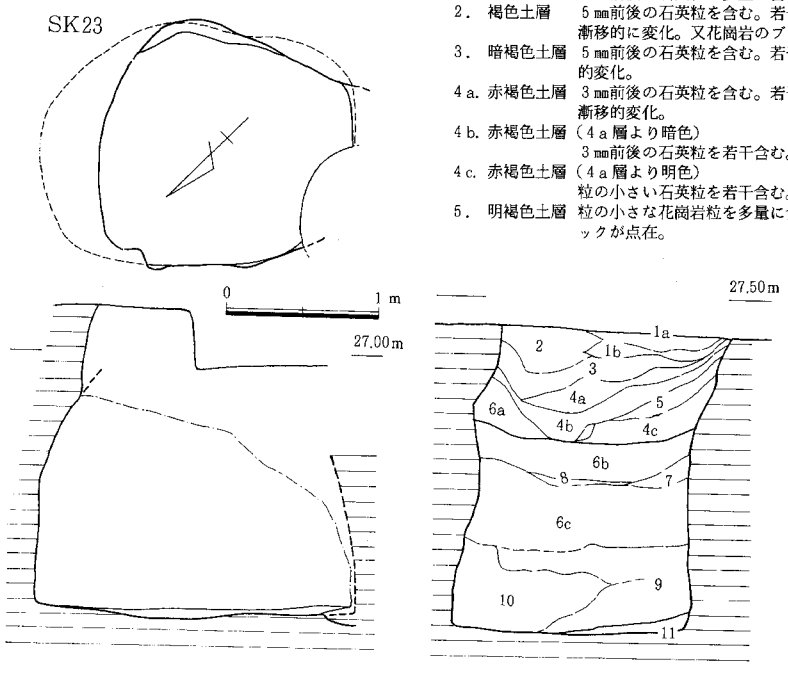


図58. SK21遺構図 (1/50)



0. 花崗岩バイラン土 (地山)

1a. 黄褐色土層 (まじりが多く少し暗め)
5㎜前後の石英粒を多量に含む。若干ではあるが粒の大きい炭化物を含む。締まりは硬く弱い粘性を有す。下位層 (1b層) へ漸移的変化。

1b. 黄褐色土層 (1aより明るい色調を有す)
5㎜前後の石英粒を多量に含む。しまりは硬いが粘性は極めて弱い。

2. 褐色土層 5㎜前後の石英粒を含む。若干の炭化物を含む。しまりは硬く弱い粘性を有す。下位層へ漸移的に変化。又花崗岩のブロックが見られる様になる。

3. 暗褐色土層 5㎜前後の石英粒を含む。若干の炭化物を含む。しまりは良く粘性を有す。下位層へ漸移的変化。

4a. 赤褐色土層 3㎜前後の石英粒を含む。若干の炭化物を含む。しまりは良く強い粘性を有す。下位層へ漸移的変化。

4b. 赤褐色土層 (4a層より暗色)
3㎜前後の石英粒を若干含む。若干の炭化物を含む。しまりは良く粘性を有す。

4c. 赤褐色土層 (4a層より明色)
粒の小さい石英粒を若干含む。しまりはやや弱く強い粘性を有す。

5. 明褐色土層 粒の小さな花崗岩粒を多量に含む。しまりは弱く粘性は認められない。小さな花崗岩ブロックが点在。

6a. 黄灰色土層 (全体に黄をおびている)
粒子の細かな砂の中に花崗岩ブロックが認められる。しまりは弱く粘性は認められない。下位層へ漸移的変化。

6b. 灰色土層 粒の細かな砂の中に花崗岩のブロックが多量に認められる。しまりは弱く若干の粘性を有する。下位層へ漸移的に変化。

6c. 灰色土層 (6bより明色)
粒の細かな砂の中に大粒の花崗岩粒を多量に含む。若干の炭化物を含む。しまりは弱く若干の粘性を有する。

7. 褐色土層 粒の細かな砂の中に花崗岩粒を含む。若干の炭化物を含む。しまりは弱く若干の粘性を有す。

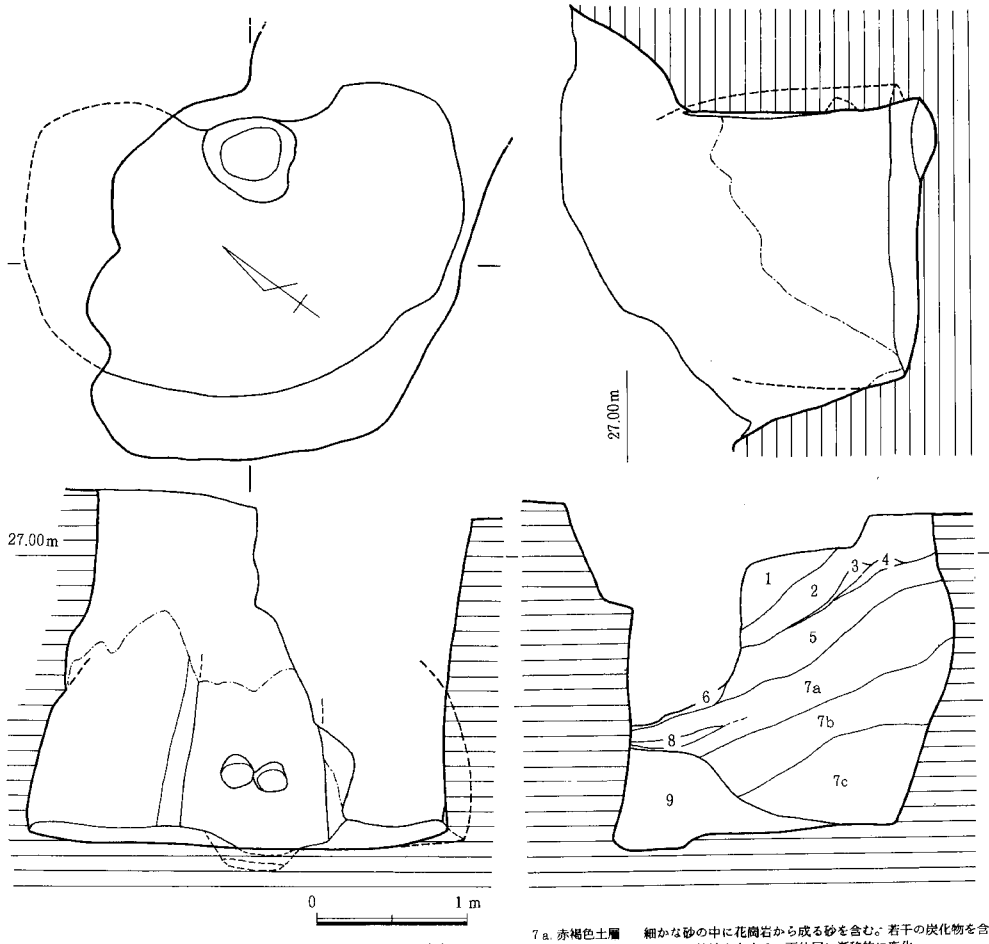
8. 花崗岩未風化小礫層 (長石含)
しまりは極めて弱く粘性は認められない。

9. 赤褐色土層 細かな砂の中に花崗岩のブロックが点在。若干の炭化物及び3㎜前後の石英粒を含む。しまりは良く硬い粘性を有する。下位層へ漸移的に変化。

10. 灰色土層 細かな砂の中に赤褐色粘土、花崗岩のブロックが多数混入。若干の炭化物を含む。しまりは弱く若干の粘性を有す。

11. 明褐色土層 細かな砂の中に小さな石英粒を若干含む。しまりは弱く極弱い粘性を有する。

図59. SK23遺構図 (1/50)



1．赤褐色粘土層　細かな砂の中に少量の石英粒を含む。しまりは良く強い粘性を有す。
2．褐色土層　細かな砂の中に多量の石英粒と若干の長石のブロックを含む。
3．赤褐色粘土層　細かな砂の中に若干の石英粒を含む。若干の炭化物を含む。しまりは良く強い粘性を有す。下位層（5層）に漸移的に変化。
4．褐色土層　細かな砂の中に粒の小さな花崗岩を多く含む。若干の炭化物を含む。しまりは良く粘性は認められない。
5．赤色粘土層　細かな砂の中に粒の大きな石英粒を含む。層の中に花崗岩のブロックが点在。若干の炭化物を含む。しまりは良く強い粘性を有す。
6．白色土層　細かな花崗岩粒によって形成。炭化物はなし。粘土のブロックを含む。しまりは弱く粘性は認められない。
7a．赤褐色土層　細かな砂の中に花崗岩から成る砂を含む。若干の炭化物を含む。しまりは弱く弱い粘性を有する。下位層に漸移的に変化。
7b．赤褐色土層　細かな砂の中に大量の花崗岩から成る砂を含む。若干の炭化物を含む。しまりは弱く粘性は認められない。下位層に漸移的に変化。
7c．白色土層　粗い粒子の花崗岩粒によって形成。若干の赤褐色土及び炭化物を含む。しまりは弱く粘性は認められない。
8．白色土層　細かな粒子の花崗岩粒により形成。炭化物はない。しまりはやや弱く粘性は認められない。
9．明褐色土層　細かな砂の中に粒の小さな石英粒、花崗岩粒を含む。層の上部に炭化物がベルト状に存在。内部にも若干の炭化物が見られる。しまりは弱く若干の粘性が認められる。

図60．SK24遺構図（1/50）

SK24：Ｄ７区の丘陵尾根線上に位置する。上部を病院建設にともない大きく破壊する。東側のSK23を切り、西側に0.6m 程の壁面を挟んでSK30がある。本遺構の西側半分には住居状遺構 SC30が造られている。SK30との切り合いは不明であるが、SK30上部を整形しSC30を構築する際に、本遺構はほぼ完全に埋没していたと見られることから、SC30の方が新しいと推定された。床面の平面は隅丸の半円形である。床面での規模は長さ3.0m、幅2.0m、深さ2.4mを測る。壁面は直辺側で最大1.6mまで遺存しているが、それ以外は大きく崩落している。遺存する壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。直辺壁の中央に柱状の削り出しがある。これは幅1.2mで約0.15m突出し、上に向かって次第に幅が細くなる。上部は壁面の崩落で不明であるが、高さ1.25mまで確認できる。また、柱状削り出しの正面の床から0.4m上に２つの凹みがある。柱状削り出しの直下に幅0.6m、長さ0.6m、深さ0.15mの掘り方がある。覆土は調査時に雨水のために上部を失ったが、残存部分は二群に分かれる。第１群は床面上の直辺側に半円錐状に堆積する砂質土である。上面に多量の炭化物が認められた。壁面の崩壊以前に開口部から自然に流入した埋土と見られる。したがって、開口部は直辺に近い位置にあったと推定される。第２群は壁面の土塊を多く含む埋土であり、曲辺側、つまり西側から連続的に流入していると見られた。壁面の破壊とともにこの方向から多量の埋土をおこなったと見られる。第２群上部を掘削、整形しSC30の床面が形成されている。本遺構内から遺物の出土はない。

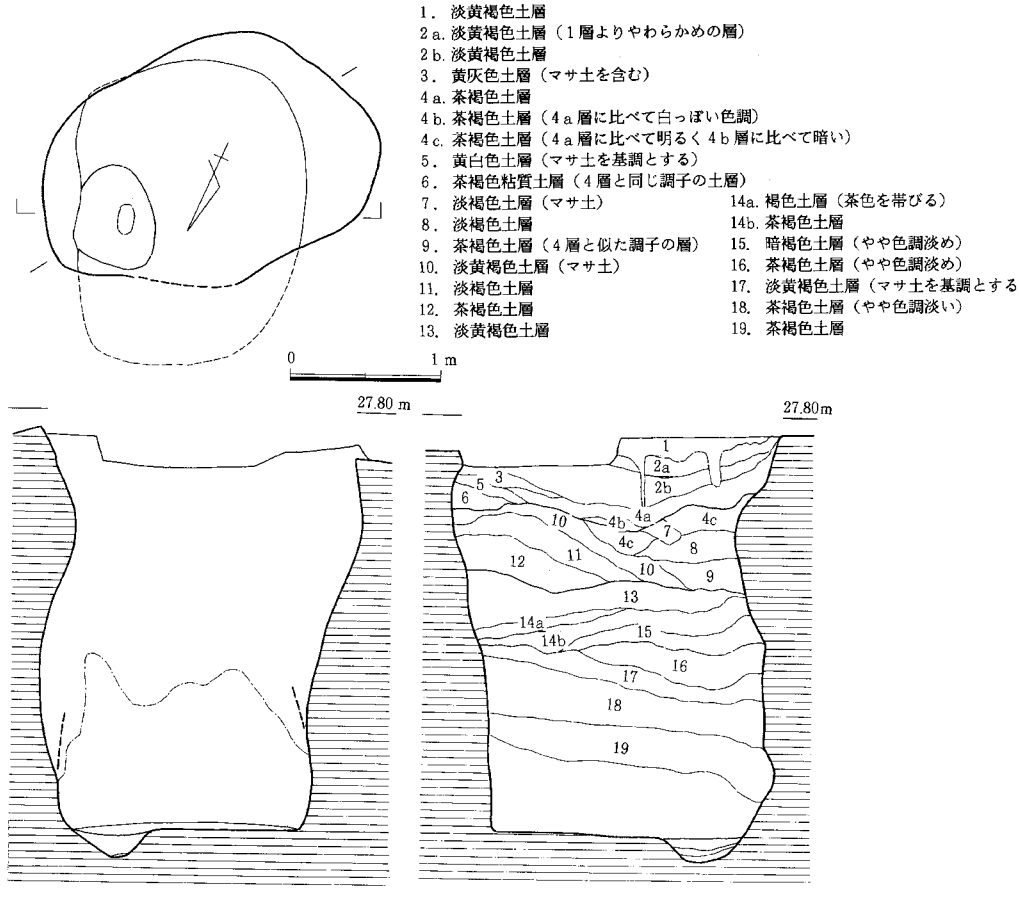
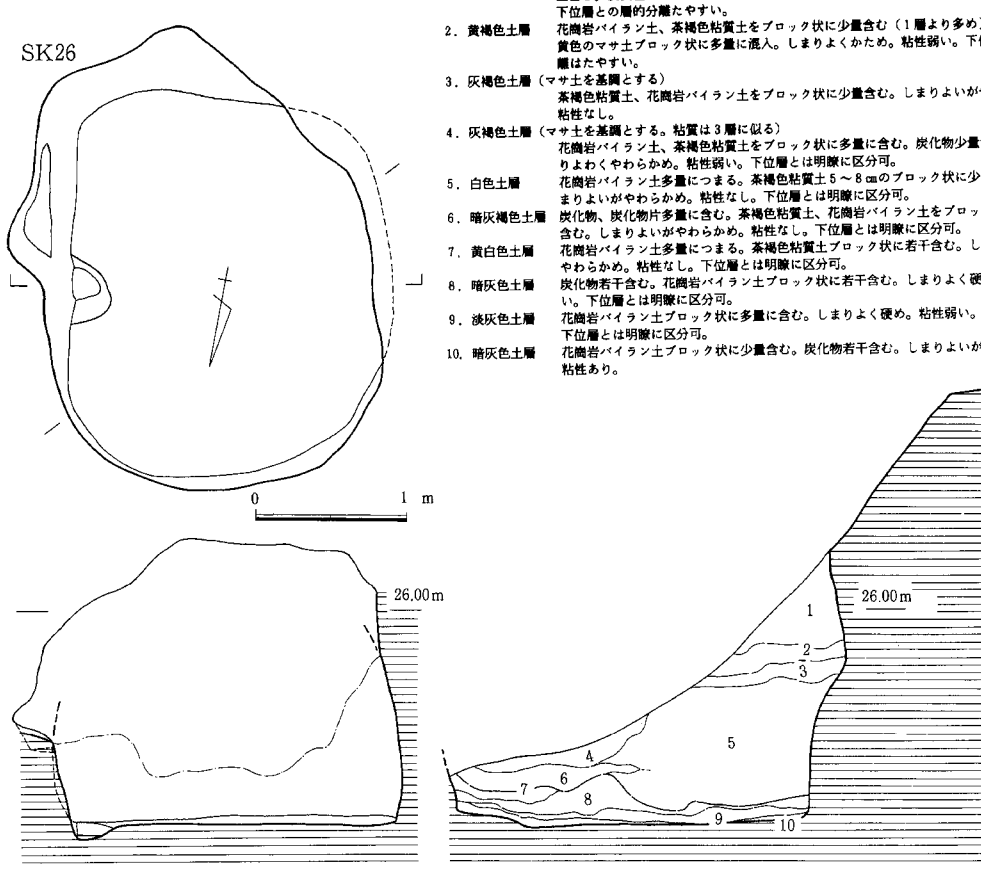


図61．SK25遺構図（1/50）

SK25：E７区の丘陵尾根線上に位置する。上部を試掘溝で一部破壊した。平面形は隅丸の半円形である。床面での規模は長さ2.1m、幅1.6m、深さ2.7mを測る。壁面は0.3～1.6mまで遺存しているが、それより上部は大きく崩落している。遺存する壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。直辺の中央に幅0.7m、長さ0.5m、深さ0.2mの掘り方がある。覆土は三群に分かれる。第１群は床面から地山の土塊を多く含む埋土であり、水平堆積を見せる。土塊には壁崩落土が含まれている。第２群は周囲から交互に流入した地山土による埋土である。第３群は最上部の窪地を埋める腐植土壌である。したがって、この貯蔵穴は主要部埋没後、一定期間窪地の状態であったとみられる。本遺構内から遺物の出土はない。

SK26：D７区の丘陵尾根線から僅かに北斜面に下がる位置にある。病院建設にともなう造成地の斜面から底面にあり、北側では上部を2.5m以上削平している。北側のSK27、東側のSK26とは0.2m前後の壁面を挟んで近接している。床面の平面は隅丸長方形である。床面での規模は長さ2.6m、幅2.1m、深さは現在1.8mであるが、南側の造成面外の現地表からは2.9mを測る。壁面は0.3～1.1mまで遺存している。遺存する壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。東壁直下の床面に幅0.5m、長さ0.3m、深さ0.1mの掘り方がある。覆土は床面から最大1.8mまで観察できた。残存部分は二群に分かれる。第１群は床面上に0.1～0.3mの厚さでみられる細砂質土である。下半部は水成堆積、上部は円錐状に堆積した流入土と見られる。直辺側に半円錐状に堆積する砂質土である。これらは壁面の崩壊以前に開口部から自然に流入した埋土と見られる。第２群は壁面の土塊を多く含む埋土であり、水平の堆積をみせる。壁面の破壊とともに多量の埋土があったと見られる。本遺構内から遺物の出土はない。



1．淡灰色土層（マサ土を基調とする）
2～5㎝の花崗岩バイラン土ブロック状に多量に含む。茶褐色粘質土ブロック状に少量含む。淡灰色マサ土ブロック状に多量に含む。しまりよいがやわらかめ。粘性なし。下位層との層的分離たやすい。

2．黄褐色土層　花崗岩バイラン土、茶褐色粘質土をブロック状に少量含む（1層より多め）。灰色と黄色のマサ土ブロック状に多量に混入。しまりよくかため。粘性弱い。下位層との分離はたやすい。

3．灰褐色土層（マサ土を基調とする）
茶褐色粘質土、花崗岩バイラン土をブロック状に少量含む。しまりよいがやわらかめ。粘性なし。

4．灰褐色土層（マサ土を基調とする。粘質は3層に似る）
花崗岩バイラン土、茶褐色粘質土をブロック状に多量に含む。炭化物少量含む。しまりよわくやわらかめ。粘性弱い。下位層とは明瞭に区分可。

5．白色土層　花崗岩バイラン土多量につまる。茶褐色粘質土5～8㎝のブロック状に少量含む。しまりよいがやわらかめ。粘性なし。下位層とは明瞭に区分可。

6．暗灰褐色土層　炭化物、炭化物片多量に含む。茶褐色粘質土、花崗岩バイラン土をブロック状に若干含む。しまりよいがやわらかめ。粘性なし。下位層とは明瞭に区分可。

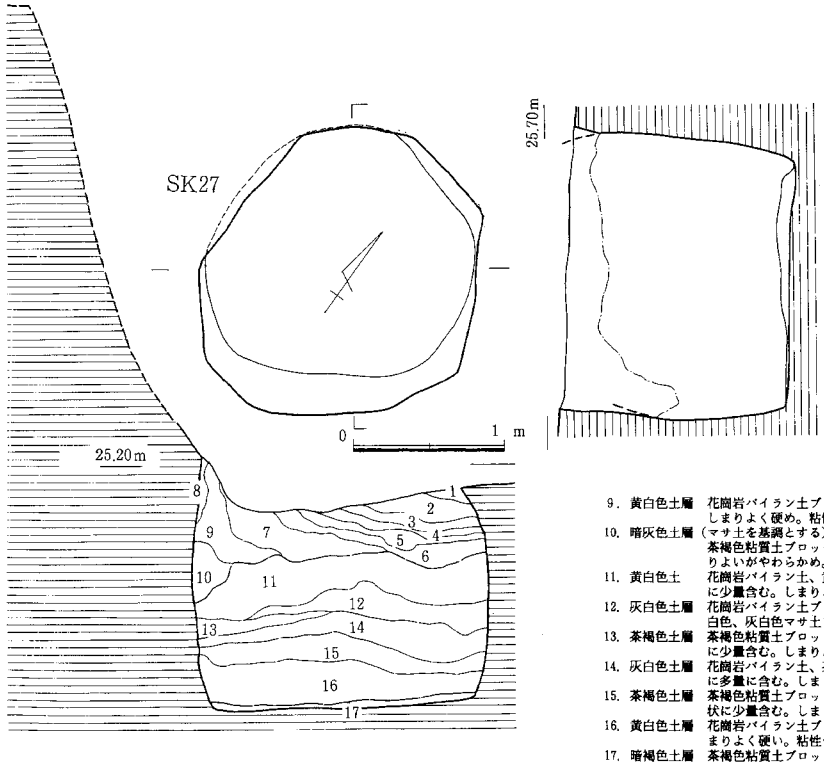
7．黄白色土層　花崗岩バイラン土多量につまる。茶褐色粘質土ブロック状に若干含む。しまりよいがやわらかめ。粘性なし。下位層とは明瞭に区分可。

8．暗灰色土層　炭化物若干含む。花崗岩バイラン土ブロック状に若干含む。しまりよく硬め。粘性弱い。下位層とは明瞭に区分可。

9．淡灰色土層　花崗岩バイラン土ブロック状に多量に含む。しまりよく硬め。粘性弱い。
下位層とは明瞭に区分可。

10．暗灰色土層　花崗岩バイラン土ブロック状に少量含む。炭化物若干含む。しまりよいがやわらかめ。粘性あり。

図62．SK26遺構図（1/50）



1．茶褐色土層　茶褐色粘質土ブロック状に多量に含む。花崗岩バイラン土ブロック状に少量含む。黄白色マサ土ブロック状に多量に含む。しまりよく硬い。粘性ややあり。

2．暗褐色土層　花崗岩バイラン土、茶褐色粘質土をブロック状に少量含む。黄白色マサ土ブロック状に多量に含む。しまりよわくやわらかめ。粘性あり。

3．黄褐色土層　茶褐色粘質土ブロック状に少量含む。花崗岩バイラン土、黄褐色マサ土をブロック状に多量に含む。しまりよく硬め。粘性ややあり。

4．暗灰色土層　茶褐色粘質土ブロック状に多量に含む。花崗岩バイラン土ブロック状に少量含む。黄灰色マサ土ブロック状に多量に含む。しまりよく硬め。粘性あり。

5．灰白色土層　茶褐色粘質土ブロック状に少量含む。灰色マサ土、花崗岩バイラン土をブロック状に多量に含む。しまりよいがやわらかめ。粘性ややあり。

6．灰色土層　花崗岩バイラン土ブロック状に多量に含む。茶褐色粘質土ブロック状に少量含む。灰白色マサ土ブロック状に多量に含む。しまりよいがやわらかめ。粘性ややあり。

7．暗灰色土層（混入物多し）
茶褐色粘質土、花崗岩バイラン土をブロック状に多量に含む。黄灰色マサ土ブロック状に多量に含む。しまりよくかため。粘性ややあり。

8．暗褐色土層（マサ土を基調とする）
茶褐色粘質土ブロック状に少量含む。炭化物少量含む。しまりよわくやわらかい。粘性なし。

9．黄白色土層　花崗岩バイラン土ブロック状に多量につまる。茶褐色粘質土ブロック状に若干含む。しまりよく硬め。粘性なし。

10．暗灰色土層（マサ土を基調とする）
茶褐色粘質土ブロック状に多量に含む。花崗岩バイラン土ブロック状に少量含む。しまりよいがやわらかめ。粘性ややあり。

11．黄白色土　花崗岩バイラン土、黄灰色マサ土をブロック状に多量に含む。茶褐色粘質土ブロック状に少量含む。しまりよく硬め。粘性ややあり。

12．灰白色土層　花崗岩バイラン土ブロック状に多量につまる。茶褐色粘質土ブロック状に若干含む。黄白色、灰白色マサ土ブロック状に多量に含む。しまりよく硬め。粘性ややあり。

13．茶褐色土層　茶褐色粘質土ブロック状に多量に含む。花崗岩バイラン土、黄灰色マサ土をブロック状に少量含む。しまりよく硬い。粘性あり。

14．灰白色土層　花崗岩バイラン土、茶褐色粘質土をブロック状に多量に含む。灰白色マサ土ブロック状に多量に含む。しまりよく硬い。粘性あり。

15．茶褐色土層　茶褐色粘質土ブロック状に多量につまる。花崗岩バイラン土、黄灰色マサ土をブロック状に少量含む。しまりよく硬い。粘性強い。

16．黄白色土層　花崗岩バイラン土ブロック状に多量につまる。茶褐色粘質土ブロック状に少量含む。しまりよく硬い。粘性ややあり。灰白色マサ土ブロック状に少量含む。

17．暗褐色土層　茶褐色粘質土ブロック状に少量含む。しまりよく硬め。粘性あり。

図63．SK27遺構図（1/50）

SK27：Ｄ７区にあり、丘陵尾根線から僅かに北斜面に下がった位置にある。病院建設にともなう造成面地にあり、3.3～3.4m 削平を受けている。南側の SK26と近接している。床面の平面は隅丸の三角形に近い。床面での規模は長さ1.8m、幅1.7m、深さは現在1.7m であるが、南側の造成面外の現地表からは4.7m を測る。周辺の貯蔵穴に比べて特に深いことから二段掘りの貯蔵穴である可能性が残る。壁面は0.7～1.4m まで遺存する。遺存する壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。覆土は床面から最大1.7m まで観察できた。残存部分は三群に分かれる。第１群は床面上に0.1m 以下の厚さでみられる細砂質土である。水成堆積とみられる。第２群は床面から約1.0m まで円錐状に堆積する地山土塊主体の埋土である。これは壁面の崩壊以前に開口部から投棄された埋土と見られる。第３群も地山土塊を多く含む埋土であるが、南～西側から傾斜した堆積をみせる。壁面の崩壊部分と一致することから、壁面の破壊とともに多量の埋土があったとみられる。本遺構内から遺物の出土はない。

SK28：Ｅ６・７区にあり、丘陵尾根線から僅かに北斜面に下がった位置にある。病院建設にともなう造成面地にあり、3m 以上の削平を受けている。西側の SK26と近接している。床面の平面は隅丸の半円形に近い。床面での規模は長さ1.7m、幅1.3m、深さは現在0.8m である。南側の造成面外の現地表からは約3.9m の深さとなる。壁面は0.3～0.8m まで遺存している。覆土は床面から最大0.7m まで観察できた。残存部分は二群に分かれる。第１群は床面上に0.2m の厚さでみられるほぼ水平の堆積である。地山土塊を多く含む埋土である。第２群も地山土塊を多く含む埋土であるが、東側からの傾斜した堆積をみせる。この時点で壁面の破壊とともに多量の埋土があったとみられる。本遺構内から遺物の出土はない。

SK29：Ｅ７区にあり、丘陵尾根線上に位置する。西側の SK47と0.5m 前後で近接し、南側の SK 34の覆土部分を切る。床面の平面は隅丸の半円形である。床面での規模は長さ2.2m、幅1.6m、深さは1.9m である。壁面は0.3～0.8m まで遺存している。遺存する壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。直辺に接する床面中央に幅0.5m、長さ0.4m、深さ0.1m の掘り方がある。また、直辺と左辺の隅部も幅0.9m、長さ0.8m、深さ0.1m の落ち込みがある。覆土は四群に分かれる。第１群は床面上に0.1m 以下の厚さでみられる水平の薄層の堆積である。粘土化した部分もあるが、水成土壌である。第２群は地山土塊を多く含む埋土である。床面から約1.1m まで堆積する。壁面の崩落土を含み、主体は南～西側から流入している。第２群上面は整地され、SC29の床面となっている。第３群は地山土塊を多量に含む埋土であり、分層困難な無層理状態であった。第４群は第３群上部に見られた掘り方内の埋土である。その性格は不明である。本遺構内から遺物の出土はない。

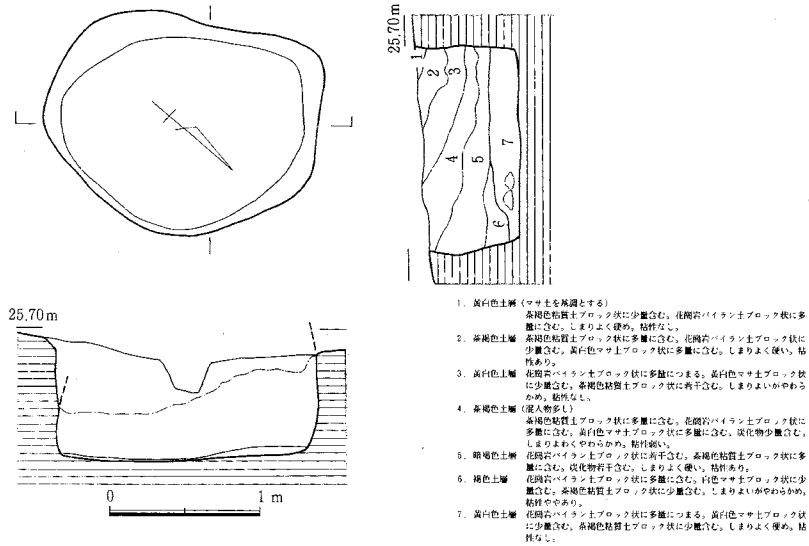
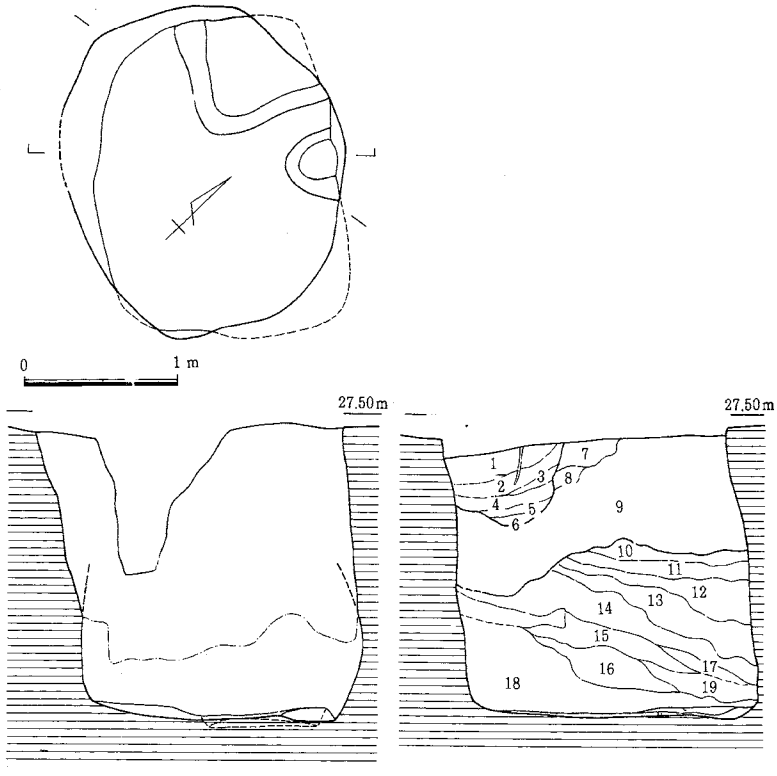


図64. SK28遺構図（1/50）

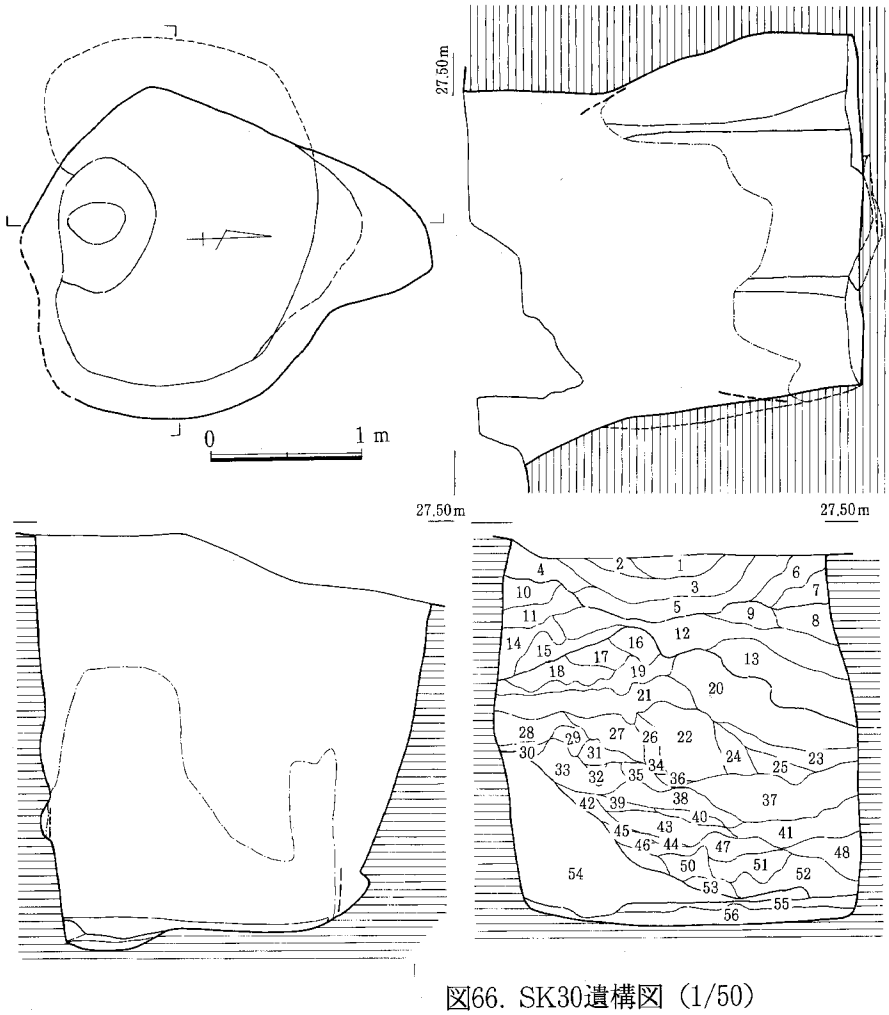


1．黄白色土層（褐色帯びる。マサ土を基調とする）
花崗岩パイラン土、黄褐色マサ土をブロック状に少量含む。しまりよわくやわらかめ。粘性弱い。
2．黄白色土層（マサ土を基調とする）
茶褐色粘質土（層中上位に多め）、花崗岩パイラン土をブロック状に少量含む。しまりよいがやわらかめ。粘性弱い。
3．黄白色土層（白色強い。マサ土を基調とする）
花崗岩パイラン土ブロック状に多量に含む。しまりよく硬め。粘性なし。
4．灰白色土層（褐色を帯びる。マサ土を基調とする）
花崗岩パイラン土、茶褐色粘質土ブロック状に少量含む（層中上位に多め）。しまりよいがやわらかめ。粘性なし。
5．灰白色土層（マサ土を基調とする）
花崗岩パイラン土多量に含む。茶褐色粘質土ブロック状に少量含む。しまりよいがやわらかめ。粘性弱い。
6．褐色土層（マサ土を基調とする）
茶褐色粘質土ブロック状に多量につまる。花崗岩パイラン土ブロック状に少量含む。しまりよく硬め。粘性弱い。
7．灰白色土層（マサ土を基調とする）
花崗岩パイラン土少量、茶褐色粘質土ブロック状に若干含む。しまりよく硬め。粘性なし。
8．茶褐色土層　茶褐色粘質土ブロック状に多量につまる。炭化物若干含む。しまりよく硬い。粘性なし。
9．灰白色土層（マサ土を基調とする）
花崗岩パイラン土ブロック状に多量に含む。茶褐色粘質土ブロック状に少量含む（層中下位に多め）。しまりよく硬め。粘性あり。
10．黄褐色土層　茶褐色粘質土ブロック状に少量含む（層中上位に多め）。花崗岩パイラン土ブロック状に多量に含む。黄白色マサ土ブロック状に少量含む。しまりよく硬い。粘性ややあり。
11．褐色土層　茶褐色粘質土ブロック状に多量に含む。炭化物若干含む。鉄分少量含む。花崗岩パイラン土ブロック状に少量含む。しまりよく硬い。粘性弱い。
12．黄褐色土層　茶褐色粘質土、花崗岩パイラン土をブロック状に少量含む。黄白色、灰白色マサ土ブロック状に多量に含む。しまりよく硬い。粘性強め。
13．茶褐色土層　茶褐色粘質土ブロック状に多量につまる。花崗岩パイラン土ブロック状に少量含む。鉄分少量含む。黄白色、灰白色マサ土ブロック状に少量含む。炭化物若干含む。しまりよく硬い。粘性強め。
14．黄褐色土層（やや暗めの色調。マサ土を基調とする）
混入物多し。花崗岩パイラン土、茶褐色粘質土をブロック状に多量に含む。炭化物少量含む。黄褐色マサ土ブロック状に多量に含む。花崗岩若干混入する。鉄分少量含む。しまりよいがやわらかめ。粘性あり。
15．黄褐色土層（マサ土を基調とする）
茶褐色粘質土ブロック状に少量含む。花崗岩パイラン土（層中上位に多め）、黄褐色マサ土をブロック状に多量に含む。しまりよいがやわらかめ。粘性弱い。
16．黄褐色土層（やや暗めの色調）
花崗岩パイラン土ブロック状に多量に含む。茶褐色粘質土ブロック状に若干含む。しまりよく硬め。粘性あり。
17．暗灰褐色土層　花崗岩パイラン土ブロック状に若干含む。炭化物若干含む。茶褐色粘質土ブロック状に若干含む。しまりよくやわらかめ。粘性弱い。
18．黄白色～黄褐色土層
花崗岩パイラン土ブロック状に多量につまる。茶褐色粘質土ブロック状に少量含む。黄褐色マサ土ブロック状に多量に含む。しまりよわいが硬め。粘性なし。
19．暗灰褐色土層　茶褐色粘質土ブロック状に若干含む。黄褐色土ブロック状に若干含む。しまりよく硬め。粘性弱い。
20．茶褐色土層　茶褐色粘質土ブロック状に多量につまる。しまりよく硬め。粘質。
21．灰褐色土層（やや暗めの色調）
花崗岩パイラン土、黄褐色粘質土ブロック状に若干含む。しまりよく硬め。粘性あり。
17・19・21層は似た土質。特に21層は泥質である。

図65. SK29遺構図（1/50）

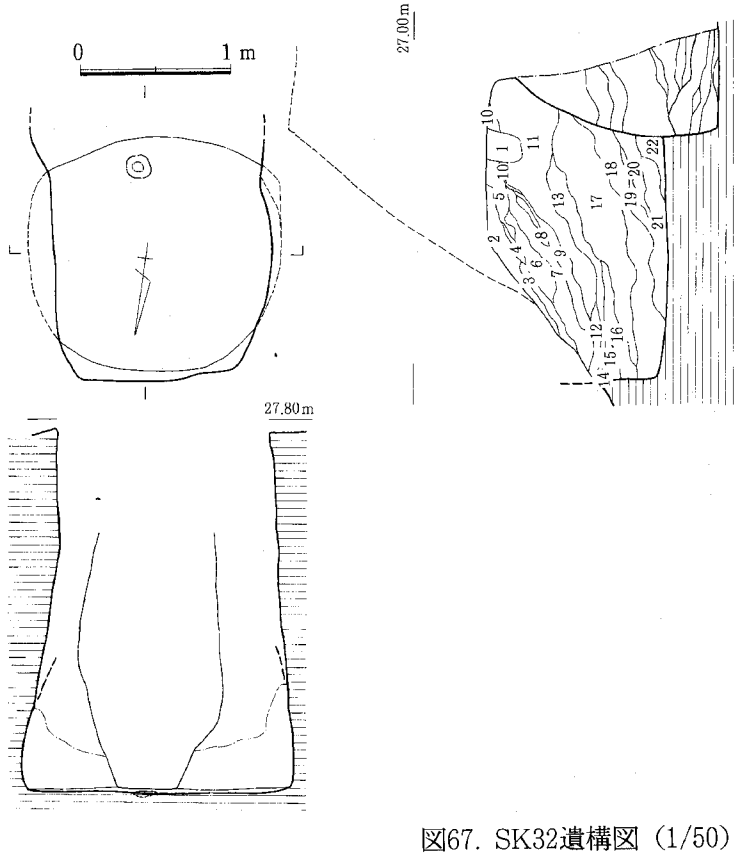
SK30：D・E７区にあり、丘陵尾根線上に位置する。東側のSK24、西側のSK60bと0.3m前後の壁を挟んで近接する。床面の平面は隅丸の半円形である。床面での規模は長さ2.3m、幅1.7m、深さは2.6mである。壁面は0.4～1.7mまで遺存している。遺存する壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。直辺壁の中央に柱状の削り出しがある。これは幅1.2m前後で約0.15m突出している。上部は壁面の崩落で不明であるが、高さ1.6mまで確認できる。柱状削り出しの直下に幅0.9m、長さ0.6m、深さ0.15mの掘り方がある。覆土は四群に分かれる。第１群は床面上に0.2m以下の厚さでみられる水成堆積土である。第２群は南～東側の壁に沿って堆積した半円錐状の流入土である。床面から約1.1mまで堆積する。第３群は壁面の崩落土を含む地山土塊を多量に含む埋土である。第３群も直辺側からの円錐状に堆積している。第４群は最上部の窪地を埋める腐植土壌である。したがって、この貯蔵穴は主要部埋没後、一定期間窪地の状態であったとみられる。住居状遺構SC30はこの第４群上部を削平整形して設けられている。本遺構内から遺物の出土はない。

SK32：E７区の丘陵尾根線にある。病院建設にともなう造成地の斜面に検出した。北側を大きく削平されている。南側のSK25に切られている。床面の平面は円に近い隅丸方形である。床面での規模は長さ1.6m以上、幅1.7m、深さ2.5mを測る。壁面は0.2～0.7mまで遺存している。遺存する壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。南壁に近い床面に幅0.2m、長さ0.15m、深さ0.04mの掘り方がある。覆土は床から1.2mまで観察できた。この範囲での層群の区分は困難であり、全体に地山土塊を多く含む埋土からなり、南側から流入している。本遺構内から遺物の出土はない。



1．白色褐色土
2．暗赤褐色土
3．褐色土
4．褐色土
5．薄褐色土
6．赤褐色土
7．白褐色土
8．白褐色土
9．薄褐色土
10．薄褐色土
11．褐色土
12．薄褐色土
13．赤褐色土
14．薄白褐色土
15．赤褐色土
16．薄灰褐色土
17．黒褐色土
18．赤褐色土
19．薄褐色土
20．灰褐色土
21．赤褐色土
22．黄褐色土
23．薄赤褐色土
24．暗赤褐色土
25．薄赤褐色土
26．黄白褐色土
27．黄褐色土
28．褐色土
29．白褐色土
30．灰白褐色土
31．白褐色土
32．褐色土
33．褐色土
34．黄褐色土
35．黄褐色土
36．暗赤褐色土
37．褐色土
38．黄赤褐色土
39．白褐色土
40．明褐色土
41．明褐色土
42．灰褐色土
43．茶褐色土
44．白褐色土
45．赤褐色土
46．白灰色土
47．明薄褐色土
48．明薄褐色土
49．白褐色土
50．明黄褐色土
51．薄赤褐色土
52．明褐色土
53．白褐色土
54．白褐色土
55．灰色土
56．薄褐色土

図66. SK30遺構図（1/50）



1．茶褐色土層
2．灰白色土層（若干黄味がかる）
3．暗褐色土層
4．茶褐色土層
5．灰白色土層（マサ土を基調とする）
6．暗茶褐色土層
7．暗褐色土層（混入物多し）
8．茶褐色土層（若干黄味がかる）
9．灰白色土層（マサ土を基調とする）
10．灰色土層
11．暗褐色～暗茶褐色土層（混入物多し）
12．褐色土層
13．黄白色土層
14．茶褐色土層
15．黄褐色土層
16．灰白色土層
17．暗褐色～茶褐色土層
18．黄灰色土層
19．茶褐色土層
20．褐色土層（やや淡めの色調）
21．茶褐色土層
22．褐色土層

図67. SK32遺構図（1/50）

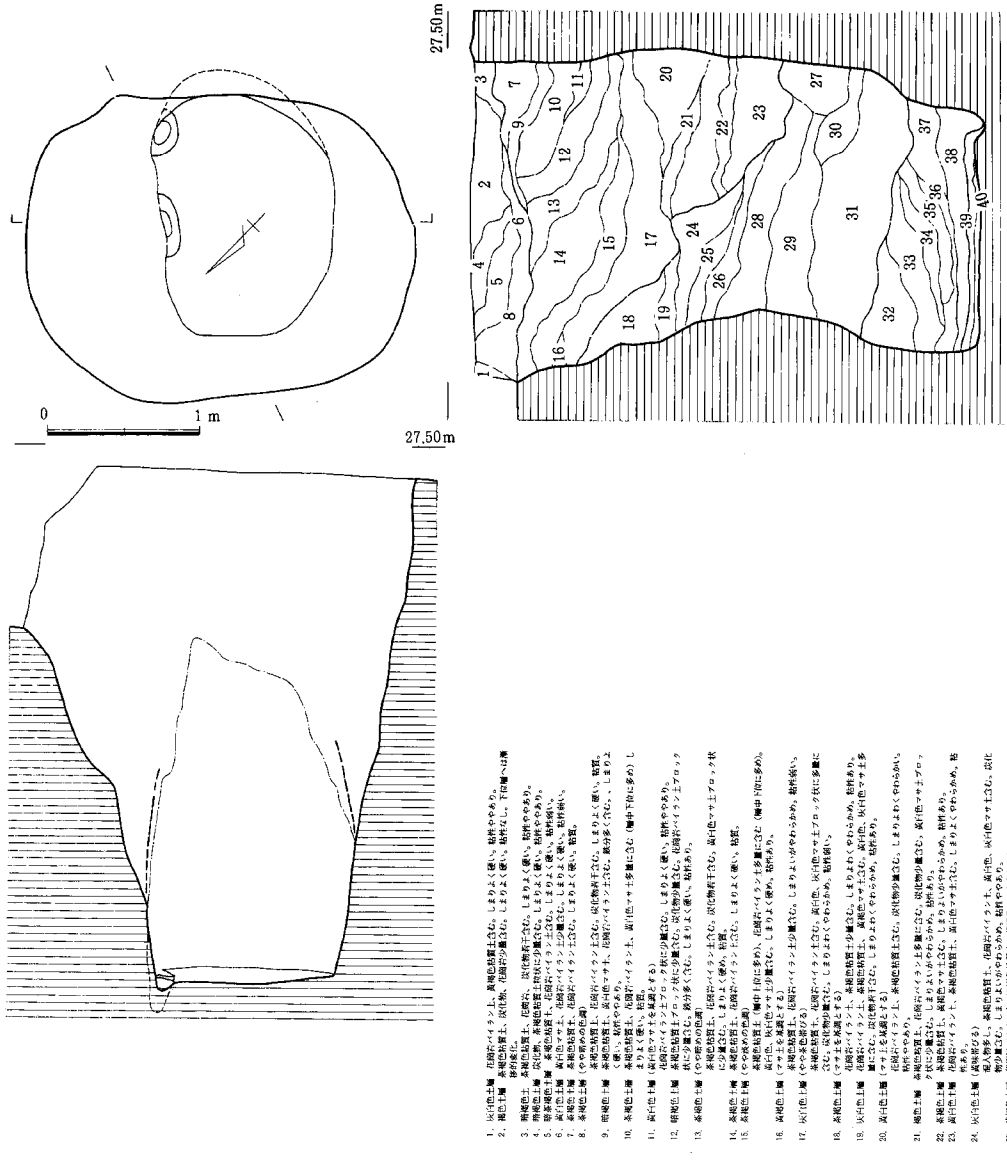


図68. SK33遺構図（1/50）

SK33：Ｅ７区にあり、丘陵尾根線上に位置する。病院建物基礎などにより1m 近い削平を受けている。検出時点の観察では東側の SK34の覆土を切っている。壁の上部は崩落のため、大きく開いている。床面の平面は隅丸の半円形である。床面での規模は長さ1.7m、幅1.2m、深さは3.4m である。壁面は0.5～2.3m まで遺存している。遺存する壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。直辺壁の直下に２カ所の掘り方がある。中央の掘り方は幅0.4m、長さ0.1m、深さ0.1m であり、右辺に近い掘り方は幅0.3m、長さ0.15m、深さ0.25m である。覆土は四群に分かれる。第１群は床面上に0.1m 以下の厚さでみられる泥質の水成堆積土である。第２群は直辺側の壁に半円錐状に堆積した流入土である。床面から約0.5m まで堆積する。第１、２群は壁面の遺存部内であることから、壁崩壊以前の開口部からの流入土と見られる。第３群は壁面の崩落土を含む地山土塊を多量に含む埋土である。主に曲辺側から流入している。第４群は最上部の窪地を埋める地山土塊混じりの埋土である。土壌化は確認できなかった。本遺構内から遺物の出土はない。

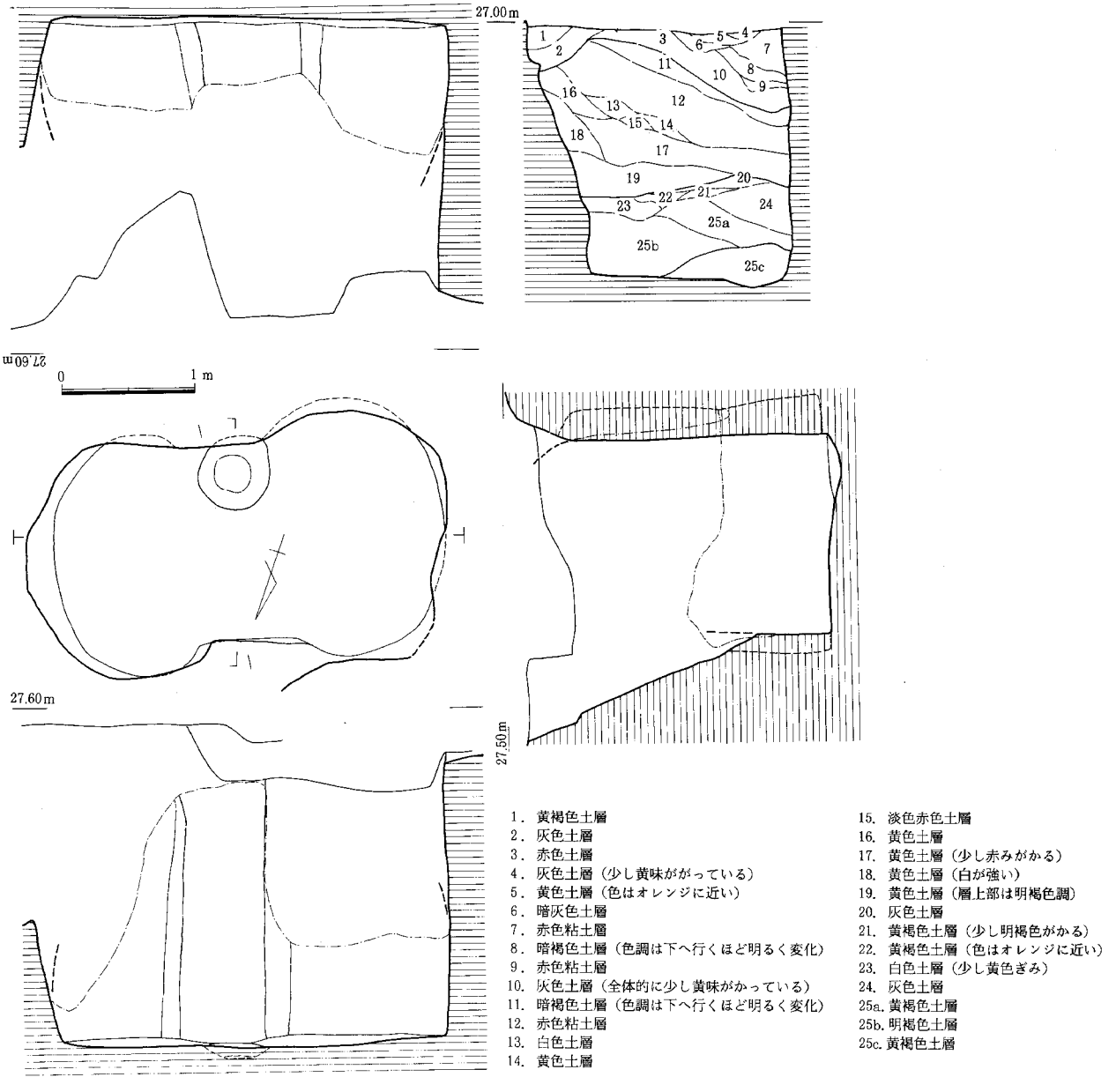
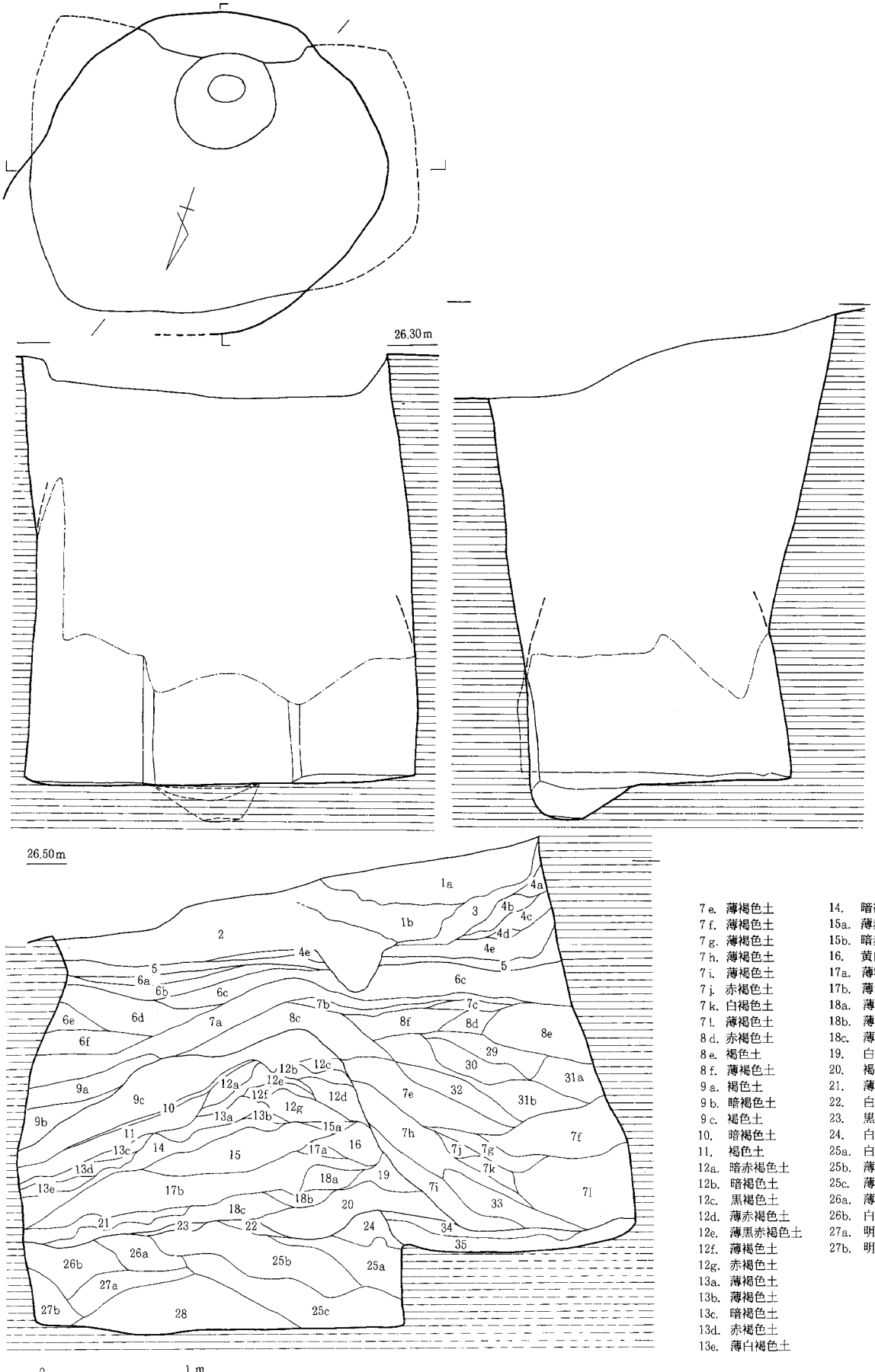


図69. SK34遺構図（1/50）

SK34：E７区にあり、丘陵尾根線上に位置する。病院建物基礎などにより1m 近い削平を受けている。西側の SK33、北側の SK29に切られる。床面の平面は楕円形である。床面での規模は長さ2.9m、幅1.9m、深さは2.4m である。壁面は0.2～2.0m まで遺存している。遺存する壁面からみると断面形は本来袋状に緩くすぼまるとみられる。長軸側の両壁の中央に柱状の削り出しがある。北側は幅1.0m で約0.15m 突出している。上部は壁面の崩落で不明であるが、高さ2.0m まで確認できる。南側は幅1.1m で約0.15m 突出している。上部に向かって次第に細くなる。高さ0.6m まで確認できる。南側の柱状削り出しの直下に幅0.5m、長さ0.6m、深さ0.1m の掘り方がある。覆土は三群に分かれる。第１群は床面上に0.5m 前後の厚さでみられる水成堆積土である。層中には、南からの流入を示す流理が認められた。また、この時点で一部の壁面は崩落があったとみられる。第２群はほぼ上半部全体を埋める埋土であり、壁面の崩落土を含む地山土塊を多量に含む埋土である。南側から流入堆積している。第３群は最上部の窪地を埋める土壌である。底の部分が僅かに確認された。本遺構内から遺物の出土はない。



7e. 薄褐色土
7f. 薄褐色土
7g. 薄褐色土
7h. 薄褐色土
7i. 薄褐色土
7j. 赤褐色土
7k. 白褐色土
7l. 薄褐色土
8d. 赤褐色土
8e. 褐色土
8f. 薄褐色土
9a. 褐色土
9b. 暗褐色土
9c. 褐色土
10. 暗褐色土
11. 褐色土
12a. 暗赤褐色土
12b. 暗褐色土
12c. 黒褐色土
12d. 薄赤褐色土
12e. 薄黒赤褐色土
12f. 薄褐色土
12g. 赤褐色土
13a. 薄褐色土
13b. 薄褐色土
13c. 暗褐色土
13d. 赤褐色土
13e. 薄白褐色土
14. 暗褐色土
15a. 薄赤褐色土
15b. 暗赤褐色土
16. 黄白褐色土
17a. 薄暗褐色土
17b. 薄赤褐色土
18a. 薄褐色土
18b. 薄褐色土
18c. 薄赤褐色土
19. 白褐色土
20. 褐色土
21. 薄褐色土
22. 白褐色土
23. 黒褐色土
24. 白褐色土
25a. 白褐色土
25b. 薄褐色土
25c. 薄褐色土
26a. 薄明褐色土
26b. 白褐色土
27a. 明褐色土
27b. 明褐色土

図70. SK35 a•b 実測図（1/50）

SK35：C８区にあり、丘陵尾根線から南に1～2m下がった位置にある。掘り方の上部を整形し住居状遺構SC35が造られている。調査当初は１基の貯蔵穴と見ていたが、掘り下げ途中に２基の貯蔵穴の複合であることが判明した。そのため、北側をSK35a、南側をSK35bと呼ぶ。両者は床面で0.1m以下の壁を挟んで近接する。床面高は0.5mの差がある。切り合いからSK35aが後出するとみられた。

SK35aは床面の平面は楕円形である。床面での規模は長さ1.9m、幅1.6m、深さは3.0mである。壁面は0.7～2.0mまで遺存している。遺存する壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。

SK35bは隅丸長方形である。床面での規模は長さ2.7m、幅2.1m、深さ3.0mを測る。壁面は0.5～2.1mまで遺存している。壁面からみると断面形は本来緩くすぼまり、袋状を呈するとみられた。長軸側の南壁の中央に柱状の削り出しがある。幅1.1mで約0.15m突出している。上部は壁面の崩落で不明であるが、高さ0.9mまで確認できる。柱状削り出しの直下に、幅0.7m、長さ0.7m、深さ0.25mの掘り方がある。

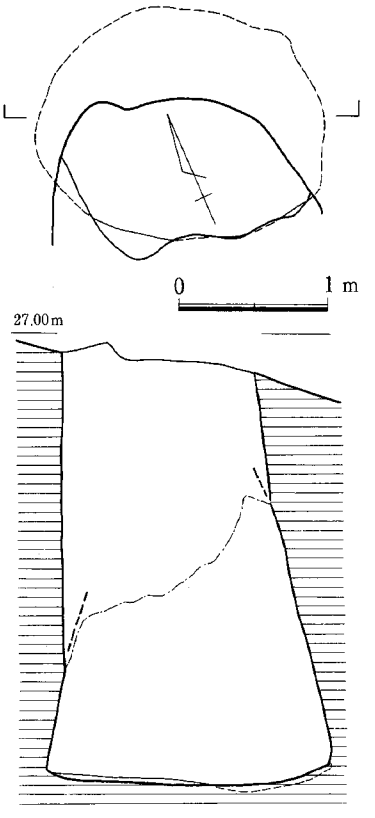


図71. SK35a遺構図（1/50）

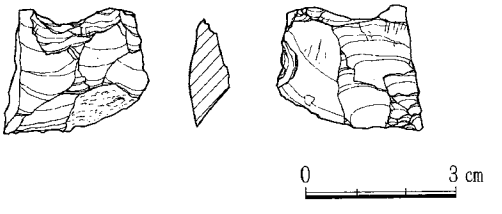


図72. SK35出土遺物（2/3）

覆土はab合わせて観察した。四群に分かれる。第１群はSK35bの床面上に約0.7mの厚さでみられる埋土である。円錐状の堆積土である。第２群は第１群を一部切り、SK35aの床面上に厚さ0.2m以下の堆積をみせる。流理砂を含み、水成作用による流入土とみられた。これら第１・２群の埋土上面を整地し、２つの貯蔵穴間の壁面を整形し、SC35の下部床面としている。第３群はab両貯蔵穴を通して円錐状に堆積している。下部で地山土塊を含むが、上部は土壌や炭化物を多量に含む。この時点での壁の崩壊は少ないとみられた。第４群は壁崩壊土を含む地山土塊を多く含んでいる。第３群と同様の円錐状に堆積と壁側の堆積が交互に進む。上面は整地され、SC35の上部床面となる。本遺構内からは第３群埋土中から剥片1が出土した。1は古銅輝石安山岩を素材とする横長剥片である。半割品であり、風化が著しい。背面に自然面が残る。打面や周囲から２次的剥離がみられる。風化具合や剥片の形態からみて本遺構の造られた弥生時代に属するものではなく、縄文時代以前の産物であり、混入したものと考えられる。

SK36：D７区にあり、丘陵尾根線上に位置する。病院建物基礎などにより相当の削平を受けている。南側にSK39が0.05m、西側にSK38が0.2mの壁を挟み近接する。北側のSK53には切られる。壁の上部は撹乱のため、失われている。床面の平面は隅丸の半円形である。床面での規模は長さ1.7m、幅1.2m、深さは1.8mである。壁面は0.3～1.0mまで遺存している。遺存する壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。直辺壁の直下に幅0.2m、長さ0.1m、深さ0.05mの掘り方がある。覆土の観察は出来なかった。本遺構検出時に土器片が出土した。1は壷の底部と見られる。平底の底部から直線的に立ち上がる。調整は、内面は指押さえナデであるが、外面は風化のため不明である。

SK38：Ｄ７区にあり、丘陵尾根線上に位置する。病院建物基礎などにより相当の削平を受けている。南側にSK39が0.4m、東側に SK36が0.2mの壁を挟み近接する。検出時はSK39との切り合いは未確認であったが、断面上部で本遺構が切られることが判明した。SK38埋没後に SK39が掘られたと考えられる。床面の平面は楕円形である。床面での規模は長さ2.1m、幅1.5m、深さは2.6m である。壁面は0.5～0.6m まで遺存している。遺存する壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。床面に掘り方はない。覆土は三群に分かれる。第１群は床から厚さ0.7～0.9m に堆積する。地山の崩落土を含むが、流理がみられ、厚い水成流入土と見られた。第２群は地山土塊を多く含み、最初は中央に円錐状に、後は北西側から流入堆積している。第３群は最上部にみられる土壌部である。上部の窪地を埋めるように堆積している。

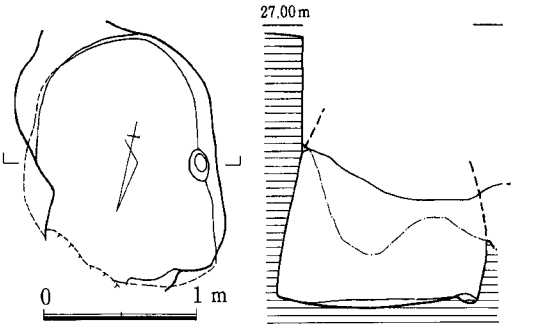


図73. SK36遺構図（1/50）

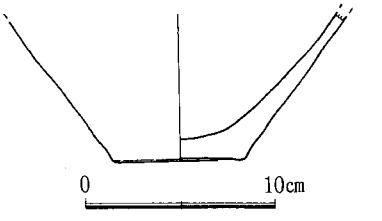


図74. SK36出土遺物（1/4）

SK39：Ｄ７区にあり、丘陵尾根線上に位置する。病院建物基礎などにより相当の削平を受けている。北側に SK36が0.05m、北西側に SK38が0.4m、南東側に SK21が0.5m の壁をそれぞれ挟み近接する。SK38の覆土を切る。床面の平面は隅丸の長方形である。床面での規模は長さ2.5m、幅2.2m、深さ2.7mを測る。壁面は0.2～1.6m まで遺存している。遺存する壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。南壁の直下に幅0.5m、長さ0.3m、深さ0.1m の掘り方がある。覆土は四群に分か

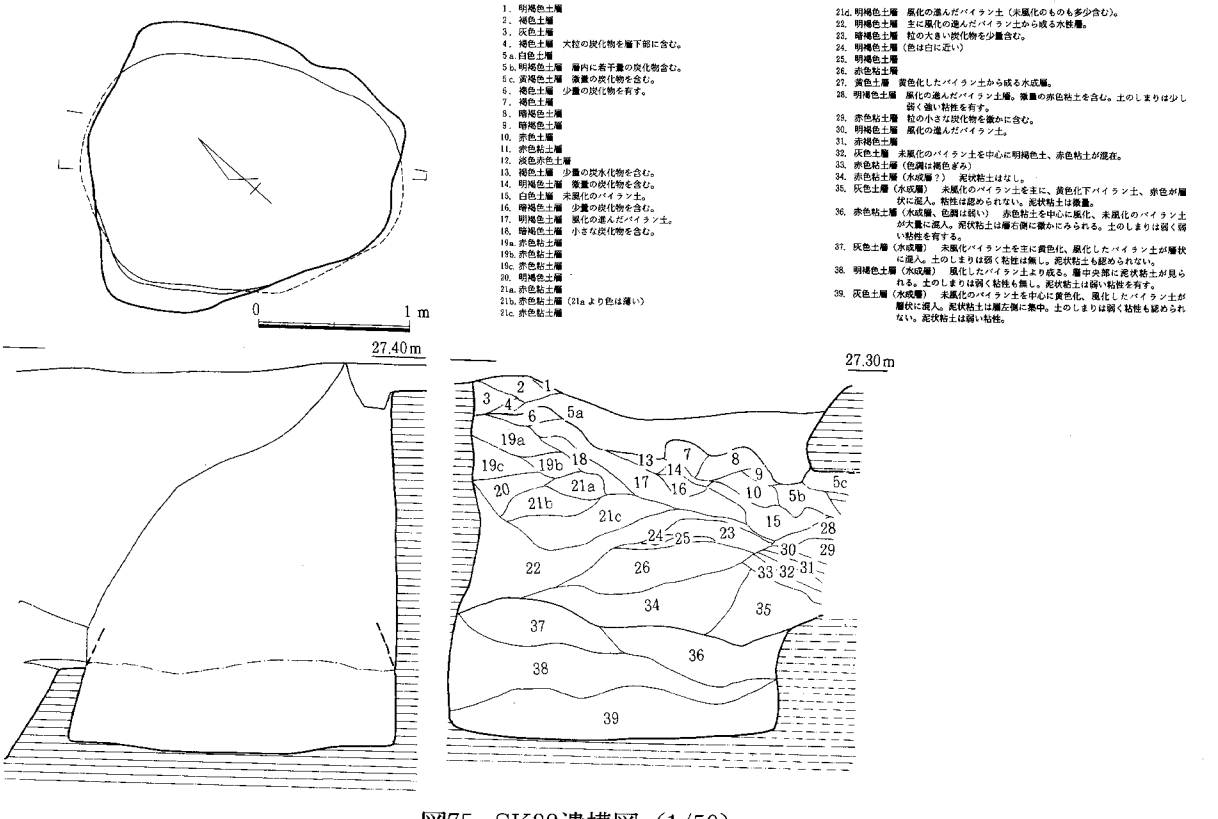


図75. SK38遺構図（1/50）

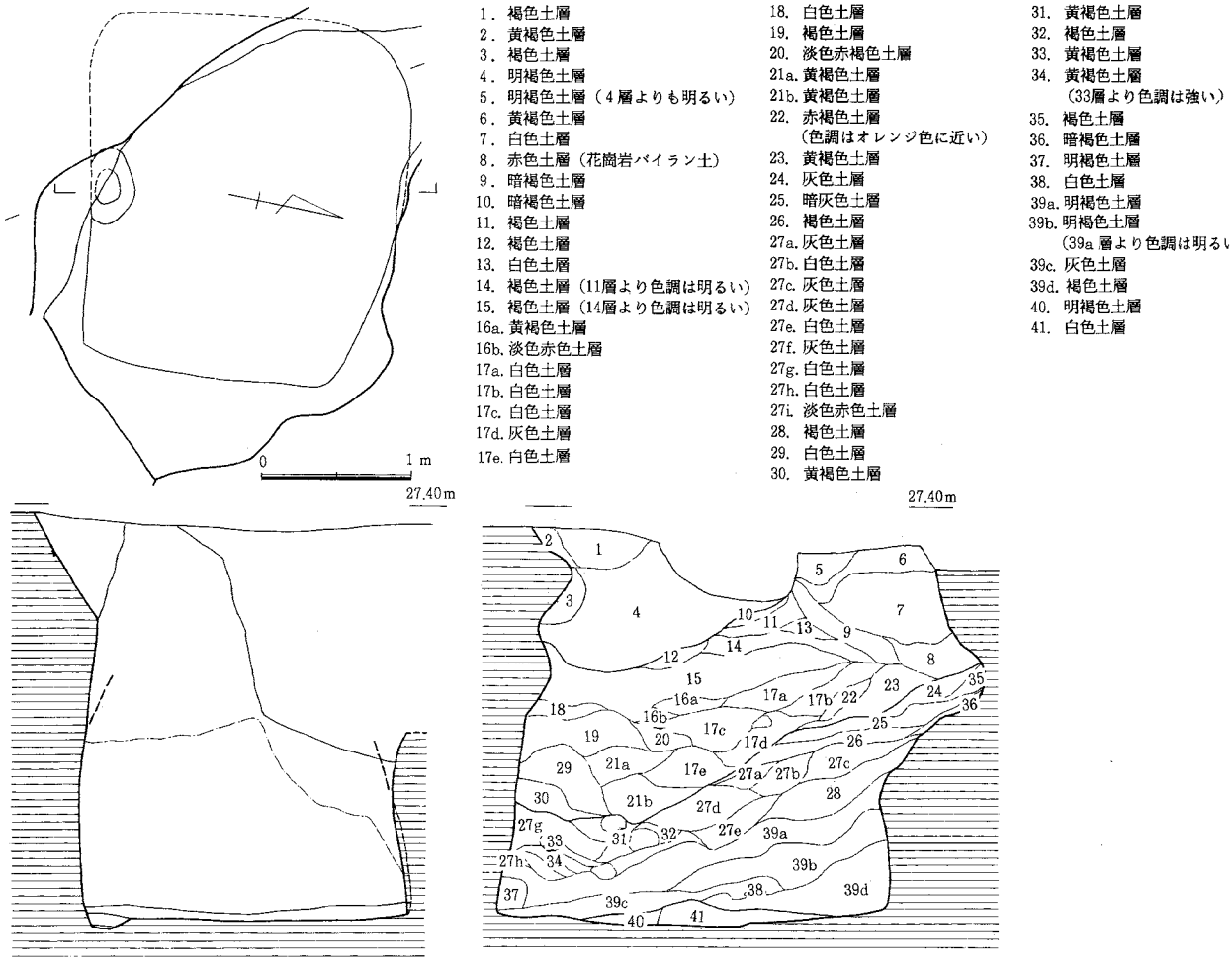
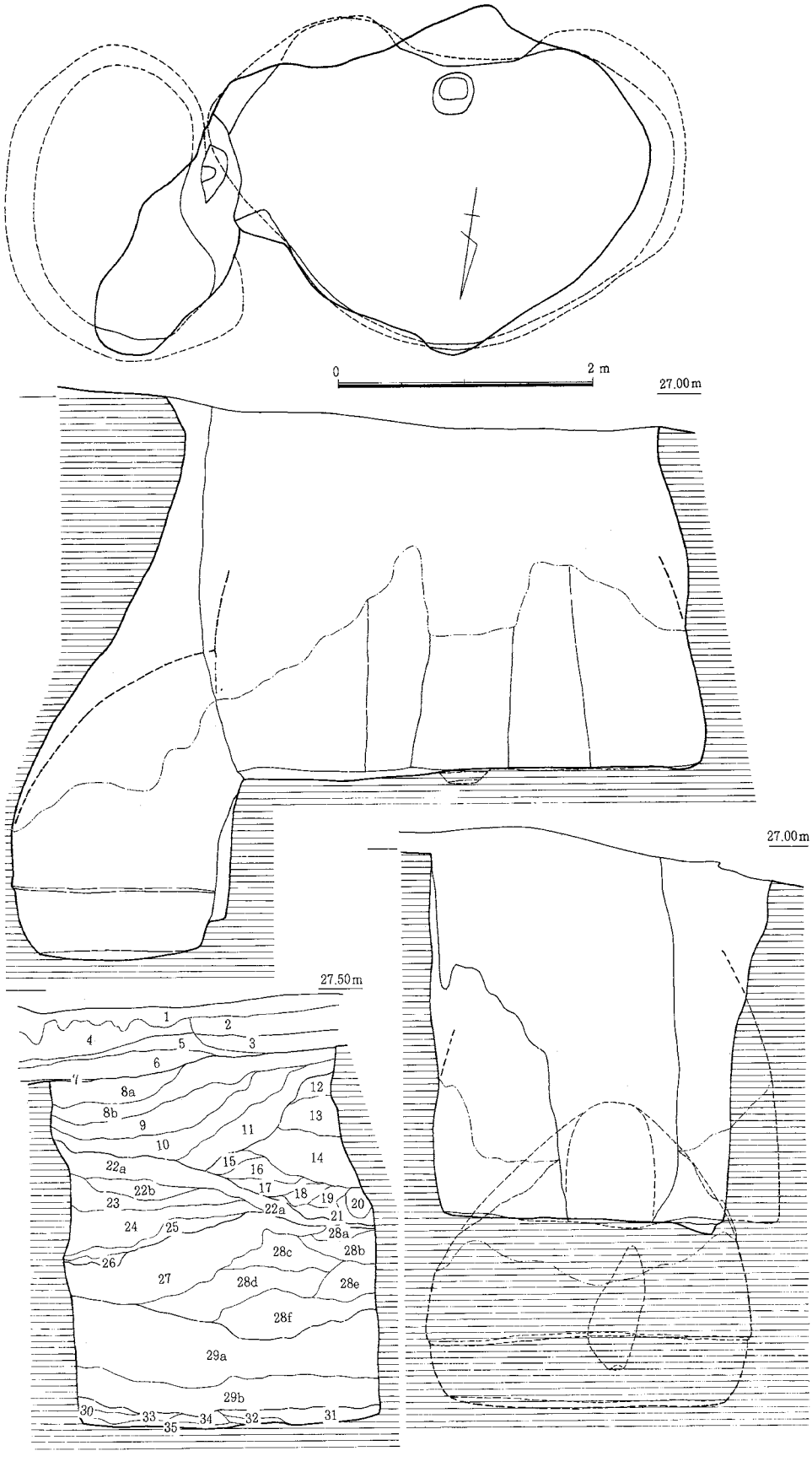


図76. SK39遺構図（1/50）

れる。第1群は床面中央に0.2m以下の厚さで円錐状に堆積する壁の崩落土である。第2群は流理砂を多く含む水成堆積土であり、北西側から流入している。本層群はSK38との間の壁を崩落させ、同埋土まで浸食している。第3群は地山土塊を多く含む埋土であり、やはり北西側から流入している。第4群は最上部の南側に片寄った位置に堆積する腐植土壌である。本遺構の第4群埋土から土器小片が出土した。破片が小さいために器種、特徴は不明である。

SK40(a～f)：D8区の丘陵尾根より僅かに南に下がる位置に立地する。住居状遺構SC40に切られている。SC40の下部から密集状態でa～fの6基の貯蔵穴床面を確認した。このうち40fは40aの付設遺構であり、40cと40eは40dの付設施設である可能性が高い。したがって、ここには独立して40a、40b、40dの3基が近接して分布していることになる。以下ではこの3基について詳述する。

SK40a,fは最も下がった位置にある、いわゆる二段式の貯蔵穴である。北側にSK40d、東側にSK40bと近接する。SK40aは床面が隅丸の半円形を呈し、床面での規模が長さ3.7m、幅2.6m、深さ3.1mを測る。壁面は0.6～1.8mまで遺存している。壁面からみると断面形は本来緩くすぼまり、袋状を呈するとみられた。直辺の壁中央に柱状の削り出しがある。幅1.4mで約0.3m突出している。上部は壁面の崩落で不明であるが、高さ1.8mまで確認できる。柱状削り出しの直下に、幅0.3m、長さ0.3m、深さ0.1mの掘り方がある。東側の左辺壁の下部から貯蔵穴二段目として掘り込まれたのがSK40fである。SK40fは床面が楕円形であり、長さ2.1m、幅1.4mを測り、SK40a床面からの深さ1.4m、検出面からの深さ4.5mを測る。壁面は床から1.0～2.0mまで遺存しているが、それより上位は崩落して



1．カクラン　黒色土層。腐葉土。表土。
2．カクラン　コンクリート基礎上にのる。
3．カクラン　コンクリート基礎の割石
4．カクラン　茶褐色土層。腐植木痕はいる。混入物多し。造成地の土か？
5．黒色土層　旧表土？　炭化物若干含む。茶褐色粘質土ブロック状に少量含む。
6．暗褐色土層　腐植木痕少々見られる。炭化物少量含む。土壌化進む。
7．黒色土層　旧表土？
8a.褐色土層（やや暗めの色調）　炭化物若干含む。下位層へは漸移的変化。土壌化進む。
8b.褐色土層　炭化物若干含む。
9．茶褐色土層　炭化物若干含む。しまりよく硬い。粘性あり。
10．褐色土層（やや暗めの色調）　マサ土を基調とする。炭化物若干含む。しまりよく硬め。粘性はややあり。
11．褐色土層（淡い色調）　マサ土を基調とする。しまりよく硬め。粘性ややあり
12．赤褐色土層　粘質土で0.5～3㎝大の砂粒を若干含む、硬くしまる。
13．暗褐色土層　炭化物を若干含む。赤褐色粘質土を基調とする。
14．赤褐色土層　粘質土と褐色砂質土が相互にブロック状に混入。
15．褐色土層（10層より明るめの色調）　マサ土を基調とする。しまりよく硬め。粘性やや　あり。
16．褐色土層（淡い色調）　マサ土を基調とする。しまりは硬い。粘性ややあり。
17．明褐色土層　砂質土でやや柔かい。
18．赤褐色土層　粘質土で砂粒の混入が少ない。
19．灰褐色土層　砂質土で粘性は全く含まずもろい。
20．黒褐色土層　しまり弱くやわらかい。粘性あり。
21．赤褐色土層　粘質土で、砂粒をやや多く含み柔かい。
22a．灰褐色土層　砂質土で、粘性は全く無くやや硬くしまる。
22b．褐色土層（やや暗めの色調）　マサ土を基調とする。しまり弱め。やわらかめ。粘性あり。
23．褐色土層（やや茶色帯びる）　マサ土を基調とする。炭化物若干含む。しまり弱くやわらかめ。粘性あり。
24．褐色土層（白色の色調強い）　マサ土を基調をする。しまりよいがやわらかめ。粘性あり。
25．褐色土層（やや暗めの色調）　マサ土を基調とする。しまりよく硬い。粘性もややあり。
26．褐色土層　マサ土を基調とする。しまりよく硬め。粘性ややあり。
27．茶褐色土層　しまりよく硬い粘質。
28a.黄褐色土層（やや暗めの色調）　しまり弱くやわらかい。粘性ややあり。
28b.黄褐色土層（やや茶色帯びる）　花崗岩バイラン土ブロック状に多量に含む。炭化物少量含む。しまりよく硬い。粘性弱い。
28c．暗褐色土層　花崗岩バイラン土を若干含み。やや柔らかい。
28d.暗黄褐色土層　バイラン土風化層で風化がひどい。やや柔らかい。
28e．黄白色土層　花崗岩バイラン土ブロック状に多量につまる。しまりよく硬め。粘性あり。
28f．暗褐色土層　バイラン土風化層で風化がひどく柔らかい。
29a．褐色土層　バイランド風化層で風化がひどく柔らかい。
29b．灰褐色土層　砂質土で粘性はほとんど無く硬くしまる。
30．暗褐色土層　炭化物若干含む。しまり弱めだが硬い。粘性あり。
31．褐色土層　砂質土できめが細かく硬くしまる。
32．暗茶褐色土層　しまりよく硬め。粘性あり。
33．褐色土層（暗めの色調）　炭化物少量含む。しまり弱くやわらかめ。粘性もあり。
34．黄褐色土層　花崗岩バイラン土（風化した）ブロック状に多量に含む。しまりはよく硬い。粘性あり。
35．褐色土層　しまりは弱くやわらかい。粘性弱い。目の細い砂性の層。

図77. SK40a•f 遺構図（1/50）

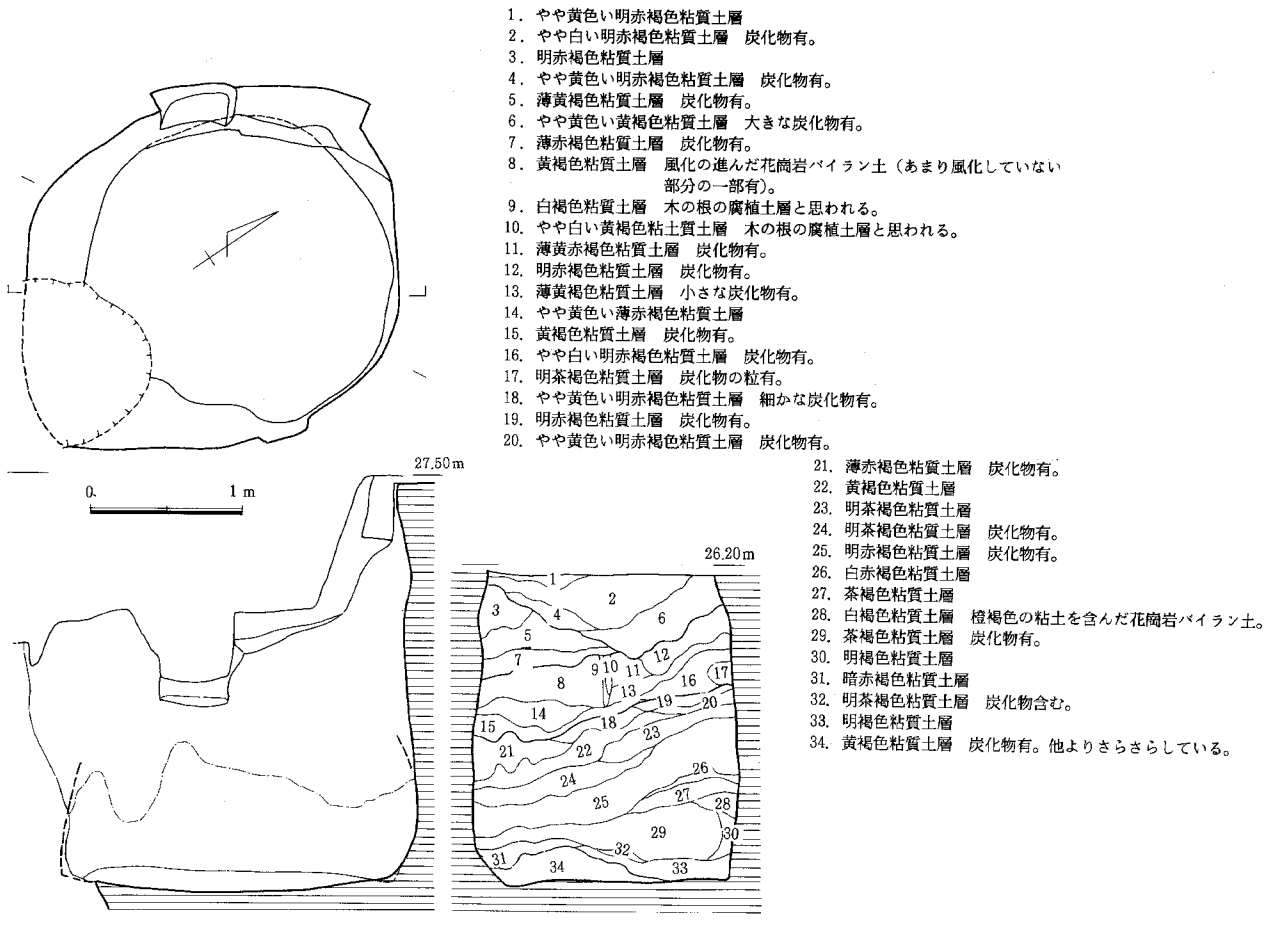
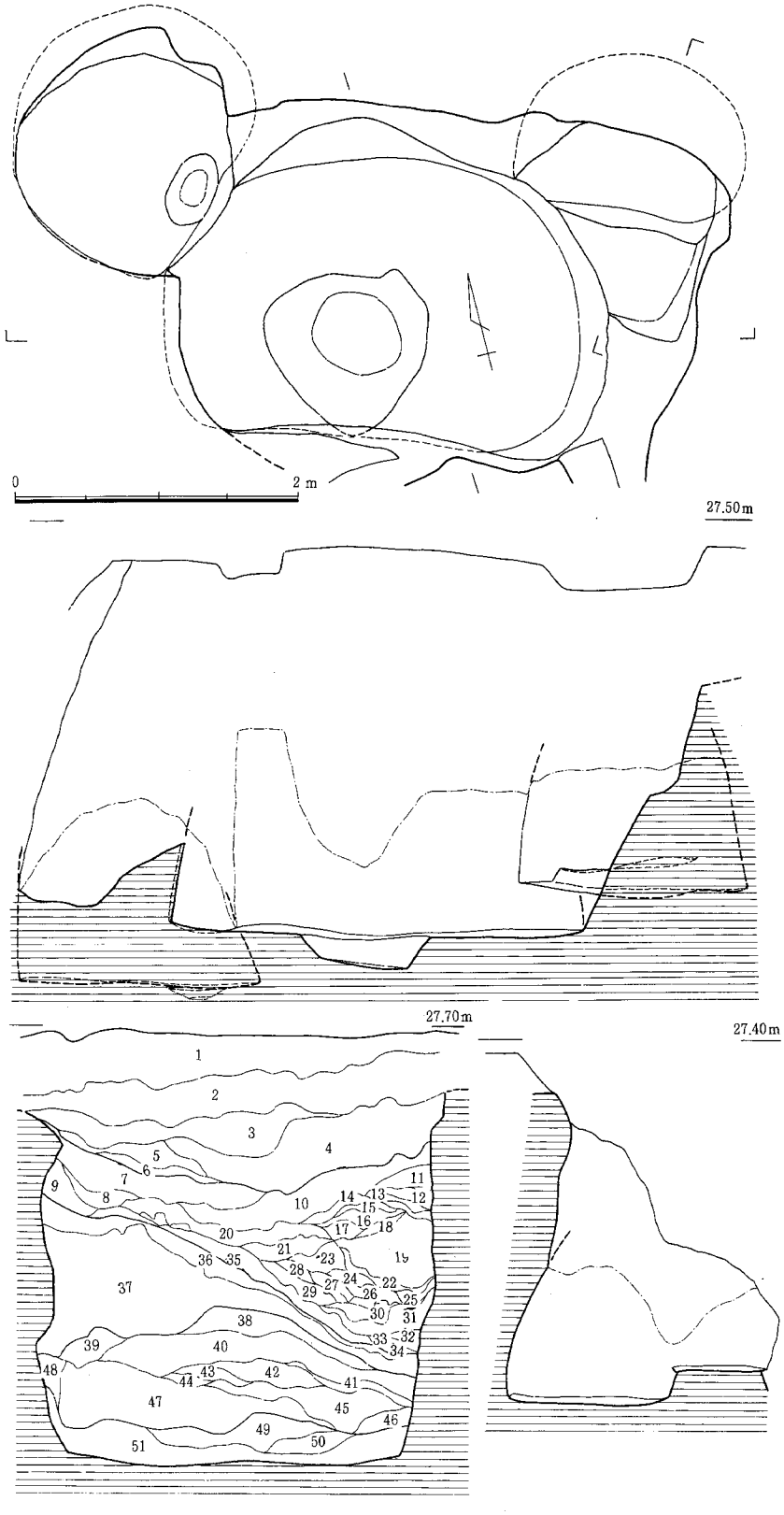


図78. SK40b 遺構図（1/50）

いる。壁面からみると断面形は本来袋状をなし、SK40a の左辺壁に高さ1.0m、幅0.9m の開口部が復元される。また SK40f の壁面には床面より0.5m 上位に明瞭な段があり、本遺構の最初の掘削時の底面痕跡であろうと推定した。また、開口部の直下の壁面にこの段を切る掘り込みがある。段は床面から0.2m 上位にあり、出入りのための階段であろうと考えられた。覆土は四群に分かれる。第１群は床面上にみられる厚さ0.2m 以下の埋土である。均質細砂の薄層を含み水成堆積とみられる。第２群は南～西側からの流入堆積土である。床面上0.6～0.9m に堆積する。地山土塊などを含むが、壁の崩壊を伴わない。第３群は西側からの流入土であり、壁の崩落など地山土塊を多量に含む。SK40f も埋まる。第４群は覆土上部の中央にみられる。窪地を埋める埋土であり、土壌化している。この上部を整形し SC40の床面が形成されている。本遺構内からの遺物の出土はない。

SK40b は南側の SK40f と0.2m、西側の SK40d と0.6m の壁を挟んで近接している。上部は病院施設により破壊され、調査時には南側の SK40f との間の床から壁が崩壊した。床面は楕円形であり、長さ2.3m、幅2.0m、深さ2.8m を測る。壁面は床から0.4～1.0m まで遺存している。壁面からみると断面形は本来袋状をなしていたとみられる。床面に掘り方は認められない。覆土は四群に分かれる。第１群は床面上に厚さ0.2m 以下で円錐状にある埋土である。細砂からなり、壁面の崩壊以前に開口部から流入したものと見られた。第２群は北～西側からの流入堆積土である。壁の崩壊土などの地山土塊を含む。第３群も西側からの流入土であるが、地山土塊も多いが、全体に粘土化が進んでいる。第４群は覆土上部の中央にみられる。窪地を埋める埋土であり、土壌化している。この上部を整形し SC40の床面が形成されている。本遺構内からの遺物の出土はない。



1．暗褐色土層　表土
2．褐色土層　風化したバイラン土。大粒の炭化物をまばらに含む。しまりは良く粘性を有す。
3．黄色土層　変色したバイラン土。土のしまりは弱く粘性は無し。層下部は住居址床面。
4．灰色土層　風化の進んだバイラン土。長石塊、赤色粘土塊を含む。土のしまりは弱く粘性は無し。
5．赤色土層　黄褐色土と赤色粘土の混合層。土のしまりは良く強い粘性を有す。
6．赤色土層　赤色粘土より成る。若干量の黄褐色土の混入あり。しまりは非常によく強い粘性を有す。
7．褐色土層　風化の進んだバイラン土（腐植土層）。炭化物・黄褐色土のまじりが多く見られる。しまりは弱く粘性は弱い。下位層（10層）へ漸移的に変化。
8．暗褐色土層　風化のより進んだバイラン土。土のしまりは良く、強い粘性を有す。
9．赤色土層　赤色粘土より成る。土のしまりは非常に良く強い粘性を有す。
10．褐色土層　風化の進んだバイラン土。7層より色調は明るい。小粒の炭化物を若干量含む。しまりは良く粘性を有す。下位層へ漸移的に変化。
11．褐色土層　風化の進んだバイラン土。7層よりも赤味は強い。土のしまりは良く強い粘性を有す。
12．黄色土層　変色したバイラン土（未風化）。土のしまりは弱く粘性は無い。
13．褐色土層　未風化の長石塊を含む。他は11層に同じ。
14．灰色土層　風化の進んだバイラン土。部分的に褐色の混じりが認められる。土のしまりは弱く粘性なし。
15．黒色土層　風化のより進んだバイラン土。マンガン粒を多く含む。土のしまりは弱く粘性を有す。
16．褐色土層　風化の進んだバイラン土。灰色土の混じりが認められる。土のしまりは良く強い粘性を有す。
17．黒色土層　風化のより進んだバイラン土。マンガン粒を含む。土のしまりはやや弱く粘性を有する。
18．褐色土層　風化の進んだバイラン土。色調は16層よりも暗い。土のしまりは良く粘性を有す。
19．黄褐色土層　変色したバイラン土。風化の進みが認められる。白色の長石の混じりが認められる。土のしまりは弱く弱い粘性を有す。
20．明褐色土層　風化の進んだバイラン土。大きさのまちまちな炭化物が若干認められる。土のしまりは弱く粘性は無い。下位層へ漸移的に変化。
21．灰色土層　風化の進んだバイラン土。未風化の長石を残す。木の根によると思われる腐植土あり。土のしまりは弱く粘性無し。
22．暗灰色土層　風化の進んだバイラン土。若干量のマンガン粒を含む。土のしまりは弱く粘性はない。
23．黒色土層　風化の進んだバイラン土に多量のマンガン粒を含む。土のしまりは弱く強い粘性を有する。
24．褐色土層　風化のかなり進んだバイラン土。土のしまりは良く強い粘性を有す。
25．黄褐色土層　風化の進んだ黄色バイラン土。土のしまりは少し弱く強い粘性を有す。
26．黄褐色土層　風化の進んだ黄色バイラン土。未風化の黄色長石を多く残す。土のしまりは弱く粘性はなし。
27．褐色土層　風化のかなり進んだバイラン土。土のしまりは良く粘性を有す。
28．灰色土層　風化の進んだバイラン土。下層に行くに従い花崗岩粒が多くなる。土のしまりは弱く粘性なし。
29．褐色土層　風化のかなり進んだバイラン土層。若干のマンガン粒を含む。土のしまりは良く強い粘性を有す。
30．暗褐色土層　風化の進んだバイラン土。多量のマンガン粒を含む。土のしまりは良く強い粘性を有す。
31．黄褐色土層　風化の進んだバイラン土。未風化の長石を含む。土のしまりは弱く弱い粘性を有す。
32．白色土層　未風化のバイラン土。土のしまりは弱く粘性は無い。
33．褐色土層　風化のかなり進んだバイラン土。土のしまりは良く強い粘性を有す。
34．灰色土層　風化の進んだバイラン土。未風化の長石、小粒の赤色粘土塊をまばらに含む。土のしまりは弱く粘性なし。
35．赤色土層　赤色粘土から成る。土のしまりは良く強い粘性を有す。
36．黒色土層　風化のかなり進んだバイラン土の中に炭化物及びマンガン粒を大量に含む。土のしまりは良く強い粘性を有す。
37．褐色土層（38層より赤色味あり）
風化の進んだバイラン土。上部及び下部に風化しきってない部分が見られる。土のしまりは弱く粘性は弱い。下位層へ漸移的に変化。
38．褐色土層　風化の進んだバイラン土。土のしまりは良く粘性を有する。下位層（40層）へ漸移的に変化。
39．黄色土層　未風化の黄色バイラン土。層下部は少し風化している。土のしまり弱く粘性は無し。
40．褐色土層　38層より赤味を帯びる。風化のかなり進んだバイラン土。土のしまりは良く強い粘性を有す。
41．黄褐色土層　変色したバイラン土。上のしまりは弱く粘性なし。
42．褐色土層　40層より黄色味がある風化したバイラン土。土のしまりは少し弱く粘性を有す。下位層へ漸移的に変化。
43．黄褐色土層　風化の進んだ変色バイラン土。褐色土のまじり少。土のしまりは少し弱く粘性はなし。
44．赤色土層　風化したバイラン土。未風化の長石を微量に含む。土のしまりは少し弱く粘性を有す。
45．褐色土層　風化の進んだバイラン土。未風化の長石を少量含む。土のしまりは良く弱い粘性を有す。下位層へ漸移的に変化。
46．黄褐色土層　変色したバイラン土。土のしまりは弱く弱い粘性を有す。
47．褐色土層　風化の進んだバイラン土。未風化の長石を多く含む。土のしまりは弱く粘性はなし。
48．褐色土層　風化したバイラン土。未風化の変色バイラン土を微かに残す。土のしまりは弱く強い粘性を有する。
49．褐色土層　風化の進んだバイラン土。未風化の長石を少し残す。土のしまりは良く粘性はなし。全体的に粗い粒子から成る。
50．白色土層　未風化のバイラン土。土のしまりは弱く粘性なし。全体的に粗い粒子より成る。
51．褐色土層　未風化バイラン土。褐色土、赤色土の混合層。土のしまりは弱く粘性はなし。

図79. SK40c•d•e遺構図（1/50）

SK40c～e は南側の SK40a、東側の SK40b と近接している。SK40d は床面が隅丸の半円形を呈し、床面での規模が長さ2.9m、幅2.0m、深さ2.8m を測る。壁面は0.5～1.4m まで遺存している。壁面からみると断面形は本来緩くすぼまり、袋状を呈するとみられた。直辺の壁直下の床面に、幅1.2m、長さ1.2m、深さ0.25m の掘り方がある。

SK40c は左辺壁の下部に掘り込まれている。二つの床面が複合し、中央に0.2m 程度の段差がある。一度の掘り直しがあったと考えられる。規模は全体で長さ1.9m、幅1.6m を測るが、最後の掘り込みは平面が隅丸の半円形を呈し、長さ1.6m、幅1.1m、検出面からの深さ2.5m を測る。この床面は SK 40d の床面から0.3m 高い。壁面は床から約0.9m まで遺存している。壁面からみて、断面形態は本来袋状になるとみられる。SK40d の壁面での開口部の形態は不明である。

SK40e は右辺壁の下部に掘り込まれている。西側部分が病院宿舎建設にともない削平され、高さ5 m 以上の崖面に断面が露出している。平面は隅丸の半円形であり、規模は長さ1.9m、幅1.6m、検出面からの深さ3.0m を測る。SK40d の床面より0.4m 下がる。壁面は床から0.5～1.3m まで遺存している。壁面からみて、断面形態は本来袋状になるとみられる。直辺中央の床面に幅0.5m、長さ0.3m、深さ0.1m の掘り方がある。SK40d の覆土は三群に分かれる。第 1 群は床面上に厚さ1.1m 以下の埋土である。床面中央部に円錐状に堆積している。壁面の崩壊以前に開口部から流入したものと見られた。第 2 群は崩落した壁面を覆う。南側に厚く堆積する。風化土壌である。上面には腐植土が形成されており、一定期間この面が地表をなしていたと見られる。第 3 群は北側を中心とする埋土である。現状で中心が窪んでいるものの、全体が水平になるように埋められている。本層の上面は SC40床面となる。本遺構内からの遺物の出土はない。

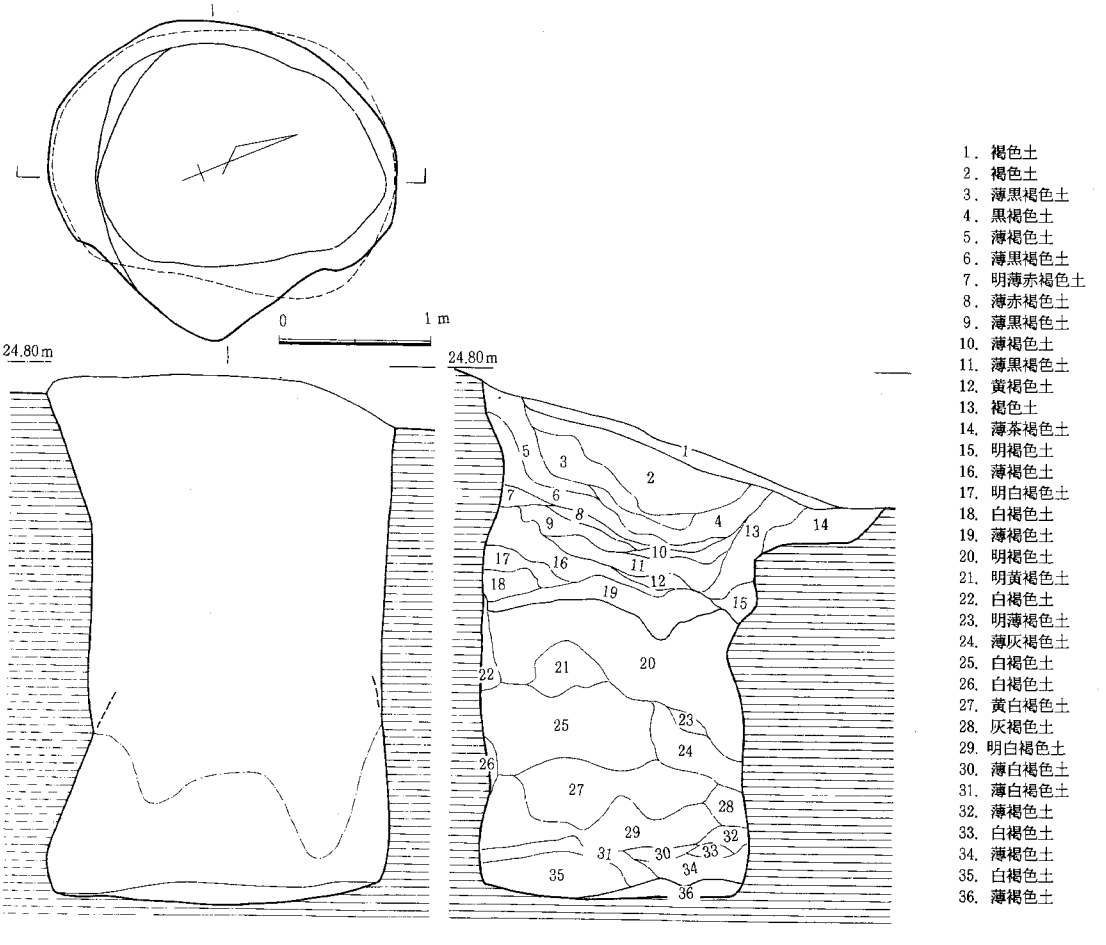


図80. SK41 遺構図（1/50）

SK41：Ｂ７区にあり、丘陵尾根線から東に下がった位置にある。南東側にSK52が近接する。床面の平面は隅丸の半円形である。床面での規模は長さ2.1m、幅1.6m、深さは3.5mを測る。壁面は0.2～1.0mまで遺存している。遺存する壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。床面に掘り方はない。覆土は三群に分かれる。第１群は床面上に厚さ0.2m以下堆積する流理をもつ砂質土であり、水成作用による堆積物とみられる。第２群は壁の崩落など地山土塊を多く含む埋土である。層区分が明瞭であり、比較的短期間の埋土とみられた。第３群は覆土上半部を形成する埋土であり、窪地状の中に土壌と炭化物が交互に堆積する。ある程度長期にわたる堆積と見られた。第３群内から土器片が出土した。1は壷の胴部下半から底部である。底部の立ち上がりはやや鈍く、厚めの底部がつく。調整は内外面とも風化のため不明である。

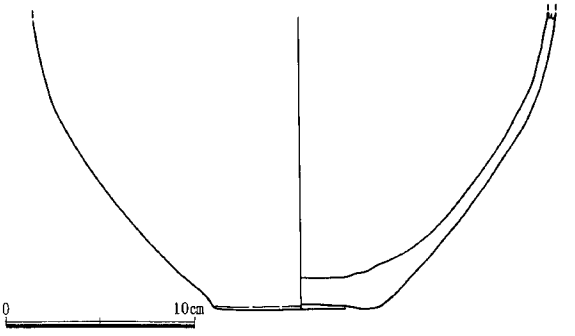


図81. SK41出土遺物（1/4）

SK42：Ｂ８区にあり、丘陵尾根線から東に下がった位置にある。西側にSK49が近接する。上部はSC42が設けられているために変形している。床面の平面は隅丸の半円形である。床面での規模は長さ2.4m、幅1.7m、深さは2.4mを測る。壁面は0.3～1.6mまで遺存している。遺存する壁面からみると

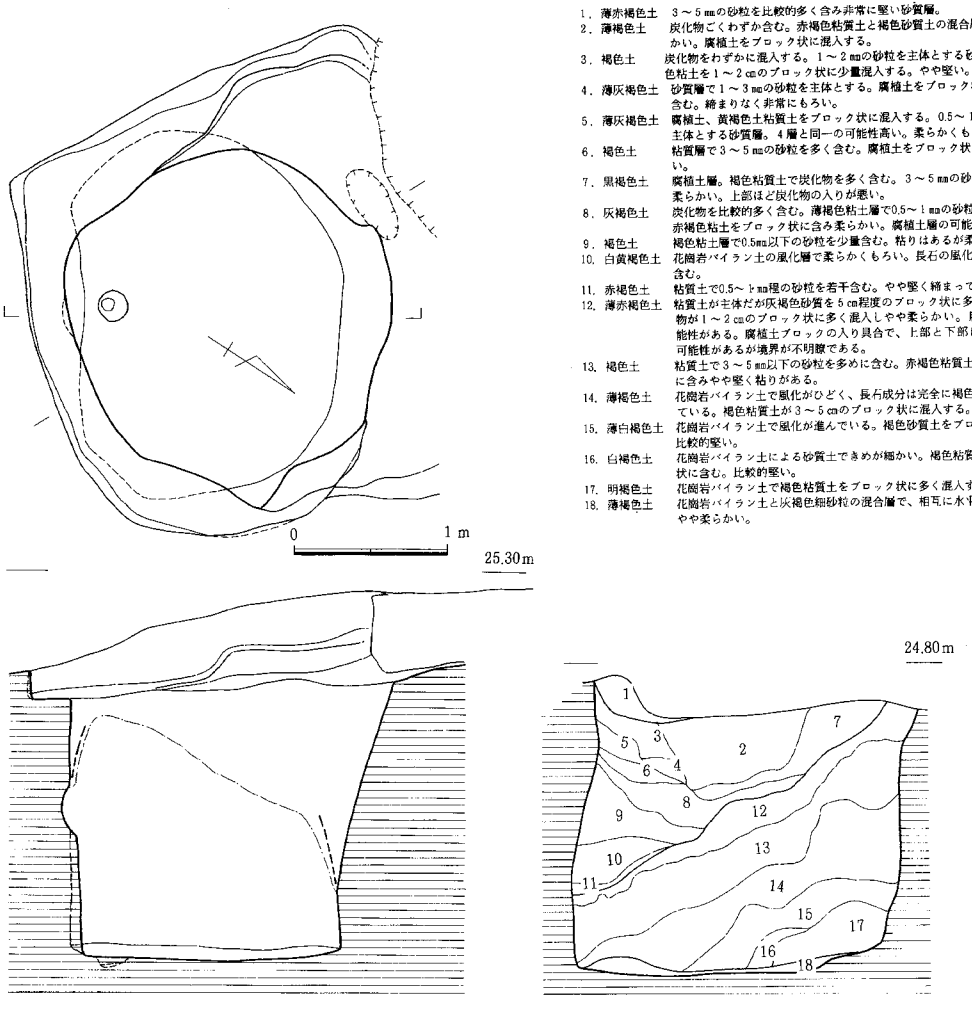


図82. SK42遺構図（1/50）

断面形は本来袋状を呈するとみられる。直辺の中央壁際には幅0.2m、長さ0.2m、深さ0.05mの掘り方がある。覆土は三群に分かれる。第1群は床面上に厚さ0.1m以下堆積する砂質土であり、水成作用による堆積物とみられる。第2群は西側からの流入堆積土と見られる。下部は壁の崩落など地山土塊を多く含む埋土であり、上部は土壌化し、上面は腐植土が形成されている。一定期間この面が地表をなしていたと見られる。第3群は東側を中心とし、覆土上半部を形成する埋土であり、窪地状の中に土壌と炭化物が交互に堆積する。ある程度長期に及ぶ堆積と見られた。本層の上面はSC42床面となる。本遺構内からの出土遺物はない。

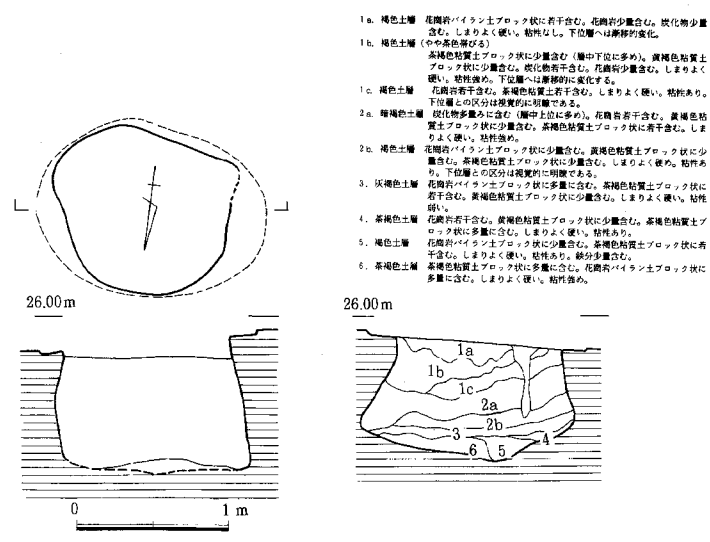


図83. SK44遺構図（1/50）

SK44：C８区にあり、丘陵尾根線の南側斜面に位置する。貯蔵穴と見るのに疑問も残るが、断面形が袋状を呈することからここに示す。床面の平面は楕円形である。床面で長さ1.5m、幅1.1m、深さは1.4m である。断面形は袋状を呈する。床面には動物生痕と見られる撹乱があった。

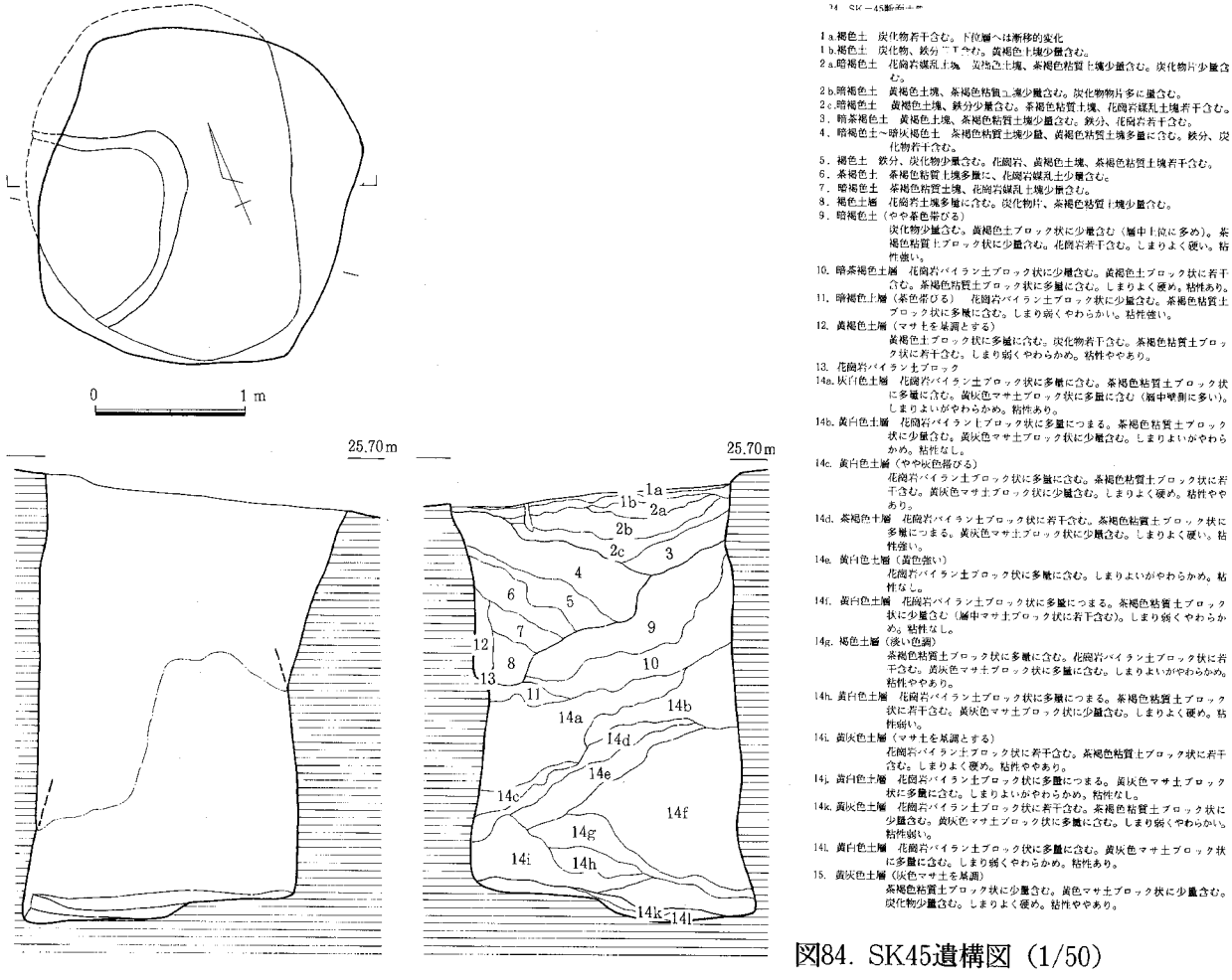


図84. SK45遺構図（1/50）

SK45：Ｂ７区の丘陵尾根より東に下がる位置に立地する。上部に住居状遺構SC45が造られている。床面の平面は楕円形である。床面での規模は長さ2.2m、幅1.8m、深さ2.9mを測る。壁面は床から0.5～1.6mまで遺存している。壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。西側壁の直下に幅1.3m、長さ1.1m、深さ0.1mの掘り方がある。遺存する覆土は四群に分かれる。第１群は床面上に厚さ0.1m以下堆積する砂質土であり、水成作用による堆積物とみられる。第２群は西側からの流入堆積土と見られる。壁の崩落など地山土塊を多く含む埋土である。第３群は第２群と同様の土質であるが、東側から流入している。第４群は覆土上半部を形成する埋土であり、窪地状の中にやや土壌化した埋土の堆積がみられた。本層の上面は整地されSC45床面となる。本遺構内からの出土遺物はない。

SK46：Ｃ８区の丘陵尾根より南に下がる位置に立地する。SK40bとSC43の中間位置にある。遺構検出段階には長さ1.5m、幅0.8mの細長い掘り方として検出した。調査時点では安全のために掘り広げたが、本来の開口部の形状を保っていたものと考えられる。床面の平面は楕円形である。床面での規模は長さ2.2m、幅1.6m、深さ2.2mを測る。壁面は保存状態が良く床から1.1～1.3mまで遺存している。壁面からみると断面形は袋状であり、長軸方向に狭く、短軸方向に長い開口部を持つと考えられた。東側壁の直下に幅0.7m、長

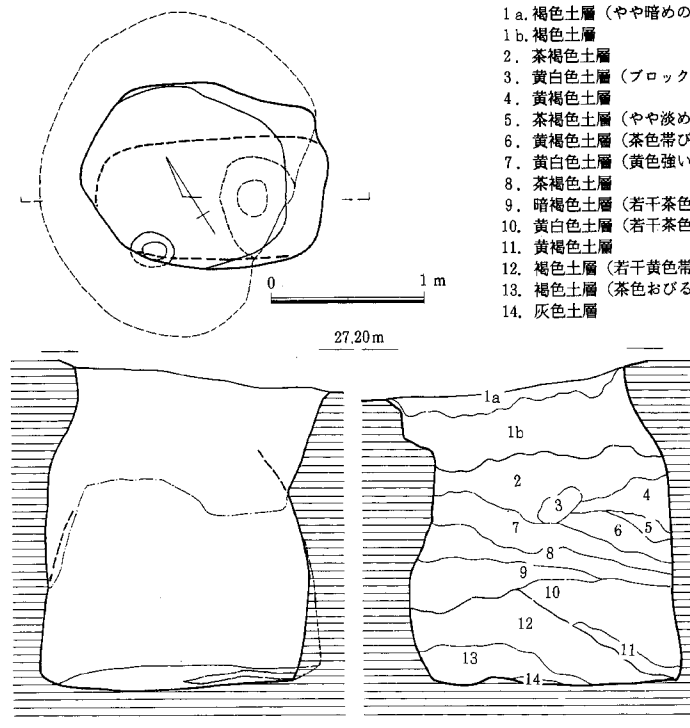


図85. SK46遺構図（1/50）

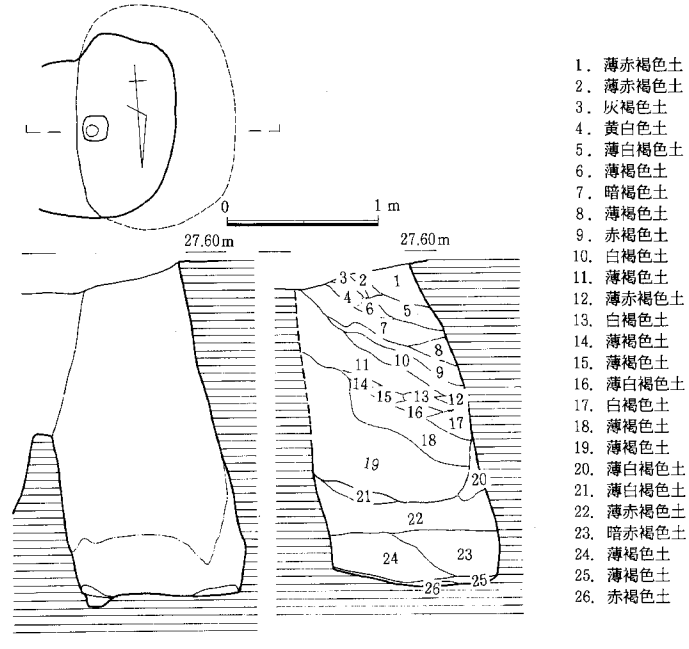


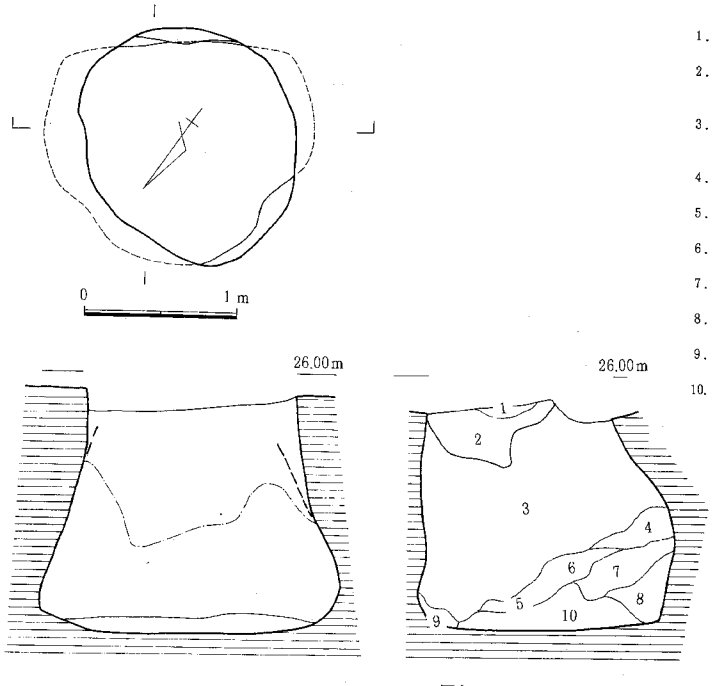
図86. SK47遺構図（1/50）

さ0.5m、深さ0.05m の掘り方がある。また、床面中央南寄りに長さ0.3m、幅0.2m、深さ0.07m の掘り方がある。遺存する覆土は三群に分かれる。第１群は床面上に厚さ0.6m 程度堆積する砂質土であり、最下部に水成作用による堆積物がある。開口部東側からの流入土である。第２群は同様に西側からの流入堆積土と見られる。壁の崩落など地山土塊を多く含む埋土である。第３群は覆土上部を形成し、土壌化した埋土の堆積がみられた。本遺構内からの出土遺物はない。

SK47：Ｅ７区の丘陵尾根上に立地する。上部は病院造成にともない削平を受ける。東側に SK29 が近接している。床面の平面は楕円形である。床面での規模は長さ1.6m、幅1.0m、深さ2.2m を測る。壁面は床から0.2～0.9m まで遺存している。壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。東側壁の直下に幅0.2m、長さ0.2m、深さ0.05m の掘り方がある。遺存する覆土は四群に分かれる。第１群は床面上に厚さ0.6m ほど水平に堆積する砂質土である。壁の崩落土を含む。第２群は東側からの流入堆積土であり、上部が土壌化する。この段階で間の壁を壊し SK29の埋土と連続する。第３群は同様に東側から流入している。地山土塊を多く含んでいる。本遺構内からの出土遺物はない。

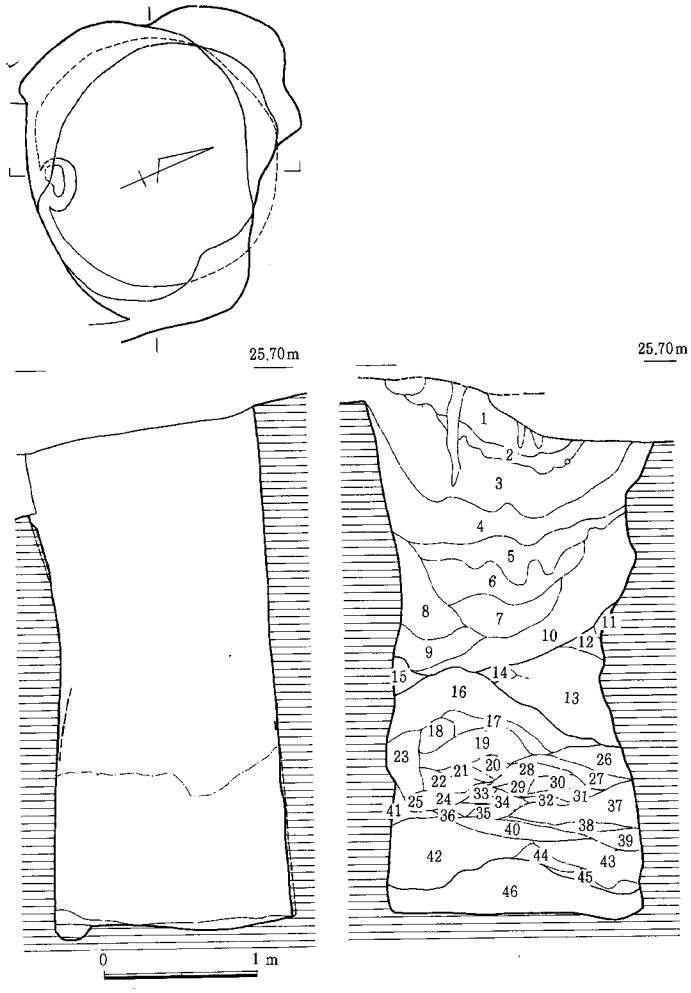
SK48：Ｂ８区の丘陵尾根より南東に下がる位置にある。西側約1m に SK44がある。床面の平面は隅丸の半円形である。床面での規模は長さ2.0m、幅1.6m、深さ1.6m を測る。壁面は床から0.4～1.1m まで遺存している。壁面から断面形は本来袋状とみられる。覆土は三群に分かれる。第１群は床面上に西側に厚く堆積する砂質土であり、地山土塊を含んでいる。第２群もやはり西側からの流入堆積土と見られる。分層困難な粘土層である。第３群は覆土上半部を形成する埋土であり、窪地状の中にやや土壌化した埋土の堆積がみられた。本層の上面に炭化物が集中していた。本遺構内からの出土遺物はない。

SK49：Ｂ８区の丘陵尾根より東に下がる位置に立地する。東側にSC42、南側にSK50が近接する。また南側で住居状遺構SC45に切られている。床面の平面は楕円形である。床面での規模は長さ1.7m、幅1.6m、深さ3.5mを測る。壁面は床から0.8～1.1mまで遺存している。壁面からみると断面形は、袋状を呈するが、上部への絞り込みは2m以上になるとみられた。南西側壁の直下に幅0.35m、長さ0.25m、深さ0.1mの掘り方がある。遺存する覆土は四群に分かれる。第１群は床面上に厚さ0.4m以下堆積



1．暗褐色土　粘質土と0.5mm以下の砂質土の混合層。堅く締まっており黒色炭化物が１～２cmの塊状に含まれる。炉状遺構の可能性あり。
2．褐色土　粘質土と0.5mm以下の砂質土の混合層で３～５mm大の砂粒を多く含む。炭化物をごくわずか含み堅く締まっている。上層と下層に細分される可能性あり。
3．褐色土　２層より赤色度が強い粘質土層で３～５mmの砂粒を多く含む。ワイヤー留め金具が右側に食い込んでおり、何らかの掘り方がある可能性があるが明確には検出されなかった。上層で砂粒の入りがやや多い。
4．黒白褐色土　パイラン土風化層で風化がひどく褐色細砂粒を多く混入する。褐色粘質土を１cm程のブロック状に少し混入する。比較的堅く締まっている。
5．明褐色土　0.5mm以下の細砂粒を主体とする層で３～５mmの砂粒を少なめに含む。比較的堅く締まっている。
6．明薄褐色土　粘質土と0.5mm以下の細砂粒の混合層で、３～５mm大の砂粒をやや多く含む。堅く締まり崩れにくい。
7．黒白褐色土　パイラン土風化層で風化がひどく、褐色細砂粒を多く含む。３～５mm大の砂粒を多く含みもろく崩れやすい。
8．薄褐色土　0.5～１mmの砂粒を主体をする砂質層で、２～３mm大の砂粒を若干含む。非常に柔らかくもろい。
9．薄褐色土　粘質土を主体とし、パイラン土風化土を若干混入する。１～２mm大の砂粒を少量含み比較的堅く締まっている。
10．白褐色土　パイラン土風化層でやや風化が進む。長石風化層である白褐色細砂粒を多く含み、一部に褐色細砂粒を混入する。比較的堅く締まっている。

図87. SK48遺構図（1/50）



1．褐色土
わずかに炭化物の混入が見られる。堅く締まっている。若干の粘質土を含む砂質層。
2．褐色土
3～5㎜の砂レキを若干含み堅く締まっている。砂質層で1層と同一の可能性もある。
3．暗黒褐色土
炭化物を少量含む。3～5㎜の砂レキを含み堅い砂質層。
4．黒褐色土
粘質土を多く含み比較的堅い。5～10㎜のレキを含む砂質層。
5．暗褐色土
粘質土と砂質土の混合層で3～5㎜の砂レキをかなり多く含む。堅く締まる。
6．暗黒褐色土
砂質層で粘質土をごくわずか含む。炭化物が少量含まれ比較的堅い。
7．明暗赤褐色土
非常に細かい粒子の砂質層を主体とする。柔らかくもろい。
8．暗赤褐色土
粘質土と砂質土の混合層で、3～5㎜の砂粒を若干含む。比較的堅い。
9．暗黒褐色土
わずかに炭化物が混入する。3～5㎜の砂粒を多く含む砂質層で堅く締まる。
10．暗褐色土
非常に細かい粒子の砂質層を主体とし、3～5㎜の砂粒を若干含む。柔らかい。
11．暗黒褐色土
炭化物をやや多く含み堅く締まっている。細かい砂粒を主体とする砂質層。10層と同一の可能性あり。
12．黄褐色土
5～7㎜の砂粒を含む砂質層で非常に堅い。粘質土をごくわずか含む。
13．褐色土
0.5～1㎝の砂粒を主体とする砂質層で柔らかくもろい。黄褐色粘質土をごくわずか含む。
14．暗茶褐色土　粘質土層で細かい砂粒を若干含む。パイラン土をブロック状にごくわずかに含み柔らかくもろい。
15．明褐色土
細かい砂粒を主体をする砂質層で、粘質土を多く含む。柔らかくもろい。
16．暗褐色土
2～3㎜の砂粒を多く含み堅く締まっている。炭化物がごくわずか含まれる。
17．明白褐色土
花崗岩パイラン土の風化がかなり進んだもので、比較的堅い。粘質土がかなり混入する。
18．白褐色土
花崗岩パイラン土の風化層で柔らかくもろい。わずかに褐色砂質土が混入する。
19．暗褐色土
炭化物がわずかに混入し堅く締まっている。層の西側に花崗岩パイラン土がブロック状に混入する部分がある。
20．明褐色土
3～5㎜の砂粒を多く含む砂質層で、1～3㎝程のブロック状に明褐色粘質土を混入する。堅く締まる。
21．明黄褐色土
花崗岩パイラン土で風化が激しい。褐色粘質土を2～3㎝のブロック状に含み柔らかい。
22．白褐色土
花崗岩パイラン土で風化している。地山の可能性もあるが柔らかくもろい。
23．明暗褐色土
細かい砂粒を主体とする層で、2～3㎝のブロック状に黄褐色粘質土を含む。比較的堅い。
24．暗灰褐色土
黄褐色粘質土をブロック状に含む砂質層で灰色細砂質層を層状に含む。柔らかくもろい。
25．白褐色土
花崗岩パイラン土で黄褐色粘土、灰褐色砂質土を1～2㎝程のブロック状に含む柔らかくもろい。
26．白褐色土
花崗岩パイラン土で若干の風化が見られる。柔らかくもろい。地山の可能性あり。
27．黄白褐色土
花崗岩パイラン土で風化が激しい。白褐色細砂粒（長石風化層）をブロック状に混入する。柔らかい。
28．灰褐色土
2～3㎜の砂粒を主体とする層で非常にもろい。褐色砂粒と灰色砂粒の互層になっている。
29．明白褐色土
花崗岩パイラン土で風化がかなり進み、長石が風化した白褐色砂粒を含む。もろい。
30．暗白褐色土
白褐色の細砂粒を主体をする砂質層。もろい。
31．暗白褐色土
褐色細砂粒を主体をする砂質層で少量の1～2㎜の砂粒を含む。柔らかくもろい。
32．暗褐色土
褐色砂質土で花崗岩パイラン土をブロック状に混入する。
30～32層は同一層の可能性あり。
33．白褐色土
花崗岩パイラン土で褐色細砂粒を多く含む。もろく崩れやすい。
34．暗褐色土
褐色細砂粒層を花崗岩パイラン土の混合層。砂質層でもろく崩れやすい。
35．白褐色土
花崗岩パイラン土でやや風化が進む。褐色細砂粒を多く含み柔らかくもろい。
36．暗褐色土
褐色細砂粒層の水成堆積層で、パイラン土混合層と互層をなす。柔らかい。

図88. SK49遺構図（1/50）

する砂質土であり、円錐状に堆積しているところから開口部からの流入土とみられる。第2群は同様に円錐状に堆積している。壁の崩落など地山土塊を多く含む埋土である。上面は風化土壌が形成されている。この時点で一定期間放置されたと見られた。第3群は地山土塊を多く含み、第2群と壁面の間を埋める埋土である。西側から流入している。第4群は覆土上半部を形成する埋土であり、長期間の間に徐々に壁面が崩壊、拡大している。この間、常に窪地状を呈していたと見られる。すべて土壌化した埋土の堆積がみられた。本遺構内からの出土遺物はない。

SK50(a,b)：B8区の丘陵尾根の東側斜面に立地する、いわゆる二段式貯蔵穴である。北側にSK49が近接している。上部をSK50a、下部（二段目）をSK50bと呼ぶ。SK50aの床面の平面は楕円形である。床面の規模は長さ2.9m、幅2.1m、深さ2.9mを測る。壁面は床から0.2～0.8mまで遺存している。壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。北東側壁の直下に幅0.4m、長さ0.4m、深さ0.1mの掘り方がある。SK50bの床面の平面は円形である。床面の規模は径1.5～1.6mである。また、SK50a床面からの深さは2.1mを測り、地上検出面からの深さは5.0mである。壁面は調査時にSK50a西壁との連結部が崩落したが、ほぼ原形をとどめている。壁面は約1.0mまで直立かやや膨らみ、それから次第にすぼまり、SK50aの床面開口部に達する。断面形は袋状を呈する。開口部は径0.7mの円形を呈する。床面に掘り方はない。覆土の観察はSK50bは調査が危険であるために諦め、SK50aについてのみおこなった。なお、SK50bの調査所見では、比較的単純な地山土塊を含む砂質土で構成されていた。壁面の遺存状態がよいことからみても、これらの埋土は比較的短期間におこなわれたと考えられる。

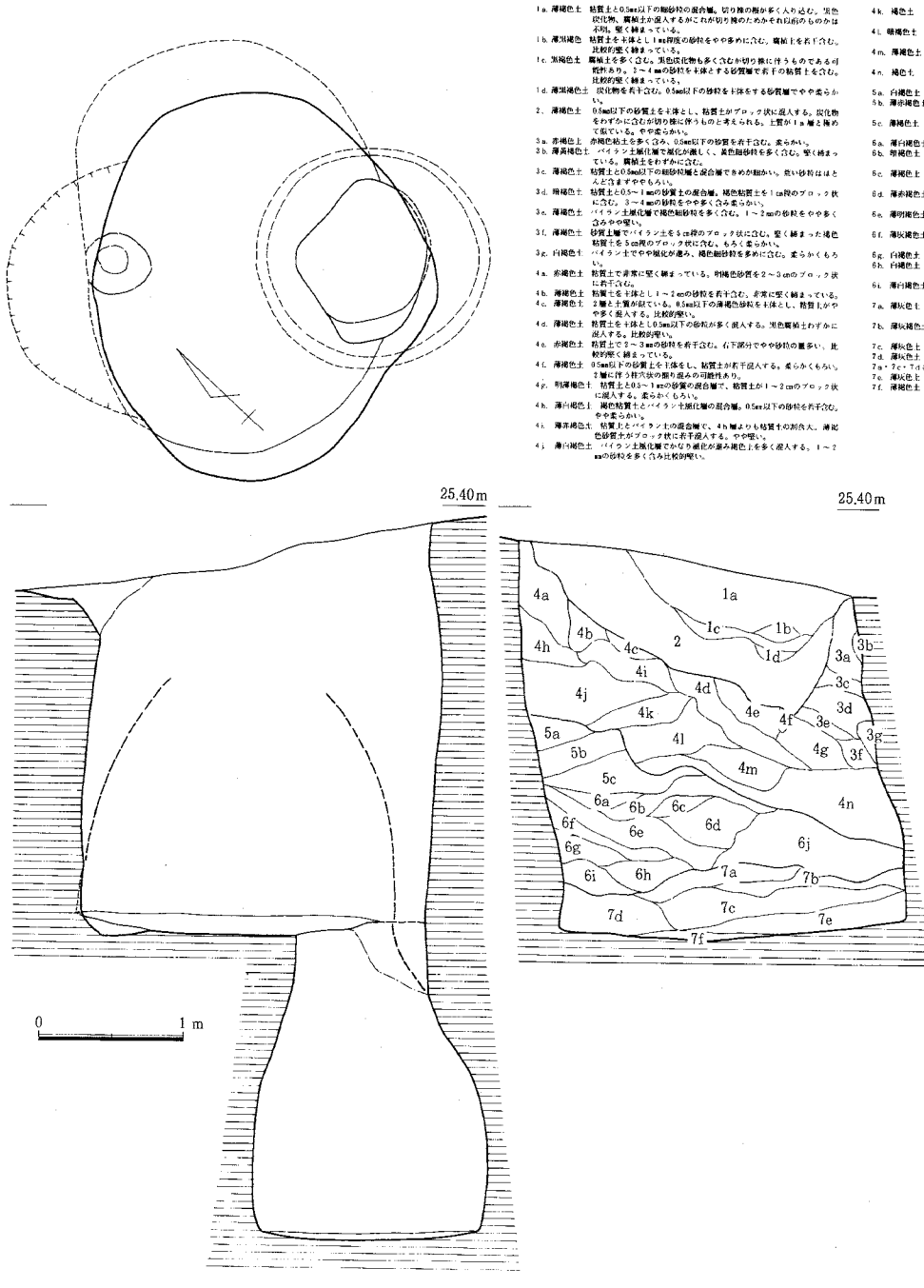


図89. SK50遺構図（1/50）

第１群は床面上に厚さ0.5m ほど水平に堆積する砂質土である。床面中央部が高く、開口部からの流入と見られる。第２群は斜面上方、北側からの流入堆積土であり、壁面崩落を含む地山土塊が多く含まれている。第３群は覆土上半部を形成する埋土であり、中央に窪地状に堆積していた。土壌化した埋土である。本遺構内からの出土遺物はない。

SK51：Ｂ７区の丘陵尾根の東側斜面に立地する。南西側0.5mにSK42が近接している。床面の平面は隅丸の半円形である。床面の規模は長さ2.3m、幅1.7m、深さ2.9mを測る。壁面は床から0.6～1.0 m まで遺存している。壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。直辺壁の直下に幅0.5 m、長さ0.4m、深さ0.1mの掘り方がある。また、直辺と右辺の隅部にも幅0.4m、長さ0.2m、深さ0.1 mの掘り方がある。覆土は四群に区分される。第１群は床面上に厚さ0.1m ほど水平に堆積する砂質

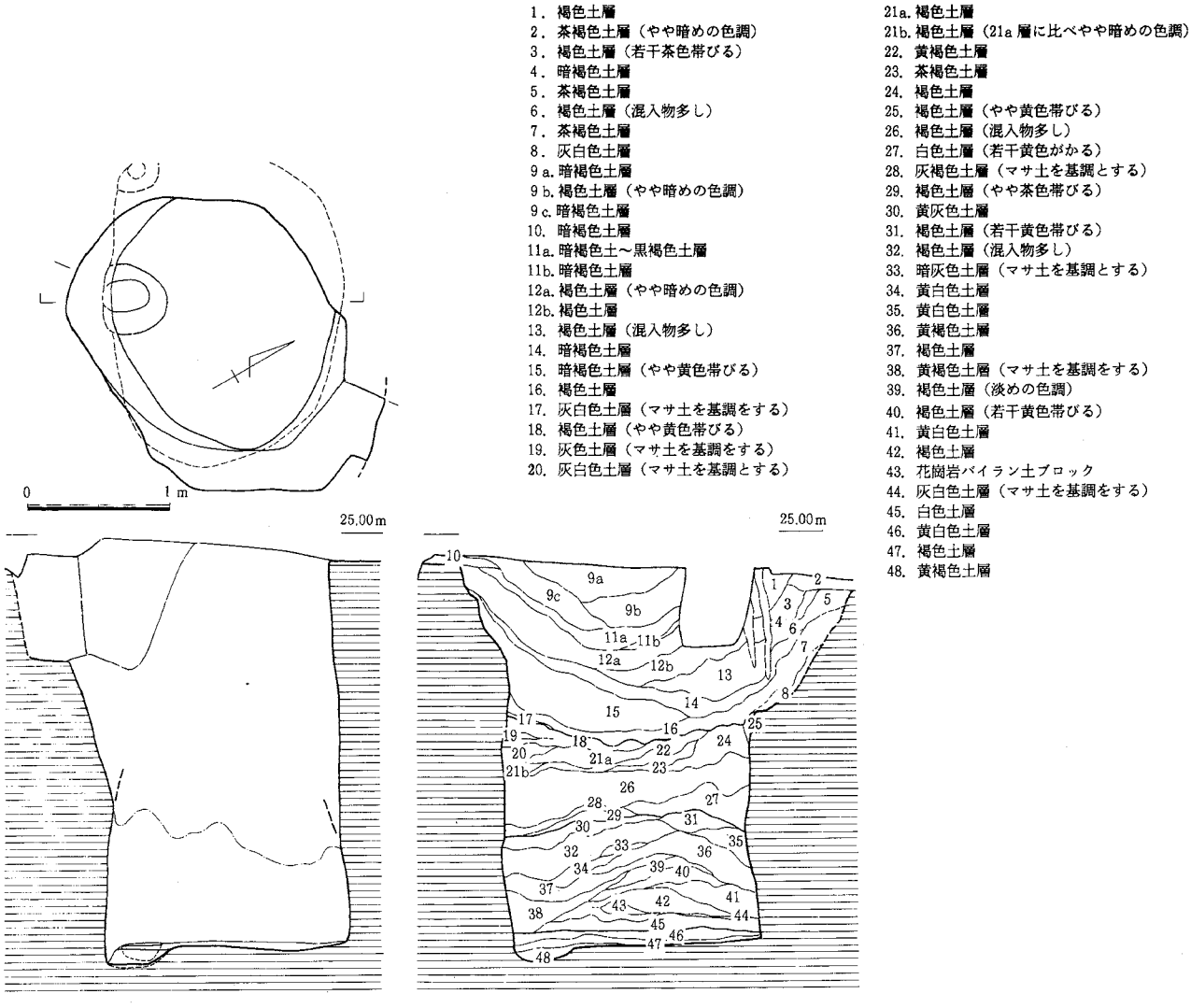
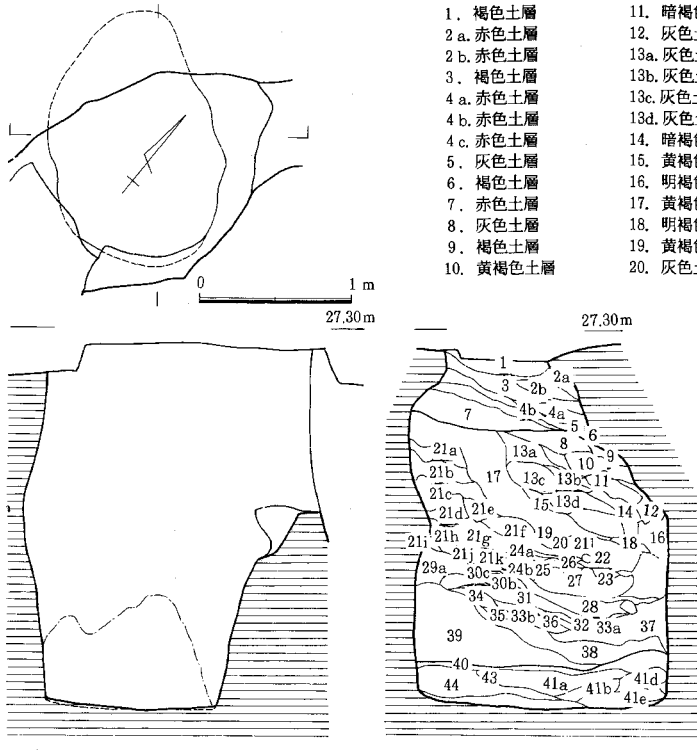


図90. SK51遺構図（1/50）

土である。掘り方内にも入る。第２群は床面中央部に円錐状に堆積する地山土塊を多く含む埋土である。床面から1m 未満に堆積し、壁面の遺存部分と対応する。この段階まで貯蔵穴は原形をとどめ、開口部から流入したものと見られる。第３群は斜面上方、西側からの流入堆積土であり、壁面崩落を含む地山土塊が多く含まれている。上面は腐植土が形成されている。第４群は覆土上半部を形成する埋土であり、中央に窪地状に堆積する土壌化した埋土である。壁面は大きく広がり、長期間にわたる流入堆積があったと予測される。本遺構内からの出土遺物はない。

SK53：Ｄ７区の丘陵尾根線上に立地する。北側の SC18が切り、南側の SK36を切る。検出時は南北方向の幅0.6m、長さ約1m 程度の溝状の平面形を示し、開口部の状態を保っていたと見られる。床面の平面は東西に長い不整の楕円形である。床面の規模は長さ1.7m、幅1.2m、深さ2.4m を測る。壁面は床から0～0.7m まで遺存している。壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。床面に掘り方はない。覆土は三群に区分される。第１群は床面上に0.3m 以下の厚さで、水平に堆積している。地山土塊を多く含むが、床面直上は細砂である。第２群は南～東側から流入している。壁の崩落土など地山土塊を多量に含む埋土である。第３群も南～東側から流入している。全体に風化が進み土壌化している。本遺構からの遺物の出土はない。



1．褐色土層
2 a. 赤色土層
2 b. 赤色土層
3．褐色土層
4 a. 赤色土層
4 b. 赤色土層
4 c. 赤色土層
5．灰色土層
6．褐色土層
7．赤色土層
8．灰色土層
9．褐色土層
10．黄褐色土層
11．暗褐色土層
12．灰色土層
13a. 灰色土層
13b. 灰色土層
13c. 灰色土層
13d. 灰色土層
14．暗褐色土層
15．黄褐色土層
16．明褐色土層
17．黄褐色土層
18．明褐色土層
19．黄褐色土層
20．灰色土層
21a. 灰色土層
21b. 白色土層
21c. 灰色土層
21d. 白色土層
21e. 灰色土層
21f. 暗灰色土層
21g. 灰色土層
21h. 白色土層
21i. 黄褐色土層
21j. 黄褐色土層
21k. 灰色土層
21l. 白色土層
22．暗褐色土層
23．明褐色土層
24a. 褐色土層
24b. 褐色土層
25．黄褐色土層
26．褐色土層
27．暗褐色土層
28．褐色土層
29a. 褐色土層
29b. 褐色土層
30a. 灰色土層
30b. 暗灰色土層
30c. 灰色土層
31．褐色土層
32．白色土層
33a. 褐色土層
33b. 褐色土層
34．灰色土層
35．赤色土層
36．灰色土層
37．褐色土層
38．白色土層
39．暗灰色土層
40．褐色土層
41a. 暗灰色土層
41b. 暗灰色土層
41c. 灰色土層
41d. 白色土層
41e. 黄褐色土層
42．褐色土層
43．黄褐色土層
44．灰色土層

図91．SK53遺構図（1/50）

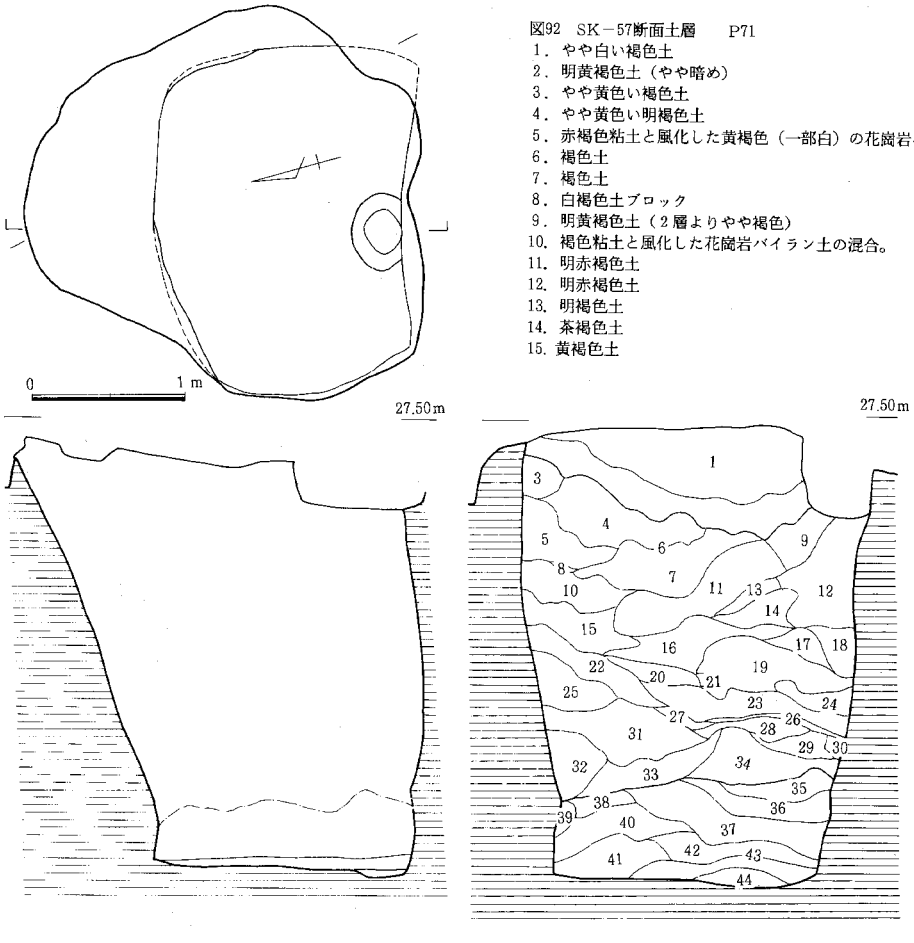


図92　SK－57断面土層　　P71
1．やや白い褐色土
2．明黄褐色土（やや暗め）
3．やや黄色い褐色土
4．やや黄色い明褐色土
5．赤褐色粘土と風化した黄褐色（一部白）の花崗岩バイラン土の混合
6．褐色土
7．褐色土
8．白褐色土ブロック
9．明黄褐色土（2層よりやや褐色）
10．褐色粘土と風化した花崗岩バイラン土の混合。
11．明赤褐色土
12．明赤褐色土
13．明褐色土
14．茶褐色土
15．黄褐色土
16．やや白い褐色土
17．褐色土（やや明るめ）
18．明赤褐色土
19．褐色土
20．赤褐色土（暗め）
21．褐色のブロック
22．黄褐色土（左の方やや白）
23．褐色土（やや赤い）
24．暗赤褐色土
25．白褐色土
26．やや白い黄褐色土
27．褐色土（やや赤い）
28．暗褐色土
29．明黄褐色土
30．褐色土
31．黄褐色土
32．白褐色土
33．黄褐色土
34．明赤褐色土
35．やや白い褐色土
36．褐色土
37．褐色土
38．白褐色土
39．黄褐色土
40．黄褐色土
41．やや白い褐色土
42．褐色土
43．明黄褐色土
44．褐色土

図92．SK57遺構図（1/50）

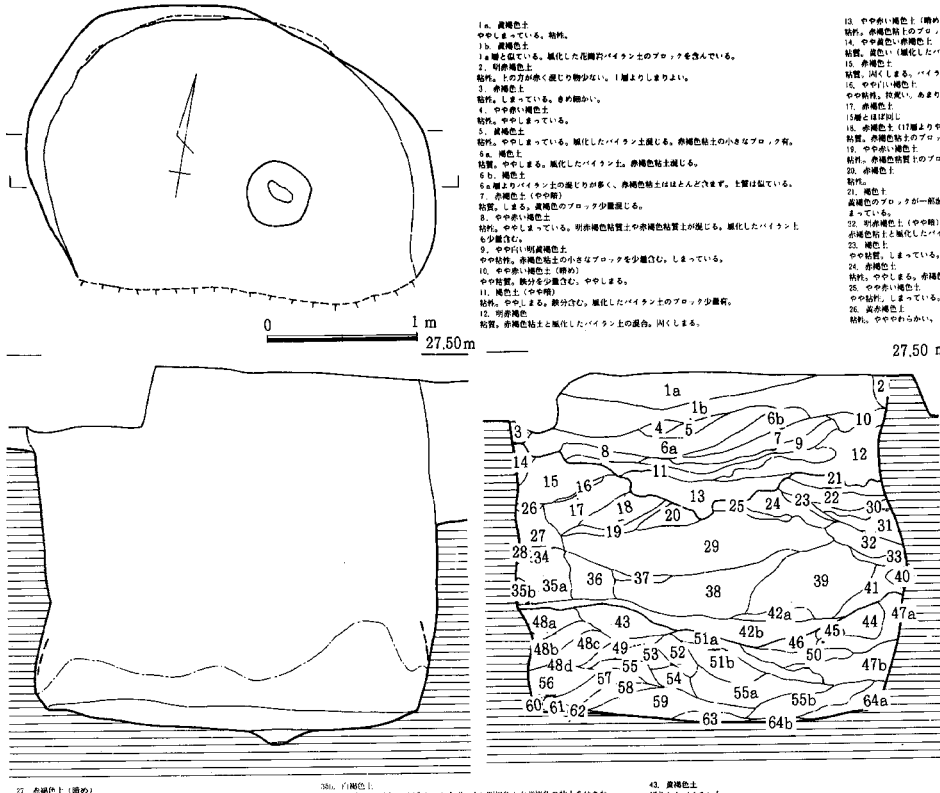


図93. SK59遺構図（1/50）

SK57：Ｄ８区の丘陵尾根線上に立地する。西～南側を病院官舎建設にともなう造成により削平されている。床面の平面は隅丸の長方形である。床面の規模は長さ2.3m、幅1.7m、深さ2.8m を測る。壁面は床から0.3～0.5m まで遺存している。壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。南側壁の直下に幅0.5m、長さ0.3m、深さ0.05m の掘り方がある。覆土は三群に分かれる。第１群は床面上に厚さ0.7m ほど円錐状に堆積するやや風化した地山土である。第２群は主に北側から流入している。壁面の崩落など地山土塊を多く含んでいる。第３群は覆土上部を形成する埋土であり、中央の窪地に堆積する土壌化した埋土である。一定期間の流入堆積が予測される。本遺構内からの出土遺物はない。

SK59：Ｅ８区の丘陵尾根線上の南側斜面に立地する。南側を病院官舎建設にともなう造成により、造成面に断面が露出していた。床面よりさらに下まで削平されている。東側1m に SK60が近接している。床面の平面は削平のため明確でない。現状では東西方向に長い楕円形を呈する。床面の規模は長さ2.5m、幅1.8m 以上、深さ2.4m を測る。壁面は床から0.1～0.6m まで遺存している。壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。床面中央の東寄りに径約0.4m、深さ0.1m の円形の掘り方がある。覆土は三群に分かれる。第１群は床面上に厚さ0.7m ほど堆積するやや風化した地山土である。上面はやや窪んでいるが、断面でみると中央部分から土砂の流入があったと見られる。第２群は主に北～東側から流入している。壁面の崩落など地山土塊を多く含んでいる。第３群は覆土上部を形成する埋土であり、中央の窪地に堆積するやや土壌化した埋土である。下部埋土を浸食し、一定期間の流入堆積があったと予測される。本遺構内からの出土遺物はない。

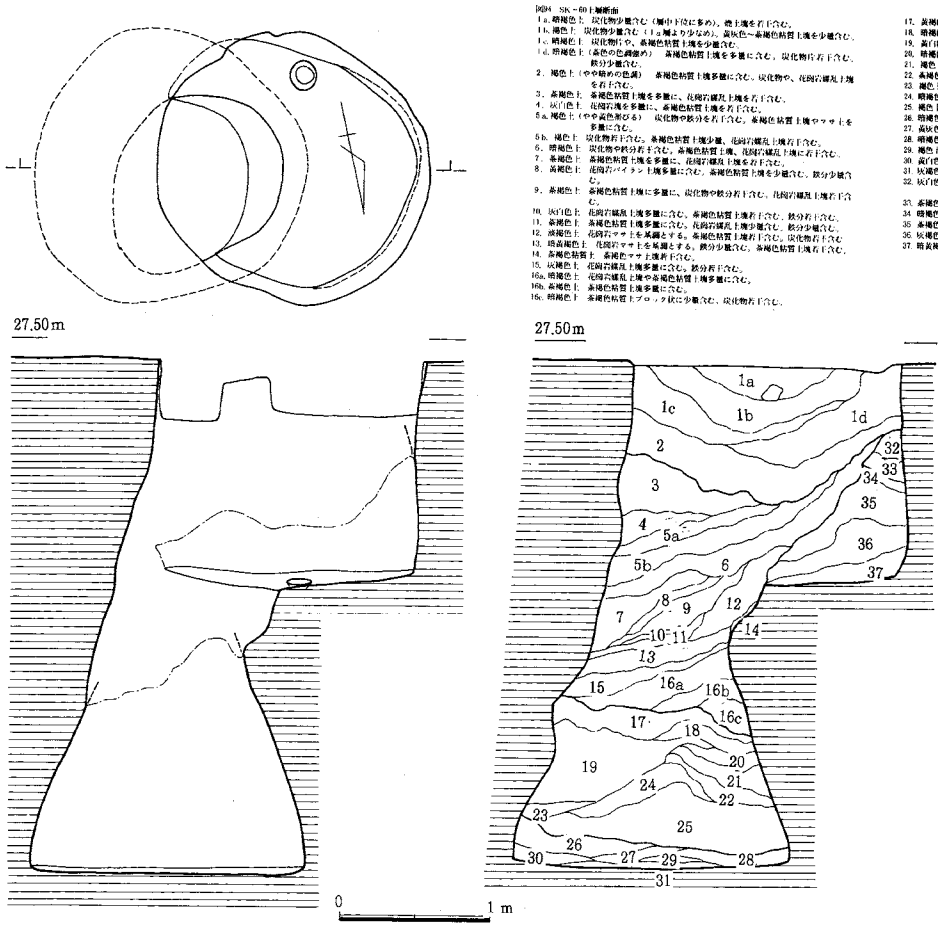
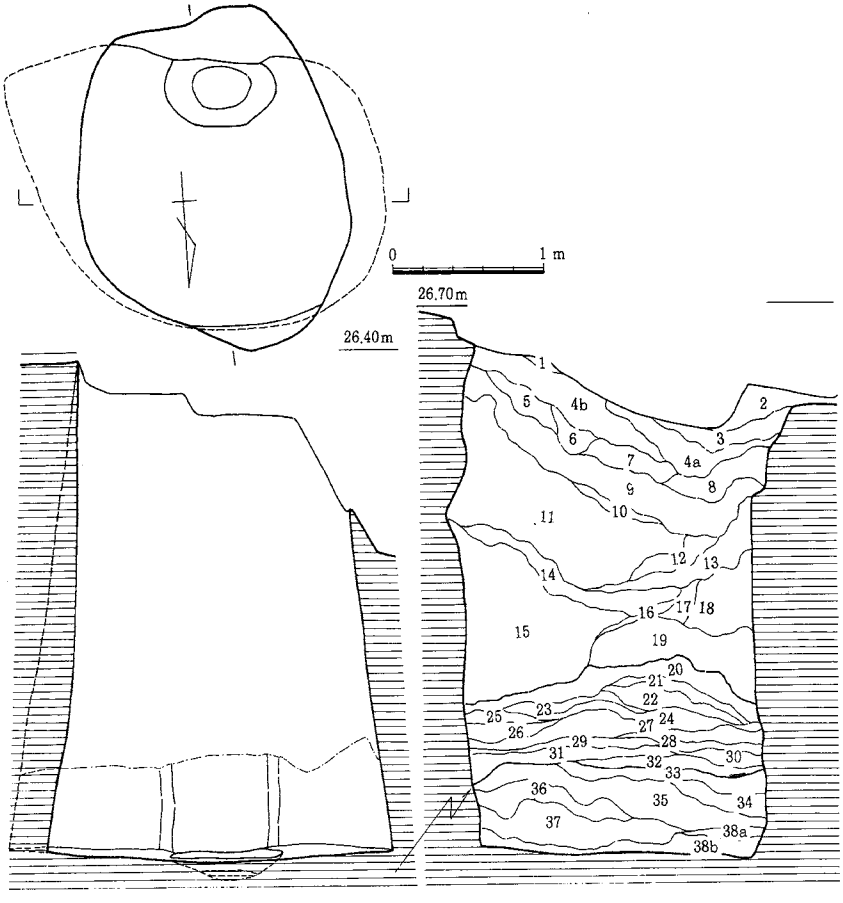


図94. SK60遺構図（1/50）

SK60(a,b)：Ｅ８区の丘陵尾根を僅かに南側に下がった位置に立地する。上部を病院施設建設のため1m 程度削平されている。いわゆる二段式貯蔵穴である。北側の SK34、東側の SK30、南側の SK 59とは検出面でそれぞれ約1m の距離にある。ただし、本遺構の二段目と SK30床面は0.2m 以下の距離であり、降雨時に崩落し、貫通してしまった。本遺構の上部を SK60a、下部（二段目）を SK60b と呼ぶ。SK60a の床面の平面は円形である。床面の規模は径1.8～1.7m、深さ1.5m を測る。壁面は床から0.2～0.8m まで遺存している。壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。南側壁の直下に径約0.2m、深さ0.1m の円形の掘り方がある。SK60b の床面の平面は円形である。床面の規模は径約1.8m である。また、SK60a 床面からの深さは1.9m を測り、地上検出面からの深さは3.4m である。壁面は開口部がやや崩れているものの、床面から1.1～1.5m まではほぼ原形をとどめている。壁面は床面から直線的にすぼまり、SK60a の床面開口部に達するとみられた。断面形はフラスコ状を呈する。開口部は径0.6m の円形と推定された。床面に掘り方はない。覆土は運良く二段目までを通した土層観察をおこなうことができた。四群に分かれる。第１群は SK60b の床面に厚さ0.2m 以下堆積する。粘質土と砂質土の薄層からなる水平堆積である。第２群は SK60a の床面上と SK60b の床から1.1m まで堆積する地山土塊を多く含む埋土である。両床面上に円錐状に堆積することや、壁面の遺存部分を覆うことから、貯蔵穴が原形を保っている段階に、両者の開口部から流入したと見られる。第３群は西側から SK60b の上部から SK60a の中位までを埋める埋土である。壁面崩落土を含む地山土塊が多く含まれている。第４群は覆土上半部を形成する埋土であり、中央に窪地状に堆積する土壌化した埋土である。本遺構内からの出土遺物はない。



1．黄褐色土層
2．暗灰褐色土層
3．黄褐色土層
4a.暗褐色土層（若干黄色帯びる）
4b.褐色土層（若干黄色帯びる）
5．褐色土層（茶色帯びる）
6．褐色土層
7．茶褐色土層
8．暗黄褐色土層
9．暗褐色土層
10．黄褐色土層（マサ土を基調とする）
11．茶褐色土層
12．暗褐色土層
13．褐色土層（やや暗めの色調）
14．茶褐色土層
15．黄褐色土層
16．灰褐色土層（マサ土を基調とする）
17．黄灰色土層（マサ土を基調とする）
18．暗褐色土層
19．暗茶褐色土層
20．灰白色土層（やや暗めの色調）
21．褐色土層
22．灰白色土層（褐色の色調帯びる）
23．褐色土層
24．褐色土層（茶色帯びる）
25．黄白色土層
26．褐色土層（暗めの色調）
27．黄褐色土層（マサ土を基調とする）
28．褐色土層
29．黒褐色土層
30．褐色土層（暗めの色調）
31．灰褐色土層（マサ土を基調とする）
32．褐色土層（マサ土を基調とする）
33．黄白色土層
34．灰褐色土層（マサ土を基調とする）
35．黄灰色土層
36．黄白色土層
37．黄灰色土層
38a.灰褐色土層（マサ土を基調とする）
38b.灰褐色土層（マサ土を基調とする）

図95. SK61遺構図（1/50）

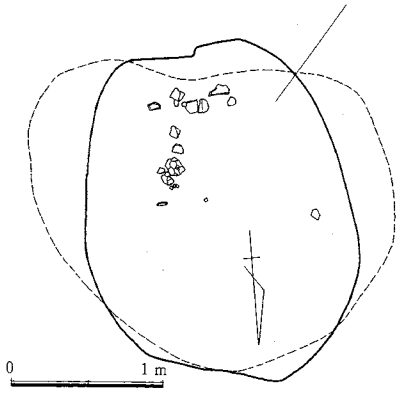


図96. SK61遺物出土状態（1/50）

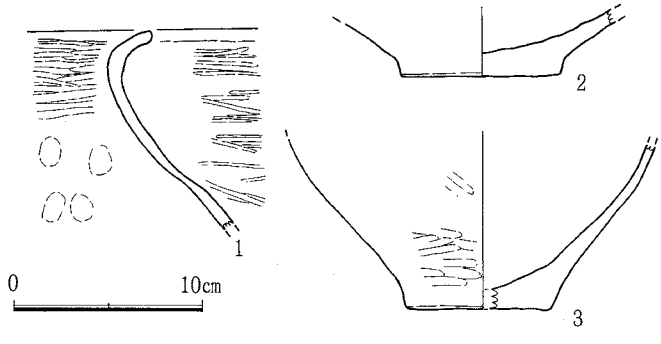


図97. SK61出土遺物（1/4）

SK61： Ｄ８区の丘陵尾根の南側斜面に立地する。南側0.5mにSK62が近接している。床面の平面は不整な楕円形を呈する。床面の規模は長さ2.8m、幅1.9m、深さ3.3mを測る。壁面は床から0.4～0.8mまで遺存している。壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。南側壁中央に柱状の削り出しがある。削り出しは幅0.8m、壁面から0.1m程突出している。高さは上部の崩落のため明確でないが、床面から0.6mまで確認できる。この削り出しの直下に幅0.7m、長さ0.5m、深さ0.2mの掘り方がある。覆土は四群に分かれる。第１群は床面から厚さ0.6m程堆積する。地山土塊を多く含み、壁面の遺存部分に一致する。上面は水平となり、土器片が投棄されていた。第２群は風化の進んだ地山土を主に土壌を含む。円錐状に堆積する。第３群は壁崩壊土など地山土塊を多く含み、最初は南から、後は北から流入している。第４群は覆土上半部を形成する埋土であり、中央の窪地に堆積する土

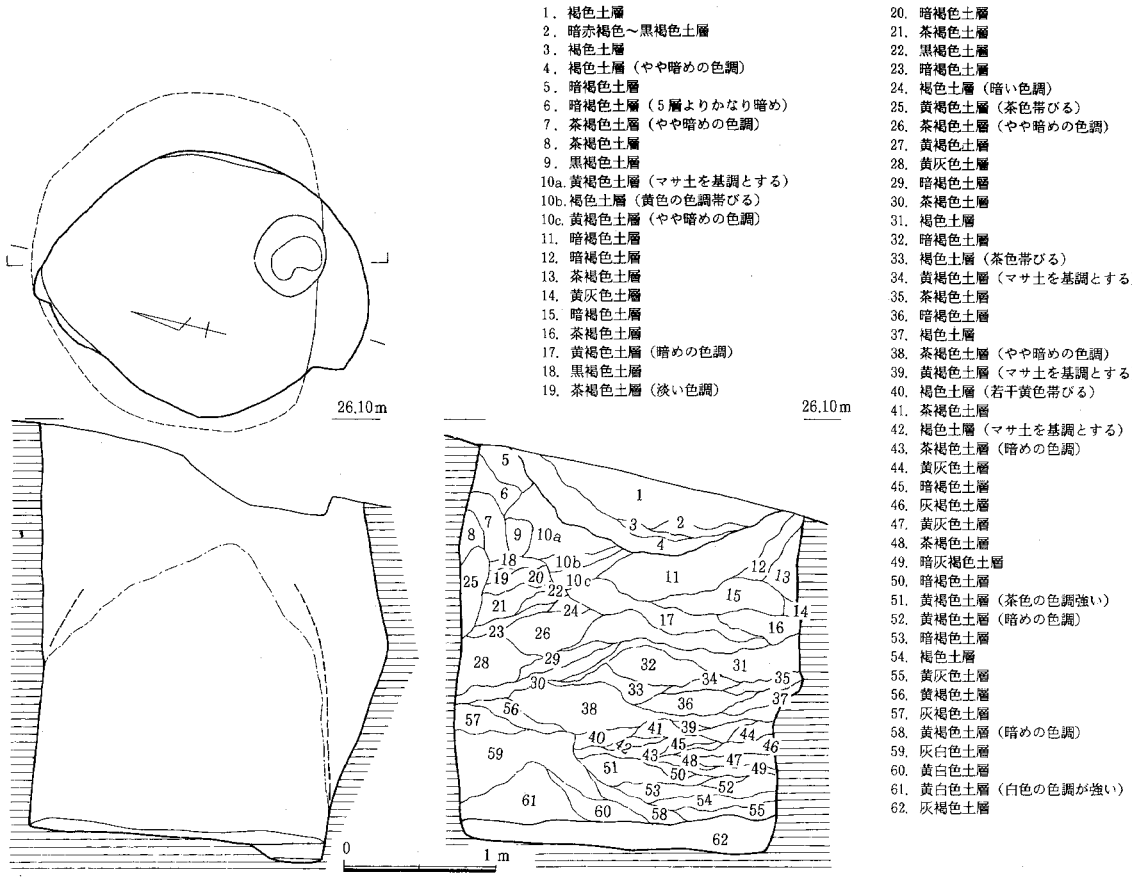


図98. SK62遺構図（1/50）

壌化した埋土である。出土遺物は第1層群の上面で土器類が出土した。1は壷口縁から頸部の破片である。内傾する頸部から口縁は強く外反する。口縁部は肥厚するが、明瞭な段はない外面～口縁内側はヘラミガキ、内面は指押さえ、ナデである。2, 3は壷の底部である。2は平底で底部が短く立つ。3は底部から次第に外反する。外面はヘラミガキである。

SK62： 区の丘陵尾根の南側斜面に立地する。北側にSK61が近接している。床面の平面は隅丸の半円形を呈する。床面の規模は長さ2.3m、幅1.9m、深さ2.7mを測る。壁面は比較的保存が良く、床から1.2～2.0mまで遺存している。壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。直辺中央の直下に幅0.6m、長さ0.5m、深さ0.1mの掘り方がある。覆土は3群に区分される。第1群は床面上に0.2m前後水平に堆積する砂質土である。第2群は南側と北側から交互に流入する。地山土塊を多く含む。第3群は覆土上半部を形成する埋土であり、中央の窪地に堆積する土壌化した埋土である。本遺構からの出土遺物はない。

SK63：D9区の丘陵尾根の南側斜面に立地する。南側を病院官舎建設にともなう造成により遺構の大半を失っている。崖面を清掃中に壁面に残った僅かな覆土を確認したに過ぎない。

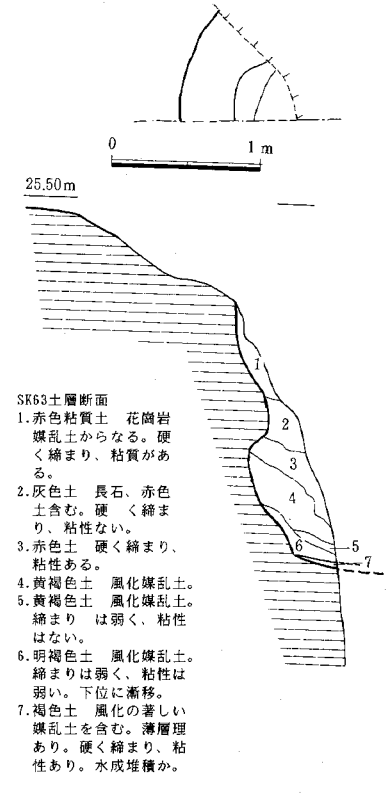


図99. SK63遺構図（1/50）

したがって、貯蔵穴の規模や形態などは明らかでない。本遺構の北東側1.5m に SK62がある。床面の平面は不明であるが、深さは検出面から2.3m を測る。壁面は床面の直上で抉れており、断面形態は不明である。覆土は部分的であり、詳細は不明である。床面上に薄い水成層があり、それより上部は地山土からなる。出土遺物はない。

SK101:D 3 区の丘陵尾根の北側斜面に立地する。周囲に貯蔵穴はなく、単独に分布する。東側上部を 1 号墳周溝に切られる。また、病院建設にともなう造成によりおよそ1m 近く削平されている。なお、貯蔵穴の中央を覆土も切って小断層が入る。このため降雨による壁面の崩壊が激しく、調査は略図の作成にとどめ中断した。床面の平面は楕円形に近いものである。床面の規模は長さ約3.7m、幅3.0m 以上、深さ約2.7m を測る。壁面は床から1.5m 前後まで遺存している。壁面からみると断面形は本来袋状を呈するとみられる。床面の掘り方は精査ができず、未確認であった。覆土は下半部が地山土塊を多く含み、床面中央に円錐状に堆積している。上部は腐植土を多く含んでいる。本遺構からの出土遺物はないが、北側5m 程度の丘陵斜面から石包丁片が出土した（図105－13)。

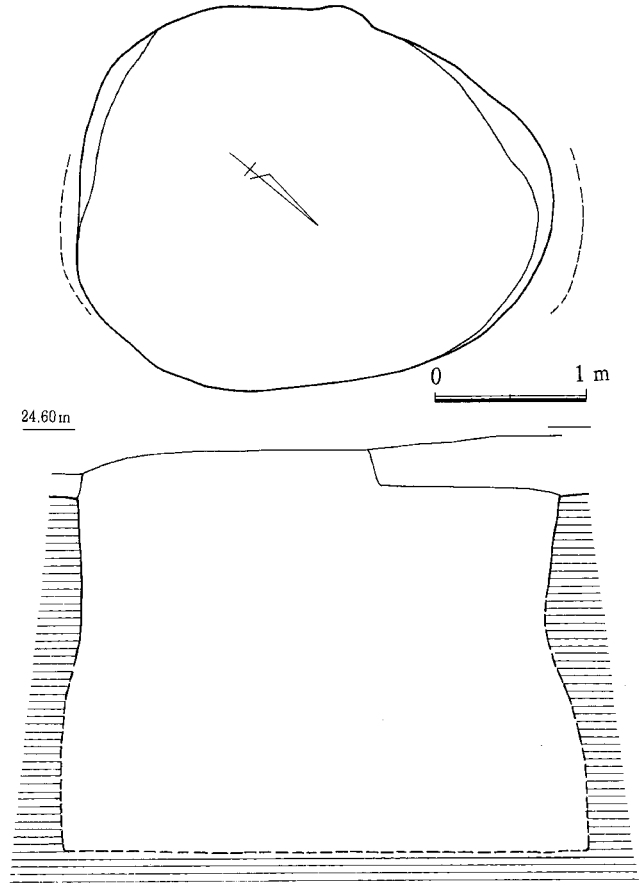


図100. SK101遺構図（1/50）

c，その他の遺構と遺物

本遺跡では、住居状遺構と貯蔵穴以外に少数の弥生時代遺構を検出した。Ⅰ区では単独に炉跡がある。関連する遺物がなく、時期は決め難いが、形態や、覆土が住居状遺構の炉跡と類似することや、同じ分布域にあることから、この時期の所産であると推定した。Ⅲ区の土壙は性格は不明であるが、覆土中から多くの遺物が出土し、弥生時代であることが判明した。また調査区内では同時期の遺物を少量出土した。以下で示す。

SR55：C 7・8 区の丘陵先端の東側斜面にあり、SC43の北東側約3mに位置する。SR56とは南北に2m離れている。西側を試掘溝で一部を失う。掘り方の平面は不整な楕円形を呈し、長さ0.8m、幅0.7m、深さ0.15m を測る。1 度の掘り直しがある。床面は赤変し、覆土中から多くの炭化物が出土した。

SR56：C 8 区の丘陵先端の東側斜面にあり、SC43の北東側約1m に位置する。掘り方の平面は楕円形であり、長さ0.5m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。埋土中に床面があり、赤変している。覆土に多くの炭化物が含まれる。

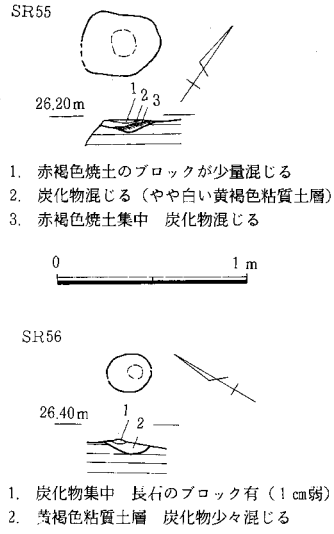


図101. SR55•56遺構図（1/50）

SK107：K11区の丘陵頂部に近い東斜面にある。5号墳の墳丘下から周溝にかかっている。南側は調査区外となる。平面は隅丸長方形を呈する。床面は三段に分かれ南から北に次第に下がる。断面は逆台形を呈する。規模は長さ3.4m 以上、幅2.1m、深さ0.85～1.3m を測る。覆土は二群に分かれ、下部に地山の風化土が0.2m 以下堆積し、これより上部はすべて腐植土壌からなる。長期間の自然流入土と考えられた。遺物は下部層の直上から土器類と石器類が出土した。1～4は土器である。1.2は甕口縁部であり、口唇部外面に断面三角形の突帯を張りつける。4.5は甕底部であり、平底から直線的に立ち上がる。調整は激しい風化のために不明である。石器類には石鏃、剥片、砕片などが5点と石斧1点がある。6は石鏃である。良質の黒耀石を素材とする。先端部を欠損する。底面は浅く窪むが、

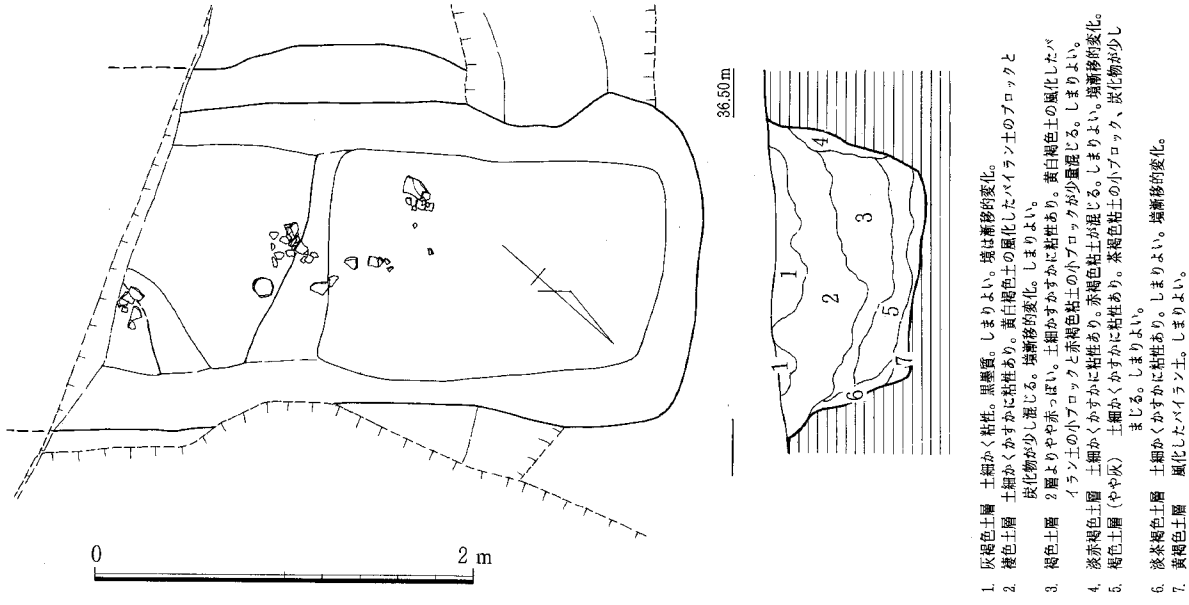


図102. SK107遺構図（1/40）

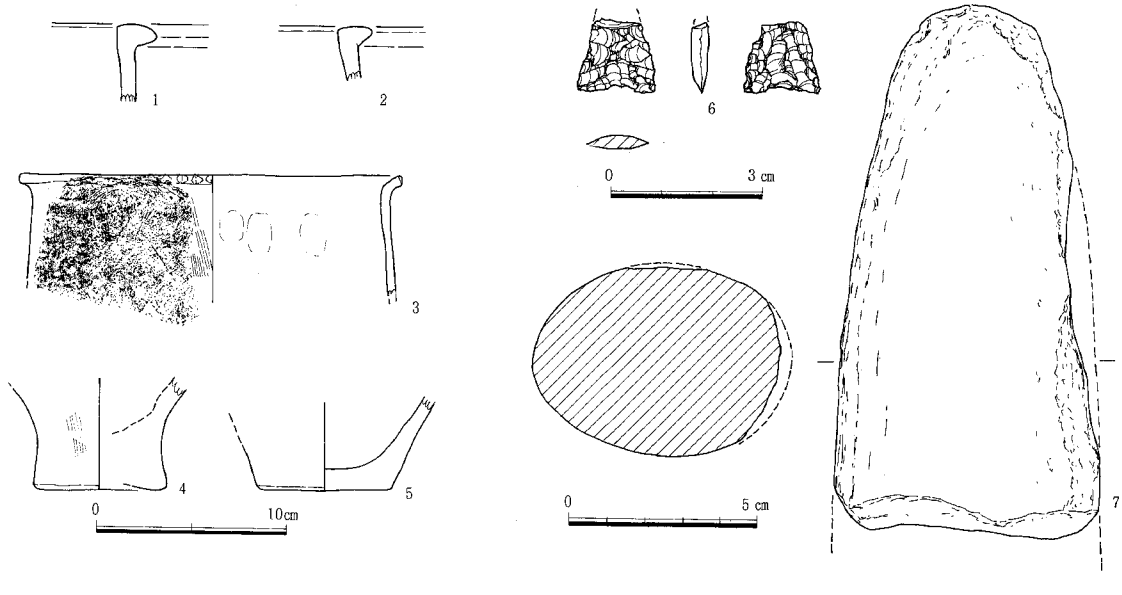


図103. SK107出土遺物（1/4, 1/2, 2/3）

三角鏃としてよい。現状で長さ1.5cm、幅1.5cm、厚さ0.3cmを測る。7は石斧である。花崗岩を素材とし、先端を欠損する。長さ14cm、幅7cm、厚さ5cmを測る。

SK109：K10区の丘陵頂部に近い東斜面にある。南側は調査区外となり、北側は防空壕に切られる。平面は楕円形を呈するとみられた。断面形は浅いすり鉢状を呈する。規模は長さ1.3m以上、幅0.9m、深さ0.2～0.3mを測る。覆土はすべて腐植土壌からなる。本遺構の覆土中位から下位にかけて多くの黒耀石片と少量の土器片が出土した。土器片には図化できるものがない。黒耀石片は良質な石材であるが、多くが小さな砕片であった。総数で48点ある。内訳は石核（残核）4、剥片3、砕片41であり、定形石器の出土はない。剥離技術と剥片の形態から弥生時代の所産と見られる。

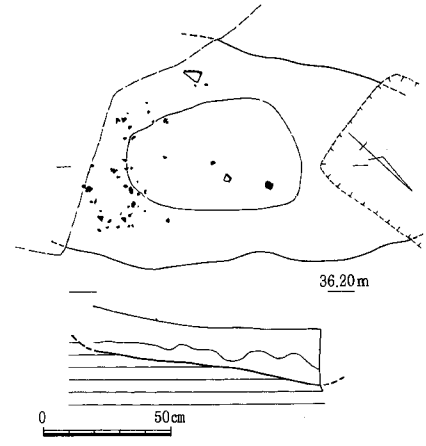


図104. SK109遺構図（1/50）

その他の遺物：調査区内では遺構に伴わない弥生時代の遺物が少量出土した。4号墳墳丘埋土直下から土器片(1～7)、黒耀石片が出土した。1～3,6,5は甕口縁である。口縁部に断面三角形の粘土を張り付け、上面を平坦に仕上げる。4,7は壷片である。8～12はC8区で出土した。壷の口縁部である。13はD3区付近で採集した石包丁片である。砂質頁岩を素材とする刃部の破片である。片面は剥落している。形態は不明である。14は砂岩の縦長の剥片である。背面には自然面が残り、周辺部に粗い調整がみられる。石包丁の未製品の可能性がある。

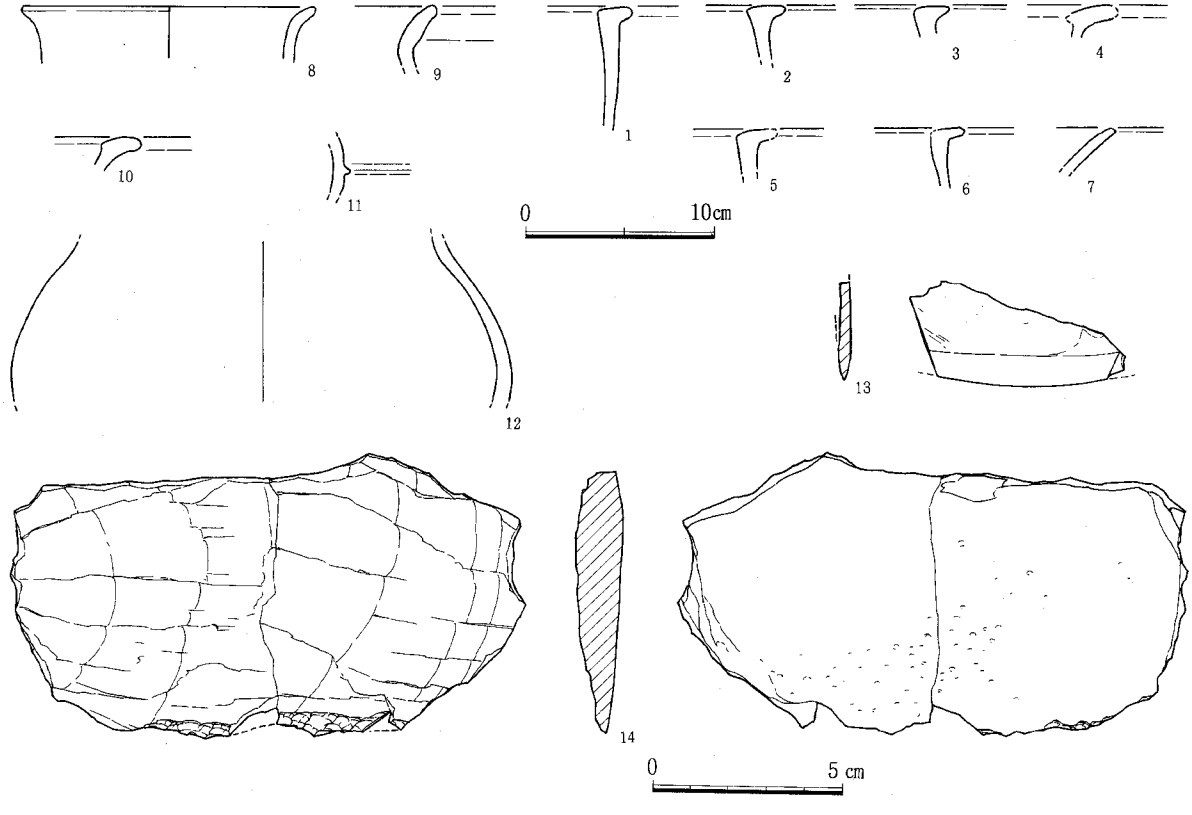


図105. その他の弥生時代出土遺物(1/2,1/4)

5）古墳時代の調査

概要(図106)： 古墳時代の遺構としては古墳5基と木棺墓1基がある。また、関連遺構として石組遺構1基がある。古墳は丘陵頂部、尾根線上から先端部といった眺望の良い場所に列をなすように設けられており、1号墳と2号墳、4号墳と5号墳がそれぞれ近接して築造されている。これらは近接しても周溝が共有することも、切り合うこともない。5基の古墳は何れも近年の造成などの工事により、何らかの破壊を受けている。特に3号墳の周囲から5号墳を繋ぐ丘陵部分と南側一帯は造成工事により最大10m以上切り下げられており、この付近に古墳が存在したかは明らかに出来ない。しかし、1930年頃の地形図（図2）をみると、古墳の並ぶこの丘陵より南側には丘陵は派生していない。またこれより西側に延びる丘陵尾根上には事前の試掘調査や、調査中の踏査においても古墳の痕跡すら認めることが出来なかった。これは丘陵頂部に設けられた4、5号墳より尾根線を西側に進むと平野部への眺望が失われる点も関係するとみられる。こうした点と古墳の分布密度からみてもこの丘陵には10基以下の古墳が分布し、一古墳群を形成していたと考えられる。

1号墳外部施設(図107～109)

区の丘陵先端部に立地する方墳である。調査前には古墳の存在が不明であり、重機により、主体部の石棺蓋石を破損したことにより、古墳の存在が明らかとなった。墳丘の上面には斜面に直交する畑の耕作痕を示す畦の跡が多数認められた。ある時点に古墳の地表面での痕跡は失われ、畑地になっていたと見られた。南西側周溝外縁と0.5m離れて2号墳がある。古墳の東側は丘陵斜面となり、周溝は

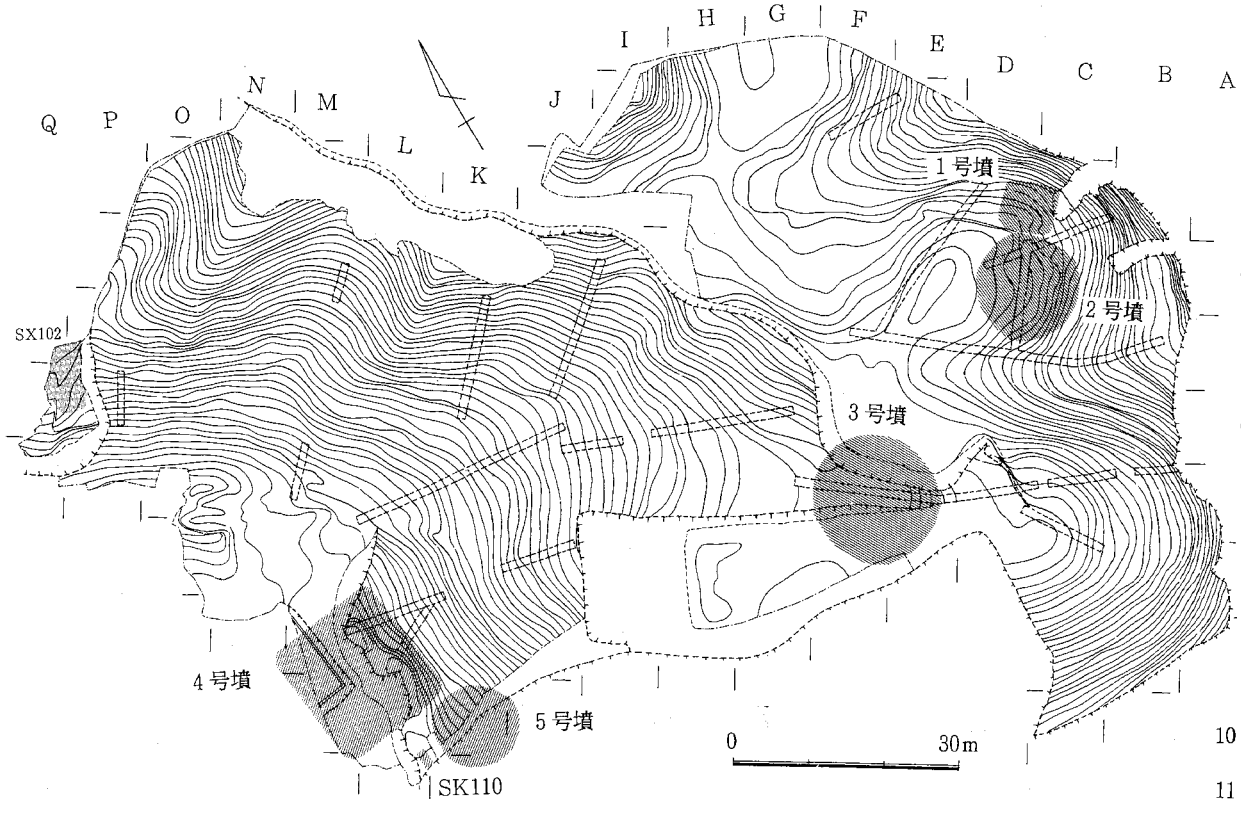


図106. 古墳時代遺構の分布(1/1,000)

存在せず、墳端も不明瞭となる。標高23m付近で傾斜の変換点がある。地山整形の痕跡とみられ、墳端線であろうと考えた。斜面に沿ってコ字状に周溝を巡らしている。周溝は隅丸方形を呈し、その主軸はN-38°-Wを取る。周溝の幅は南東側で1.3mと広く、北西側で1.0mとやや狭い。検出面での墳丘の略南北方向の規模は周溝内側で6m、外側で8.2m、また周溝底内側で7.0mを測る。略東西方向は周溝底内側から先の地形変換点まで7.0mを測る。墳高は現状で西側の標高24.3mが最高所であり、隣接する周溝底から約0.5mの高さがある。墳丘盛土は畑地の開墾や造成、今次調査の掘削により上部を大きく失っているために、未確認である。主体部が旧地表下まで掘り下げて設けられており、墳丘があったとしても低平なものであったとみられる。周溝の各隅に近い内2カ所の底に近い部分から赤色顔料が比較的まとまって出土した。それ以外に墳丘や周溝からの遺物の出土はない。

1号墳主体部(図110)

主体部は墳丘中軸から西に約1m片寄って設けられた箱式石棺1基である。石棺の主軸はN-38°-Wである。棺内床面の長さ1.61m、幅0.34～0.38m、深さ0.17～0.22mを測る。頭位は北東側であり、幅がやや広い。床は礫敷きであり、頭位側は細かな砂利を用い、頭部をやや窪ませている。足位側はやや大きい円礫を敷いている。棺材は砂岩の板状節理を有するものであり、蓋石が3枚、西側が2枚、

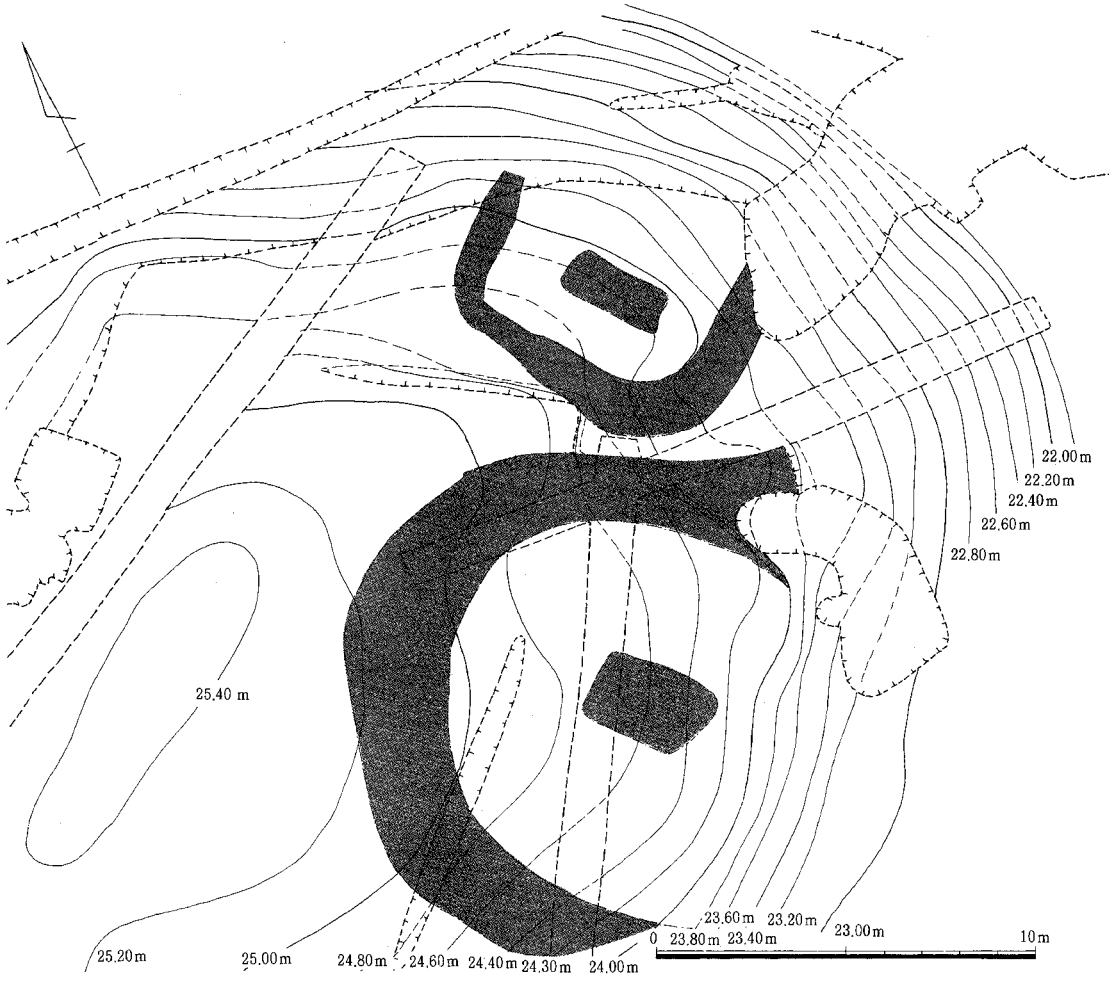


図107. 1・2号墳調査前地形図(1/200)

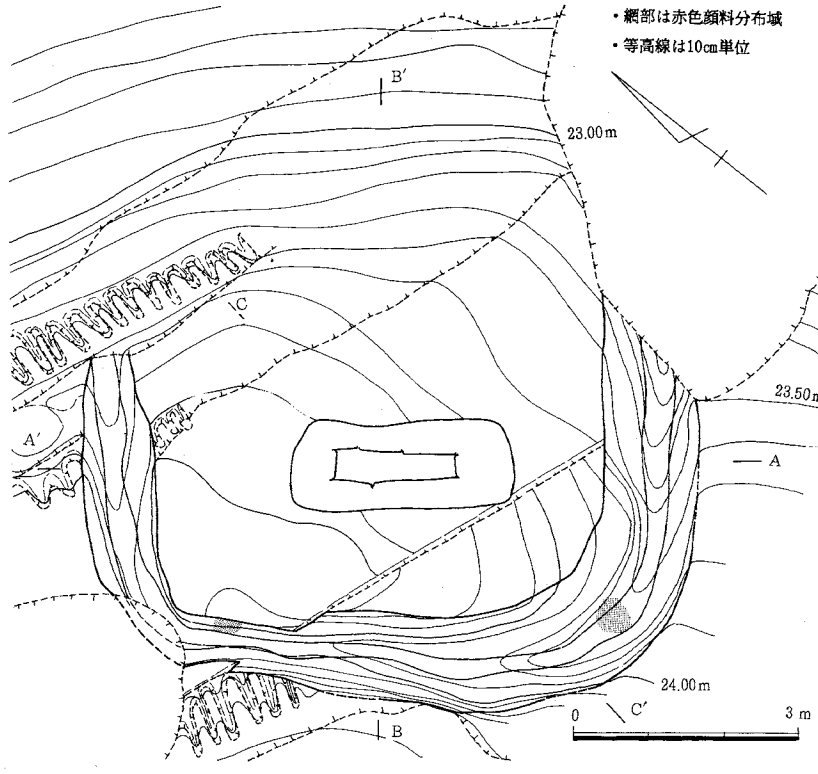


図108. 1号墳墳丘図(1/100)

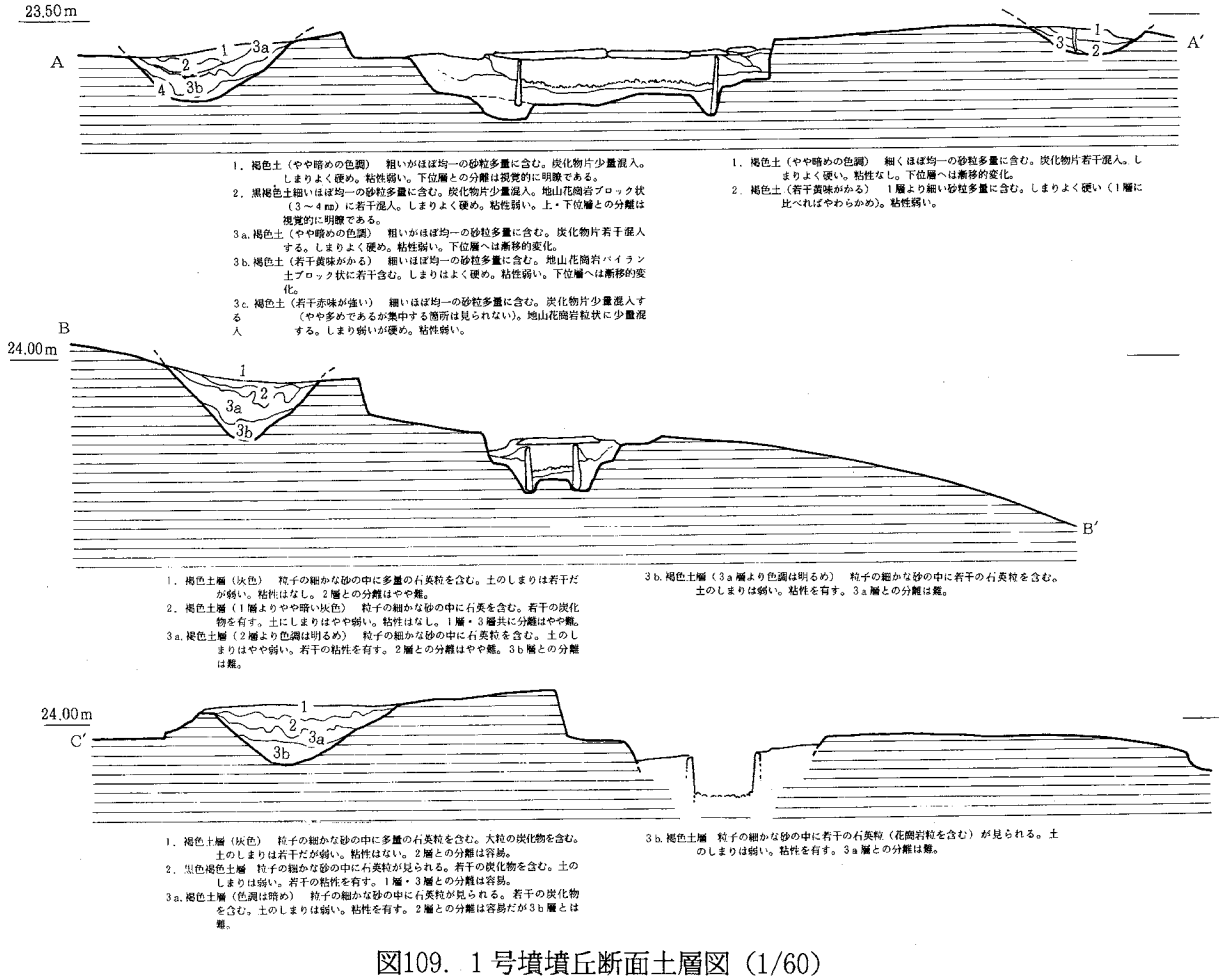
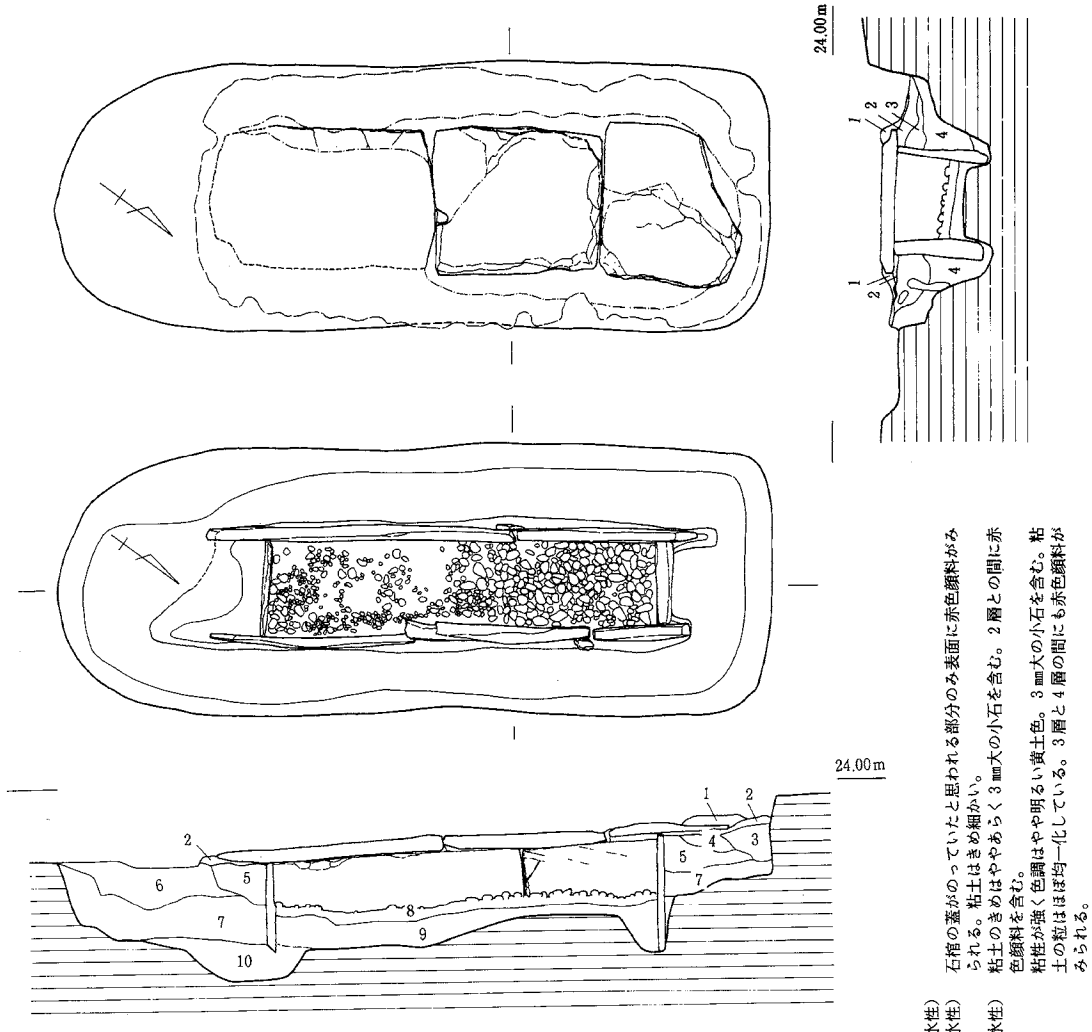


図109. 1号墳墳丘断面土層図（1/60）



1．青灰色粘土（水成）石棺の蓋がのっていたと思われる部分のみ表面に赤色顔料がみられる。粘土はきめ細かい。
2．青灰色粘土（水成）粘土のきめはややあらく3㎜大の小石を含む。2層との間に赤色顔料を含む。
3．青灰色粘土（水性）粘性が強く色調はやや明るい黄土色。3㎜大の小石を含む。粘土の粒はほぼ均一化している。3層と4層の間にも赤色顔料がみられる。
4．茶褐色粘土

1．青灰色粘土（水成）
2．青灰色粘土（水成）　石棺の蓋がのっていたと思われる部分に、赤色顔料がみられる。赤色顔料は粘土に若干浸透しているがきわめてうすく数㎜で消滅する。
3．茶褐色粘質土　青灰色粘土ブロック混じる。2㎜大の小石を含む。小口を離れるほど青灰色粘土ブロックは減少。3層と4層は粘土の比重による差に要因があると思われる。
4．青灰色粘土（水成）　2層の粘土と比較して粒がややあらく3㎜大の小石を含む。
5．青灰色粘土（水成）　鉄分が酸化したため薄いやまぶき色となった部分がまばらにみられる。4層と5層の間には赤色顔料は含まれないが、境界にまばらに茶褐色粘土がみられる。
6．茶褐色粘土　粘性が強くやや明るい黄土色で3㎜大の小石を含む。ところどころ青灰色粘土ブロックが混じる。
7．茶褐色粘土　茶褐色粘土のみであり粘土の粒は均一化されている。
8．砂礫層　土が混じる。赤色顔料のため赤変。
9．黄褐色粘質土　軟質。しまり悪い。上部は赤色顔料のしみ込みあり。
10．茶褐色粘土　粘土の粒はややあらい。7層と10層の境界は不明瞭。

図110．1号墳主体部（1/30）

東側が3枚、小口各1枚の計10枚の石材を使用している。棺の組み合わせは側板が小口を挟む形態であり、設置にあたって墓壙底の4辺に溝を巡らせている。墓壙は長さ2.9m、幅1.1m、深さ0.3mを測る。底の溝はさらに前後掘っている。棺の構築はまず、石材の設置後、棺の内外に埋め土をおこない固定し、さらに棺外全周を水成粘土で覆う。この粘土の上下各面に薄い赤色顔料が観察され、粘土充填の前後に顔料を散布していることがわかる。さらに石棺の側、小口板上面まで埋め土や粘土で埋めてそろえ、蓋石を設置する。蓋石上は水成粘土で覆い、全体を埋めている。なお、蓋石の設置面にも赤色顔料が観察でき、この段階にも顔料の散布行為があったと見られた。なお、最終の蓋石被覆粘土の西側表面に明瞭な段があり、粘土が二分されることがわかる。これが構築過程の痕跡であるのか、

追葬を示すものかは判断できなかった。棺内には赤色顔料が塗布されている。

棺内に2体の埋葬人骨が残存していた。副葬品は認められなかった。

1号墳埋葬人骨出土状態・所見

棺内からは主に南東半を中心として人骨が最低2体分検出された。以下、各骨の出土状態を南東側小口側から列記する。なお、保存状態は全般に悪く、完存しているものはほとんどない。まず、最も南東側には頭蓋骨が、頭頂を南東に、顔面を床面に向けた状態で検出された。そのとなりには、外面を上方に、オトガイを南東に向けた状態で下顎骨があり、これを取り囲むように右寛骨・右脛骨・左大腿骨・肩甲骨片などが認められた。また、下顎骨の下から、別個体のものと思われる下顎骨（左第2大臼歯が遺残）が検出された。この1群のとなりには1個体分の頭蓋冠が認められた。これらは全体的に400×200 mmの範囲にかなりまとめられていて、互いに関節しているものは一切なく、また、大腿骨は近位端を、脛骨は遠位端を下顎骨側に向けるなど、方向性も一定していない。この1群から若干離れた中央よりの部分からは、左上顎第1大臼歯や上腕骨片などが検出されている。なお、南東小口側頭蓋骨の頭頂部周辺・左大腿骨近位端・右脛骨遠位端・上方の下顎骨の内外両面など、近接した部分に赤色顔料が付着しているのが看取された。

さて、まず石棺内に葬られた人骨の個体数は、頭蓋骨や下顎骨の数を見る限り最低2個体が確認されるものの、保存状態が全般的にかなり悪く、具体的に何個体入っていたかや各骨の組み合わせなどは不明な部分が多い。ただし、確認されている範囲内では本来の位置関係を保っている骨は一切ないことは注意すべき所見と思われる。なお、頭蓋骨と下顎骨については人骨所見より1号、2号の組み合わせが特定されるが、これらも、相互に関節もしていなければ位置も本来の関係を保っていない。

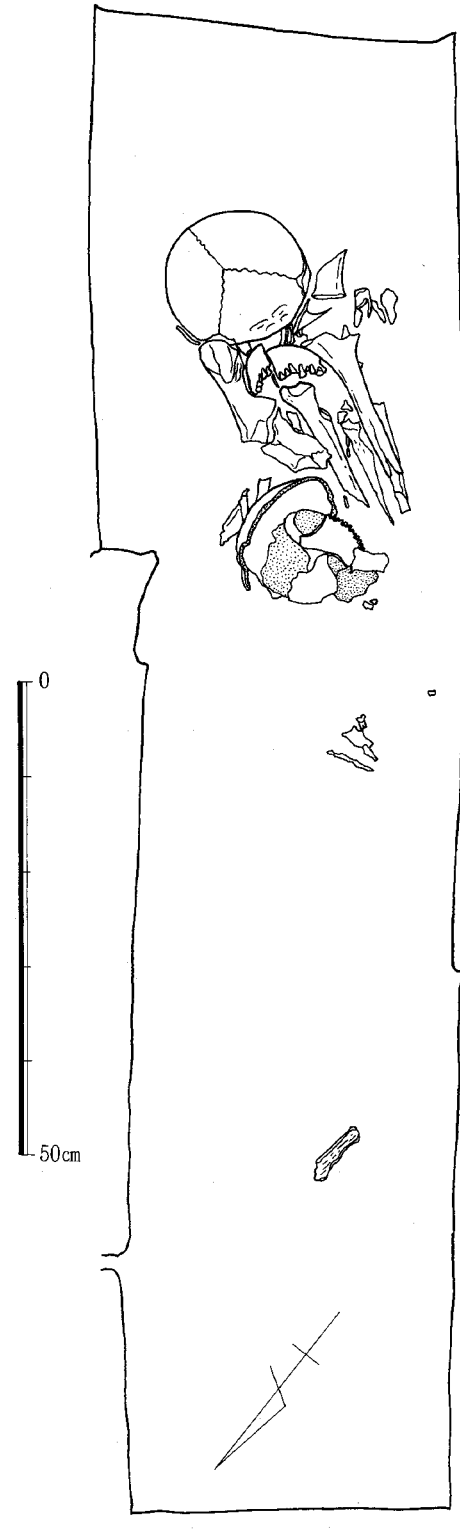
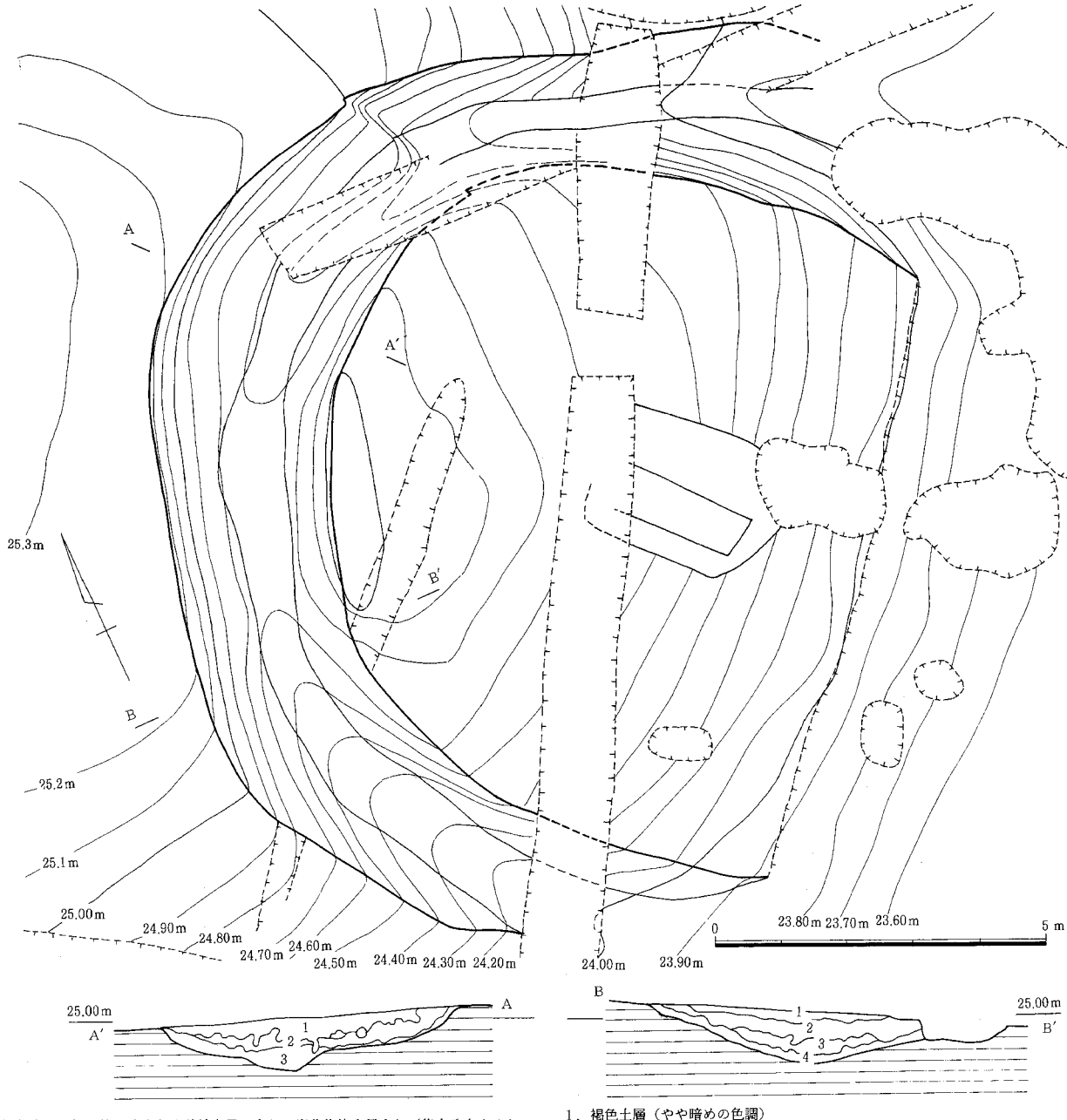


図111. 1号墳主体部人骨出土状況

2号墳外部施設(図107,112)

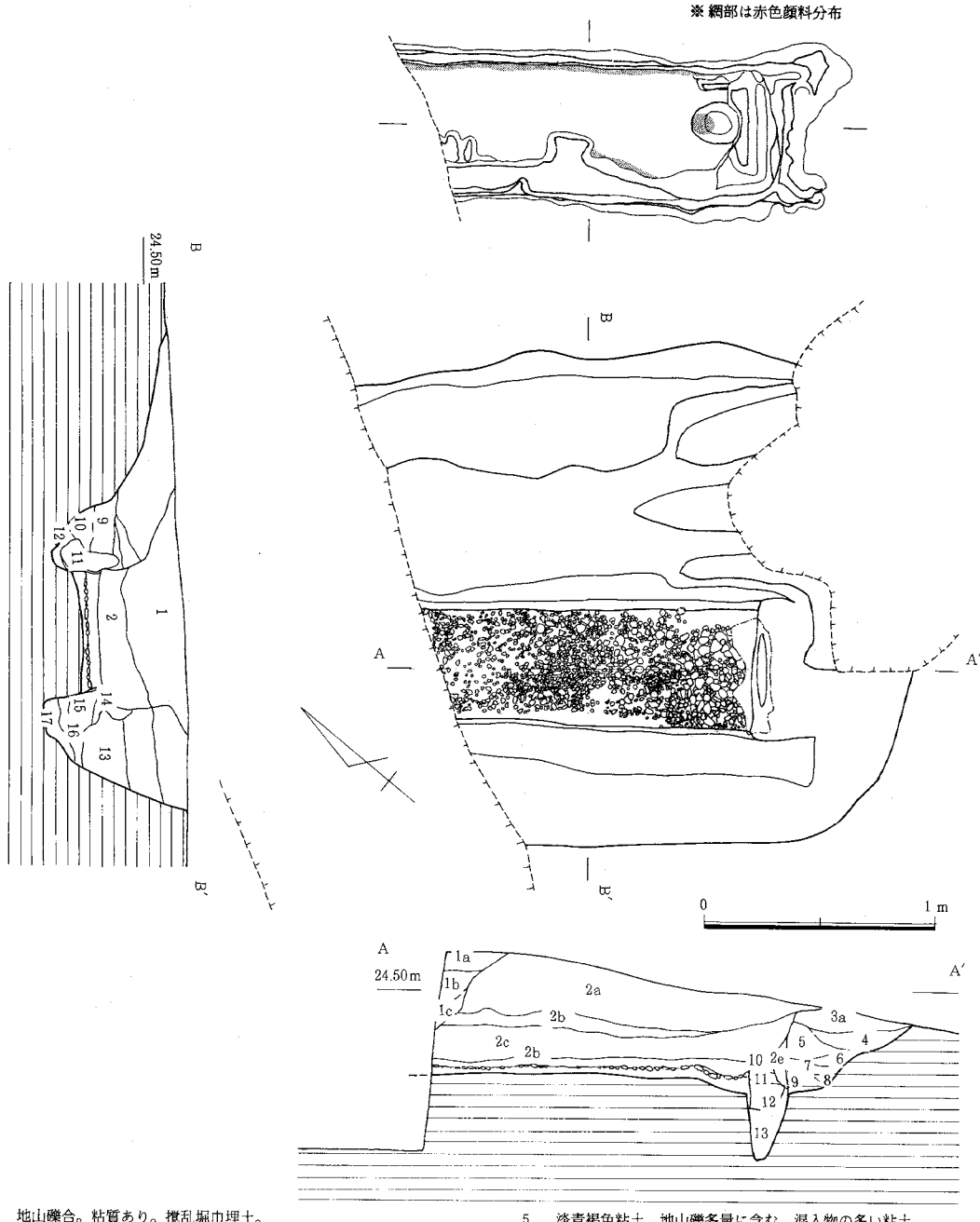
C・D4・5区の丘陵先端部に立地する円墳である。東に落ちる斜面であり、調査前には墳丘や周溝の痕跡はなく、古墳の存在が不明であった。調査前の試掘溝によって周溝、主体部に一部を破壊した。検出段階の墳丘上面は基盤の花崗岩媒乱土となっている。なお、墳丘東側をN-30°-W方向に小断層が形成され、周溝、主体部の一部を壊している。斜面には近年の撹乱坑が多数認められた。ある時点に古墳の地表面での痕跡は失われ、畑地になっていたと見られた。北東側周溝外縁と0.5m離れ



1．暗褐色土層　粗く均一土を欠く砂粒多量に含む。炭化物片少量含む（集中分布するあり方は示さず）。地山花崗岩若干混入する。しまりよく硬め。粘性なし。下位層とは明瞭に区分出来る。
2．褐色土層　炭化物片若干混入する。地山花崗岩バイラン土ブロック状に若干混入し粒状に多量に混入。しまりはよく硬い。粘性弱い。下位層へは漸移的変化。
3．褐色土～赤褐色土層　炭化物片若干混入する。地山花崗岩バイラン土ブロック状に多量に混入。粒状にも多量に混入する。しまりよいがやわらかめ。粘性弱い。

1．褐色土層（やや暗めの色調）
粗く均一土を欠く砂粒多量に含む。炭化物片若干含む。しまりよく硬い。粘性なし。下位層へは漸移的変化
2．褐色土層　炭化物片少量含む（集中分布するあり方は示さず）。しまりはよく硬い。粘性弱い。3層とは明瞭に区分出来る。4層へは漸移的変化示す。
3．黒褐色土層　炭化物・炭化物片少量含む（集中分布するあり方は示さず）。地山花崗岩バイラン土ブロック状に若干混入する。しまりよく硬い。粘性弱い。上・下位層とは明瞭に区分出来る。
4．褐色土層（やや明るめの色調）
炭化物若干混入する。地山花崗岩バイラン土ブロック状に少量混入する。粒状に少量混入する。しまりよく硬い。粘性あり。

図112. 2号墳墳丘、周溝図(1/100,1/60)



A－A′ 断面

1 a. 黄褐色土　地山礫合。粘質あり。攪乱堀巾埋土。
1 b. 黒色褐色土　よくしまる。上下層明瞭。攪乱堀巾埋土。
1 c. 赤褐色土　地山。バイラン土。2次。攪乱堀巾埋土。
2 a. 黄褐色土　硬くしまる。地山礫多量。上部で粘性あり。下部で砂質。よくしまる。棺内埋土。
2 b. 黄褐色土（より黄味強い）
地山礫やや少ない。棺内埋土。
2 c. 黄褐色土（より黄味強い）
少量の水成粘土ブロック含む。棺内埋土。
2 d. 赤褐色土　礫少なくややきめ細かい。赤色顔料を含む。棺内埋土。
2 e. 黄褐色土　FeO 2 多い。砂質強い。
3 a. 明黄褐色土　地山礫多く含む。硬くしまる。
4. 褐色土　地山礫多量に含む。しまりよく硬め。粘性弱い。

B－B′ 断面

1. 赤褐色粘質土　硬くしまる。茶色粘土。地山白色礫ブロック含む。炭化物片あり。
2. 黄褐色粘質土　ややしまる。地山白色ブロック含む。
9. 明黄褐色土　地山礫含む。炭化物片少量。粘性あり。しまり弱くやわらかめ。
10. 赤褐色土　しまりよく硬め。粘性あり。地山礫含む。11層と10層の境10層上位に赤褐色土集中し、層の分離の目印となる。
11. 淡青褐色粘土　かたくしまり、粘土下位は混入物多し。
12. 黄白色マサ土　しまりなし。やわらかい。地山礫を多量に含む。
5. 淡青褐色粘土　地山礫多量に含む。混入物の多い粘土。
6. 褐色土　4層と似た性質の層であるが4層に比べ混入物が少なく粘性も強い。炭化物若干含む。しまりよく硬め。
7. 淡青褐色粘土　地山礫含むが5層に比べれば少なめ。
8. 褐色土（やや色調淡め）
6層よりやや混入物多いがしまりよく硬い。粘性あり。
9. 淡青褐色粘土　5・7層に比べ混入物極めて少ない。
10. 淡青褐色粘土（褐色の色調強い）
混入物多くしまりよくない（他の層に比べても一番硬い）。
11. 淡青褐色粘土　混入物の少ない粘土層
12. 淡青褐色粘土　混入物多し（特に上位に集中）。
13. 黄白色マサ土　しまりよいがやわらかめ。粘性あり。

13. 淡赤褐色土　しまりよくかため。地山礫（1㎜程度の）多量に含む。粘性あり。
14. 淡青褐色粘土　混入物多い。多量に混入する礫は15層に比べて少ない。
15. 淡青褐色粘土　14層と比べるとやや少ない。しかし礫は大きめのものが混入する。
16. 赤褐色土　地山礫含む。しまりよいがやわらかめ。粘性あり。上層・下層ともに層的分離は明瞭。
17. 淡青褐色土　しまりよいがやわらかめ。粘性あり。基調はマサ土ぽい。

図113. 2号墳主体部（1/30）

て1号墳がある。周溝は完周せず、斜面に沿って馬蹄形状に周溝を巡らしている。周溝は平面上ほぼ正円形を呈する。東側は近年の造成により、旧地形を失っている。周溝の幅は南西側で2.5m、北側で3.0mである。断面は浅いU字形であり、深さは0.5m前後を測る。検出面での墳丘規模は周溝内側で東西10m、南北9m以上、外側で東西14mを測る。また周溝底内側では東西11.5mを測る。墳高は現状で西側の標高25.1mが最高所であり、隣接する周溝底から約0.3mの高さがある。墳丘盛土は未確認であるが、1号墳と同様に低平なものであったとみられる。墳丘や周溝からの遺物の出土はない。

2号墳主体部(図113)

主体部は墳丘のほぼ中央に設けられた組合式木棺1基である。西側小口部分を試掘溝により破壊している。木棺の主軸はN-38°-Wである。棺内床面の長さ1.5m以上、幅0.42～0.5mを測る。棺内の深さは不明であるが、墓壙内埋め土の状態から0.2m前後と見られる。頭位は南東側であり、幅がやや広い。床は礫敷きであり、頭位側は大きめの円礫を用い、頭部をやや窪ませている。また小口に接して水成粘土を置き、頭部付近を凹ませている。足位側はやや細かな砂利を敷いている。棺材の組み合わせは側板が小口を挟む形態であり、設置にあたって墓壙底の4辺に溝を巡らせている。棺材の厚さは5cm前後と見られる。墓壙は長さ2.4m以上、幅2.1m、深さ0.5mを測る。墓壙は東側が二段掘り、西側が一段掘りである。底の溝はさらに0.1～0.3m前後掘っている。溝底は小口側が深い。棺の構築はまず、棺材の設置後、棺の外側に埋め土をおこない固定する。このうち棺に接する埋め土は水成粘土を用いる。さらに蓋材を設置し、埋め土で覆ったと見られる。蓋板上に水成粘土による被覆があったのかは、不明であるが、棺内に転落した埋土にはその痕跡はなかった。棺内両側の面に赤色顔料が付着していた。また、側板に沿った床面にも赤色顔料が観察できた。これらは赤色顔料を棺内面に塗布したものが流下し遺存したと考えられた。また、頭位付近にも赤色顔料が分布している。棺内からは人骨や副葬品は認められなかった。

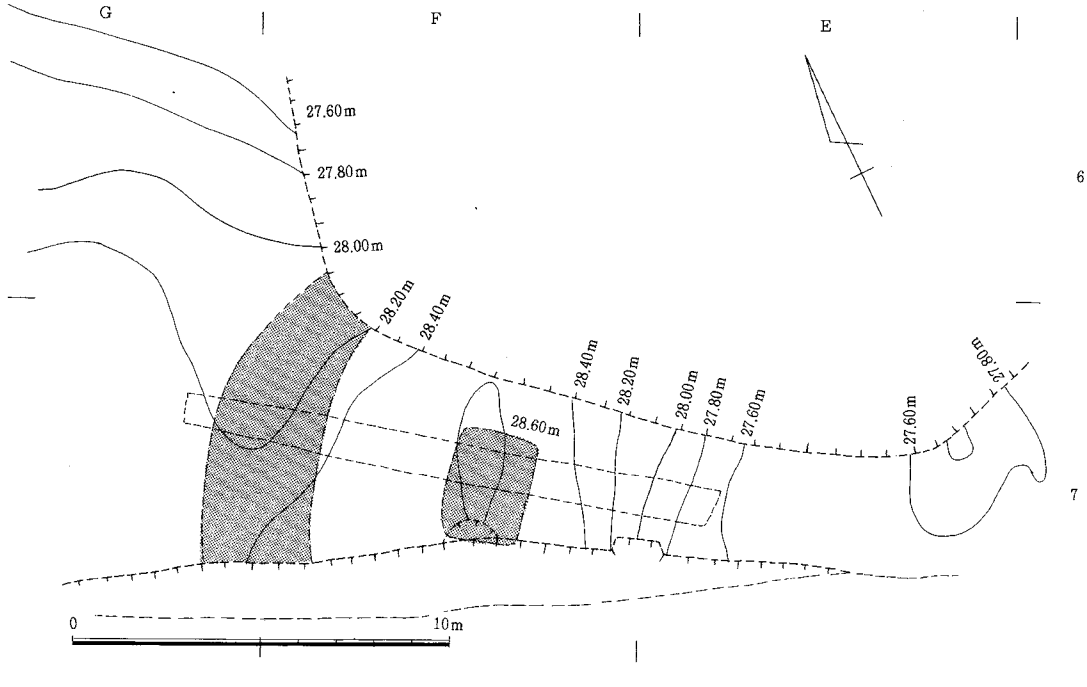


図114. 3号墳調査前地形図(1/200)

3号墳外部施設(図114～116)

E～G6～7区の丘陵尾根上に立地する円墳である。調査前には病院施設建設に伴う造成工事のために南北両側から高さ2～3mを削られ、幅3～5m程がやせ尾根状に残されていた。ただし、側面からみると地形の高まりや墳丘盛土を認め、古墳の存在が明かである。病院建設の際に古墳主体部の破壊を避けた可能性が高い。試掘調査をこの残存していた墳丘に並行に入れ、主体部である箱式石棺の一部を破損している。破損の際に人骨が出土したため、この時点で記録の上、一部は取り上げている。

古墳の西側には周溝があるが、東側は削平を受け周溝は存在しない。標高27.5～27.6m付近に傾斜の変換点があり、墳端線であろうと考えた。周溝は西側に沿って弧を描くように巡り、約8mを確認した。周溝の幅は2.0～2.9mである。断面は浅いU字形であり、深さを0.3mを測る。検出面での墳丘の略東西方向の規模は周溝内側で約11m、外側で約14m、また周溝底内側で12.5mを測る。墳高は現状で西側の標高28.6mが最高所であり、隣接する周溝底から約0.7mの高さがある。墳丘盛土は造成工事や、今次調査の掘削により上部を大きく失っている。墳丘中央部の墓壙周辺に0.2m以下の僅かな盛り土が確認できる。墓壙の深さからみて、本来の墳丘は低平なものであったとみられる。墳丘や周溝からの遺物の出土はない。

3号墳主体部(図117)

主体部は墳丘のほぼ中央に設けられた箱式石棺1基である。石棺の主軸はN-47°-Eである。棺内床面の長さ1.74m、幅0.42～0.40m、深さ0.30～

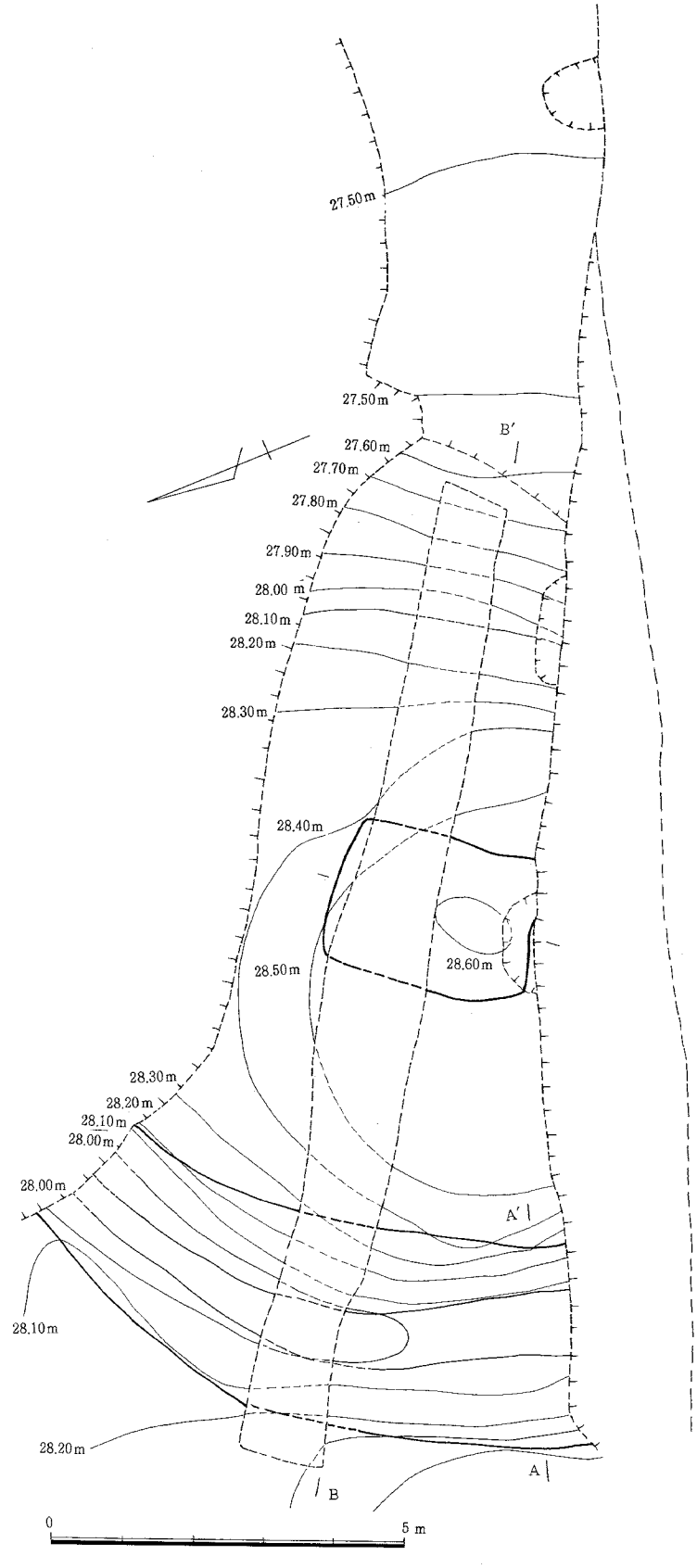


図115. 3号墳墳丘図(1/100)

0.28mを測る。頭位は不明であるが北東側の棺幅がやや広い。床は基盤岩に含まれる白色砂を敷いてある。棺材は砂岩の板状節理を有するものであり、蓋石が４枚、側石が東側３枚、西側２枚、小口各１枚の計12枚である。棺の組み合わせは側板が小口を挟む形態であり、設置にあたって墓壙底の４辺に溝を巡らせている。墓壙は二段掘りであり、上段が長さ3.0m、幅2.2m、深さ0.3～0.4m、下段が長さ2.45m、幅1.6m、深さ0.3～0.4m を測る。底の溝はさらに0.1～0.2m掘っている。溝は小口側が深い。棺の構築は石材の設置後、棺の内外に埋め土をおこない固定し、さらに棺外全周を水成粘土で覆っている。また、石棺の内側四隅の石の隙間には赤褐色粘土を詰め、目張りとしている。その後、棺床面に白色砂を敷いている。さらに石棺の側、小口板上面まで埋め土や粘土で埋めてそろえ、蓋石を設置する。蓋石上は水成粘土はなく、墓壙全体を含めて埋めている。棺内には赤色顔料は検出されなかった。

棺内に　体の埋葬人骨が残存していた。副葬品は認められなかった。

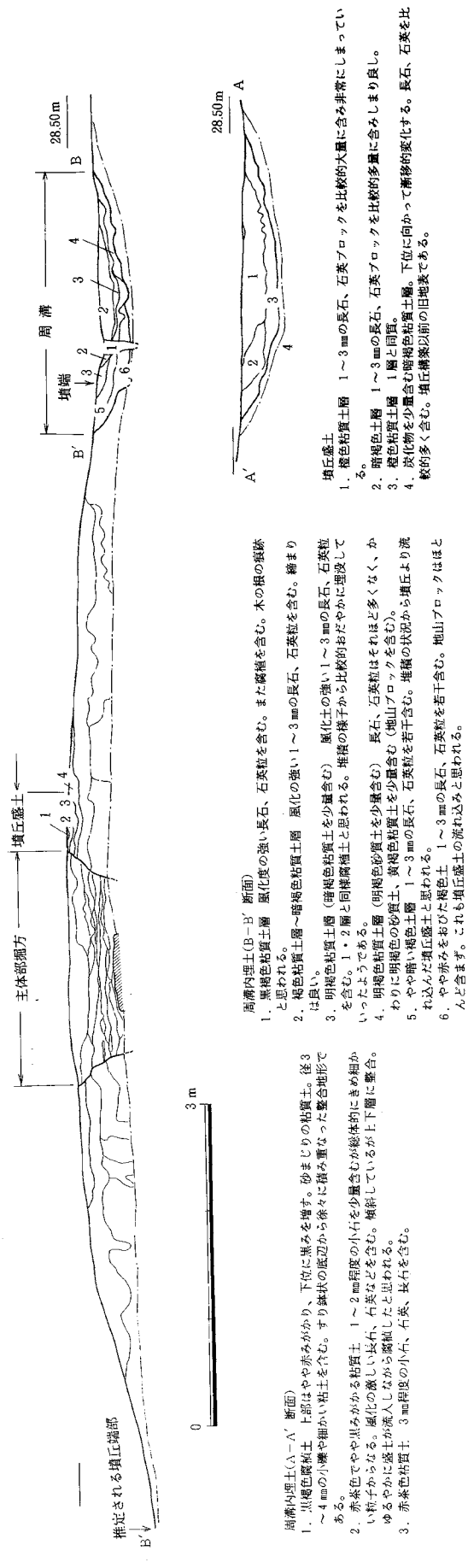
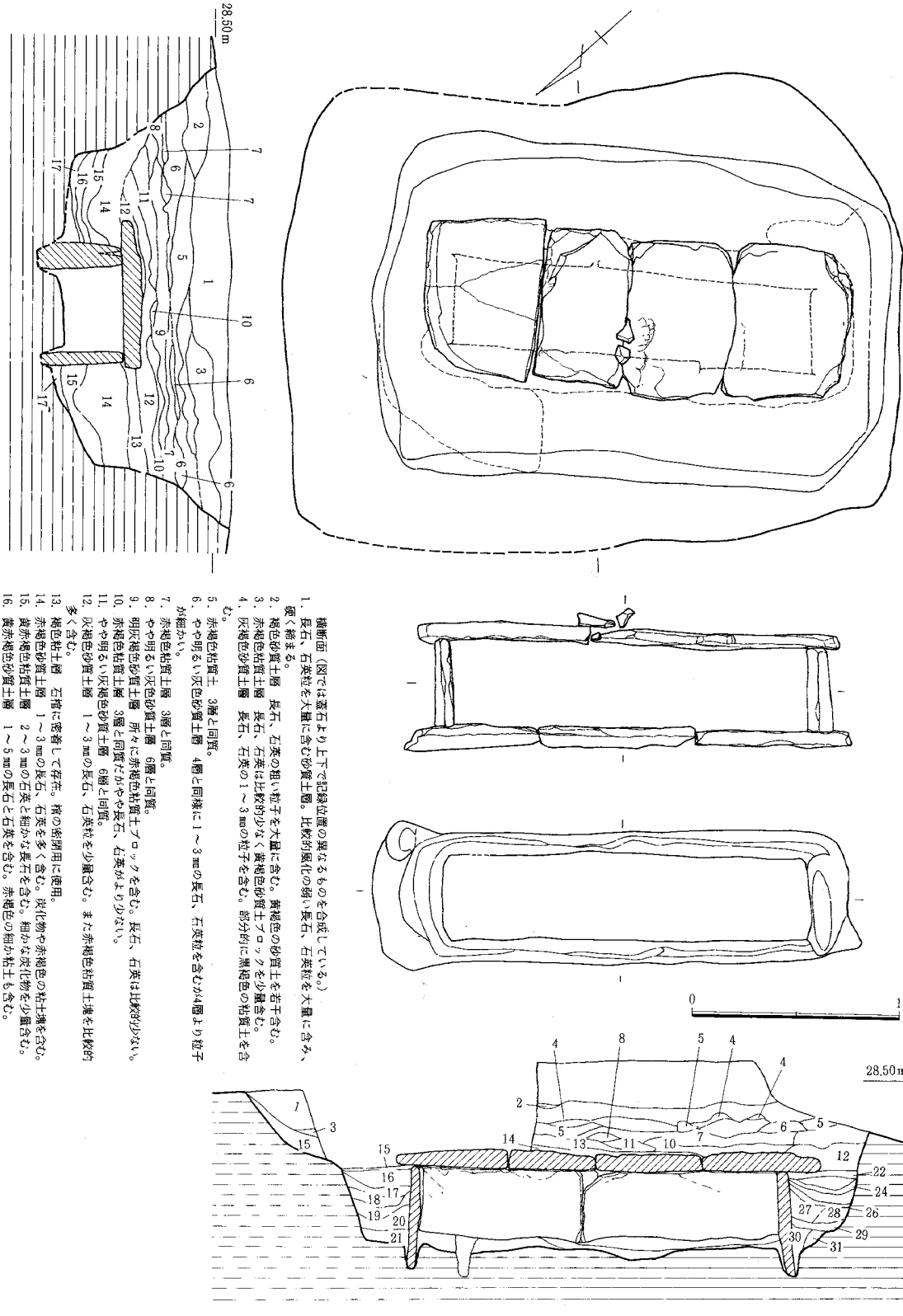


図116. ３号墳墳丘土層図（1/60）



横断面（図では墓石より上下で記録位置の異なるものを合成している。）

1. 長石、石英粒を大量に含む砂質土層。比較的風化の弱い長石、石英粒を大量に含み、硬く締まる。
2. 褐色砂質土層　長石、石英の粗い粒子を大量に含む。黄褐色の砂質土を若干含む。
3. 赤褐色粘質土層　長石、石英は比較的少なく黒褐色砂質土ブロックを少量含む。
4. 灰褐色砂質土層　長石、石英の1～3㎜の粒子を含む。部分的に黒褐色の粘質土を含む。
5. 赤褐色粘質土　3層と同質。
6. やや明るい灰色砂質土層　4層と同様に1～3㎜の長石、石英粒を含むが4層より粒子が細かい。
7. 赤褐色粘質土層　3層と同質。
8. やや明るい灰色砂質土層　6層と同質。
9. 明灰褐色砂質土層　所々に赤褐色粘質土ブロックを含む。長石、石英は比較的少ない。
10. 赤褐色粘質土層　3層と同質だがやや長石、石英がより少ない。
11. やや明るい灰褐色砂質土層　6層と同質。
12. 灰褐色砂質土層　1～3㎜の長石、石英粒を少量含む。また赤褐色粘質土塊を比較的多く含む。
13. 褐色粘土層　石棺に密着して存在。棺の密閉用に使用。
14. 赤褐色砂質土層　1～3㎜の長石、石英を多く含む。炭化物や赤褐色の粘土塊を含む。
15. 炭赤褐色粘質土層　1～3㎜の石英と細かな長石を含む。細かな炭化物を少量含む。
16. 黄赤褐色砂質土層　1～5㎜の長石と石英を含む。赤褐色の細かな粘土も含む。
17. 赤褐色粘質土層　2㎜径の石英と細かな長石を含む。

縦断面

1. 暗赤褐色砂質土層　（横断面1に対応）
2. 灰褐色砂質土層　（横断面4に対応）
3. 赤褐色粘質土層　（横断面5に対応）
4. やや黄味をおびた赤褐色粘質土層
5. 明灰褐色砂質土層　（横断面9に対応）
6. 赤褐色粘質土層　3層と同質。
7. 灰褐色砂質土層　赤褐色粘土塊少量含む。
8. 暗褐色粘質土層
9. 赤褐色粘質土層
10. 赤褐色粘質土層　3層とほぼ同質。
11. 灰色砂質土層
12. 黒褐色粘質土層　炭化物片少量含む。
13. 灰褐色砂質土層　（横断面12に対応）
14. 褐色粘土層　（横断面13に対応）
15. 赤褐色粘質土層
16. 白褐色砂質土層
17. やや黄色い赤褐色粘質土層
18. やや白い赤褐色粘質土層　2㎝前後の赤褐色の粘土塊を含む。
19. 白褐色砂質土層
20. 赤褐色粘質土層
21. 白褐色砂質土層
22. 黒褐色粘質土層　炭化物を少量含む。
23. やや黄味がかった赤褐色粘質土層
24. 白褐色砂質土層
25. 赤褐色粘質土層　3㎝大の粘土塊を含む。
26. やや白い赤褐色砂質土層
27. 明赤褐色粘質土層
28. 黄褐色粘質土層
29. 白褐色砂質土層
30. 赤褐色粘質土層
31. やや白い黄褐色粘質土層

図117. 3号墳主体部（1/30）

3号墳埋葬人骨出土状況・所見

石棺内部からは床面全体にわたって人骨が検出されている。これらは相互の位置関係や人骨自体の所見から3体と推定される（図118）。

1号人骨は北東側小口側、500×400㎜の範囲にまとまって検出された。関節を保っているものは一切なく、また本来の位置関係を保っているものも認められなかった。

2号人骨は1号人骨のとなりから、床面の残り全面にわたって検出されている。関節しているものは認められず、また頭蓋骨と右寛骨がかなり近接しているなど、各骨の位置関係もかなり乱れている。

3号人骨は2号人骨と重なるように存在しているのが認められた。頭蓋は西南端に、顔面を南西に向けた状態で検出されたが、そのすぐ脇に両側大腿骨骨頭を認めるなどこれもやはり本来の位置関係からはかなり乱れている。しかし、左寛骨と左大腿骨・骨頭は関節こそしていないものの本来の位置関係に近いものと思われる。

2号人骨と3号人骨は、石棺中央にある3号仙骨片をはさんで2群の集骨として捉えられる。各群とも概ね3号の方が上方にあるが、1部には位置関係が逆転しているものも認められる。

以上の所見から、埋葬の順序について考察する。まず、石棺端にまとめられていることから1号人骨が初葬と考えられる。2号人骨と3号人骨の先後関係については、2体は個体識別されずにまとめられているが、左股関節の所見から3号人骨は2号人骨より死後時間があまり経過していない状態で集骨されたものと思われる。以上から、1－2－3の埋葬順が推定される。

さて、各人骨はいずれも集骨状態で検出された。最終埋葬の個体が集骨されるにいたる過程としては、①埋葬の時点ですでに白骨化している場合と、②埋葬後一定期間の経過後片づけられる場合の2通りが考えられるがそのうちのいずれであるかは特定し難い。

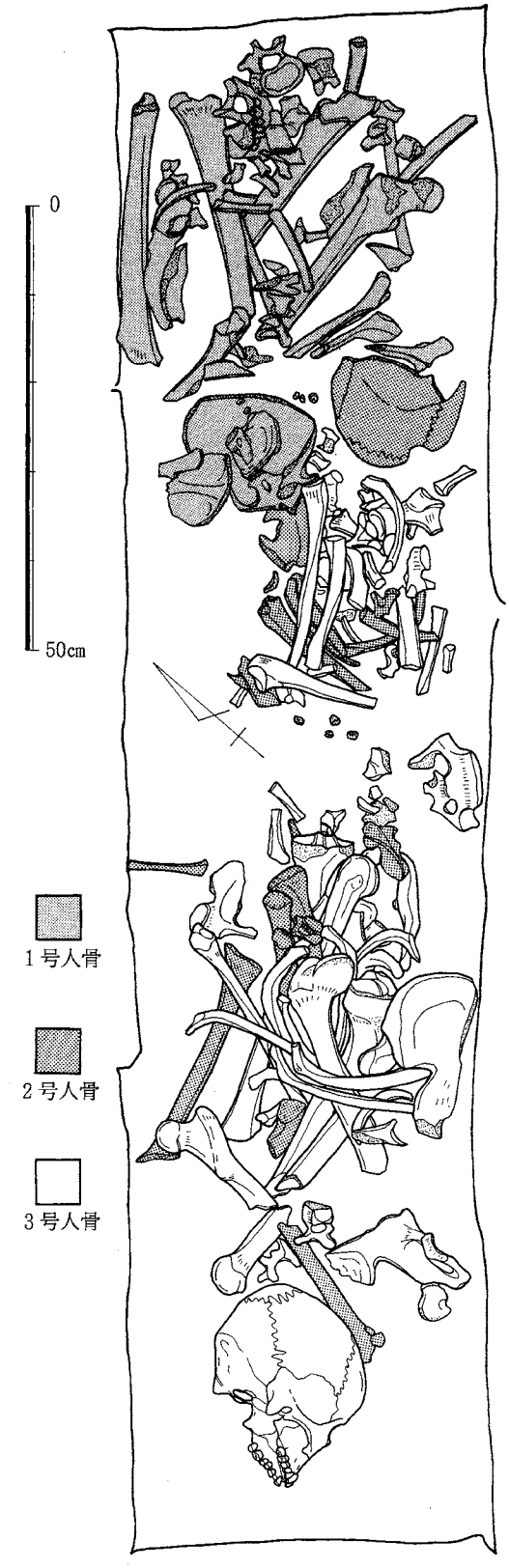


図118. 3号墳主体部人骨出土状況

4号墳外部施設(図117～120)

K～M8～10区にあり、標高38m付近の丘陵頂部に立地する方墳である。この場所は眺望が良く、福岡平野南部一帯を見渡すことができる。4号墳の南側周溝外縁と1.5m離れて5号墳がある。調査前に古墳の存在は不明であった。この場所は戦前に病院の給水用貯水塔を設けるために、大規模な造成が行われた。そのために古墳の存在を示すような旧地形をとどめていない。試掘調査の際も土手状に残る墳丘を確認はしたが、中世以降の土塁ではないかと推察している。調査に際して立地条件、地形などから古墳の存在は確実と判断し、事前の地形測量を実施し、墳形の推定をおこなった。その結果、この部分は貯水塔だけでなく、給、出水管埋設溝、連絡用道路、防空濠などの付設により予想以上の破壊が確認された。

墳丘は東側約三分の一が残っているが、西側は基盤層を数m掘削されている。東辺の主軸はN-08°-Wである。周溝は南側が丘陵を切断するように掘られ、北側、東側では浅い溝を伴う段状となっている。周溝の幅は南側が2.0～2.8mである。断面は浅いU字形であり、深さは0.5m前後を測る。検出面での墳丘規模は墳丘上面で南北10.2m、東西5.8m以上、外側で南北17.5mを測る。また周溝底

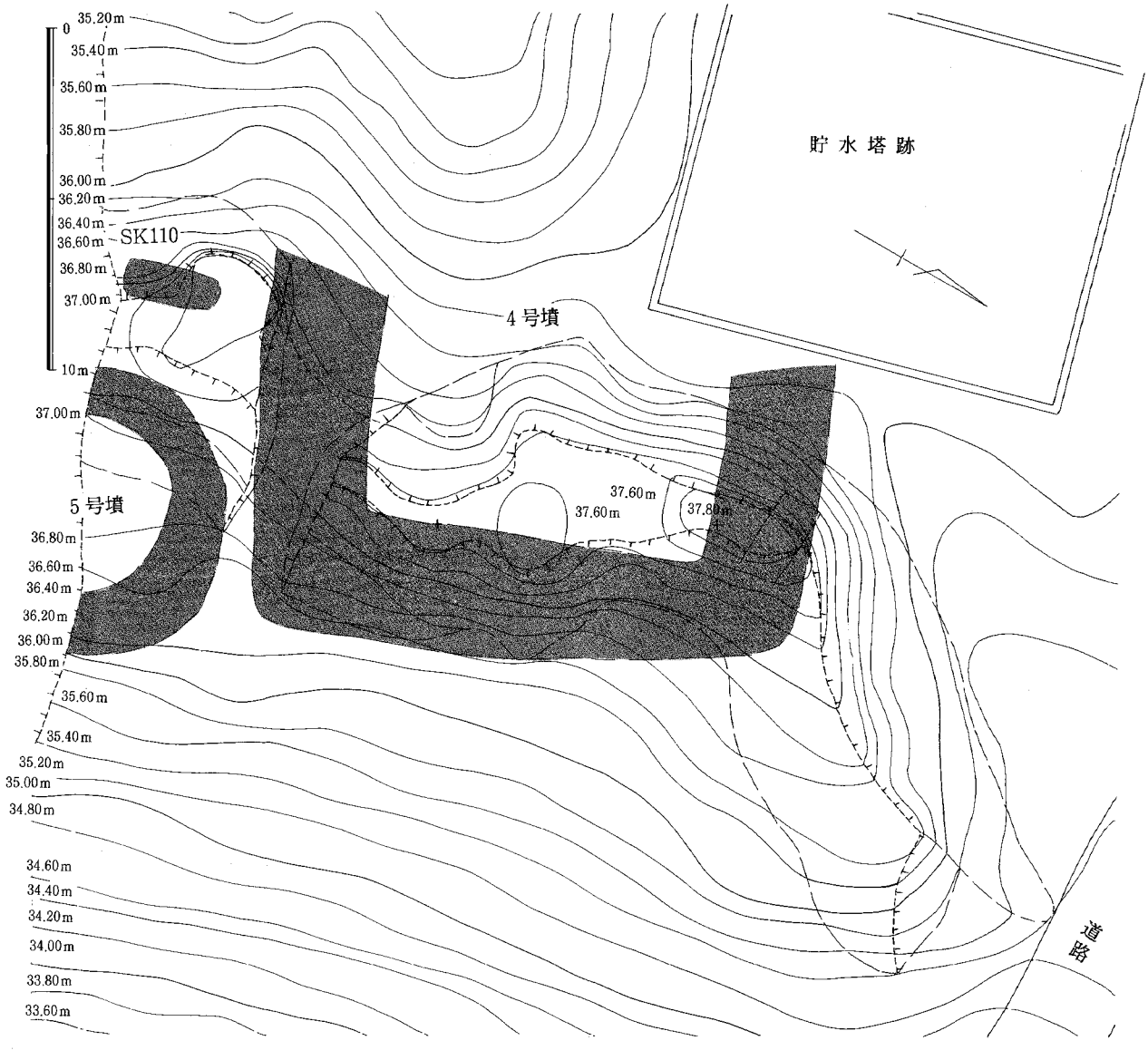


図119. 4・5号墳調査前地形図(1/200)

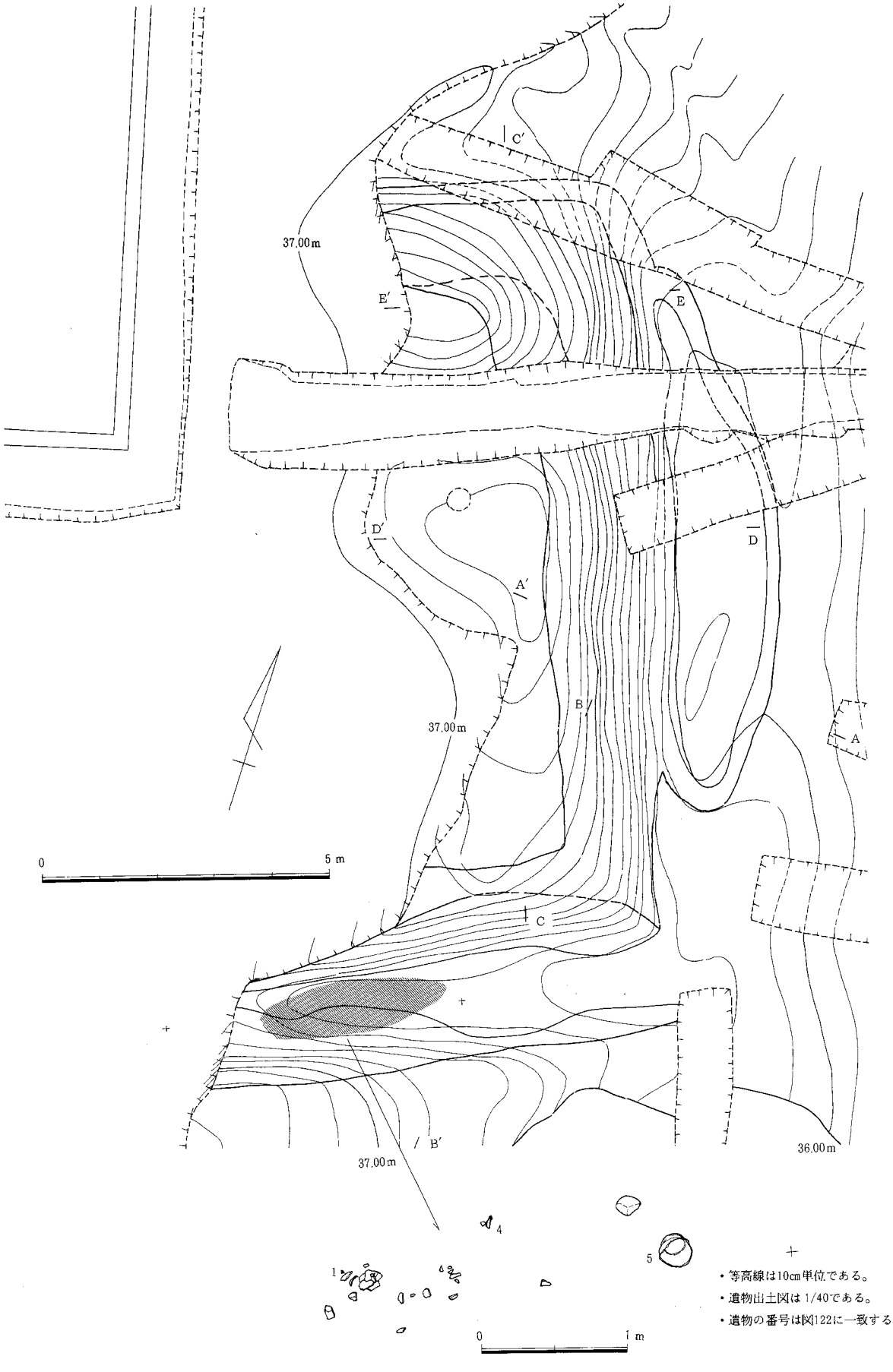
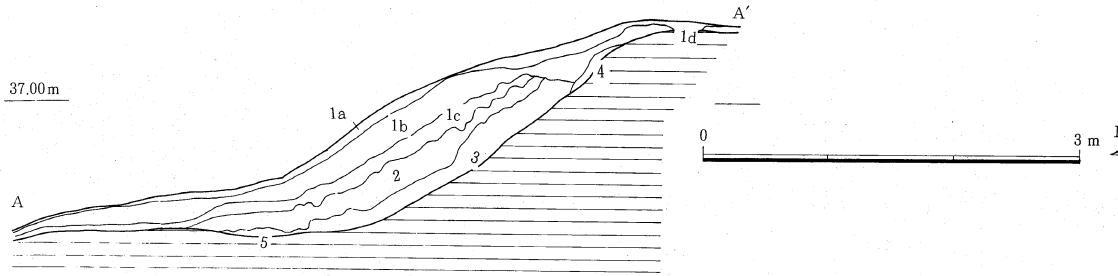
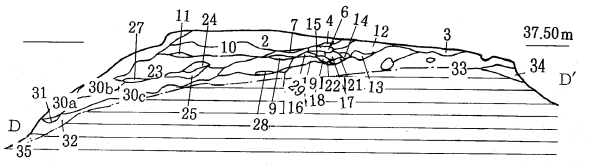


図120. 4号墳墳丘図 (1/100)



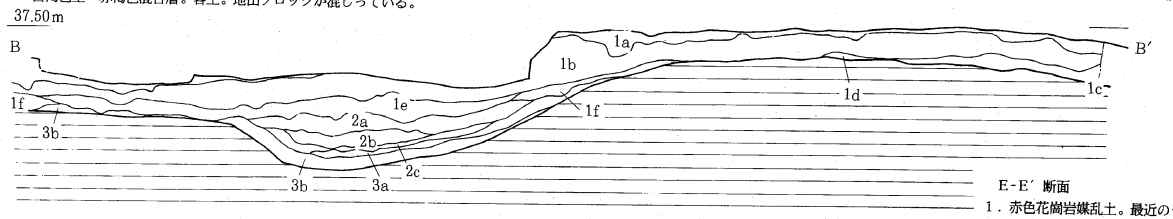
A－A′ 断面

1a.黒茶褐色土　表土。腐植土層。落葉でふかふかしている。
1b.淡明赤褐色土　細かくさらさらしているが石英の粒を大量に含む。固くしまる。
1c.淡明赤褐色土（やや黒い）　やや粘質。しまりよい。1a層との境はきわめて不明瞭。1a層よりもやや色が濃く石英の量が少ない。
1d.白褐色土　赤褐色混合層。客土。地山ブロックが混じっている。
2.黒灰～灰褐色土　粘質できめが細かい。左へ行くほど色が黒くクロボク質となる。1bとの境はでこぼこしていて漸移的。旧地表。場所によって腐植の度合違う。
3.褐色土（やや赤）　粘質。しまりよい。2層との境は漸移的。中でも右の方は白っぽく炭化物を少量含み下（左）の方はやや赤い。
4.明赤褐色土　やや柔らかく、粘質あり。上層との境はやや不明瞭。砂粒は少ない。
5.淡赤褐色土　硬く締まり、粘質る。シルト質。2層との境漸移的。3層とは不明瞭。



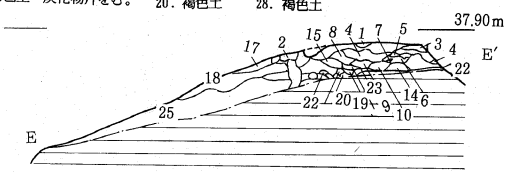
D-D′ 断面

1.褐色土
2.赤褐色土　炭化物片あり。
3.淡赤褐色土　花崗岩媒乱土。
4.褐色土
5.褐色土
6.赤褐色土
7.赤褐色土
8.褐色土
9.褐色土　炭化物を含む。
10.淡赤褐色土　炭化物片をむ。
11.淡赤褐色土
12.赤褐色土　炭化物片あり。
13.褐色土
14.赤褐色土
15.褐色土
16.褐色土
17.褐色土
18.赤褐色土
19.褐色土
20.褐色土
21.暗褐色土
22.褐色土
23.淡赤褐色土
24.赤褐色土
25.淡灰褐色土
26.褐色土
27.淡赤褐色土
28.褐色土
29.赤褐色土
30a.褐色土
30b.赤褐色土
30c.褐色土
31.暗褐色土
32.灰褐色土　旧地表。
33.褐色土　基盤土
34.赤褐色土　基盤土。
35.淡赤褐色土　基盤。



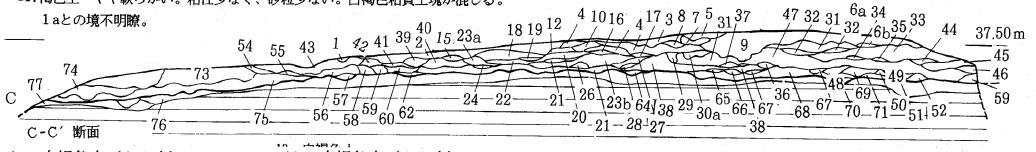
B－B′ 断面

1a.黒茶褐色土　表土。腐植土層。細かい土と細い根。落葉でふかふかしている。
1b.淡明赤褐色土　細かくさらさらしている。石英の粒を多く含む。しまりよい。
1c.明褐色土　細かくさらさらしている。砂粒は少なくなり、やや粘質。しまりよい。
1d.明褐色土　土質は1c層と同じ。マンガン粒を少量含む。1bと境は不明瞭。
1e.暗褐色土　やや粘性。しまりよい。1b層との境は不明瞭。2との境は漸移的。
1f.褐色土　やや軟らかい。粘性少なく、砂粒少ない。白褐色粘質土塊が混じる。1aとの境不明瞭。
2a.灰褐色土　粘質。きめ細かい。クロボク土。やや軟らかい。
2b.黒褐色土　2a層と土質は同じ。クロボク土。両端は褐色化。
2c.灰褐色土　2a層と土質は同じ。クロボク土。2a層より黒い。特に中央が真っ黒。白褐色～赤褐色土塊あり。付近に炭化物少量あり。
3a.赤褐色土　粘質。やや軟らかい。右の方は明褐色で漸移的変化。
3b.赤褐色土　粘質。やや軟らかい。炭化物を少量含む。

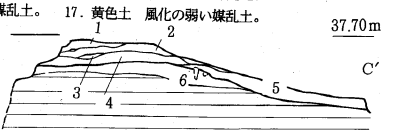


E-E′ 断面

1.赤色花崗岩媒乱土。最近のものか。
2.黒色土　腐植土層。
3.赤色土　花崗岩媒乱土。
4.赤色土　3層と同質。より暗色。
5.黄色土　風化の弱い花崗岩媒乱土。
6.赤色土　微量の炭化物を含む。
7.黄色土
8.赤褐色土　風化の進んだ媒乱土。
9.灰色土　炭化物を若干量含む。
10.黄色土　細かな炭化物片を少量含む。
11.黄色土　風化の弱い媒乱土。粘性ない。
12.赤色土　硬く締まり、粘性はない。
13.黄色土　風化の弱い媒乱土。
14.暗灰色土　炭化物片を微かに含む。
15.赤褐色土　風化の強い媒乱土。
16.灰色土　風化の強い媒乱土。
17.黄色土　風化の弱い媒乱土。
18.赤褐色土　少量の炭化物を含む。
19.赤色土　石英粒が多く、粘性強い。
20.灰色土　16層と同じ色調をもつ。
21.赤褐色土　硬く締まり、粘性強い
22.赤色土　締まりは弱く粘性強い。
23.灰色土　硬く締まり、粘性弱い。
24.赤色土　硬く締まり、粘性強い。
25.暗褐色土　旧地表。



C-C′ 断面



1. 白褐色土（やや赤）
2. 淡赤褐色土（1層より濃い）
3. 淡褐色土
4. 白褐色土（やや赤）
5. 淡赤褐色土
6a.赤褐色土
6b.白褐色土（やや赤）
7. 白褐色土
8. 赤褐色土（やや淡い）
9. 赤褐色土
10. 白褐色土
11. 白褐色土（やや赤）
12. 赤褐色土
13. 白褐色土
14. 淡赤褐色土
15. 白褐色土
16. 淡赤褐色土
17. 赤褐色土
18. 白褐色土
19. 淡赤褐色土（やや白）
20. 白褐色土（やや赤）
21. 淡赤褐色土
22. 淡赤褐色土（やや白）
23a.淡褐色土（やや赤）
23b.白褐色土（やや褐色）
24. 白褐色土（やや赤）
25. 白褐色土
26. 褐色土（やや赤）
27. 淡褐色土
28. 赤褐色土
29. 淡赤褐色土
30. 赤褐色土
31a.褐色土
31b.褐色土（赤）
32. 褐色土（やや赤）
33. 白褐色土
34. 褐色土（やや赤）
35. 赤褐色土
36. 赤褐色土
37. 褐色土（やや赤）
38. 褐色土（やや暗い）
39. 白褐色土
40. 白褐色土
41. 褐色土（やや白い）
42. 褐色土（やや白い）
43. 白褐色土
44. 淡赤褐色土
45. 褐色土（やや白）
46. 淡赤褐色土（やや白）
47. 褐色土（やや暗い）
48. 褐色土（やや黒い）
49. 褐色土
50. 灰褐色
51. 褐色土（やや赤い）
52. 濃褐色土
53. 白褐色土
54. 白褐色土（やや赤）
55. 淡赤褐色土
56. 淡赤褐色土
57. 褐色土（やや白く暗い）
58. 淡褐色土（やや赤）
59. 赤褐色土
60. 褐色土（やや白）
61. 赤褐色土
62. 赤褐色土（ややにぶい色）
63. 褐色土（やや赤）
64. 褐色土（やや赤）
65. 赤褐色土
66. 赤褐色土（ややにぶい色）
67. 褐色土（やや暗）
68. 褐色土（やや暗）　炭化物の小粒あり。
69. 褐色土（やや赤）
70. 褐色土（やや暗い）
71. 褐色土（やや赤）
72. 白褐色土（やや赤）
73. 白褐色土
74. 褐色土（やや暗い）
75. 褐色土
76. 灰褐色土　炭化物含む。旧地表である。
77. 褐色土（やや暗）　旧地表である。

図121 、4号墳墳丘、周溝土層図（1／60）

内側では南北13.5m、東西7.5m 以上を測る。墳高は現状で標高37.6m が最高所であり、隣接する周溝底から約1.7m の高さがある。墳丘盛土は最大で0.4m を確認した。盛土は地山の赤褐色粘土と黒色土を交互に積み上げたものであるが、堅固な墳丘築成ではない。墳丘盛土上から焼土壙 SR107を検出した。遺物の出土はない。墳丘斜面や周溝内から少量の遺物が出土した。墳丘上東斜面では土師器の小型丸底壷(2,3)、南側周溝内下部からは銅鏃(1)、甕(5)が出土した。また、周溝内中位の黒色土中から土師器の高台付椀(4)が出土した。これらのうち1～3,5は本古墳に伴うとみられるものであり、布留式古段階に位置づけられるものである。4は古代後期のものであり、周溝埋没途中に流れ込んだものと見られる。

4号墳主体部

主体部は墳丘の大半を失っているために不明である。なお、周溝外南側1.5m に木棺墓 SK110がある。これが本古墳に関連する墳外埋葬であるのかは検討が必要であろう。

5号墳外部施設(図119・123)

K１０区にあり、丘陵頂部から僅かに東に下がった標高36m 付近の斜面に立地する円墳である。北側周溝外縁と1.5m 離れて4号墳がある。調査前に古墳の存在は不明であった。発見は表土を除去し、周溝を検出したことによる。古墳は戦前の防空濠や、戦後の病院官舎造成工事により大きく破壊されている。墳丘は北側約三分の一が残っているが、南側は10m以上の切り立った崖となっている。調査が危険なために崖沿いに1m の土手を残した。周溝は調査区内では円形に巡るように掘られている。周溝の幅は西側が1.8m、東側が0.8m である。断面は浅いU字形であり、深さは0.5m 前後を測る。検出面での墳丘規模は周溝内側で径約6.5m、外側で径約9.5m と復元される。周溝底内側では径約7.5m とみられる。墳高は現状で標高36.5m が最高所であり、隣接する周溝底から約0.6m の高さがある。墳丘盛土は確認できなかったが、周溝内の旧地表と見られる黒色風化土が見られ、近年までは僅かな盛土が存在していたと推定される。周溝内から少量の土器片が出土したが、図化できるものではない。

5号墳主体部

墳丘の南側の大半を失っているために不明である。崖の断面でも主体部の痕跡は確認できなかった。造成工事に際して破壊されたと見られる。

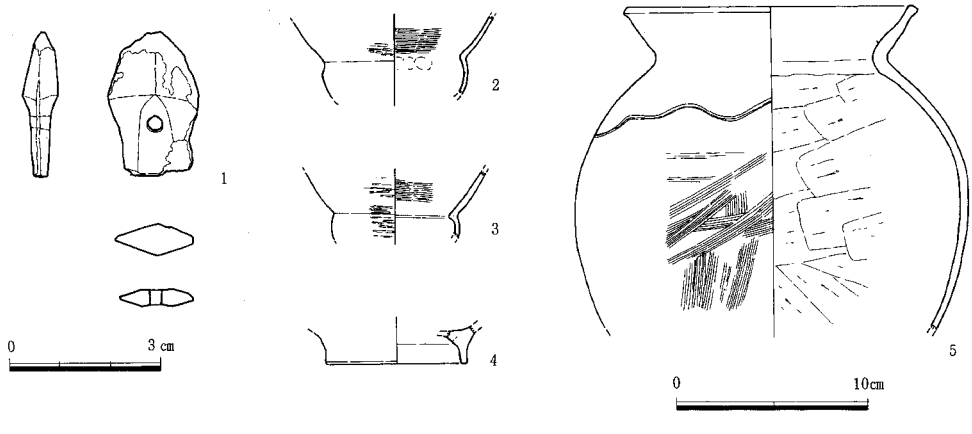


図122. 4号墳出土遺物(2/3,1/4)

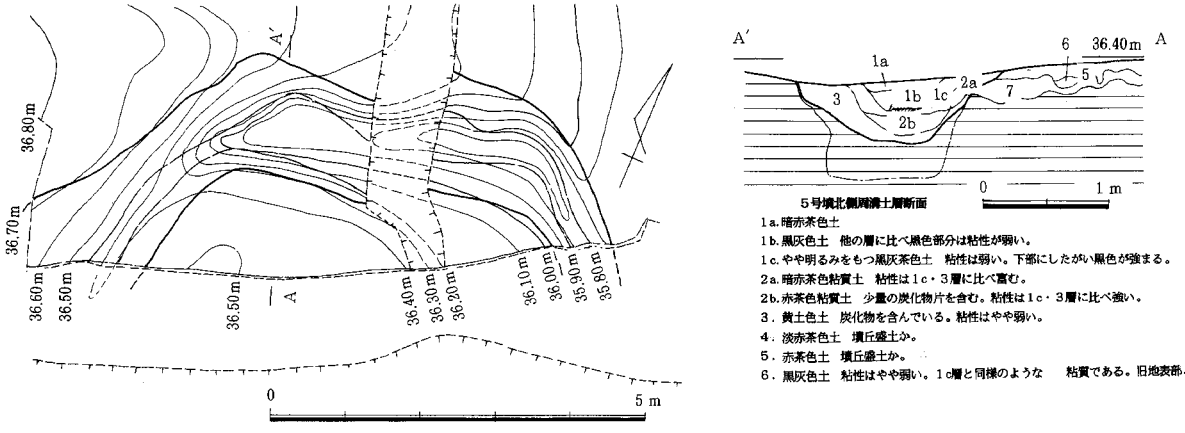
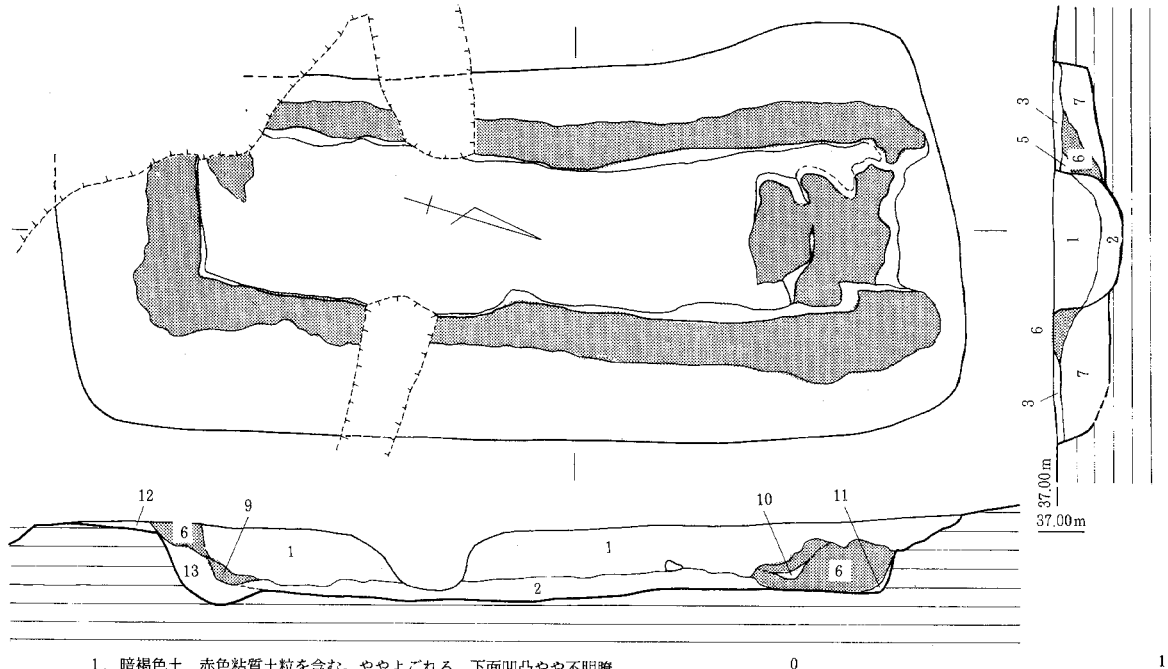


図123. 5号墳墳丘、周溝土層図(1/60,1/100)

木棺墓 SK110(図124)

Ｌ１０・１１区に検出した刳抜式の木棺墓である。丘陵頂部に位置し、４号墳と５号墳のほぼ中間の位置にある。標高は約37m である。木棺の上面は相当の削平を受け、棺の中位以下が残されていた。棺材は腐敗し、棺痕跡のみが遺存していた。木棺の主軸は N-17°-W であり、幅は北側が広く0.45m、南側で0.37m、棺の長さ約1.8m を測る。棺底は浅いU字形を呈し、小口側が僅かに掘り込まれていて、小口板の存在が推定される。棺内の北側に水成粘土塊があり、二次的に変形しているが、本来粘土枕を形成していたと見られる。枕の上面には赤色顔料が分布していた。棺内埋土は風化土壌を主としており、棺内への土砂流入に際して被覆粘土の落ち込みがない。棺側のみを粘土で覆う型式であったと見られる。墓壙の規模は長さ2.4m、幅0.95～1.1m、深さ0.2m を測る。墓壙内埋土の観察



1．暗褐色土　赤色粘質土粒を含む。ややよごれる。下面凹凸やや不明瞭。
2．赤褐色土　褐色土を混じる。ややよごれ。下位にしだいに硬くなる。
3．赤褐色土　黒色ブロック混じり。硬くしまる。下位とは明瞭。
4．赤褐色土　黒色ブロック混じり。硬くしまる。下位とは明瞭。3層と同質。
5．赤色顔料混じり土　バイラン土を母材。
6．青灰色粘土　白色かかる水成粘土。
7．暗褐色土　旧地表下の土壌化。地山。
8．赤褐色粘質土　花崗岩バイラン土。長石見える。地山。

※網部は水成粘土

9．暗灰色粘質土　青色粘質土の２次堆積か。
10．赤色顔料
11．黒褐色礫混り土
12．暗褐色土　花崗岩バイラン土。

図124. SK110遺構図 (1/20)

からみて木棺の設置は次のように推定される。まず、墓壙底に一定の埋め土をおこない、木棺下（底）部を据える。この段階に小口板を設置したとみられる。さらに墓壙内に埋め土をおこなった後、棺上部との接合部分、小口部分を水成粘土で覆う。棺内への粘土枕の設置はこの段階とみられる。その後、木棺上（蓋）部を設置し、棺の接続部を粘土で塞いでいる。本木棺から副葬品など遺物の出土はない。

石組遺構 SX102(図125)

Ｐ６区にある。丘陵北側斜面を造成してできた平坦面に検出した。この平坦面は掘削した壁面が露出し、また旧病院敷地内を通る道路に連続していることから、さほど古い造成とは考えにくい。調査の結果、この遺構は二次的に動かされた石棺材を用い箱型の石組を設け、この中に人骨を入れていたと判明した。石組内からは鉄釘が十数点出土した。釘に残され木材片と出土位置、石組内の空間からみて、この人骨は当初一辺40cm 前後の正方体に近い木製の箱に入っていたと考えられた。石組は床石を置き、側石を設置、蓋石を乗せ、上部に板石片を多数置き、周囲を埋め土で覆い、径約2m 程度の墳丘状をなしていた。周囲にそのほかの施設や遺物は見いだされていない。

人骨の出土状況

石組遺構の中からは人骨が散乱した状態で検出された。人骨は遺構内の空間全体に散乱しているものの、西－南側は北－東側に比べて骨の数が相対的に少ない。長骨の保存状態は全般に良好であるものの骨端はほとんど壊れている。また、関節していることを窺わせるような位置関係で検出された骨は一切なかった。なお、長骨以外の骨は長骨に比べてかなり細かく壊れている。

さて、以下に人骨の個体数の推定と個体相互の位置関係について考察を進める。まず、上腕骨・大腿骨・脛骨などの長骨はいずれも左右の組み合わせが３対認められ、他に説明困難な余分な骨片を認めないこと、歯も同様に3セット認められること（いずれも詳細後述）などから、遺構内には3体が埋納されたと考えられる。大型長骨は後述する人骨所見から各々1号・2号・3号に組み合わせることができるが、1号は遺構内南半、2号は下方、3号は北半にと、比較的まとまることが注目される。これから、各人骨はもとから一定程度個体別に分かれた状態で埋葬されていたことが考えられる。

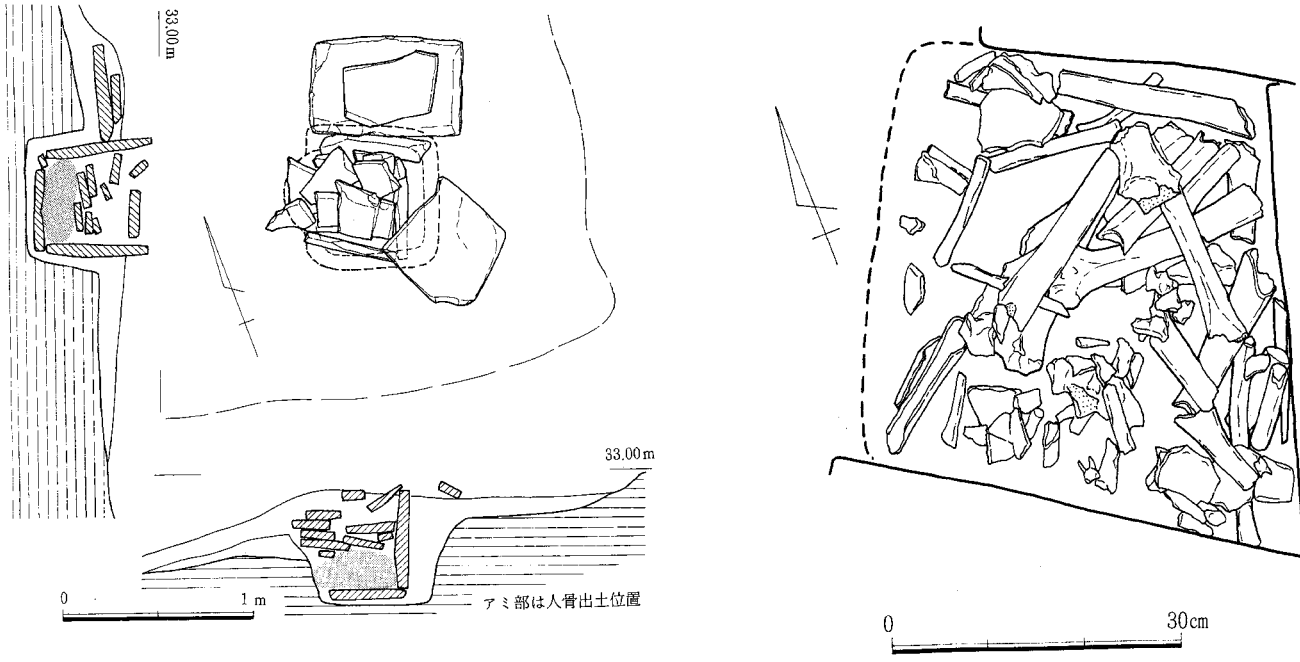


図125. 石組遺構 SX102(1/20)

6）その他の遺構と遺物

概要：A地区ではこれまで示した遺構以外に性格が不明な遺構が多数検出された。遺物が出土しないためにその時期も明かではない。それには土壙状を呈するもの、溝状を呈するもの、柱穴状を呈するものがある。遺構数も多いことからここでその内容にふれておきたい。

土壙状の遺構(SK)は調査区の北～東側を中心に検出した。総数で20基程度ある。形態から大まかに次のように4つに区分される。

1)炭化物、焼土面があるもの(SK07,83,108)。

2)円形で深いもの(SK02)。

3)楕円形もしくは不整楕円形を呈し、床面が平坦なもの(SK01,03～06,13,15,16,76)。

4)円形もしくは不整楕円形を呈し、床面に凹凸があるもの(SK08,14,73,77)。

1)はいわゆる「焼土壙」を含む。2)は井戸の可能性がある。3)、4)には落とし穴や埋葬遺構が含まれている可能性がある。

溝状の遺構(SD)は7条あり、調査区の南西側を中心に検出した。丘陵先端の東に面する斜面にあり、全て南東－北西方向に設けられている。

柱穴状の遺構は調査区の北東側を中心に検出した。まとまった状態や配列を示すものはない。ここでは省く。

a、土壙(図126,127,128,129)

SK07：Ⅰ2区にある。フノカケ池に面する西斜面に立地する。相当の削平を受け遺存状態は良くない。平面は不整楕円形を呈し、その主軸はN-15°-Wであり、長さ0.8m、幅0.4m、深さ0.05mを測る。覆土中に炭化物や焼土を多量に含む。

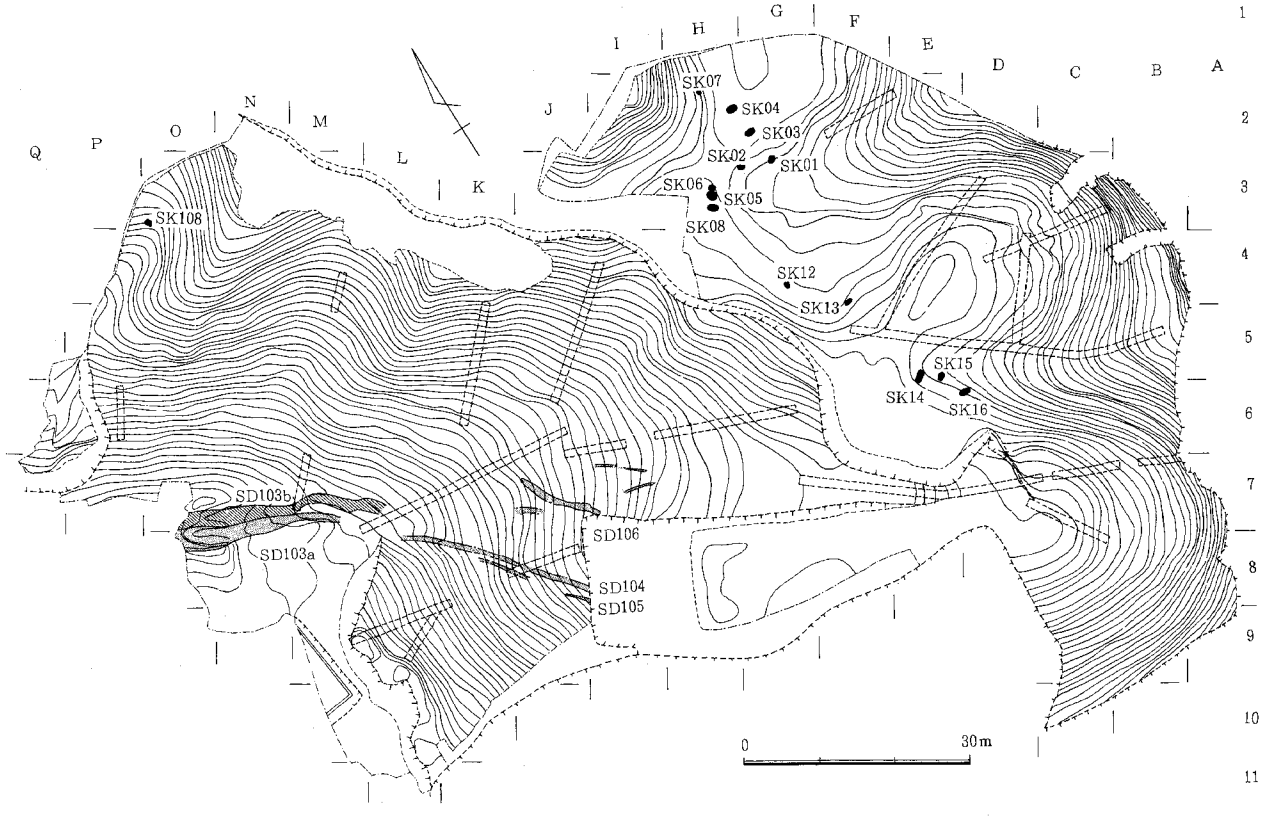


図126. その他の遺構(1/1,000)

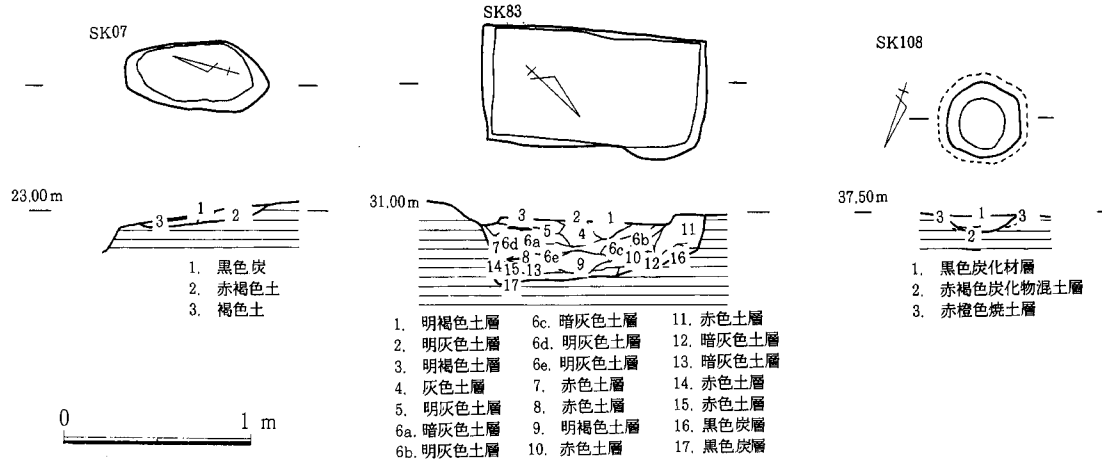


図127. 土壙１(1/40)

SK83:Ｏ３区にある。南からフノカケ池に向かって延びる小丘陵の尾根上に立地する。平面は長方形を呈し、床面は平坦であるが、南側に下がっている。その主軸はN-39°-Wであり、長さ1.2m、幅0.6m、深さ0.4～0.2mを測る。南側を除く三壁面は赤く焼け、覆土中に炭化物、焼土を多量に含む。

SK108:Ｌ９区にある。４号墳墳丘上の平坦面にある。平面は円形を呈し、床面は緩く窪む。径0.4m、深さ0.1mを測る。床面は赤く焼け、覆土中に炭化物を多量に含む。

SK01:Ｈ３区にある。南からフノカケ池に向かって延びる丘陵つけ根の鞍部に立地する。平面は楕円形を呈し、床面は平坦である。その主軸はN-25°-Eであり、長さ1.0m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。

SK02:Ｈ３区にある。SK01の西側3mに位置する。平面は円～隅丸方形を呈する。床面はほぼ平坦である。径（辺）0.9～1.0m、深さ1.5mを測る。壁面には鉄分の凝着がみられ、床面からは僅かな湧水がある。井戸か。

SK03:Ｈ２区にある。SK01の北側4mに位置する。平面は楕円形を呈し、西側に段がある。床面は平坦である。その主軸はN-82°-Wであり、長さ1.2m、幅0.7m、深さ0.6mを測る。

SK04:Ｉ２区にある。SK03の北側3mに位置する。平面は楕円形を呈し、床面は隅丸長方形となる。床面は平坦である。その主軸はN-75°-Eであり、長さ1.3m、幅0.8m、深さ0.65mを測る。

SK05:Ｉ３区にある。SK02の西側4mに位置する。SK06に切られる。平面は隅丸長方形を呈し、床面は平坦である。その主軸はN-33°-Eであり、長さ1.1m、幅0.9m、深さ0.5mを測る。

SK06:Ｉ３区にある。SK05を切る。平面は楕円形を呈し、床面は平坦である。その主軸はN-16°-Wであり、長さ1.0m、幅0.7m、深さ0.6mを測る。

SK08:Ｉ３区にある。SK05の南側0.5mに位置する。平面は楕円形を呈し、東側に段と床面に小穴がある。その主軸はN-68°-Eであり、長さ1.4m、幅0.6～0.8m、深さ0.5mを測る。

SK13:Ｇ４・５区にある。２号墳の西側16mに位置する。平面は長楕円形を呈し、床面は平坦である。床面から0.2m上位の両側壁に段がある。その主軸はN-77°-Eであり、長さ1.2m、幅0.5m、深さ0.5mを測る。下部内法は長さ1.2m、幅0.2mを測る。覆土は黒色風化土である。木蓋土壙墓か。

SK14:Ｅ５区にある。平面は不整楕円形を呈し、床面は西側が階段状である。その主軸はN-42°-Eであり、長さ1.8m、幅1.0m、深さ0.5mを測る。

SK15:Ｅ５区にある。SK14の東側2mに位置する。平面は楕円形を呈し、床面は平坦である。その主軸はN-36°-Eであり、長さ1.0m、幅0.75m、深さ0.5mを測る。

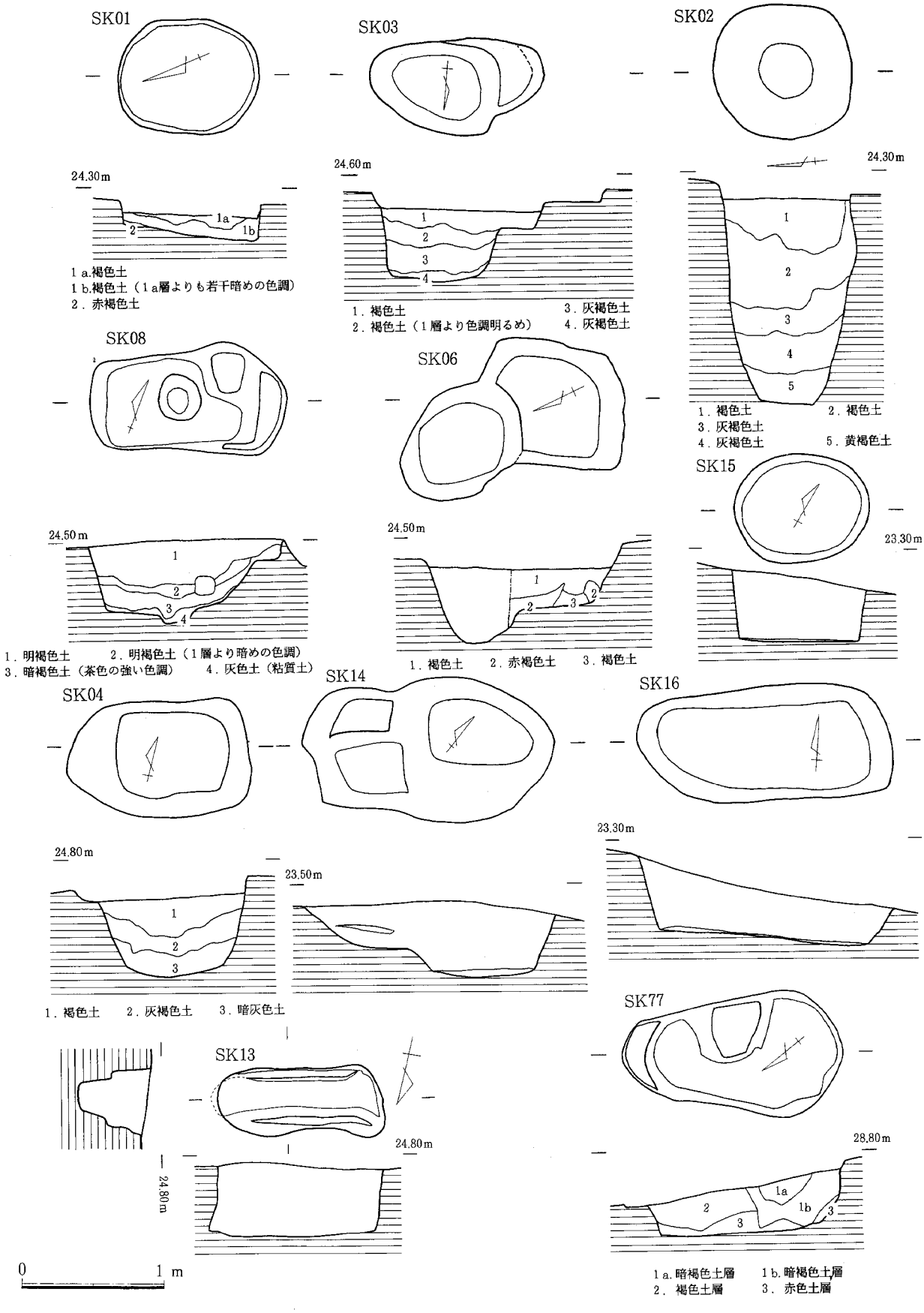

SK01
24.30m
1a
1b
2
1a.褐色土
1b.褐色土（1a層よりも若干暗めの色調）
2．赤褐色土
SK03
24.60m
1
2
3
4
1．褐色土
2．褐色土（1層より色調明るめ）
3．灰褐色土
4．灰褐色土
SK02
24.30m
1
2
3
4
5
1．褐色土
2．褐色土
3．灰褐色土
4．灰褐色土
5．黄褐色土
SK08
24.50m
1
2
3
4
1．明褐色土
2．明褐色土（1層より暗めの色調）
3．暗褐色土（茶色の強い色調）
4．灰色土（粘質土）
SK06
24.50m
1
2
3
1．褐色土
2．赤褐色土
3．褐色土
SK15
23.30m
SK04
24.80m
1
2
3
1．褐色土
2．灰褐色土
3．暗灰色土
SK14
23.50m
SK16
23.30m
SK13
24.80m
24.80m
SK77
28.80m
1a
1b
2
3
1a.暗褐色土層
1b.暗褐色土層
2．褐色土層
3．赤色土層
0
1 m

図128. 土壙2 (1/40)

SK16:Ｄ６区にある。SK15の南東側3m に位置する。平面は長楕円形を呈し、床面は平坦である。その主軸は N-84° -E であり、長さ1.8m、幅0.8m、深さ0.5m を測る。

SK77:Ｉ５区にある。平面は楕円形を呈し、斜面に沿った主軸をとる。床面は平坦であり、東側に片寄って小穴がある。主軸は N-37° -W であり、長さ1.4m、幅0.9m、深さ0.5m を測る。

SK73:Ｇ・Ｈ５区にある。落とし穴 SK71,72の東側1m に位置する。平面は不整楕円形を呈し、床面は凹凸がある。主軸は N-78° -W であり、長さ3.3m、幅1.9m、深さ0.5m を測る。

SK76:Ｊ５区にある。平面は不整楕円形である。二段掘りであり、それぞれの主軸が異なることから、２つの土壙が切り合っていることも考えられる。一段目の主軸は N-45° -W であり、長さ2.0m、幅1.2m、深さ0.5m を測る。床面は平坦である。二段目の主軸は N-72° -w であり、長さ1.4m、幅0.8m、深さ0.5m を測る。二段目西端の覆土中に多量の炭化物が出土した。

ｂ，溝状遺構(図128)

SD103a,b:Ｌ～Ｏ７・８区にある溝状の遺構であり、貯水塔に向かう道路や給・出水管埋設溝などにより削平、破壊を受けている。多少の蛇行はみせるが、全体として丘陵尾根に沿って N-65° -W 方向に主軸をとる。検出できた東端はやや曲がり、SD104,105に一致する方向となる。２つの溝の明瞭な切り合いがあり、新しい方をａ、古い方をｂとする。

SD103a は幅2.5～1.0m、深さは保存の良い場所で0.5m、他で0.1m 前後を測る。断面は浅いＵ字形をなす。覆土上部は黒色の腐植土壌が多く堆積しており、最上部は調査前も僅かな窪みを見せていた。床面や覆土の下部は極めて堅く締まっている。この SD103a は現在も調査区外西側に痕跡の残る林道に連続していることから、野多目から中尾に抜ける山道の跡と考えられる。

SD103b は SD103a の南側に沿っている。幅は3.2～1.0m、深さは最大0.9m を測る。断面は浅いＵ字形を呈している。床面は堅く締まり、密度は高くないが、円礫の分布が認められた。覆土最上部に

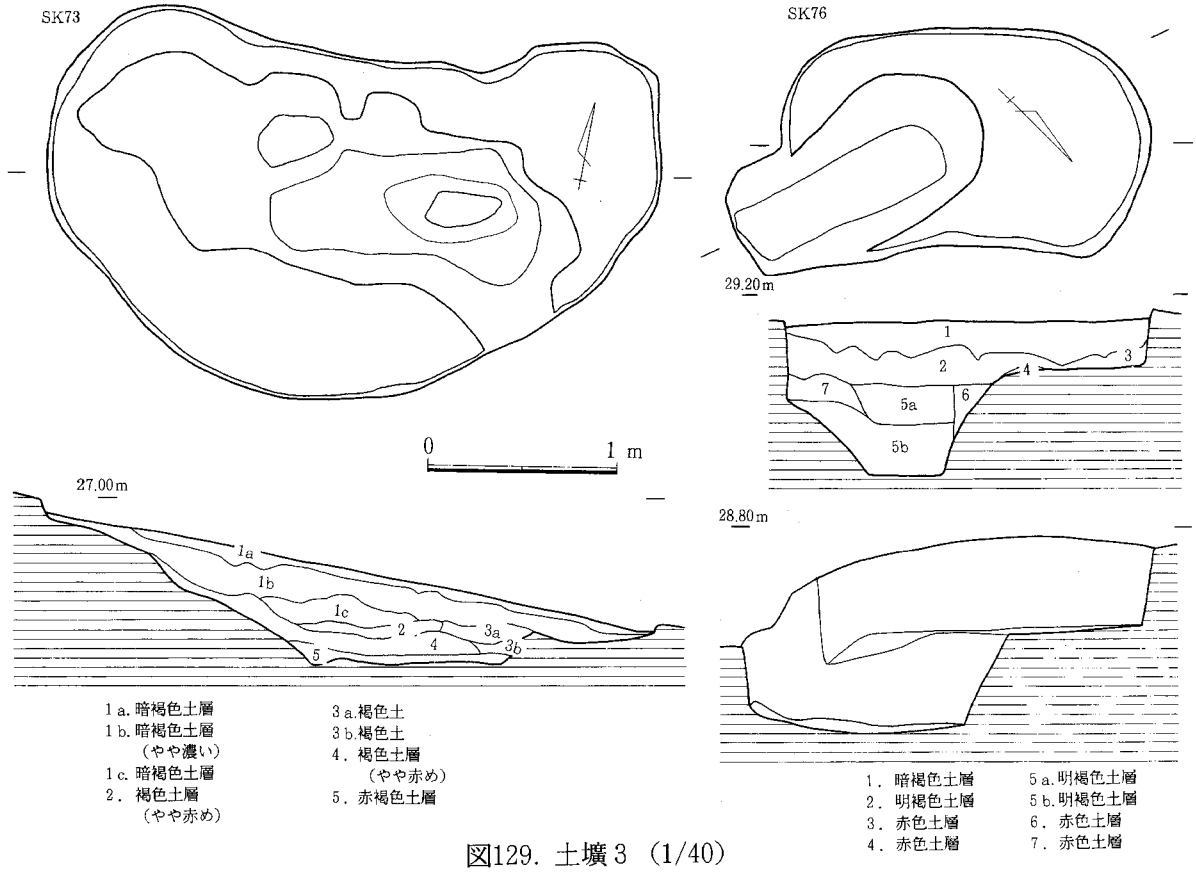


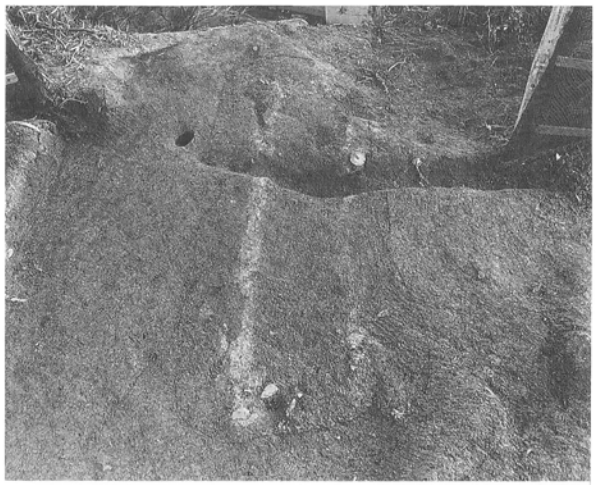
図129. 土壙３（1/40）

の形成がある。SD103a に先行する道路風化土層跡であり、礫敷きであったと見られる。

SD104: J～L 8 区にある。幅1.0m、深さ0.5m を測る。全体として丘陵を斜めに横切る N-35°-W 方向に主軸をとる。並行して SD105西側にある。溝内は黒色の風化土である。

SD105: J・K 8 区にある。幅0.3～0.4m、深さ0.1m を測る。SD104と SD105の 2 つの溝は溝底で1.5m 幅であり、この間が道路跡となると見られる。路面を示す痕跡は認めていない。

SD106: J 7 区にある。幅1.0m、深さは保存の良い場所で0.3m を測る。断面は浅いU字形をなす。覆土上部は黒色の風化土が堆積する。



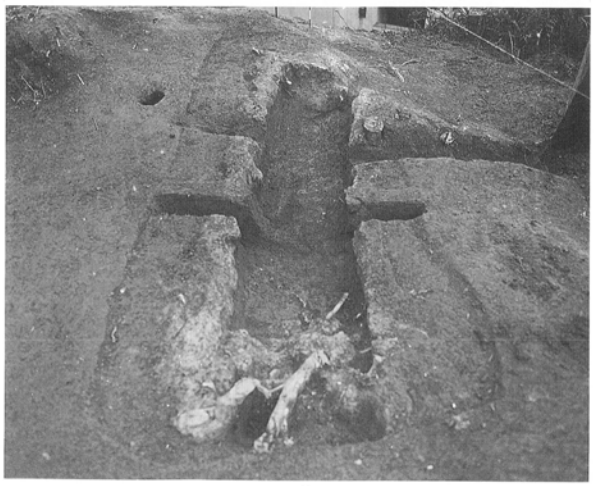


図131. SK110

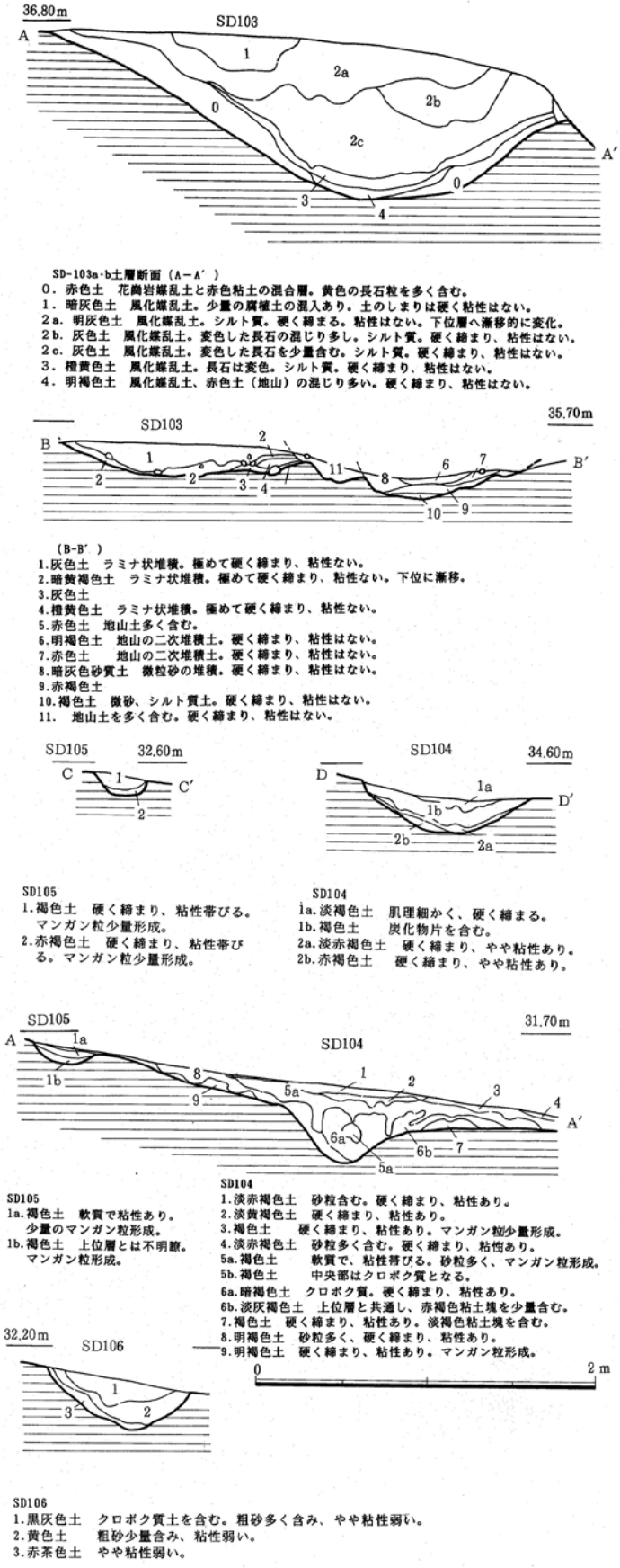


図130. 溝状遺構断面図（1/40）

① B地区全景（北西から）

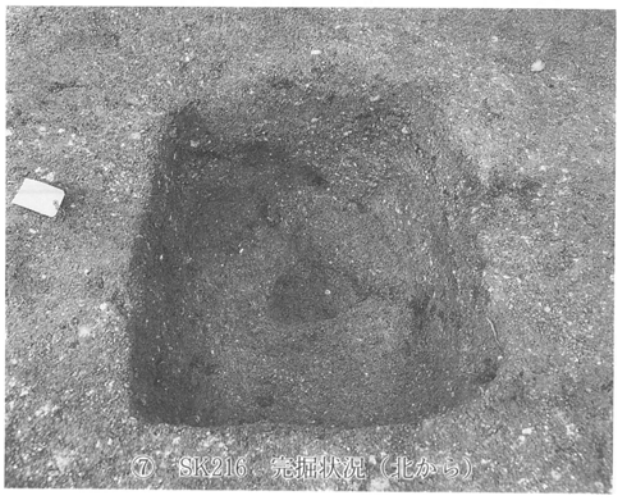
② SK208 完掘状況（北から）

③ SK211 完掘状況（北から）

④ SK212 半掘状況（南から）

⑤ SK214 完掘状況（西から）

⑥ SK215 完掘状況


⑦ SK216 完掘状況（北から）

⑧ SK221 完掘状況（東から）

図132. B地区と主要遺構

第４章、和田Ｂ遺跡Ｂ地区

１）調査の概要

Ｂ地区はＡ地区の北側約200m の距離にあり、西から東に延びる丘陵の南斜面にあたる。Ａ地区とはフノカケ池のある浅い谷を挟んで対岸に位置する。Ｂ地区の立地する丘陵は早く住宅地として造成され、丘陵の頂部から北側の斜面はほとんど削平により失われている。また、調査対象地も病院関係施設の建設にともなう造成工事により相当の破壊を受けている。遺跡の遺存状態は悪いと判断された。

調査対象地は敷地境界に沿った細長い範囲であり、おおよそ幅10～30m、長さ150m の広さであり、標高は32～21m であった。

調査はまず、重機により表土、撹乱土の除去をおこない、次いで人力によって遺構の検出を進めた。調査範囲内に開発地内の保存樹木が残されていたため、これを避けて調査をおこなった。なお、調査区の東側では、調査範囲が狭く、且つ保存樹木のために表土の除去から手作業でおこなった。

調査用のグリットはＡ地区と共通の区割りを用いた。

調査範囲は表土の直下がすぐ基盤層となっていた。基盤層はＡ地区の花崗岩媒乱土と異なり、花崗岩岩砕を含む砂礫層であり、中位段丘面の浸食面であろうと考えられた。表土とこの基盤層は斜面のまま不整合関係にあり、ある時期に畑地などへの開発があったと推定された。

調査の結果、遺構としては住居状遺構2、落とし穴14、焼土壙1などが検出された。また、遺物は旧石器時代の石器類、縄文時代の土器、石器類などが出土した。これらは遺構内から出土したものもあるが、異なる時期の遺構内や遺構外から採集されたものも多く、既に本来の遺構や包含位置から遊離したものも少なくないと見られた。以下では時代別、遺構別に報告する。

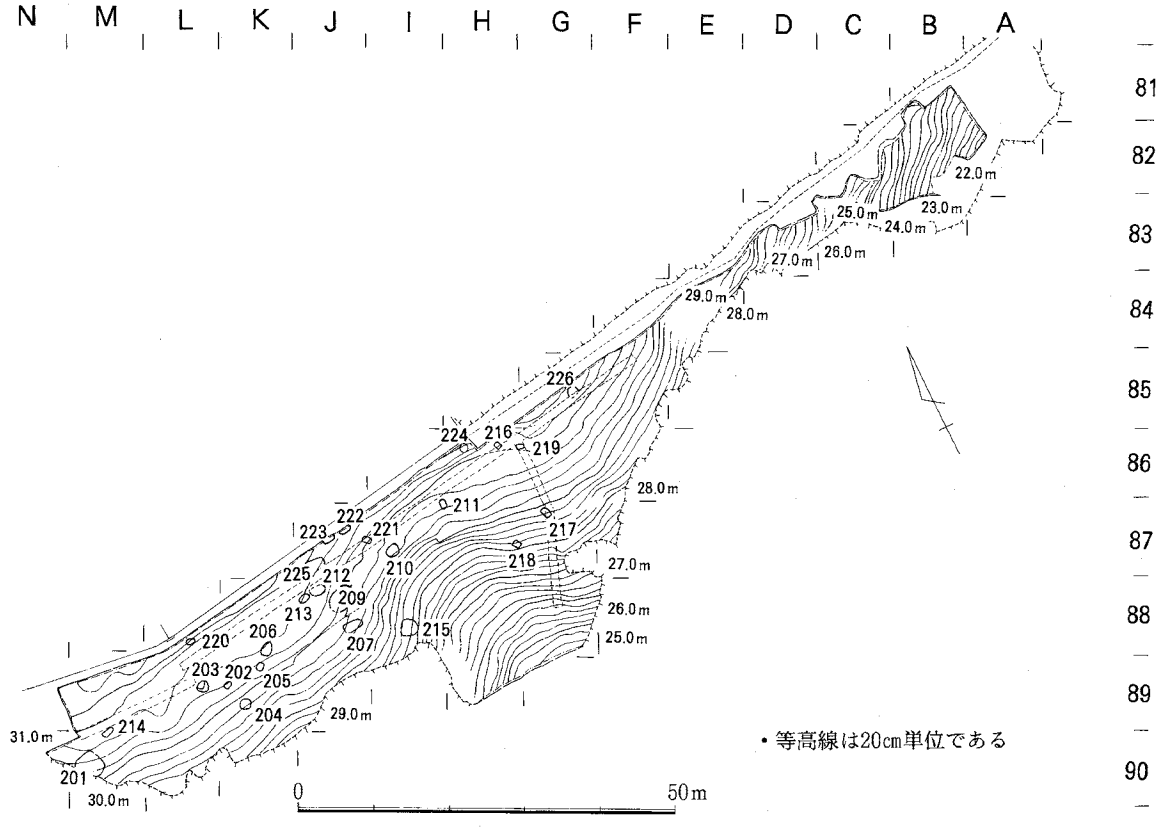


図133. Ｂ地区遺構分布図(1/1,000)

2）先土器時代の調査(図134)

縄文時代の遺構内から出土したものであり、石材、風化、剥離形態などから先土器時代の所属と判断した。調査区西側の3つの遺構からの出土である。この遺構は何れも径20mの範囲内にある。こうしたことから、既に基盤層まで削平されてはいるが、本来この付近に先土器時代の石器群の集中部があったとみられる。1はSK206出土で、風化の強い漆黒色黒耀石の縦長剥片である。打面調整があり、一方向からの連続剥離である。2はSK204出土で、黒色黒耀石の使用痕有る剥片である。背面は自然面、裏面はネガ面をもつ。先端部に樋状を含む微細剥離がある。3はSC209出土で、漆黒色黒耀石の不定形の使用痕有る剥片である。打面、背面は自然面である。一側辺に使用痕とみられる剥離がある。

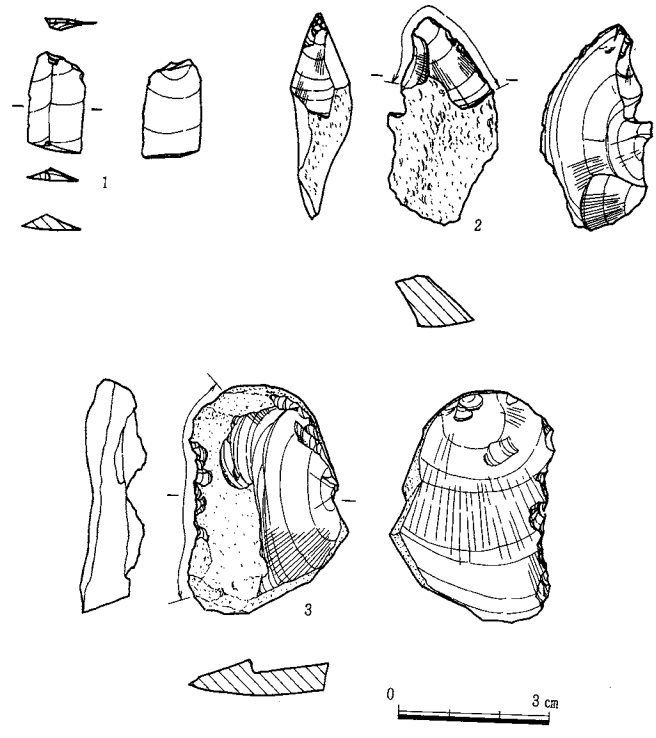


図134. 先土器時代の遺物（2/3）

3）縄文時代の調査

a、住居状遺構

SC201:M90区にある。標高約30.5mの緩い南斜面に立地する。平面は東西に長い不整な楕円形であり、長さ4.5m、幅3.0m、深さ約0.4mを測る。床面は比較的平坦であるが、現地形に沿った傾斜をもつ。床面には小穴があるが、規則性はない。また、焼土面はない。覆土は上半部は風化土であるが、炭化物や遺物の包含は認められなかった。こうした点から住居であるかは疑問が残る。

SC209: J88区にある。標高約30.0m付近の南東斜面にある。平面は東西に長い楕円形を呈する。長さ3.9m、幅2.8m、深さ0.45mを測る。また、西側に長さ1.0m程の不整な浅い張り出しがある。床面は中央に向かって緩く窪む。床面に柱穴はない。覆土の中位に炭化物片の集中や、土器片、石器類が多く出土した。土器は全て破片であるが、精製と粗製がある。精製土器には口唇部外面に一条の沈線を施し、玉縁状に仕上げた鉢(1)や、鉢の胴部屈曲部破片(2)などがある。粗製土器は多くが深鉢形を呈するとみられ、直立する口縁部をもつもの(3〜7)、口縁部が小さく外反するもの(8,9)、胴部の屈

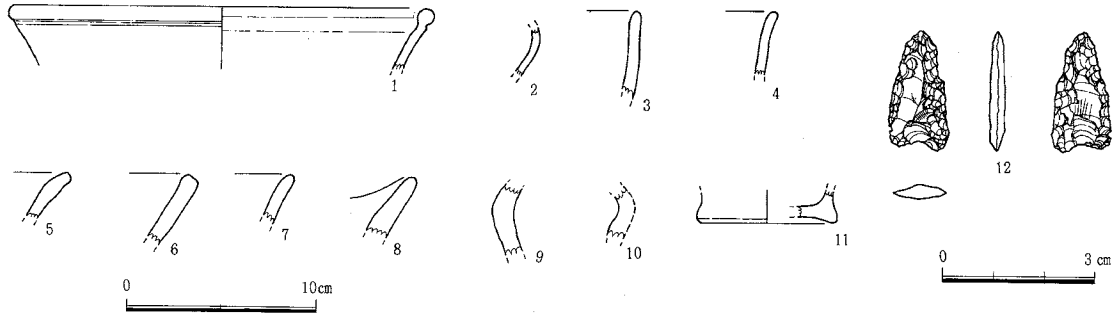
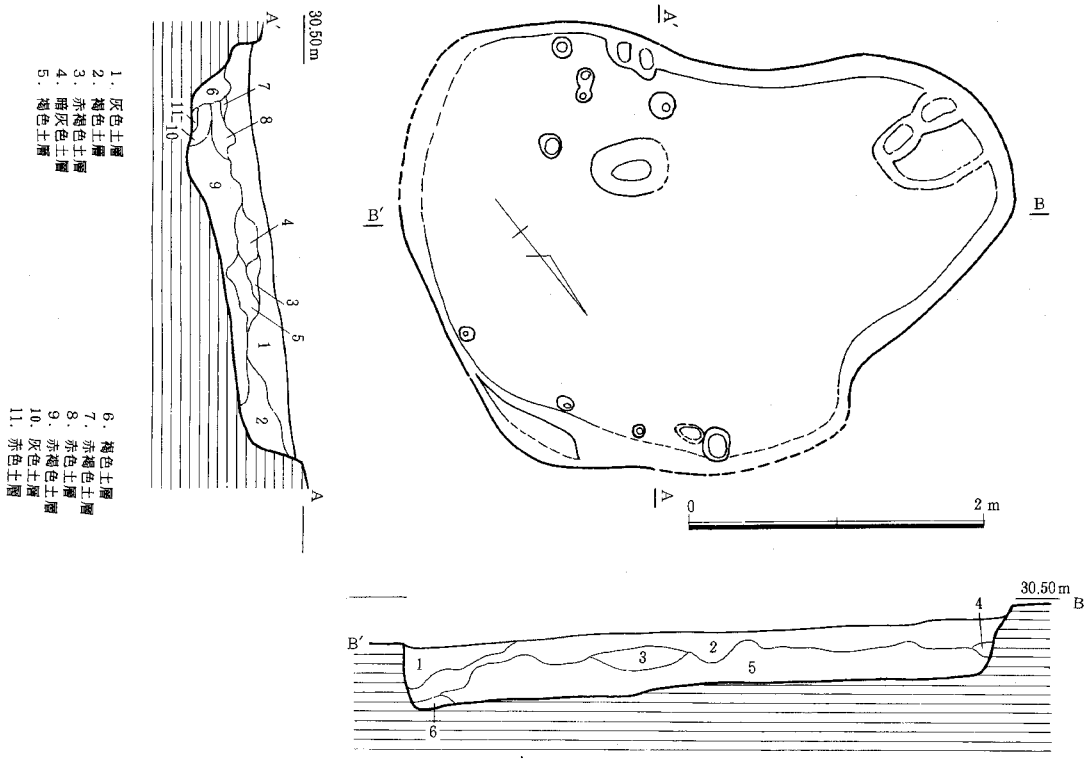
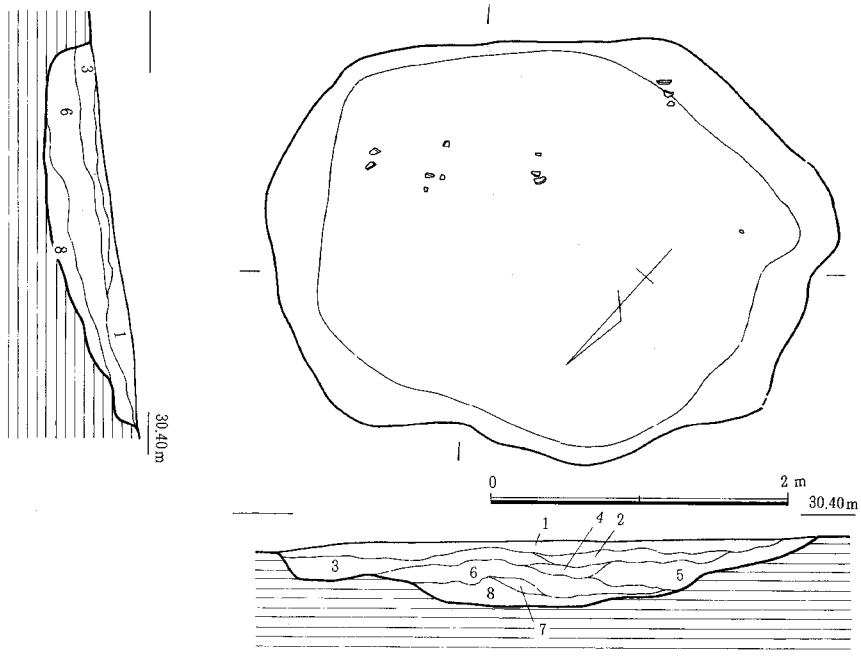


図135. SC209出土遺物(1/4,2/3)



1．暗灰色土層　僅かに炭化物を含む。
2．灰色土層
3．暗灰色土層
4．褐色土層
5．赤褐色土層
6．赤色土層

図136. SC201遺構図（1/50）



1．暗褐色土層（暗めの色調）
2．暗褐色土層　炭化物少量含む。
3．褐色土層
4．暗褐色土層（茶色帯びる）
5．茶褐色土層　炭化物片含む。
6．黄褐色土層
7．茶褐色粘質土層
8．暗褐色土層

図137. SC209遺構図（1/50）

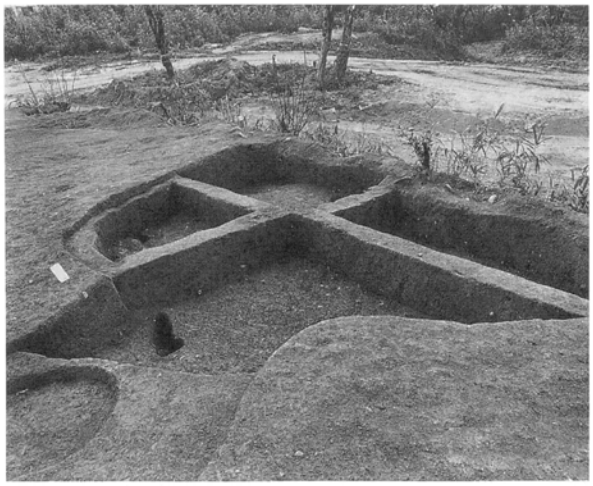


図138. SC201調査状況（北から）

図139. SC209完掘状況（南西から）

曲部と見られるもの(10)、僅かな上げ底の底部(11)などがある。石器には石鏃がある。12は半透明の黒色黒耀石製であり、縦長剥片を素材としたものである。全周から調整を施す。長さ2.4cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm を測る。土器類は数が少ないが、鉢は縄文時代晩期中葉の黒川式土器の特徴をもつものである。石鏃も素材や調整からみて、この時期として矛盾がないものである。

b，落とし穴

SK202:L89区にあり、平面は隅丸長方形を呈する。上部は広がっている。中位以下の壁面は80°以上となる。主軸は N-46° -Eで、長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.55m を測る。床面中央に小穴 3 がある。小穴は径約0.1～0.05m、深さ0.15～0.05m を測る。先端は尖っている。

SK204:K89区にあり、北側は保存樹木があるため未調査である。平面は隅丸長方形を呈する。壁面は70° 以上となる。主軸は N-53° -W で、長さ1.4m、幅0.9m、深さ0.9m を測る。床面中央に穴1がある。穴は径約0.5m、深さ0.35m を測る。

SK206:K88区にあり、平面は隅丸長方形を呈する。上部は北側を主に不整形に広がっている。下半部の壁面は垂直に近い。主軸は N-33° -W で、長さ1.5m、幅0.7m、深さ0.95m を測る。床面中央に楕円形の穴 1 がある。穴は長さ0.4m、幅0.3m、深さ0.05m を測る。

SK207: J88区にあり、浅く、広いことから落とし穴であるかは不明である。平面は隅丸長方形を呈する。壁面は40° 以上となる。主軸は N-79° -E で、長さ2.6m、幅1.3m、深さ0.2m を測る。床面南西側に落ち込みがある。落ち込みは不整形であり、長さ0.8m、幅0.5m、深さ0.2m を測る。

SK208: I 88区にあり、平面は楕円形を呈する。上部は広がっている。壁面は70° 以上となる。主軸は N-44° -W で、長さ0.9m、幅0.7m、深さ0.5m を測る。床面中央に隅丸長方形の穴 1 がある。穴は長さ0.35m、幅0.25m、深さ0.1m を測る。

SK211: I 87区にあり、平面は隅丸長方形を呈する。壁面は垂直であり、上部はややせり出している。主軸は N-01° -E で、長さ1.3m、幅0.8m、深さ0.9m を測る。床面中央に隅丸長方形の穴 1 がある。穴は長さ0.5m、幅0.35m、深さ0.35m を測る。

SK216:H86区にあり、平面は隅丸長方形を呈する。近年の造成で上部は削平されている。壁面は70° 以上となる。主軸は N-23° -W で、長さ0.9m、幅0.7m、深さ0.4m を測る。床面中央に穴 1 がある。小穴は径20cm 前後、深さ0.1m を測る。先端は尖っている。覆土中から古銅輝石安山岩製の石匙が出土した。6は完形品であり、横長の剥片を素材としている。高さ4.5cm、幅5.4cm、厚さ0.7cm を測る。

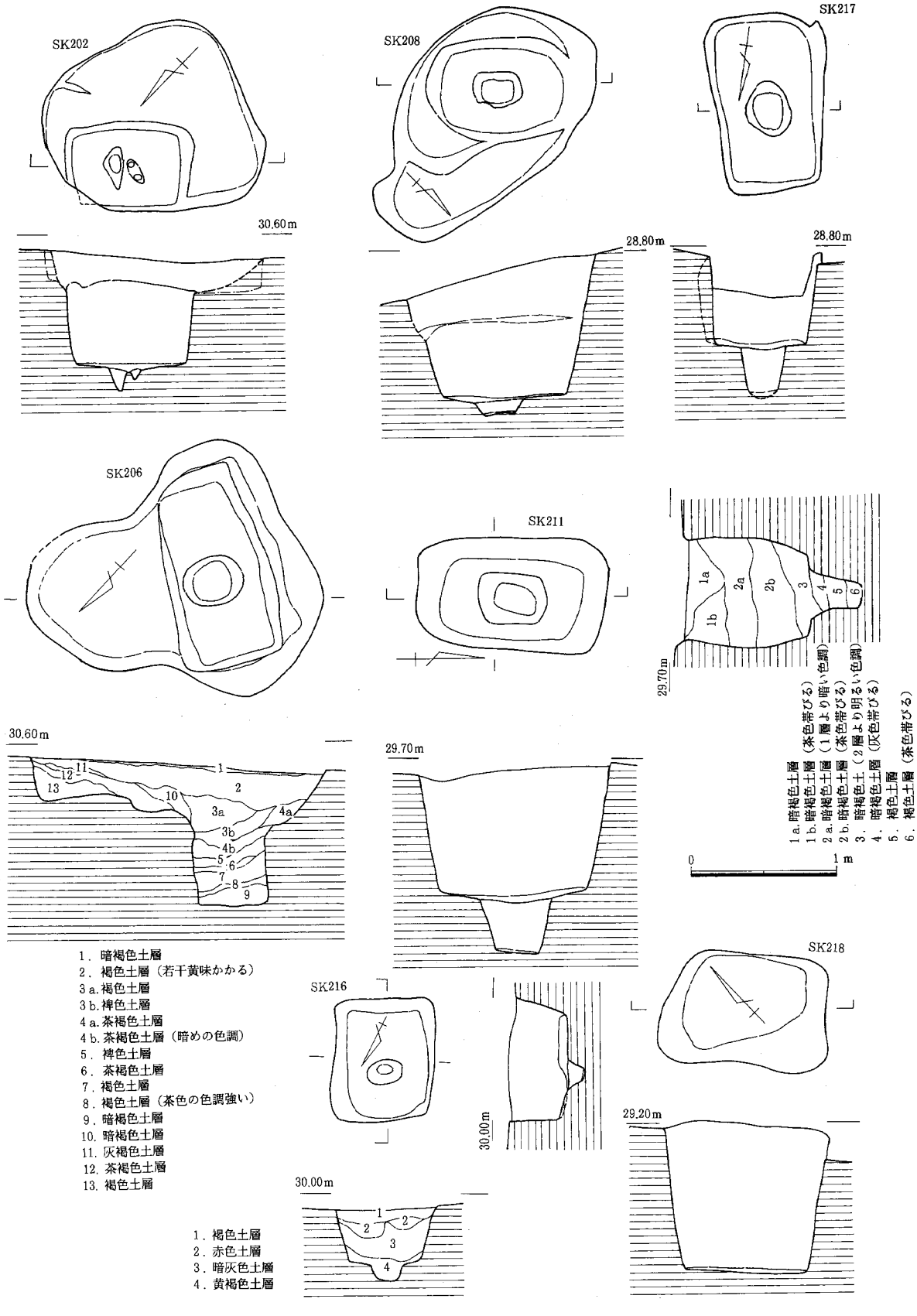
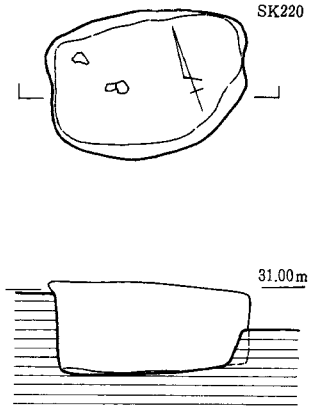
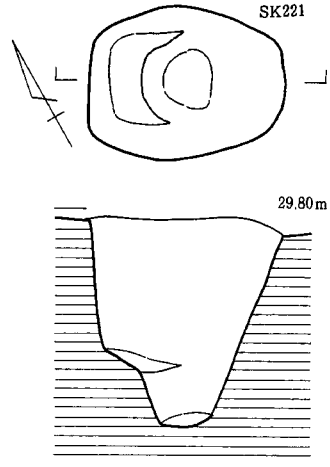
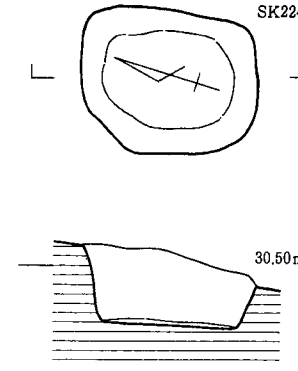
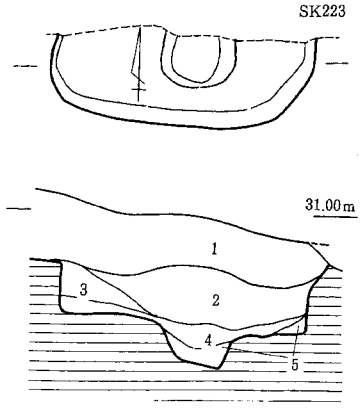


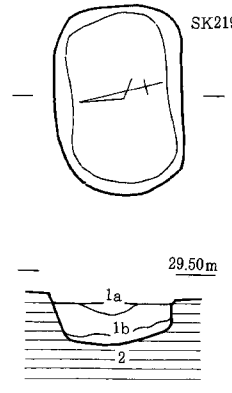
図140. 縄文時代遺構図１（1/40）

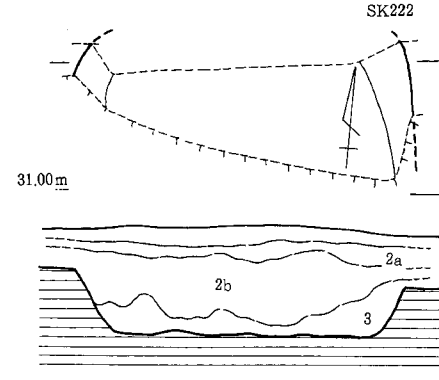








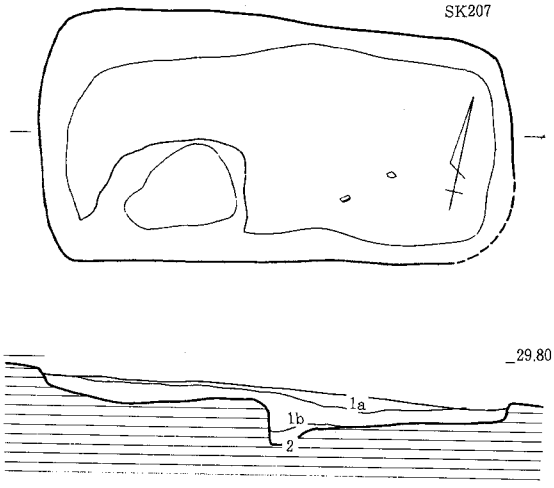


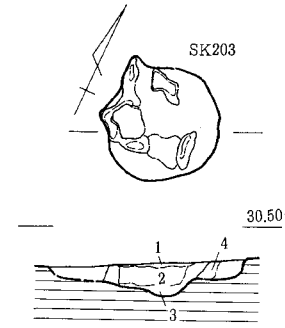


1．黒色土　腐植土層。土の締まりは弱い。
2．明灰色土　風化の進んだ媒乱土。炭化物を若干含む。硬く締まり、粘性強い。下位層へ漸移的に変化。
3．明褐色土　風化の進んだ媒乱土。硬く締まり、粘性強い。下位層へ漸移的に変化。
4．褐色土　より風化の進んだ媒乱土。多い。硬く締まり、粘性強い。下位層へ漸移的に変化。
5．赤色粘質土　地山。硬く締まり、粘性強い。

1a.暗褐色土　下位層へ漸移的変化。硬く締まり、粘性あり。
1b.暗褐色土（若干灰色帯びる）花崗岩少量含む。茶褐色粘質土を若干含む。硬く締まり、粘性強い。
2．暗茶褐色土　花崗岩媒乱土を若干含む。しまりよく硬い。粘質あり。

1．黒褐色表土
2a.（暗）褐色土　茶褐色粘質土塊を若干含む。硬く締まり、粘性あり。下位へ漸移的に変化する。
2b.褐色土　茶褐色粘質土塊、炭化物若干含む。硬く締まり、粘性あり。
3．赤褐色土　花崗岩媒乱土少量含む。硬く締まる。2層との区分は視覚的に明瞭である。





1a.暗褐色土層　腐植木痕あり。炭化物少量含む。硬く締まり、粘性ない。
1b.褐色土層（1a層に比べて明るい）　炭化物若干含む。硬く締まり粘性ない。上位からは漸移的変化。下位層とは明瞭に区分可。
2．暗褐色土層　茶褐色粘質土塊若干含む。花崗岩風化土を塊状に少量含む。炭化物若干含む。硬く締まり粘性弱い。

1．暗褐色土　炭化物少量含む。硬く締まり、粘性ない。
2．暗褐色土（茶色帯びる）　炭化物多量に含む。焼土塊を若干含む。硬く締まる。
3．暗灰褐色土　炭化物、焼土片を若干含む。硬く締まる。粘性弱い。
4．暗褐色土（茶色強い）　茶褐色粘質土塊、炭化物を少量含む。硬く締まり、粘性あり。

0　1m

図141. 縄文時代遺構図2 (1/40)

SK217:G86区にある。平面は隅丸長方形を呈する。壁面は80° 以上となる。主軸はN-10° -Wで、長さ1.2m、幅0.7m、深さ0.6mを測る。床面中央に穴1がある。穴は0.3〜0.4m、深さ0.3mを測る。

SK218:H87区にあり、平面は隅丸長方形を呈する。壁面は70° 以上となる。主軸はN-46° -Wで、長さ1.1m、幅0.8m、深さ1.0mを測る。床面に穴は未検出である。

SK219:G86区にあり、平面は隅丸長方形を呈する。試掘溝により上部を削平している。壁面は60° 以上となる。主軸はN-77° -Wで、長さ1.0m、幅0.7m、深さ0.3mを測る。床面に穴はない。

SK220:L88区にあり、平面は楕円形を呈する。南半部は造成により削平されている。壁面は80° 以上となる。主軸はN-70° -Wで、長さ0.9m、幅0.8m、深さ0.5mを測る。床面に穴はない。

SK221:J87区にあり、平面は楕円形を呈する。壁面は70° 以上となる。主軸はN-61° -Wで、長さ1.0m、幅0.8m、深さ0.8mを測る。床面中央に穴1がある。穴は径約0.4m、深さ0.3mを測る。

SK222:J87区にあり、調査区北側の壁にかかっている。そのため、南半分の調査をおこなった。平面は隅丸長方形を呈する。上部は広がっている。壁面は50° 以上となる。主軸はN-90° -Wで、長さ1.8m、幅0.5m以上、深さ0.4mを測る。床面に穴はない。

SK223:J87区にあり、調査区北側の壁にかかっている。そのため、南半分の調査をおこなった。平面は隅丸長方形を呈する。壁面は80° 以上となる。主軸はN-85° -Eで、長さ1.4m、幅0.6m以上、深さ0.3mを測る。床面中央に穴1がある。穴は径約0.4m、深さ0.2mを測る。

SK224:H86区にあり、平面は隅丸方形を呈する。壁面は70° 以上となる。主軸はN-18° -Wで、長さ1.0m、幅0.8m、深さ0.4mを測る。床面に穴はない。

c，焼土壙

SK203:K89区にあり、平面は不整円形を呈する。径約0.6m、深さ0.15mを測る。床面上に焼土面がある。覆土中には多くの焼土片、炭化物片が含まれている。

d，縄文時代の遺物(図142)

縄文時代の遺物は遺構検出時や撹乱中などから出土した。1〜5は石鏃である。このうち1•2•4は黒耀石製、3,5は古銅輝石安山岩製である。3は鍬形鏃であり、縄文時代早期に比定される。

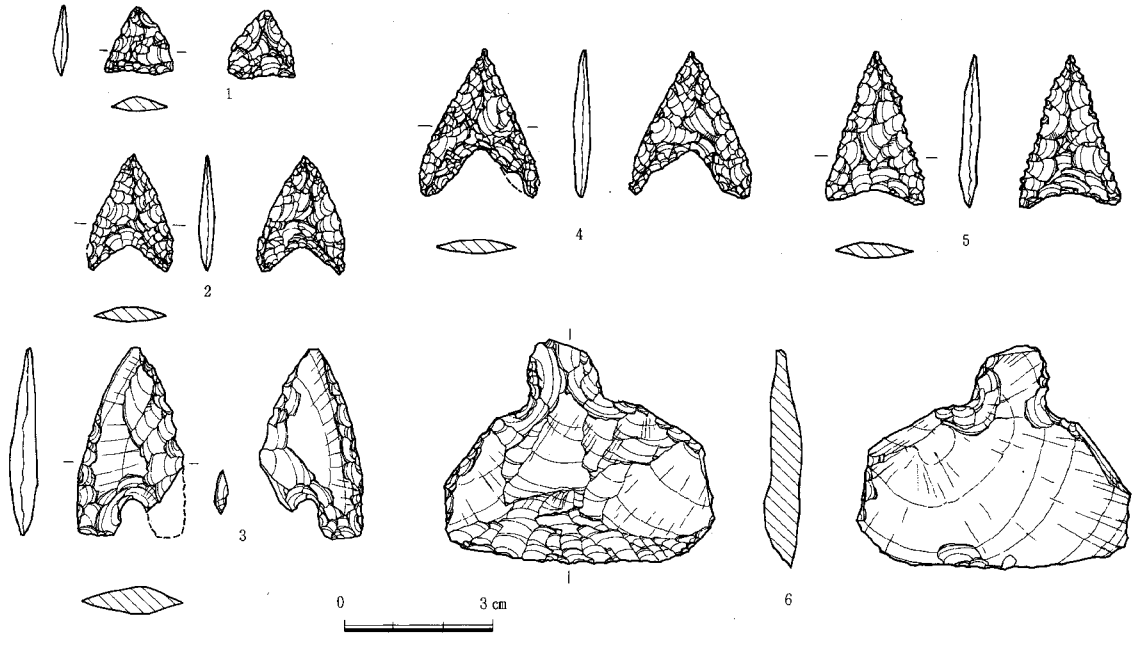


図142. 縄文時代の遺物(2/3)

第５章、考察

１）和田Ｂ遺跡出土の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター　本田光子

和田遺跡の１－３号墳およびSK45，225出土の赤色物が何であるかを知るために、顕微鏡観察、蛍光Ｘ線分析を行った。出土例に関する今までの知見に寄れば、墳墓出土の赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第２鉄・赤鉄鉱（Hematite）を主成分とするベンガラと、硫化水銀（赤）・辰砂（Cinnabar）を主成分とする朱の２種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四酸化鉛を主成分とする鉛丹がある。これら３種類の赤色顔料を考えて分析を行った。試料の一覧・分析結果とそれにより推定される赤色顔料を表に示した。

No.	試料の採取位置	顕微鏡観察	蛍光Ｘ線分析		赤色顔料の種類
			鉄	水銀	
1	１号墳周溝内	ベンガラ	＋	－	ベンガラ
2	１号墳主体部石棺の石材	ベンガラ	＋	－	ベンガラ
3	１号墳主体部石棺内床面頭部周辺	ベンガラ	＋	－	ベンガラ
4	１号墳主体部石棺内床面北側（足側）	ベンガラ			ベンガラ
5	１号墳主体部石棺内床面東側	ベンガラ			ベンガラ
6	１号墳主体部石棺内床面西側	ベンガラ			ベンガラ
7	２号墳主体部床面頭部下	ベンガラ・朱	＋	＋	ベンガラ・朱
8	２号墳主体部床面南側側板	ベンガラ	＋	－	ベンガラ
9	２号墳主体部床面Ｉ区	ベンガラ			ベンガラ
10	２号墳主体部床面Ⅱ区	ベンガラ			ベンガラ
11	２号墳主体部床面Ⅲ区	ベンガラ			ベンガラ
12	３号墳主体部石棺内床面北側	なし			なし
13	３号墳主体部石棺内床面東側	なし			なし
14	３号墳主体部石棺内床面清掃分	なし	＋	－	なし
15	３区SK45埋土中	なし			なし
16	３区SK225埋土中	ベンガラ	＋	－	ベンガラ

表　赤色物の分析結果と推定される赤色顔料の種類

２号墳からは人骨が出土していないが、頭位と推定される位置から朱が検出されているので、埋葬施設にはベンガラ、遺骸には朱という使い分けが行なわれていたものと判断できる。

Ｘ線分析は九州産業大学総合機器センターで行ったもので、ご協力頂いた同センター助手古賀啓子博士に感謝致します。

2）和田Ｂ遺跡出土の人骨について

金宰賢・石井博司・田中良之

1．はじめに

本遺跡においては、１号墳、３号墳およびSX102から人骨が出土した．筆者らは、発掘調査の段階から現場における人骨の観察・調査を行ったが、人骨はその後九州大学大学院比較社会文化研究基層構造講座に搬入し、整理・調査を行った。以下遺構ごとに記載を行うことにしたい。

なお、人骨は九州大学大学院比較社会文化研究科考古人類資料室に保管されている。

2．１号墳出土人骨

１号人骨

【保存状態】人骨の保存は比較的良好である。頭骨は、左右頭頂骨、左右側頭骨と後頭顆が認められる。このうち、乳様突起と外後頭隆起の発達は弱く、矢状縫合は内板が閉鎖し、ラムダ縫合も内板の閉鎖が始まっている。また、頭骨の全面に赤色顔料の付着が認められた。

下顎骨は筋突起を含む左下顎体から右下顎体の一部が認められた。残存歯式は以下の通りである。

	M_2

○歯槽開放　×歯槽閉鎖　／欠損　△歯根のみ
・遊離歯　（　）未萌出　Ｃう歯　以下同様

歯の咬耗度は、Martin の３度、栃原の３度である。

【年齢・性別】歯牙咬耗度と頭蓋主縫合の癒合状況からみて、本人骨は成年後半から熟年と推定される。また、乳様突起・外後頭隆起の発達が弱いことから、女性であると判定される。

【形質】頭骨小変異は表７に示したが、上矢状洞溝左傾、アステリオン骨、鼓室骨裂孔、頭頂切痕骨の変異が認められた。

２号人骨

【保存状態】頭骨のみであり、左右頭頂骨、後頭骨が認められる。保存は比較的良好である。矢状縫合とラムダ縫合は内外板とも開離する。下顎骨は左右の下顎頭・下顎角を除く部位が遺存していた。残存歯式を以下に記す。

	$\dot{M}^1$
M_3 △ △ ○ P_1 ○ ○ ○ c c c	○ ○ ○ ○ ○ M_1 × M_3

歯牙咬耗度は Martin の１度、栃原の１Ｃ度である。下顎右第１・２大臼歯にう蝕が認められ、第１大臼歯歯槽骨に粗慥が認められる。なお、頭骨と下顎骨に赤色顔料の付着が認められた。

【年齢・性別】歯牙咬耗度および頭蓋主縫合の癒合状況から、年齢は成年と推定される。性別については、性判定が可能な部位が遺存していないため、不明である。

3．３号墳出土人骨

１号人骨

【保存状態】人骨の保存状態は比較的良好である。頭骨は、左右頭頂骨、後頭骨、左右側頭骨が認められる。なお、ラムダ縫合には内板の開離が認められ、後頭骨外後頭隆起の発達は顕著ではない。下顎骨は、左右下顎頭と下顎角を除くほとんどが遺存する。頭骨の遺存部全面と下顎骨の内面からは赤

色顔料の付着が認められた。また、上顎骨は全く遺存していないが、上顎歯牙およびその破片が認められた。残存歯式は以下の通りである。

／ ／ $\dot{P}^1$ ／ $\dot{I}^2$ ／	／ ／ $\dot{C}$ $\dot{P}^1$ $\dot{P}^2$ ／ $\dot{M}^2$
( ) M_2 M_1 P_2 P_1 C ○ ○	○ I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2 ( )

これら歯牙の咬耗度は、Martin（1992）の１度、栃原（1957）の１～２ａ度を示している。

上肢骨は、左右肩甲骨片、左右鎖骨、左右上腕骨骨体、左右橈骨、左尺骨が認められる。躯幹骨は、軸椎（第２頚椎）、胸椎、腰椎および肋骨片が認められた。下肢骨は、左右寛骨、仙骨片、左右大腿骨、左右の脛骨と腓骨が認められる。これらのうち、寛骨大坐骨切痕角は小さく、大腿骨粗線および脛骨ヒラメ筋線の発達は強い。

【性別・年齢】以上のように、本人骨は歯牙咬耗度からみて、成年でも後半に達する年齢であったと推定される。また、乳様突起の発達は弱いものの、大坐骨切痕角が小さいこと、大腿骨粗線および脛骨ヒラメ筋線の発達が認められることから、男性と判定される。

【形質】頭骨の計測は不能であったが、四肢骨の計測値は表２～６に示す。頭骨小変異は、観察が可能であった変異そのものが少なかったが、アステリオン骨・後頭乳突縫合小骨が観察された。

２号人骨

【保存状態】頭骨は、前頭骨、左右頭頂骨、後頭骨、左右側頭骨片が認められる。これら縫合は全て開離し、骨の厚さも薄く、また頭骨のサイズも小さい。遊離歯から得られた残存歯式を以下に記す。

M^1 (P^2) m^2 P^1 $\dot{c}$ I^2	I^1 I^2 (C) (P^2) m^2 M^1 (M^2)
(M_2) M_1 (P_2) (P_1)	(C) m_1 m_2 M_1 (M_2)

歯の咬耗度は、ほとんど０度で、乳歯と永久歯が共に認められる。

躯幹骨は、頚椎と肋骨が一部残存している。上肢骨は、右鎖骨と左右肩甲骨片、右上腕骨骨体が認められる。下肢骨は、左右寛骨と、左右大腿骨、左右脛骨が認められる。寛骨、大腿骨、脛骨は全て骨幹のみであり、骨端が遊離した状態である。

【年齢・性別】このように本人骨は長骨骨端の未癒合から、未成人であることは明らかである。また、第１・２乳臼歯が残存していて、第１・２切歯と第１大臼歯がやや磨耗していて萌出していたこと、犬歯と第１・２小臼歯、第２大臼歯の歯根が未形成であるという歯牙萌出状態からみて、年齢は８才くらいの小児と推定される。性別は不明である。

【形質】小児であるため、計測は不能である。頭骨小変異も表７に示したように、ほとんどの変異が観察不能であった。

３号人骨

【保存状態】人骨の保存は良好で、ほぼ完存する。頭骨は左の頬骨から眼窩にかけての前頭骨を除い全てが遺存している。頭骨は眉弓・乳様突起・外後頭隆起ともに発達する。下顎骨も完存しており、上下顎から得られた残存歯式は以下の通りである。

( ) M^2 M^1 P^2 P^1 C I^2 I^1	I^1 I^2 C P^1 P^2 M^1 M^2 ( )
( ) M_2 M_1 P_2 P_1 C I_2 I_1	X I_3 C P_1 P_2 M_1 M_2 M_3

歯の咬耗度はMartinのＩ度、栃原の１ｂ～１ｃ度である。

躯幹骨は胸椎および仙骨と肋骨が一部認められる。上肢骨は、右上腕骨が遠位端を除く部分が遺存

し、左は近位端と遠位端の破片が認められるのみである。前腕は右橈骨と右尺骨の遠位端、左尺骨骨体が認められる。下肢骨は、左右寛骨、左右大腿骨の骨頭から骨体にかけて、左右脛骨、左右腓骨、右踵骨、右距骨が認められた。

これらのうち、上腕骨三角筋粗面、大腿骨粗線、脛骨ヒラメ筋線はいずれも発達する。

【年齢・性別】歯牙咬耗度からみて成年の半ば～後半と推定され、さらに恥骨腹側縁の lipping が始まっていることから、成年の後半と推定される。性別については、眉弓、乳様突起、外後頭隆起、上腕骨三角筋粗面、大腿骨粗線、脛骨ヒラメ筋線がいずれも発達することから、男性と判定される。

【形質】四肢骨の計測値を表２～６に示す。本人骨は唯一顔面骨の保存が良好であったが、上顔高は75mm と高く、上顔示数は70.8である。また、右眼窩で求めた眼窩示数も78.6であり、筑前古墳人（Doi and Tanaka,1987）に近い値であり、筑前古墳人の典型に近いといえる。

頭骨小変異は表７に示したが、ほとんどの項目で観察可能であったものの、顆前結節、鱗状縫合小骨、副眼窩卞孔、口蓋隆起が認められたのみである。

【特記事項】

右上腕骨の骨体三角筋粗面のやや上で骨折の所見が認められた。詳細は不明であるが、骨折後治癒した形跡を認める。

４．ＳＸ１０２出土人骨

遺溝内から出土した人骨の保存状態は良好であるが、本来古墳に葬られていたものを古墳の破壊に伴って集骨されたものであるため、まず個体識別を行った結果、３個体分と識別された。したがって、以下１～３号人骨として記載する。ただ、砕片化した頭骨はじめいずれとも判別できなかった骨片についてはこれらに含めてはいない。

１号人骨

【保存状態】他の長骨に比べて最も頑丈な個体である。上肢は右上腕骨と左上腕骨遠位端、下肢は左右大腿骨、左右脛骨が認められた。

【年齢・性別】上腕骨三角筋粗面、大腿骨粗線、脛骨ヒラメ筋線の発達からみて男性と判定され、年齢も成人には達していたと推定される。

２号人骨

【保存状態】左右上腕骨、右大腿骨、左右脛骨が認められた。１号人骨ほど頑強でなく、下記の３号人骨ほど華奢でない個体である。

【年齢・性別】上腕骨三角筋粗面、大腿骨粗線の発達からみて、男性と判定され、年齢も成人に達していたと考えられる。

３号人骨

【保存状態】左上腕骨遠位端、左寛骨、左右大腿骨、左脛骨骨体が認められた。

【年齢・性別】大腿骨粗線の発達は弱く、全体に華奢であることから、この個体は女性と判定される。また、年齢は成人に達していたと考えられる。

【歯牙】これらの他に、３体に相当すると思われる歯牙が検出されている。上顎左第１・２大臼歯（咬耗度：Martin の I 度、栃原の１ｂ度）、上顎右犬歯・第１大臼歯と左第１小臼歯・第３大臼歯（咬耗度：Martin の１～２度、栃原の１ｃ～２ａ度）、上顎左右第１大臼歯・下顎左第１小臼歯（咬耗度：Martin の２度、栃原の２ａ度）であり、それぞれ成年前半、成年半ば、成年後半と推定されるが、上記の３体との対応は不明である。

5．おわりに

以上、出土人骨について記載・報告を行ってきた。各遺構の出土状態にも記されているが、1号墳、3号墳ともに片づけられた状態で、最終埋葬の個体が認められない。とくに3号墳は、3体とも保存が比較的良好であったにもかかわらず、いずれも片づけられていた。したがって、改葬・集骨あるいは最終埋葬後しばらく経過して遺体を片づけたことが考えられる。しかし、それらの行為の時間的経過を示す考古学的情報が何もなく、どのような過程で行われた葬送行為であるかは不明である。

また、3号墳の3体の被葬者については、歯冠計測値を用いて血縁関係の推定を行い、$CP^2M^2P_1P_2M_1M_2$の組み合わせで0.691（1－2号）、0.412（1－3号）、0.760（2－3号）、$P_1P_2M_1M_2$で0.872（1－2号）、0.781（1－3号）、0.743（2－3号）の値が得られ、おそらく3体とも血縁関係であったろうという結果が得られている。これらの問題については紙数の関係もあり、再論を期したい。

最後に、調査段階から大変お世話になった福岡市教育委員会吉留秀敏氏に感謝したい。また、人骨整理等でご協力いただいた基層構造講座諸氏、および九州大学宮田剛・安永浩両氏に謝意を表する。

参考文献：

Doi,Naomi and Yoshiyuki Tanaka,1987 : A Geographical Cline in Metrical characteristics of Kofun Skulls Western Japan. 人類学雑誌,19－3.

Martin,R. 1922 : Lehrbuch der Anthropologie Ⅱ.

栃原博、1957 :日本人歯牙咬耗に関する研究。熊本医学会雑誌,31 補冊4.

表1 頭蓋主要計測値 (mm)

マルチンNo.	項目	3－3号人骨（♂）
1	頭蓋最大長	185
8	頭蓋最大幅	149
17	Ba－Br高	133
8／1	頭長幅示数	80.5
17／1	頭長高示数	71.9
17／8	頭幅高示数	89.3
45	頬骨弓幅	(144)
46	中顔幅	(106)
47	顔高	125
48	上顔高	75
47／45	顔面示数（K）	86.8
47／46	顔面示数（V）	117.9
48／45	上顔示数（K）	52.1
48／46	上顔示数（V）	70.8
51R	眼窩幅（右）	42
51L	眼窩幅（左）	－
52R	眼窩高（右）	33
52L	眼窩高（左）	－
52／51R	眼窩示数（右）	78.6
52／52L	眼窩示数（左）	－
54	鼻幅	26
55	鼻高	53
54／55	鼻示数	49.1

表2　上腕骨計測値　(mm)

マルチンNo.	項　目	3号石棺 1号人骨(♂) 右	左	3号石棺 3号人骨(♂) 右	左	SX102遺構 1号人骨(♂) 右	左	SX102遺構 2号人骨(♂) 右	左
1	最大長	−	−	−	−	−	−	−	−
2	全　長	−	−	−	−	−	−	−	−
5	中央最大径	(23)	(22)	25	−	−	−	−	−
6	中央最小径	(18)	(17)	18	−	−	−	−	−
7	骨体最小周	63	−	63	−	69	68	69	68
7a	中央周	(72)	(68)	71	−	−	−	−	−
6／5	骨体断面示数	78.3	77.3	71	−	−	−	−	−

表3　前腕計測値　(mm)

マルチンNo.	項　目	3号石棺 1号人骨(♂) 右	左	3号石棺 3号人骨(♂) 右	左
橈骨					
3	最小周	41	−	44	−
4	骨体横径	16	16	18	−
4a	骨体中央横径	(15)	(15)	16	−
5	骨体矢状径	13	13	13	−
5a	骨体中央矢状径	(13)	(13)	13	−
5／4	骨体断面示数	81.3	81.3	72.2	−
5a／4a	中央断面示数	86.7	86.7	81.3	−
尺骨					
11	尺骨矢状径	−	14	−	−
12	尺骨横径	−	17	−	−
11／12	骨体断面示数	−	82.4	−	−

表4　大腿骨計測値　(m)

マルチンNo.	項　目	3号石棺 1号人骨(♂) 右	左	SX102遺構 1号人骨(♂) 右	左
6	骨体中央部矢状径	28	28	−	−
7	骨体中央部横径	28	29	−	−
8	骨体中央周	88	90	−	−
9	骨体上横径	32	32	32	−
10	骨体上矢状径	24	23	25	−
6／7	骨体中央断面示数	100	96.6	−	−
10／9	上骨体断面示数	75	71.9	79.6	−

表5　脛骨計測値　(mm)

マルチンNo.	項　目	3号石棺 1号人骨(♂) 右	左	3号石棺 3号人骨(♂) 右	左	SX102遺構 2号人骨(♂) 右	左	SX102遺構 3号人骨(♂) 右	左
1	全　長	−	−	353	−	−	−	−	−
1a	最大長	−	−	357	−	−	−	−	−
8	中央最大径	31	30	29	(29)	−	−	−	−
8a	栄養孔位最大径	34	34	37	34	−	32	−	29
9	中央横径	20	21	20	(21)	−	−	−	−
9a	栄養孔位横径	21	22	24	25	−	−	−	21
10	骨体周	81	81	77	81	−	−	−	−
10a	栄養孔位周	92	90	94	91	−	−	−	78
10b	最小周	73	72	72	−	−	−	−	−
9／8	中央断面示数	64.5	70	69	72.4	−	−	−	−
9a／8a	栄養孔位断面示数	61.8	64.7	64.9	73.5	−	−	−	71.1
10b／1	長厚示数	−	−	20.4	−	−	−	−	−

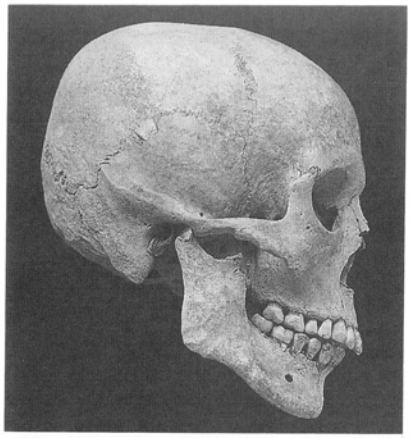
表6　腓骨計測値　(mm)

マルチンNo.	項　目	3号石棺 3号人骨(♂) 右	左
2	中央最大径	−	16
3	中央最小径	−	13
4	中央周	−	48
3／2	骨体中央断面示数	−	81.3

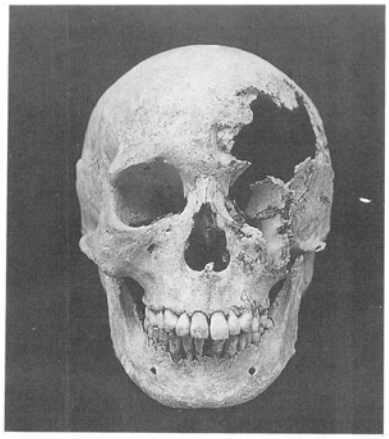
表7　和田B遺跡出土人骨の頭骨小変異

人骨	1－1号人骨		1－2号人骨		3－1号人骨		3－2号人骨		3－3号人骨	
小変異	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
インカ骨	－		／		－		／		－	
ラムダ小骨	－		－		／		－		－	
横後頭縫合	－	－	／	／	／	／	／	／	－	－
上矢状洞溝左傾	（＋）		／		／		－		－	
顆管欠如	／	／	／	／	／	／	／	／	－	－
舌下神経管二分	－	－	／	／	／	／	／	／	－	－
頸静脈孔二分	／	／	／	／	／	／	／	／	－	－
顆前結節	／	／	／	／	／	／	／	／	＋	＋
第三後頭顆	／		／		／		／	／	－	
アステリオン骨	＋	－	／	／	／	＋	／	／	－	－
後頭乳突縫合小骨	－	／	／	／	／	＋	／	／	－	－
鼓室骨裂孔	＋	／	／	／	／	－	／	／	－	－
外耳道骨種	－	－	／	／	／	－	／	／	－	－
頭頂切痕骨	＋	＋	／	／	／	／	／	／	－	－
頭頂孔欠損	－	－	－	－	－	／	／	／	－	－
鱗状縫合小骨	／	／	／	／	／	／	／	／	＋	－
翼上骨	／	／	／	／	／	／	／	／	－	－
前頭側頭連結	／	／	／	／	／	／	／	／	－	－
前頭縫合	／		／		／		／		－	
眼窩上縁孔	／	／	／	／	／	／	／	／	－	－
副眼窩下孔	／	／	／	／	／	／	／	／	＋	－
内側口蓋管骨橋	／	／	／	／	／	／	／	／	－	－
上顎隆起	／	／	／	／	／	／	／	／	－	－
口蓋隆起	／		／		／		／		＋	
床状突起間骨橋	／	／	／	／	／		／		／	／
副オトガイ孔	／	／	／	／	－	－	／	／	－	－
二分頬骨	／	／	／	／	／	／	／	／	－	／
頬骨顔面孔欠損	／	／	／	／	／	／	／	／	－	／
下顎隆起	／	／	／	／	－	－	／	／	－	－
顎舌骨筋神経溝骨橋	／	／	／	／	－	－	／	／	－	－

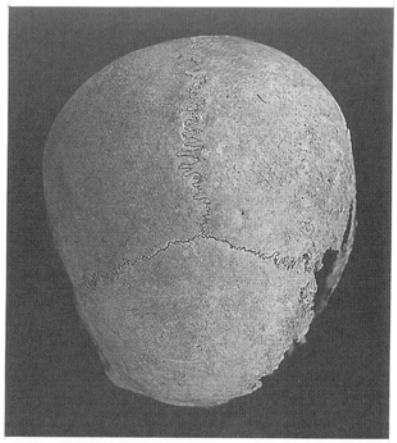
＋：有　－：無　／：不明



3 号墳 3 号人骨側面観

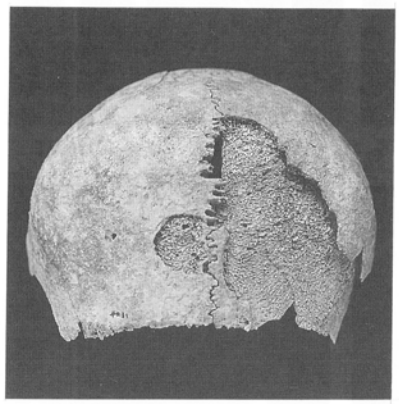


3 号墳 3 号人骨正面観

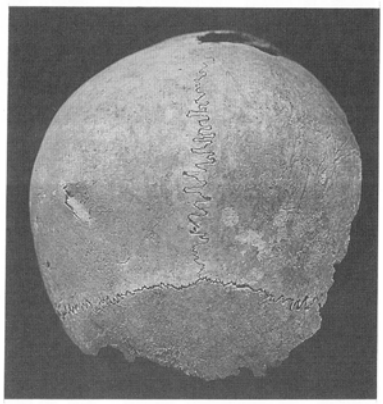


3 号墳 3 号人骨上面観

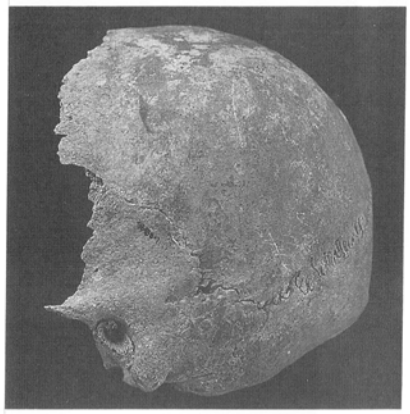
1 号墳 1 号人骨上面観



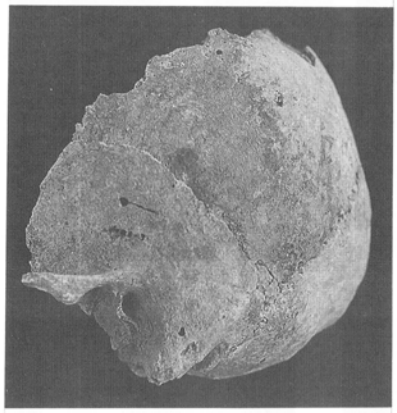
1 号墳 2 号人骨上面観



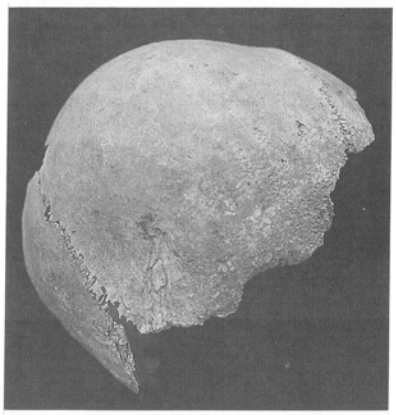
3 号墳 2 号人骨上面観



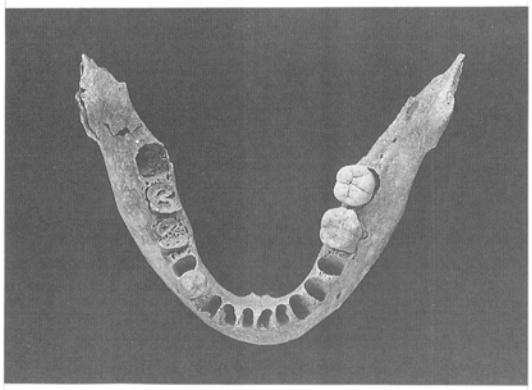
1 号墳 1 号人骨側面観



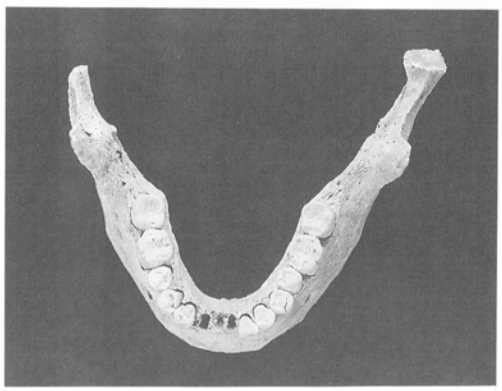
3 号墳 1 中人骨側面観



3 号墳 2 号人骨側面観

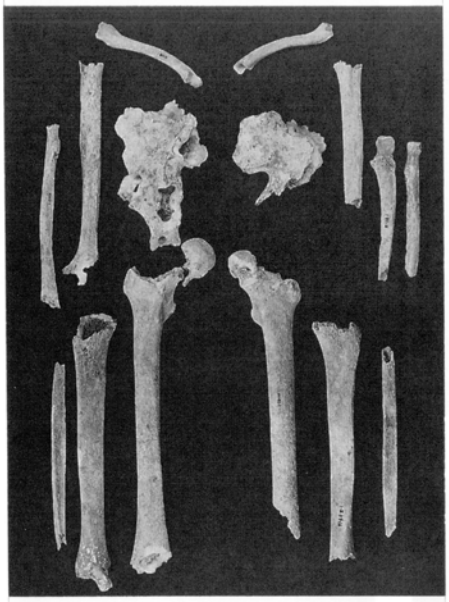


1 号墳 2 号人骨下顎骨

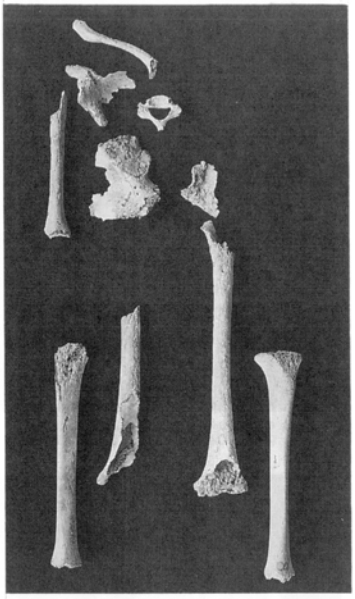


3 号墳 1 号人骨下顎骨

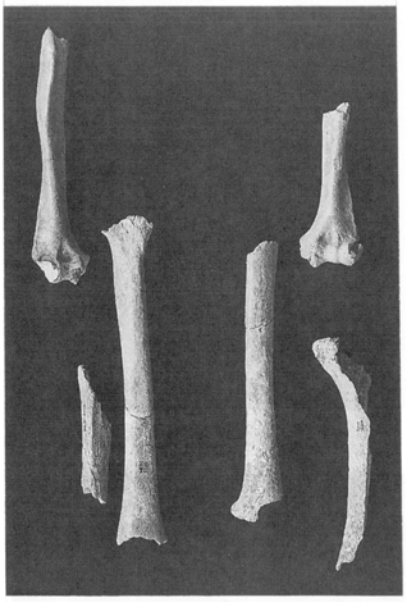
出土人骨 I



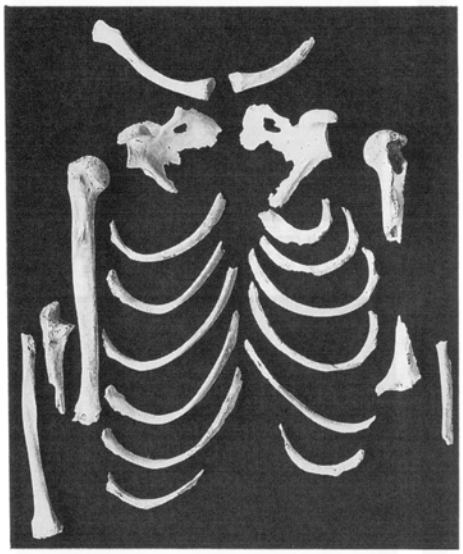
3号墳1号人骨四肢骨



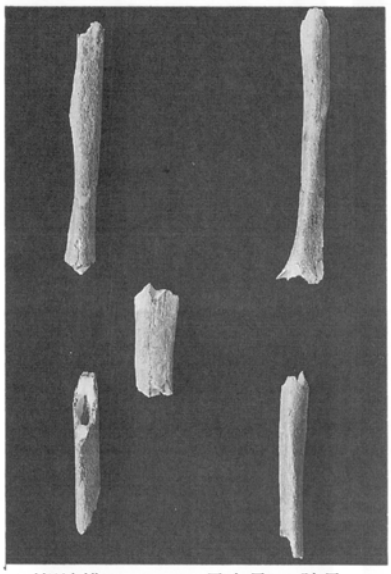
3号墳2号人骨、椎骨・四肢骨



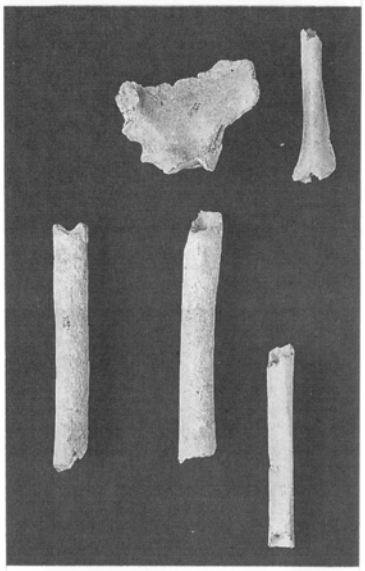
石組遺構 SX102・1号人骨 四肢骨



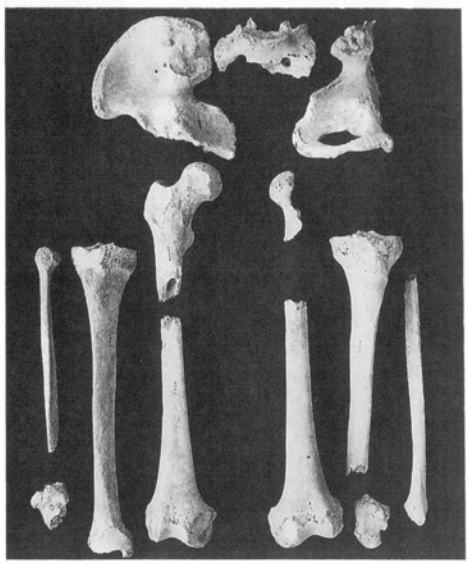
3号墳3号人骨上肢・躯幹骨



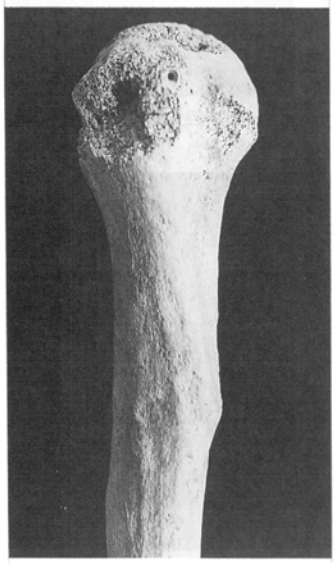
石組遺構 SX102・2号人骨 四肢骨

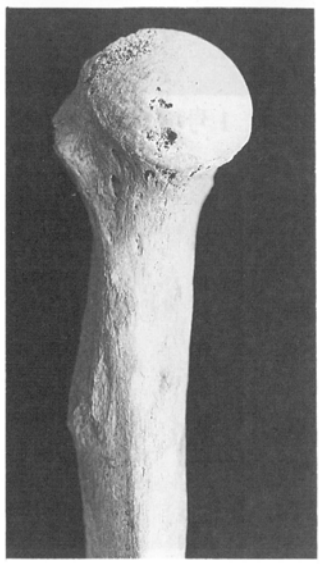


石組遺構 SX102・3号人骨 四肢骨



3号墳3号人骨下肢骨





3号墳3号人骨右上腕骨（骨折痕）

出土人骨Ⅱ

第６章、まとめ

野多目Ｂ、和田Ｂ両遺跡の調査成果の概要を時代別を記したい。

1,先土器時代

和田Ｂ遺跡Ａ地区において１カ所の先土器時代の遺物集中地点を確認した他、周辺で当該期の遺物を採集した。またＢ地区でもこの時期の遺物が検出された。このうちＫ・Ｌ８区の石器群は、出土石器の型式的特徴や打面両設を主とする剥片剥離技術などから、ナイフ形石器段階後半期の早い時期に比定されると推定される。周辺遺跡では野多目Ｃ（拈渡）遺跡などから後続する時期の遺物が出土しており、那珂川左岸の丘陵地帯にこうした遺跡が広がっているものと考えられる。

2,縄文時代

野多目Ｂ、和田Ｂ両遺跡から縄文時代の遺構・遺物を検出した。古い順に見たい。

縄文時代早期の遺構としては、和田Ｂ遺跡において37基余の「落とし穴」遺構を検出した。北部九州のこの種遺構は、小田和利氏の集成・検討に詳しい。本遺跡ではこれまで報告された型式の他に、床面に掘方を設け、杭を配列後、埋め土をおこなうものがある。また、Ａ地区の遺構分布において、数単位に分かれ群集し、一部に落とし穴同士の切り合いが認められた。このことは落とし穴の構築にあたって、その設置場所や配列に一定期間の継続と規制があったとみられる。また、Ａ・Ｂ両地区で大まかに規模の差があるが、何を示すかは不明である。遺構内からは少量の石器が出土したのみである。時期はこの遺物と他遺跡の例からみて縄文時代早期を中心とする時期の所産と考えられる。

縄文時代後期の遺構は、野多目Ｂ遺跡で旧河道と溝状遺構を検出した。また、和田Ｂ遺跡でも同時期の遺物が出土した。野多目Ｂ遺跡では旧河道岸に多量の堅果類の殻や土器片、石器類が出土した。また溝状の遺構はその場所に隣接し設けられている。これらは縄文時代後期前葉に位置づけられるものであり、周辺で堅果類の加工をおこなったと考えられる。約300m 東側の野多目Ｃ（拈渡）遺跡では、中期後半から後期前葉の堅果類貯蔵穴が約60基確認されている。大庭康時氏はこの遺構の分布状態から、同時期の集落は野多目Ｂ遺跡の低丘陵上に想定している。この想定が正しければ、集落を挟んで東側に貯蔵穴、西側に加工場という配置があったことになる。縄文時代晩期の遺構は和田Ｂ遺跡Ｂ地区で住居状遺構を検出した。黒川式段階であり、福岡平野では数少ない確認例である。他に野多目Ｂ遺跡 SD61から夜臼式段階の土器が出土している。

3,弥生時代

弥生時代前期の遺構は、野多目Ｂ遺跡で水田関連施設、和田Ｂ遺跡で貯蔵穴群、住居状遺構、土壙などを検出した。水田関連施設は潅漑用水路であり、削平のため溝底のみが残されていた。水路は谷地形に沿って延びる幹線水路とそれから派生する支線水路、水田への給排水用とみられる水口などがある。遺存状態が不良なために水田面の復元はおこなえないが、野多目Ａ遺跡２次調査における夜臼式～

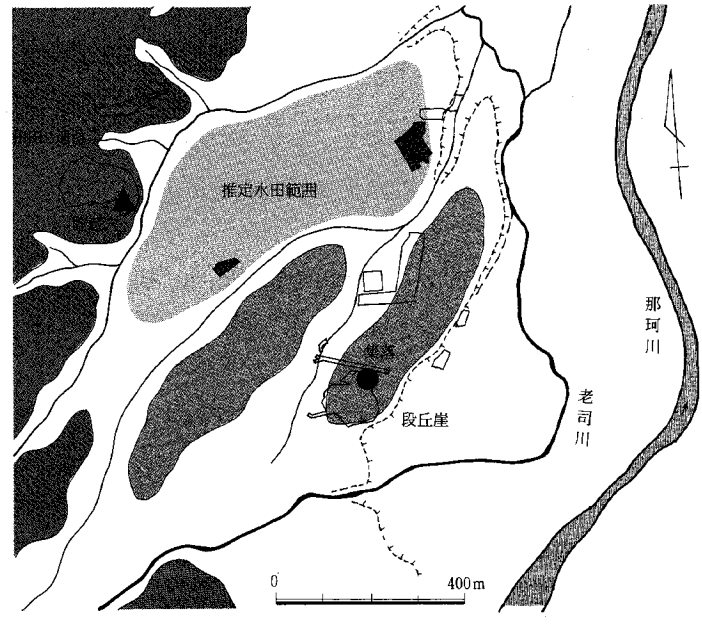


図143　弥生前期の遺構分布

板付Ⅰ式段階の水田構造と同様に微高地際を流れる流路から幹線水路を引き、谷部中央を水田開発したものであり(図143)、水田へはさらに支線や井堰などから水口を通し灌漑したと考えられる。この溝内からは遺物が少ないが、出土土器からみて前期後葉を下限とするものとみられる。

貯蔵穴群、住居状遺構群は丘陵先端部に群集して確認できた。貯蔵穴は40基余りを検出したが、丘陵の西側を造成で失っており、本来は50～60基程度の群集であったと推定される。貯蔵穴は何れも床面の壁際に掘り方があり、開口部が袋状にすぼまる形態である。壁に拡張部や床から二段目を付設する例がある。床面積で、1)1～3.5㎡の小型、2)4～5㎡の中型、3)5.5㎡以上の大型の3群に区分される。その比率は小型が7割以上、中型が2割、大型は1割以下である。床面の平面形態では、A)方形のもの、B)円形のもの、C)楕円形のもの、D)半円形のものに区分される。また、二次的に床面から二段目の貯蔵穴を掘削する例や、壁面に拡張区を設ける例がある。なお、C)、D)のものには長軸方向の壁面に柱状の削り出しをもつ例がある。こうした削り出しはSK34の二辺を除けば全て一辺にのみある。構造上は削り出しをもつ壁面が垂直に近い傾斜をとり、それに向かって他の壁面がアーチ状に迫り出している。また、地形との関連でみると、この施設は斜面下方側に設置している。こうした点から、この施設は貯蔵穴の壁面強度を増す役割を意図したものとみられる。なお、類例は他になく、この出現、系譜については不明である。住居状遺構は13基あり、貯蔵穴の埋没途中、あるいは埋没後に壁面を整形、拡張し、床面を整地し設けたものである。特徴的に床面中央に炉があり、SC18－19のように不明瞭ながら数回の張り床を伴うものがある。しかし平面形は歪があり、規模も小さく、柱穴も未検出であることから、長期の居住施設とは考え難く、短期間の使用に用いられたものと考えられる。こうした点と覆土中の埋め土の様相からみて、両者は同時に機能していた期間があることが判明した。この遺構は貯蔵穴の管理を目的とした短期間の居住施設と考えられる。貯蔵穴と住居状遺構の時期は、SC07、SC18－19、SC30、SC40、SK61からの出土土器が著者の6、7式、いわゆる板付Ⅱａ式の特徴をもつ。切り合いからみて貯蔵穴の一部は板付Ⅰ式期まで遡るとみられる。

また、A地区Ⅲ区のSK108,109は出土遺物から9式（板付Ⅱｂ式新相）期に相当する。Ⅱ区の貯蔵穴群とは並行せず、遺跡の性格は不明であるが、石器製作跡があることから、この丘陵頂部を中心として同時期の生活遺構があったものと考えられる。

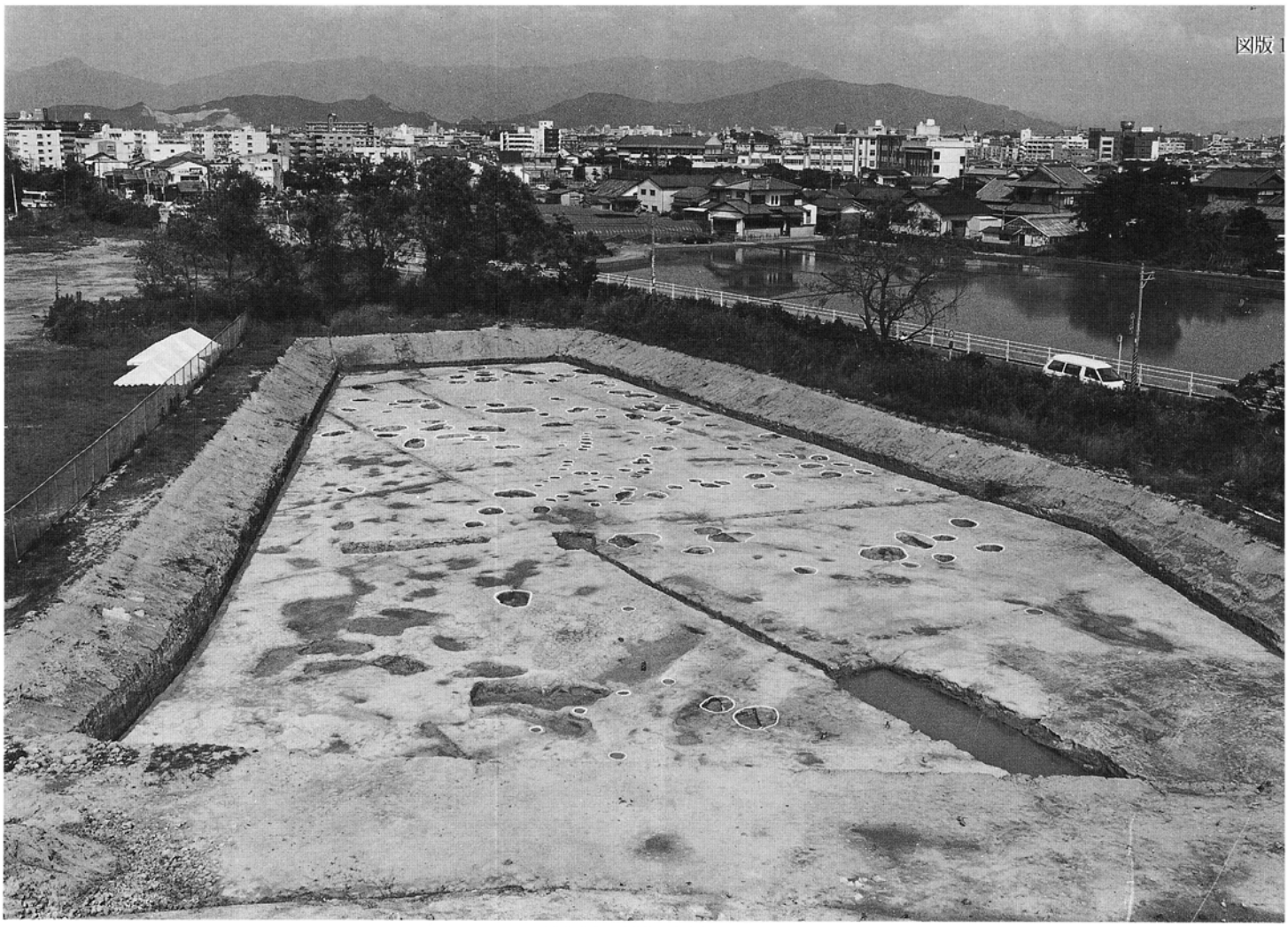
4,古墳時代

和田Ｂ遺跡では5基の古墳と単独の木棺墓を調査した。また、古墳の破壊に伴う石組遺構1基がある。古墳に伴う遺物の出土は少ないが、4号墳から古墳時代前期前葉の土師器、銅鏃が出土した。個々の古墳の時期は不明であるが、古墳群の分布状態から他の古墳も相前後する時期に築造されたと考えられる。確認できた古墳の主体部は組合式石棺、箱式木棺であり、1、3号墳の石棺からは埋葬人骨を検出した。また、石組遺構からも3体分の人骨が出土した。いずれの石棺内にも複数人骨があり、該期では数少ない貴重な人骨資料が得られた。石棺覆土にも二次的な開口が予測できた。しかし、追葬、集骨、改葬などの埋葬手法などは不明であり、今後の資料の集積を待ち、検討したい。

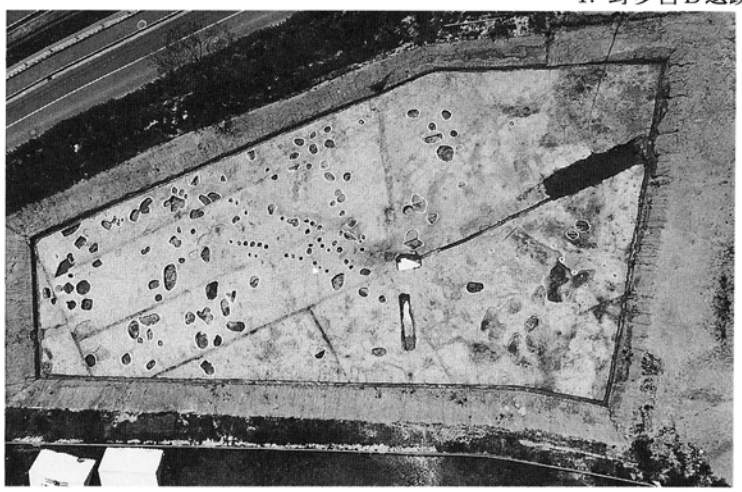
5,古代

野多目Ｂ遺跡において古代の土壙群を検出した。形態、規模、遺物出土状況などから埋葬遺構の可能性が高い。土壙は湧水のある低地にあり、時期は出土した土師器、須恵器からみて、8世紀後半を中心とする短い期間であると見られた。同時期の埋葬遺構としては大宰府条坊を中心とする丘陵地帯で多数の例があるものの、その被葬者は官僚など上位の階層に位置すると見られている。今回の土壙墓群は立地条件や埋葬型式、副装品の貧弱さなどから、古墳時代における密集型群集墓と同様に、より下位に位置づけられる階層を被葬者とすると考えられる。今後の同様の類例を待ちたい。

図　　版

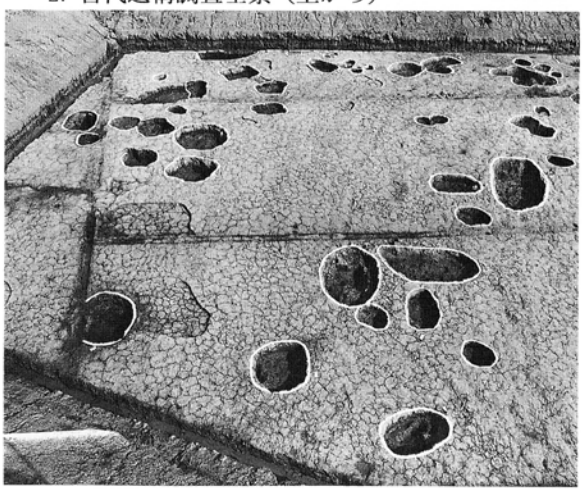


1. 野多目Ｂ遺跡全景（西から）

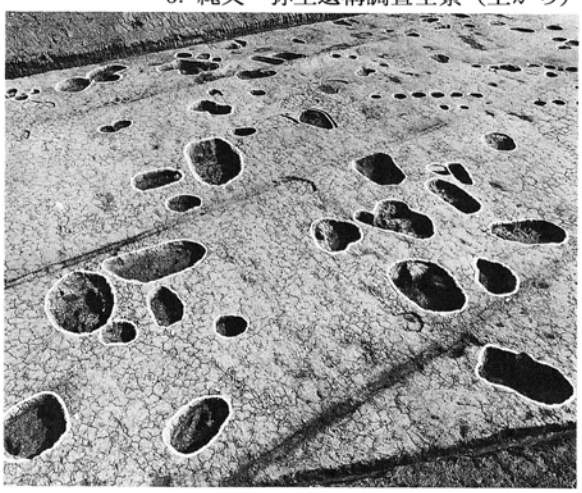


2. 古代遺構調査全景（上から）

3. 縄文～弥生遺構調査全景（上から）

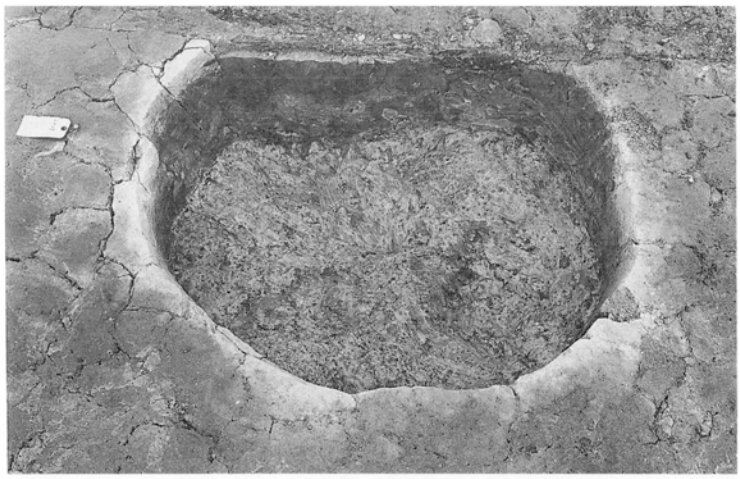


4. 調査区東側近景（北から）

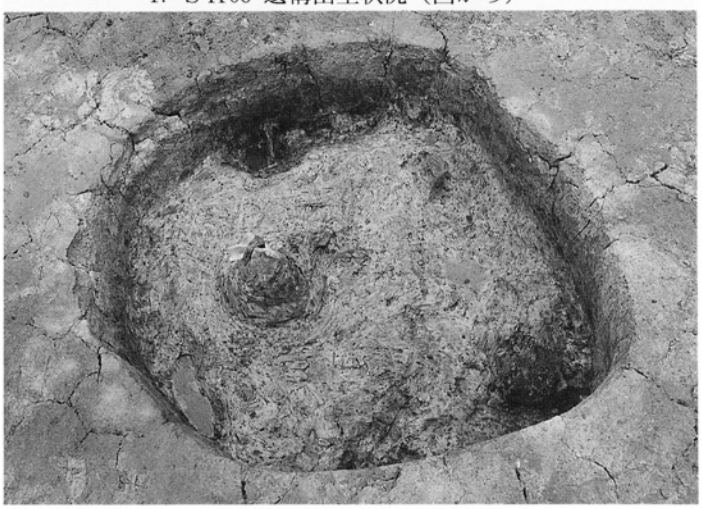


5. Ａ～Ｃ，３～５区付近　土壙群遠景（北から）

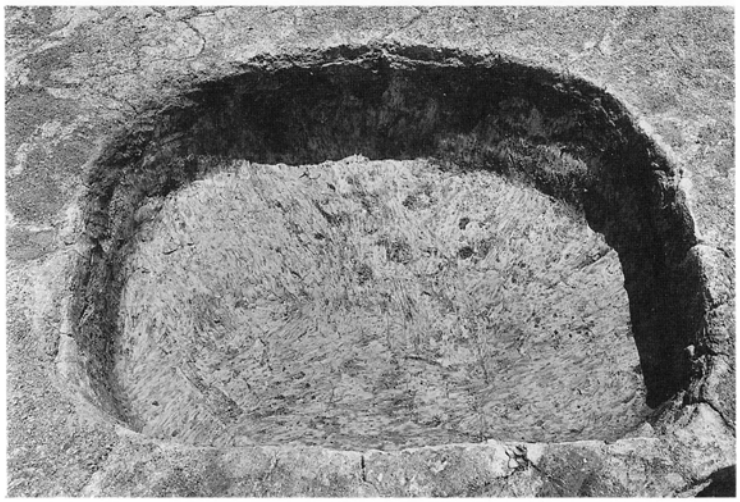
1. ＳＫ06 遺構出土状況（西から）



2. ＳＫ09 遺構出土状況（南西から）



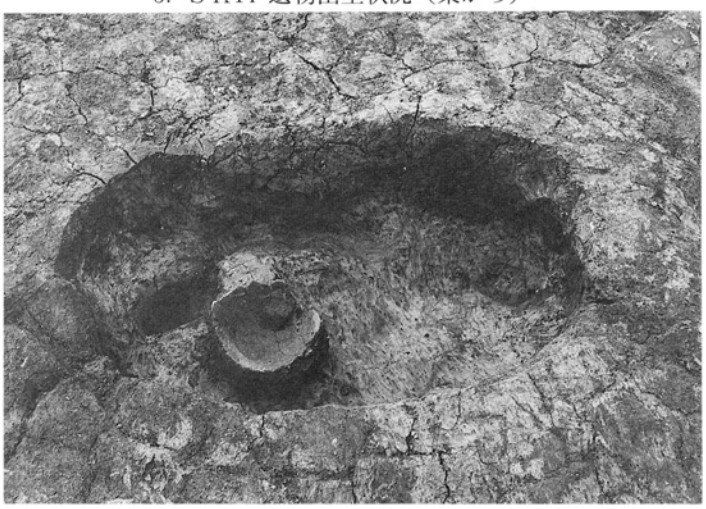
3. ＳＫ10 遺物出土状況（北から）



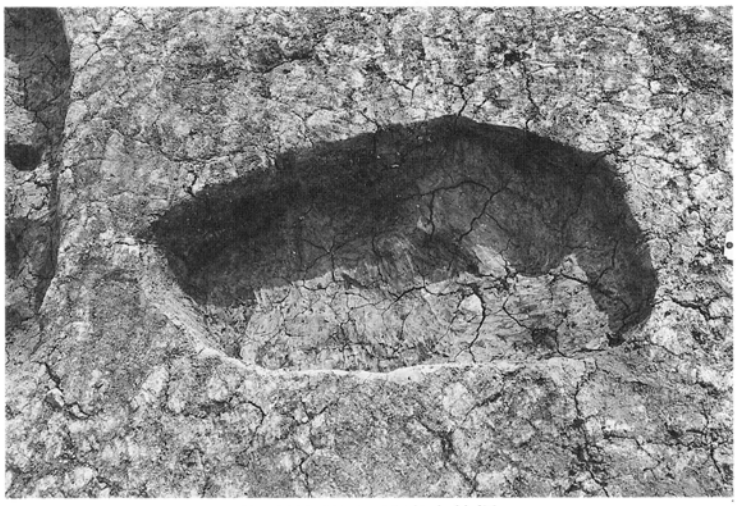
4. ＳＫ12 遺構出土状況（西から）

5. ＳＫ14 遺物出土状況（東から）

6. ＳＫ15 遺物出土状況（北西から）



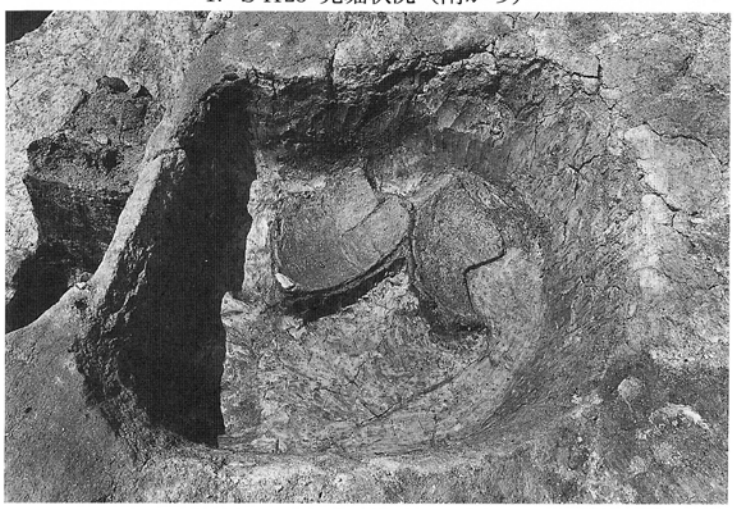
7. ＳＫ15 遺物出土状況



8. ＳＫ16 遺構出土状況

1. ＳＫ23 完堀状況（南から）

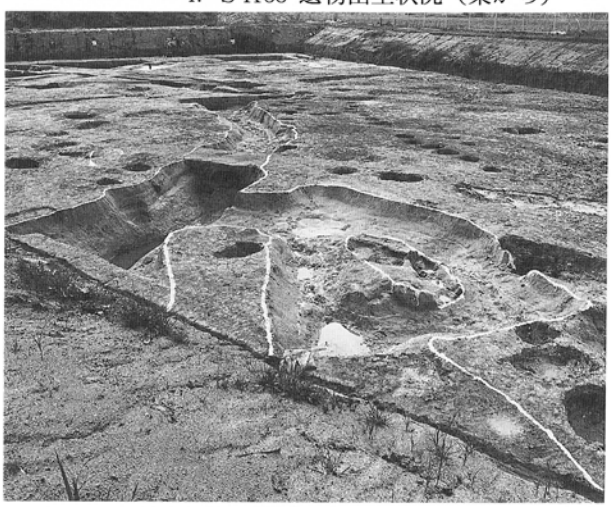
2. ＳＫ24 完堀状況（南西から）



3. ＳＫ03 遺物出土状況（南東から）

4. ＳＫ38 遺物出土状況（東から）

5. ＳＤ52 近景（東から）

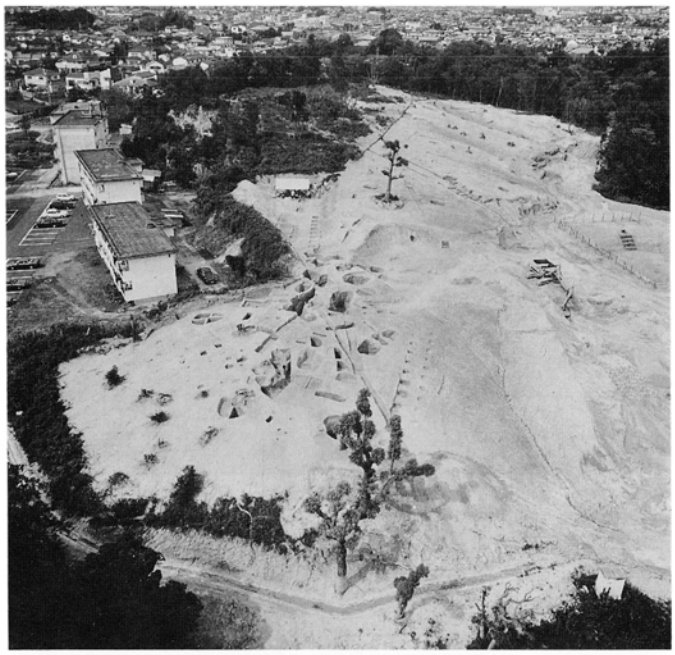


6. ＳＤ52 （東から）

7. ＳＤ61 完堀状況（南から）

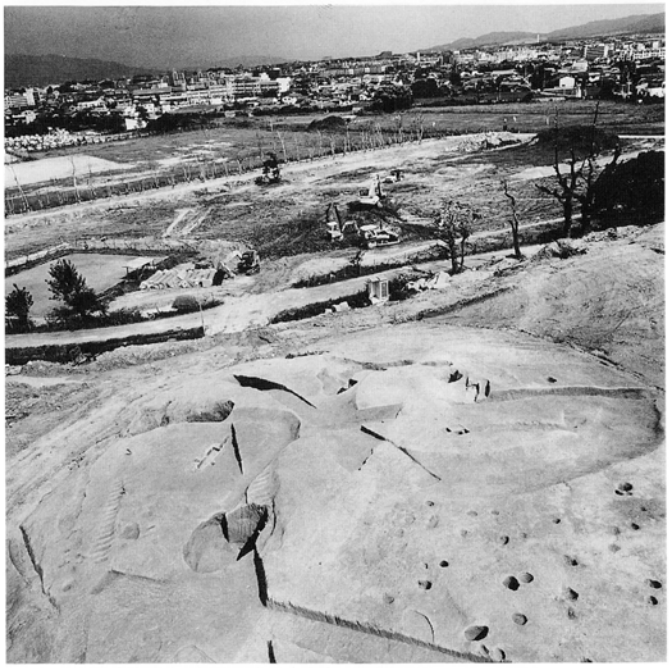
8. ＳＤ61 付近近景（北から）

1. 和田Ｂ遺跡Ａ地区全景（東から）



2. Ａ地区近景（東から）

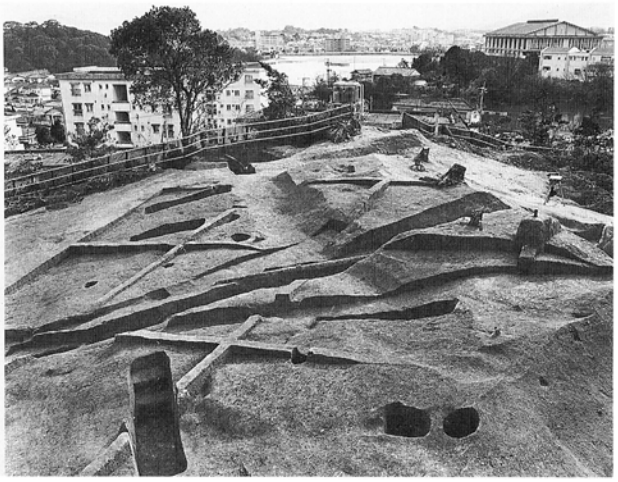
3. Ａ地区から野多目Ｂ遺跡をのぞむ（西から）



4. Ａ地区１，２号墳付近（西から）

5. Ａ地区東側（上から）

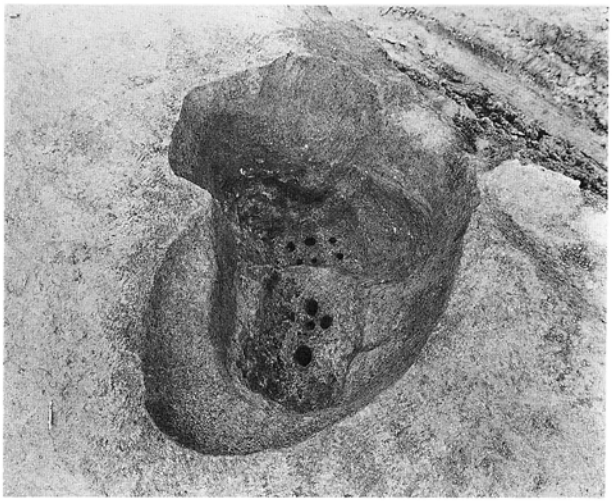
6. １，２号墳全景（上から）



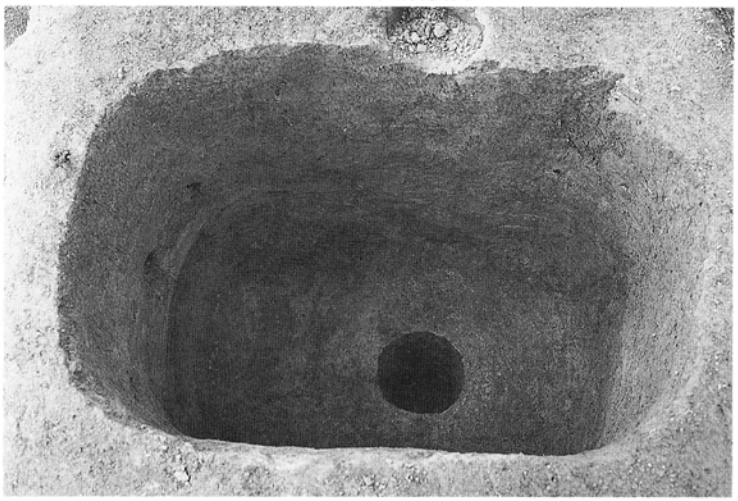
1. A地区先土器調査区近景（北から）

2. A地区先土器調査区遺物出土状況（北から）

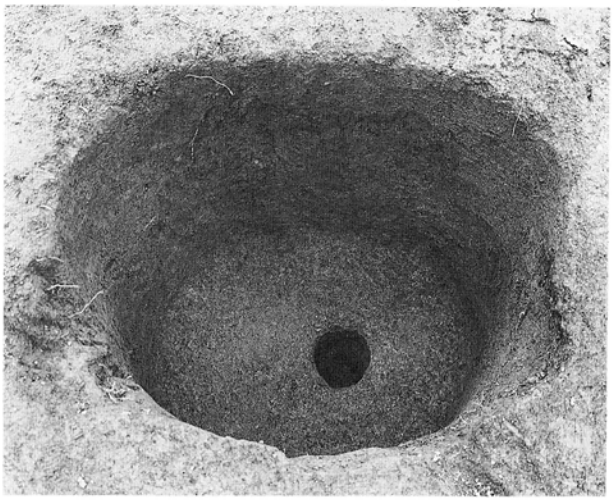
3. SK71 完堀状況



4. SK84 完堀状況（西から）



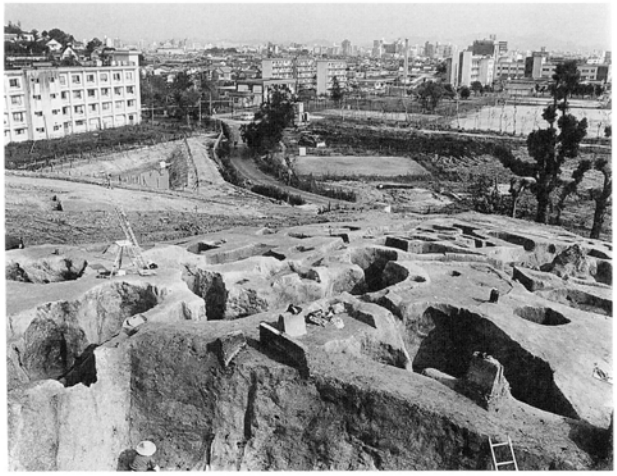
5. SK89 完堀状況（東から）



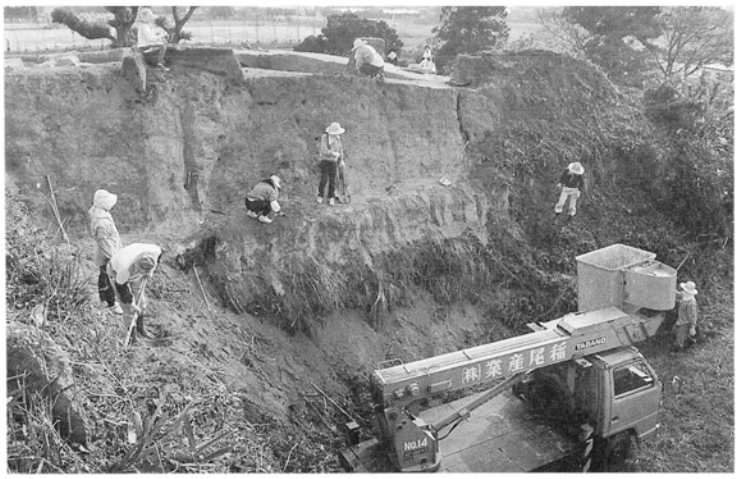
6. SK85 完堀状況（北東から）

7. SD103 全景（東から）

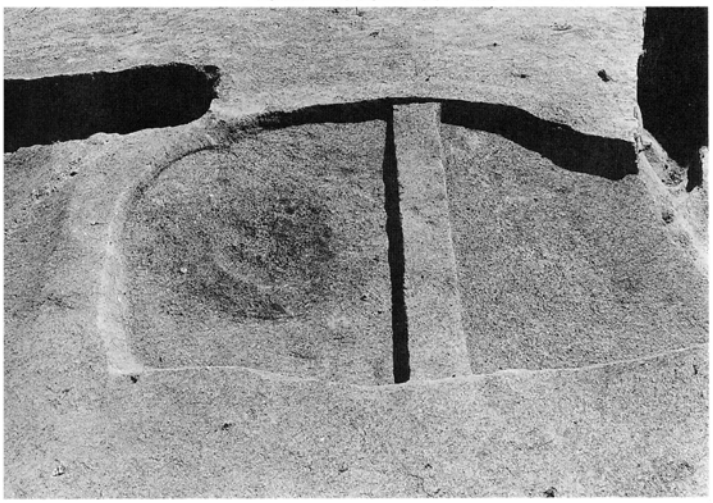
8. SX102 検出状況（西から）



1. 貯蔵穴群調査風景（南西から）

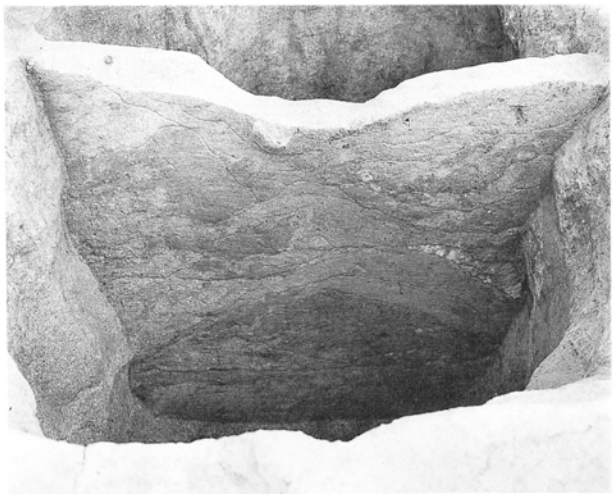


2. 貯蔵穴群調査風景（西から）

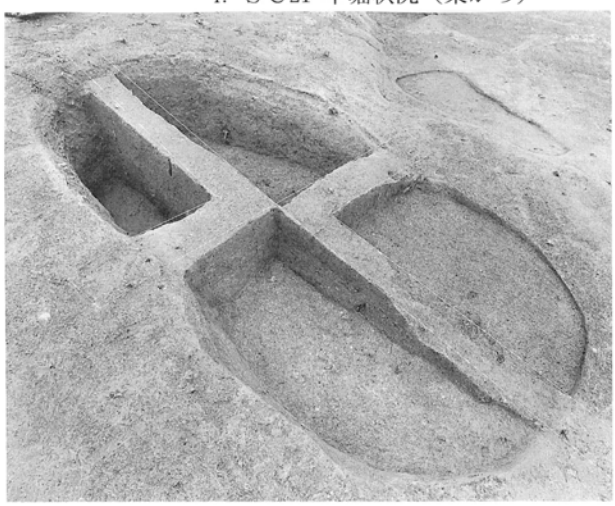


3. ＳＣ45 炉検出状態（北西から）

4. ＳＣ21 半堀状況（東から）

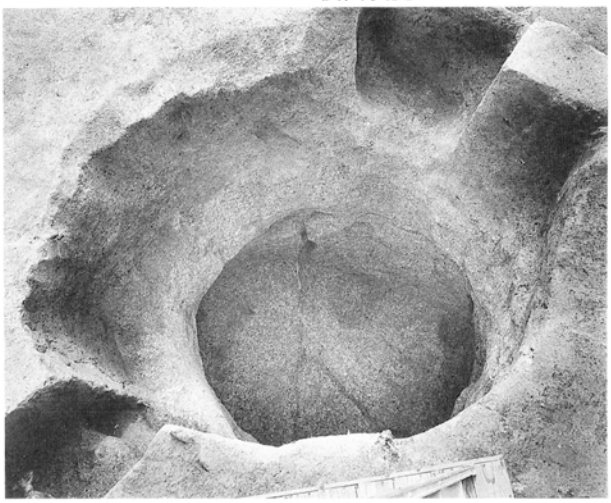


5. ＳＫ17 土層断面

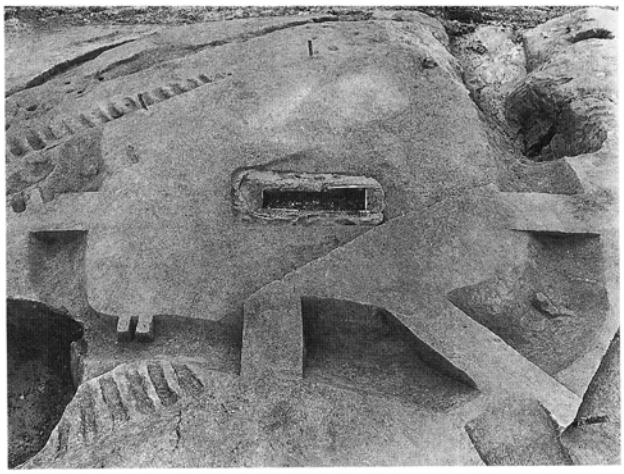


6. ＳＣ35 検出状況

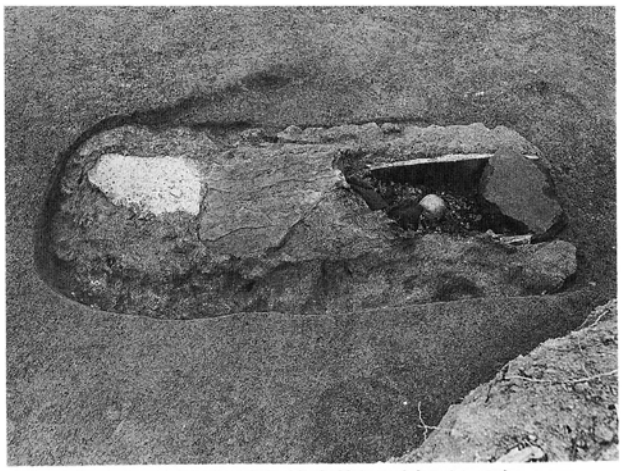
7. ＳＫ18 完堀状態（北から）



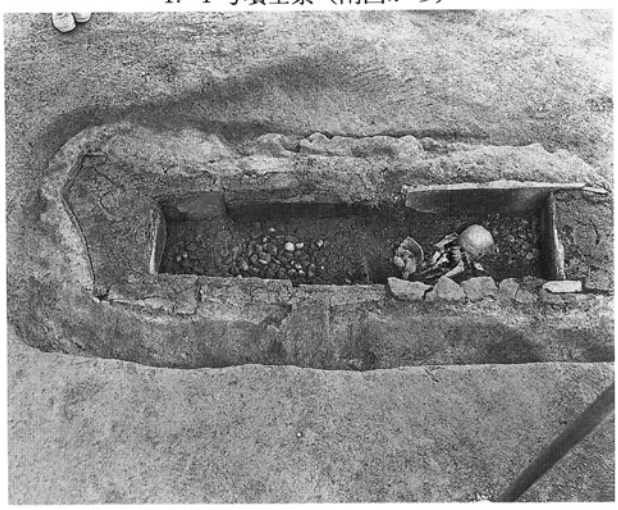
8. ＳＫ51 完堀状態（北から）



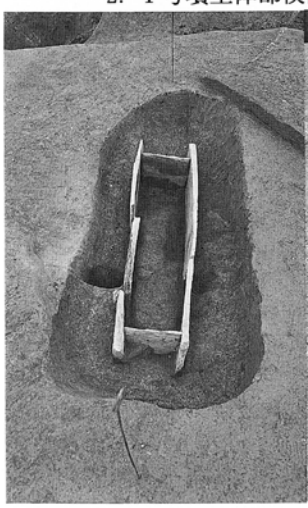
1. 1号墳全景（南西から）



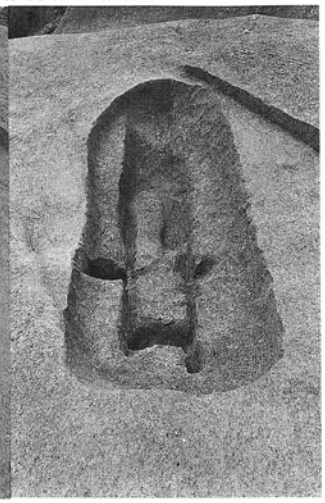
2. 1号墳主体部検出状況（南西から）



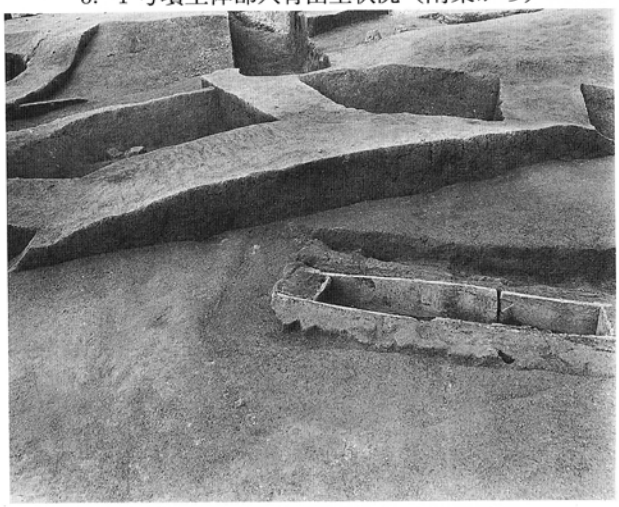
3. 1号墳主体部人骨出土状況（南東から）



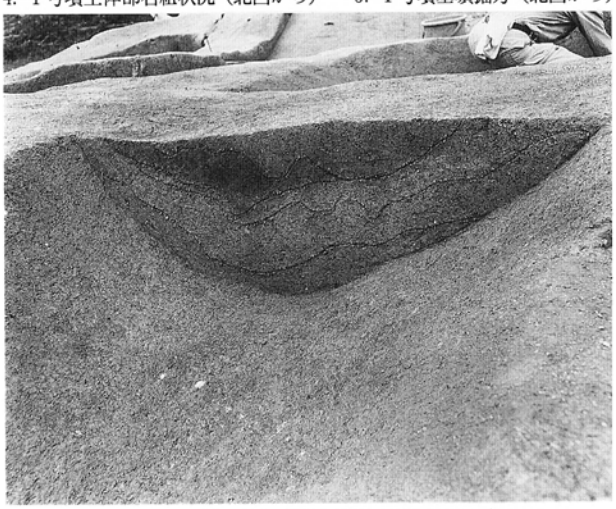
4. 1号墳主体部石組状況（北西から）



5. 1号墳墓壙掘方（北西から）



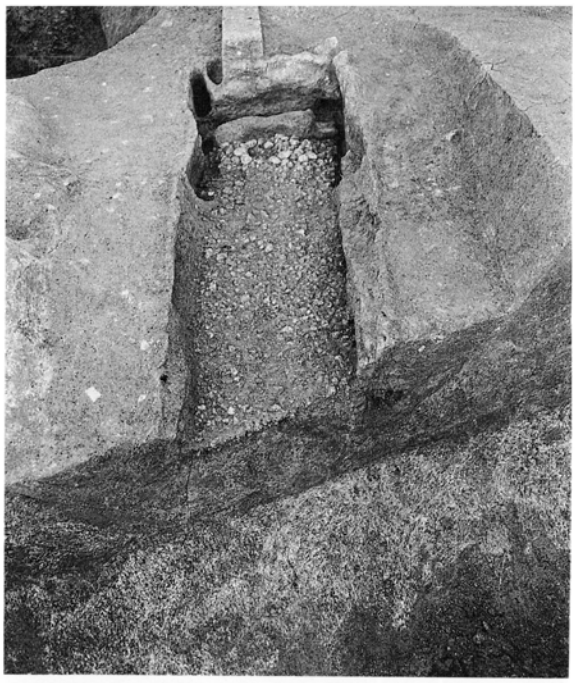
6. 1号墳墳丘盛土土層断面（北から）



7. 1号墳周溝土層断面（北東から）

8. 1，2号墳全景（南西から）

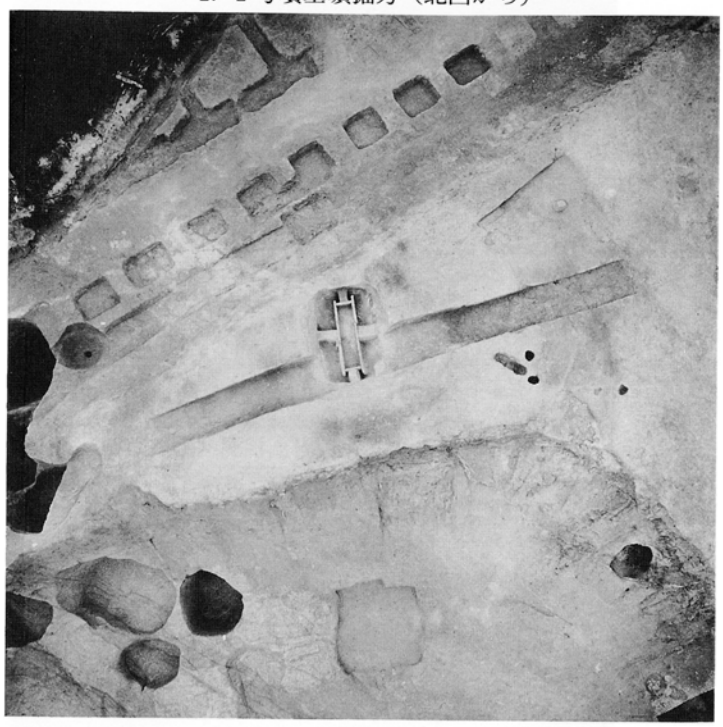
9. 2号墳主体部埋土（北西から）



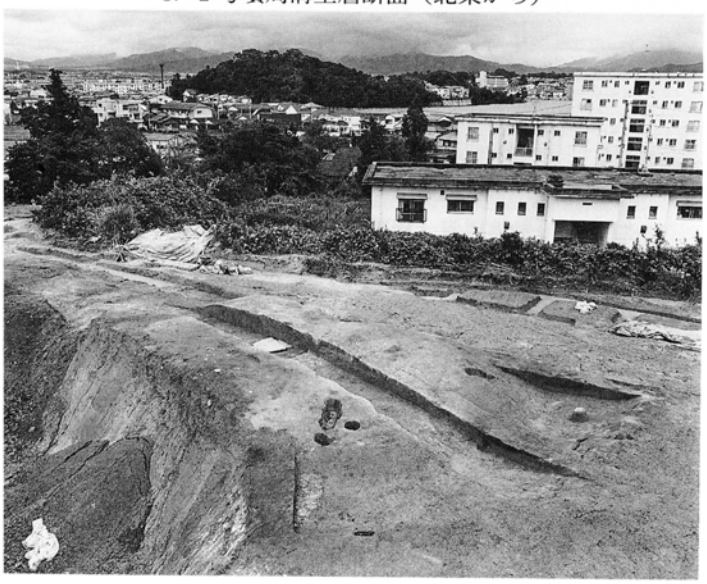
1. 2 号墳主体部

2. 2 号墳墓壙掘方（北西から）

3. 2 号墳周溝土層断面（北東から）



4. 3 号墳全景



5. 3 号墳全景（北から）

6. 3 号墳周溝土層断面

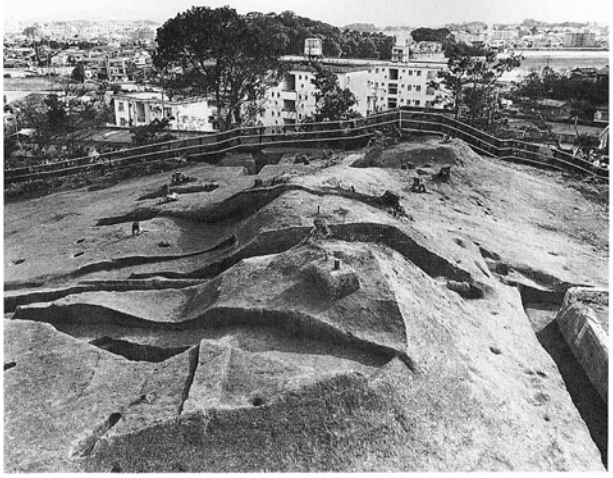
1. 3 号墳主体部検出状況（北東から）

2. 3 号墳主体部人骨出土状況（北東から）

3. 3 号墳主体部石組状況（北東から）

4. 3 号墳墓壙掘方（北東から）

5. 5 号墳墳丘（北から）



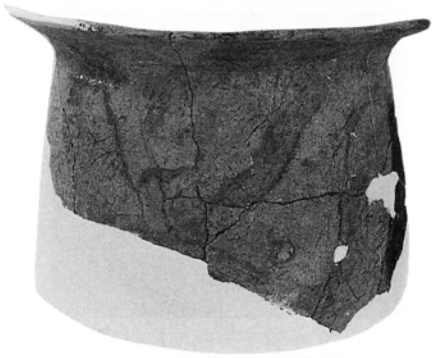
6. 4，5 号墳近景（北から）

7. 4 号墳周溝土層断面（北から）

8. ＳＸ102 人骨出土状況

1. 野多目Ｂ遺跡ＳＤ61出土遺物

2. 野多目Ｂ遺跡ＳＫ01出土遺物



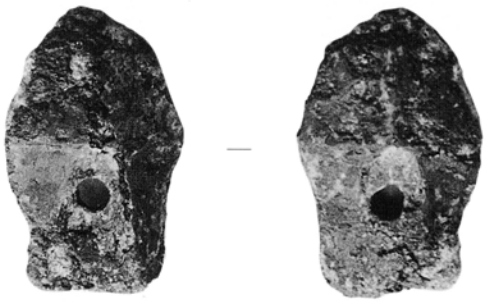
3. 野多目Ｂ遺跡ＳＫ14出土遺物

4. 野多目Ｂ遺跡ＳＫ07出土遺物

5. 和田Ｂ遺跡ＳＣ40出土遺物

6. 和田Ｂ遺跡ＳＣ30出土遺物

7. 和田Ｂ遺跡４号墳出土土器



8. 和田Ｂ遺跡４号墳出土銅跡

図版10　野多目Ｂ、和田Ｂ遺跡、出土遺物

野　多　目　台

野多目B・和田B遺跡調査第1次調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第413集

1995年3月31日

発　行　　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神1丁目8番1号

印　刷　　㈲松古堂印刷